明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治三十六年十一月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第三巻第十四號

記事要目




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

女學世界 第參卷第拾四號 目次

總裁　小松宮頼子殿下　副總裁　鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學期を開き
會員を募る
淑女たちとく
入會あれかし

◎本會は女子教育の普及發達を圖らん爲に女子必須の諸學科を掲げたる女學の講義錄を發行し種々の事情の爲に女學校に入學する事能はざる女子をして父母の許を離れず居ながらに通信教授に依て修養を積ましめ一般女子の地位を高めん事を目的とす

◎本會發行の女學講義は畏くも　皇后宮の御覧を辱うし殊に御歌下賜の大榮を擔ふ

◎本會は第一流の名家をすぐりて諸學科の擔任を囑托せり去れば其講義の有益多趣なる事己に世の定評ある所にて明治廿八年創立以來貳萬五千人の講習修了者を出せり

◎本會講義錄は女子素養の程度に應ぜんため高等と簡易との兩料に分つ月謝は高等科金四拾錢簡易科金貳拾錢とし入會の節束脩（高等四拾錢簡易貳拾錢）を要す

◎簡易科女學講義は十一月五日に高等科女學講義は同廿五日に發行す詳細なる會則はハガキにて請求あれ直に進呈すべし

東京市麹町區下二番町卅七番地

大日本女學會

（電話番町千三百三十番）

少女



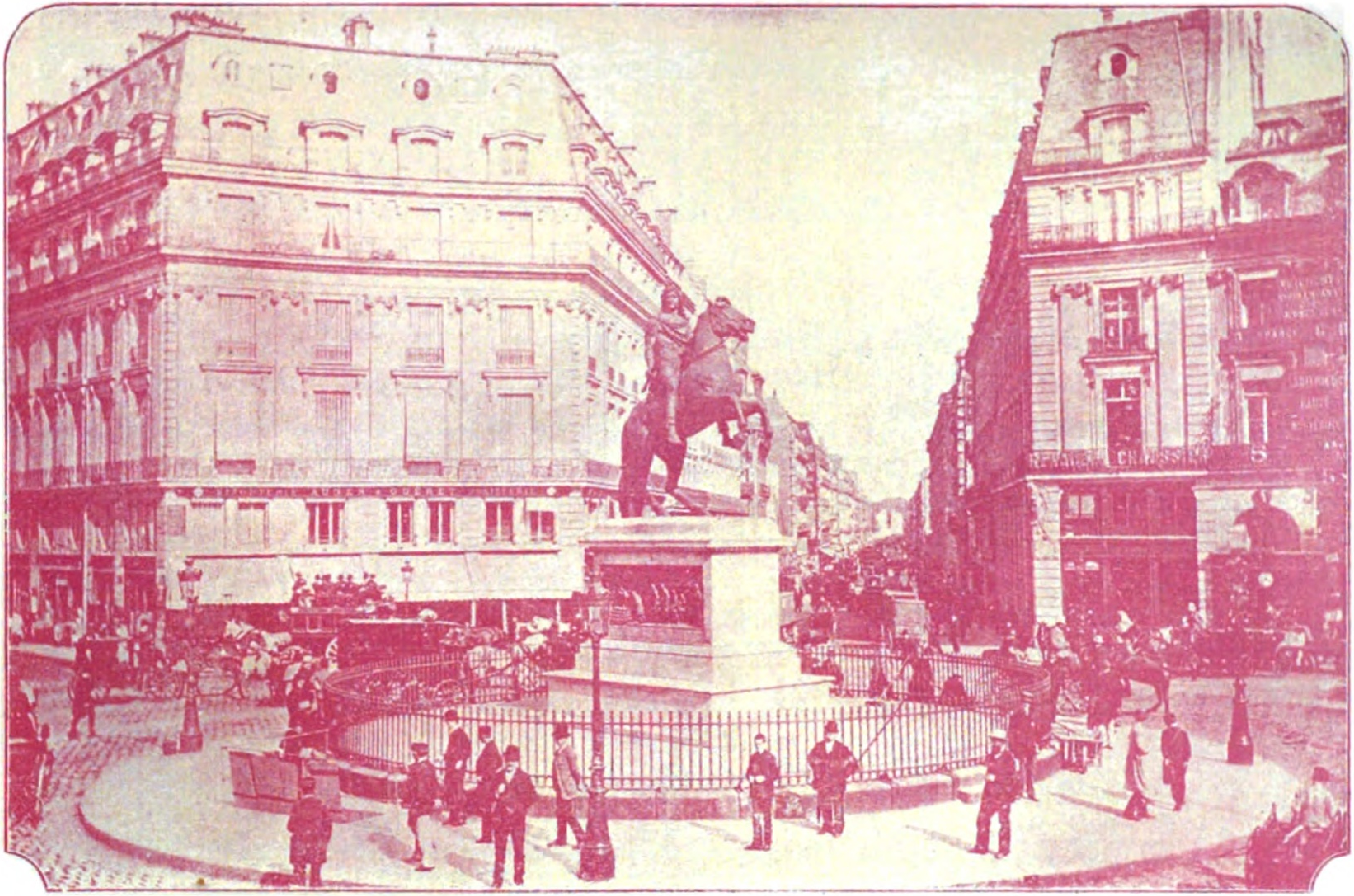
（博進社工場印行）

母



歐洲名畫

泰西名都の巨觀



巴里勝利の辻



島田三郎氏の家庭

婦女必讀寶監

飯田呉服店裁縫部
主任 小岩井規太郎君
副主任 監田眞三君 合著
（製本既成）

實用裁縫全書

全壹册

和裝菊判美本
紙數三百餘頁
正價五拾錢
郵税八錢

卷頭 彩色木版少女裁縫の圖……上村松園女史筆
高島屋陳列場及店頭裝飾……寫眞銅版

裁縫の日常欠くべからざるは言ふ迄もなきことにして就中裁ち方積り方等は主に數理上の智識を要し頗る六ヶ敷ものなり普通簡單なるものにありては其法元より一定せりと雖も少しく複雜なるものに至りては頗る工夫を要するもの丶みならず其巧拙によりては經濟上に關することと少なからざるなり本書は飯田呉服店（通稱高島屋）專縫部員の協力編纂に成れるものにて尚斯道達人の助力を得たる著述なり故に本書の主とする處は普通の衣服は元より之に附屬する諸種のものに就て普ねく裁ち方積り方等を網羅し專ら實用に供せしむるにあり故に女子諸學校の參考書となると同時に家庭の好侶伴たるべきなり本書前編に於ては裁縫に關する諸般の要件を掲け後編に於ては裁ち方積り方を圖解し附錄には織物の產地を記して參考に供せり讀者よ實用を主とする本書は解說にて六ヶ敷所は密圖を添へて直に了解し得べき樣に注意せり請ふ愛讀あらんことを

吉田調子女史著

裁縫と編物

彩色寫眞銅版挿入
（全壹册洋裝）

正價金貳拾五錢
郵税六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の一）

家庭之友

每月三日發行

發賣高八千部

第七號要目

定價金五錢 郵税五厘 一ヶ年(拾貳冊)郵税共前金六拾錢 見本郵劵六錢 第壹號(五版)第貳號(四版)全部取揃へて註文に應ず

(甲の二)

（甲の三）

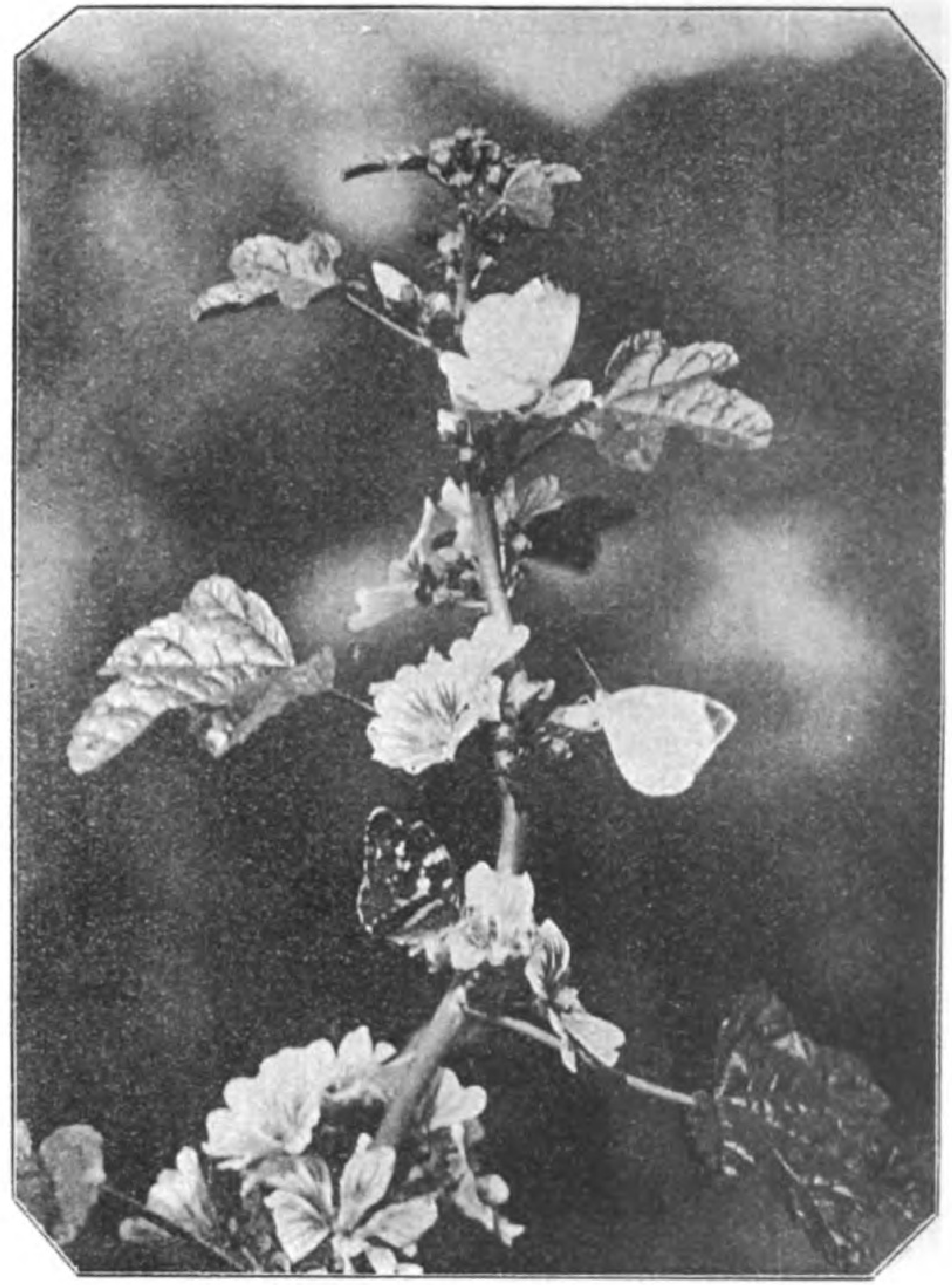


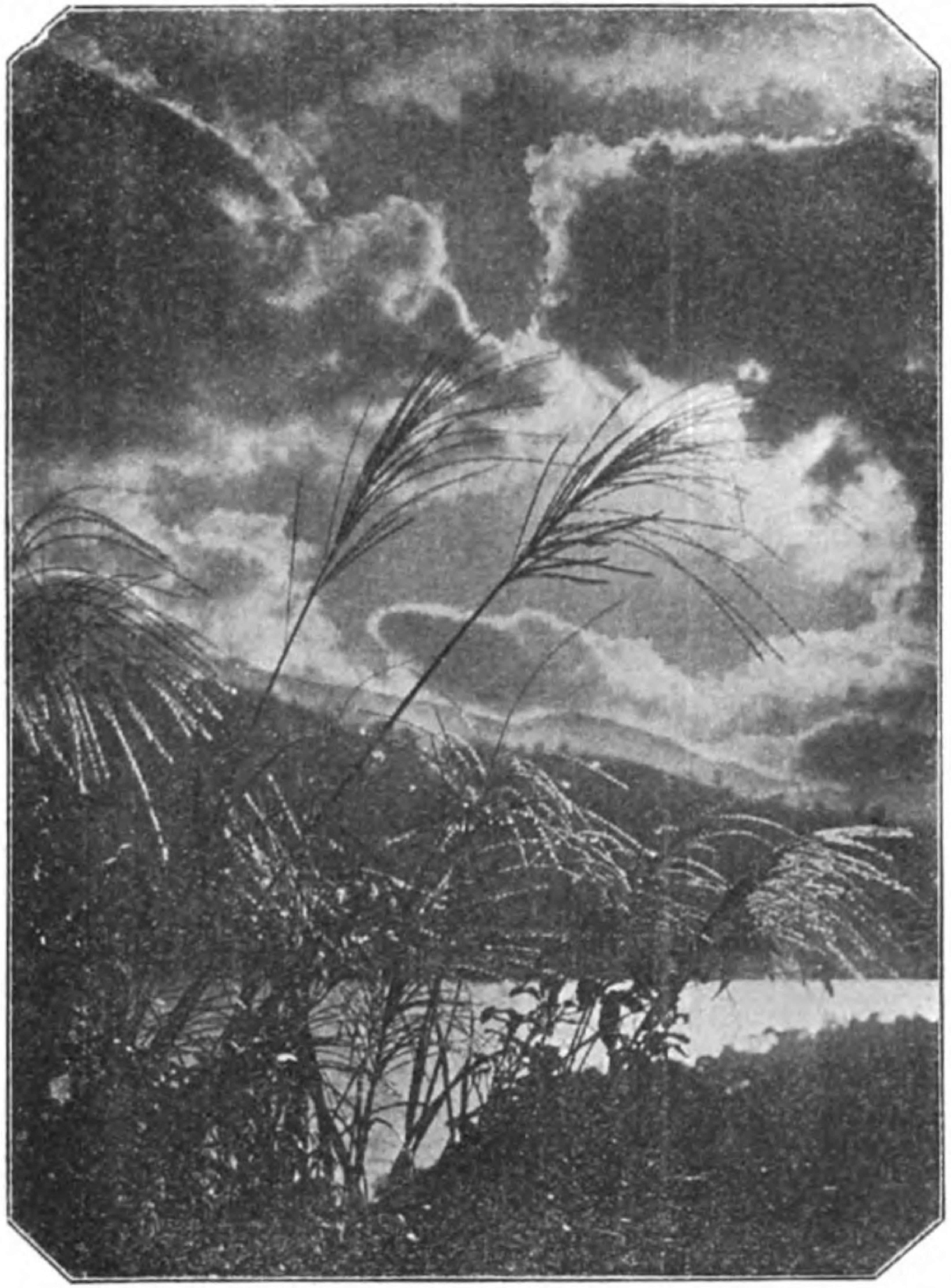
瓜哇の婦人（左方は未婚の女子右方は既婚者）

池の水禽

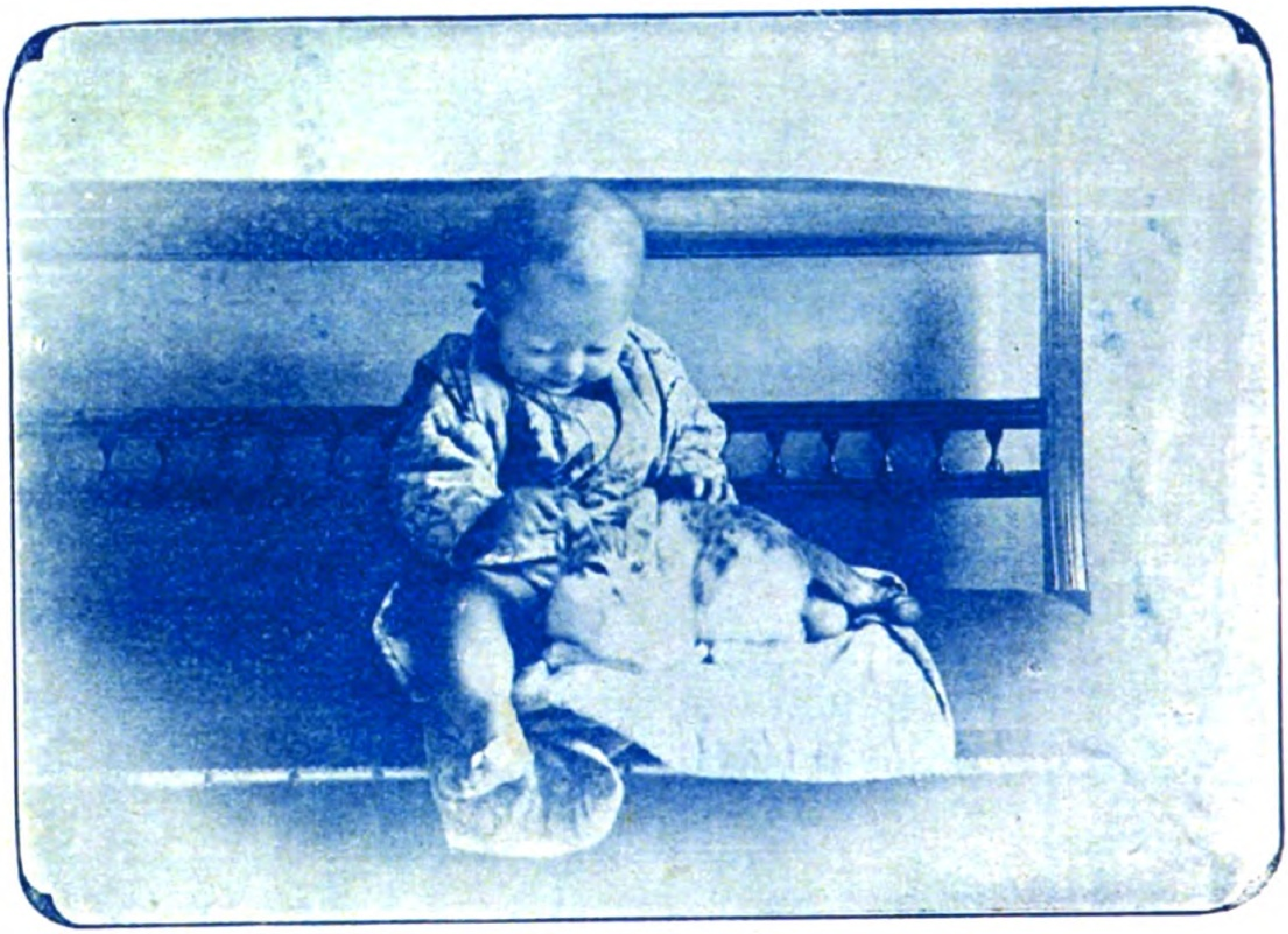


花とすゝき





小春





毎月一回 近事畫報 一日發行

一冊金二十五錢◎六冊前金一圓三十八錢◎十二冊前金二圓六十四錢◎御注文は總て前金◎郵券代用一割増◎郵券は一錢か二錢

= 第二卷第三號十一月一日發行 =

（繪畫）東洋の風雲將に急ならんとす此の時に當りて本誌は此方面に全力を盡して益本誌の特色を發揮せんとす◎韓國の暴動事件及び將來注目すべき同地の風景は悉く剩す所なく◎我が精鋭なる常備艦隊の小濱潟集合は二頁大として壯快なるもの也◎其他元老各大臣兒玉參謀次長東郷常備艦隊司令長官松尾日本銀行總裁ローゼン露公使栗野駐露公使極東總督アレキシフ等の肖像は時節柄注意を拂ふべき人々なり此の外揭ぐる物は外交科學市井の出來事

繪畫總數四十葉

◎大附錄！滿韓明細地圖！ 石版刷本紙四頁大

= 第二卷第三號十一月一日發行 =

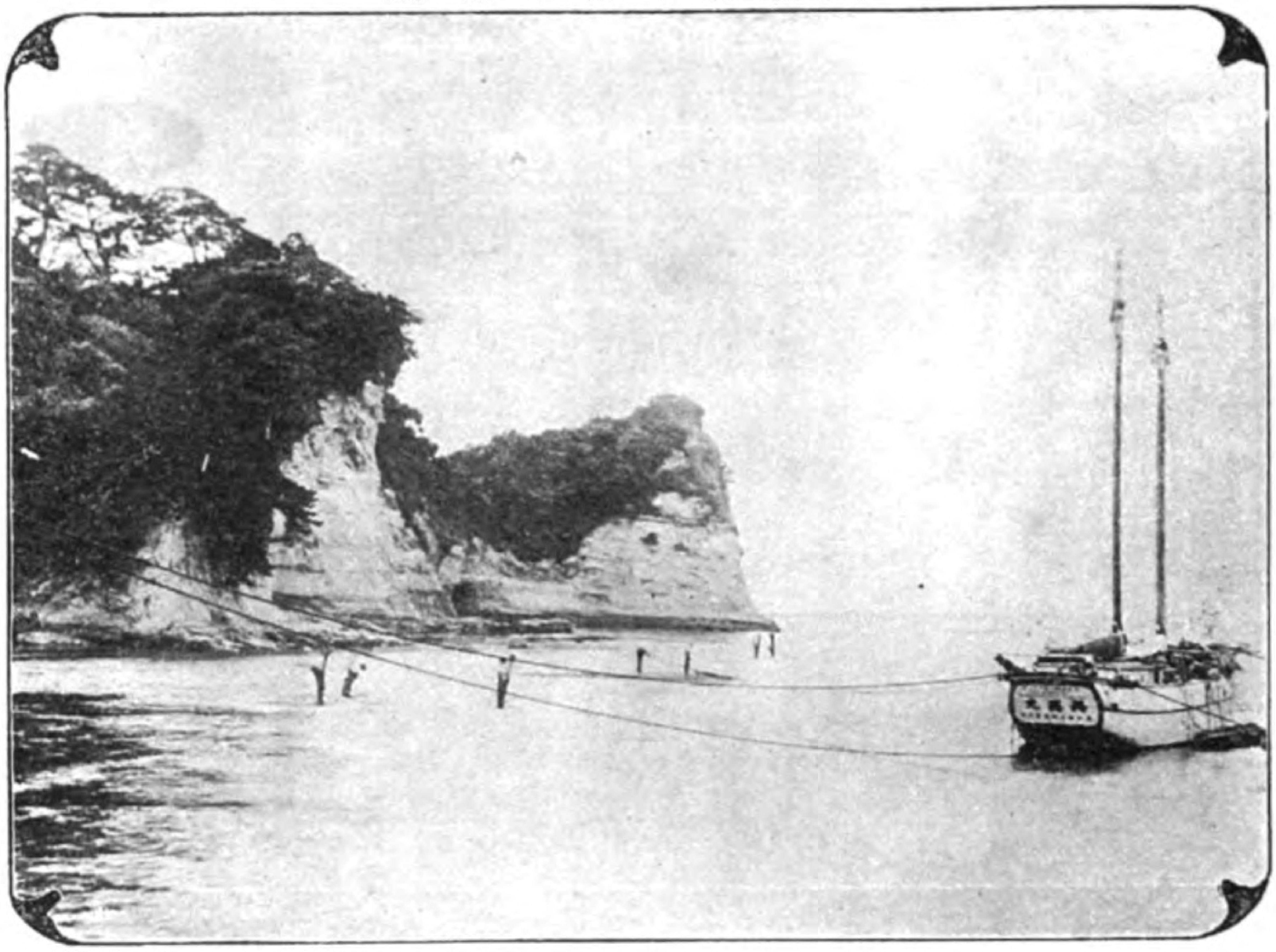
（讀物）龍溪氏の出鱈目の記は鶴山氏の因果庵漫錄と相共に精華を放ち◎風葉氏の家內喜多留は益興趣横溢或は又た青々園主の秋の芝居◎無耳生氏の歌劇梗概は劇壇の珍とすべきもの◎銃獵は霜川氏の小說雲水日記は即ち千山萬岳櫻の雲水日記◎其他獨歩氏の支那小說は例の通り同氏獨得の幽韻を現はして剩す所なし猶は諸名家の玉稿和歌俳句落噺智慧競べ雜錄及び木版繪畫等は本誌八十頁に渉りて堆きこと山の如し

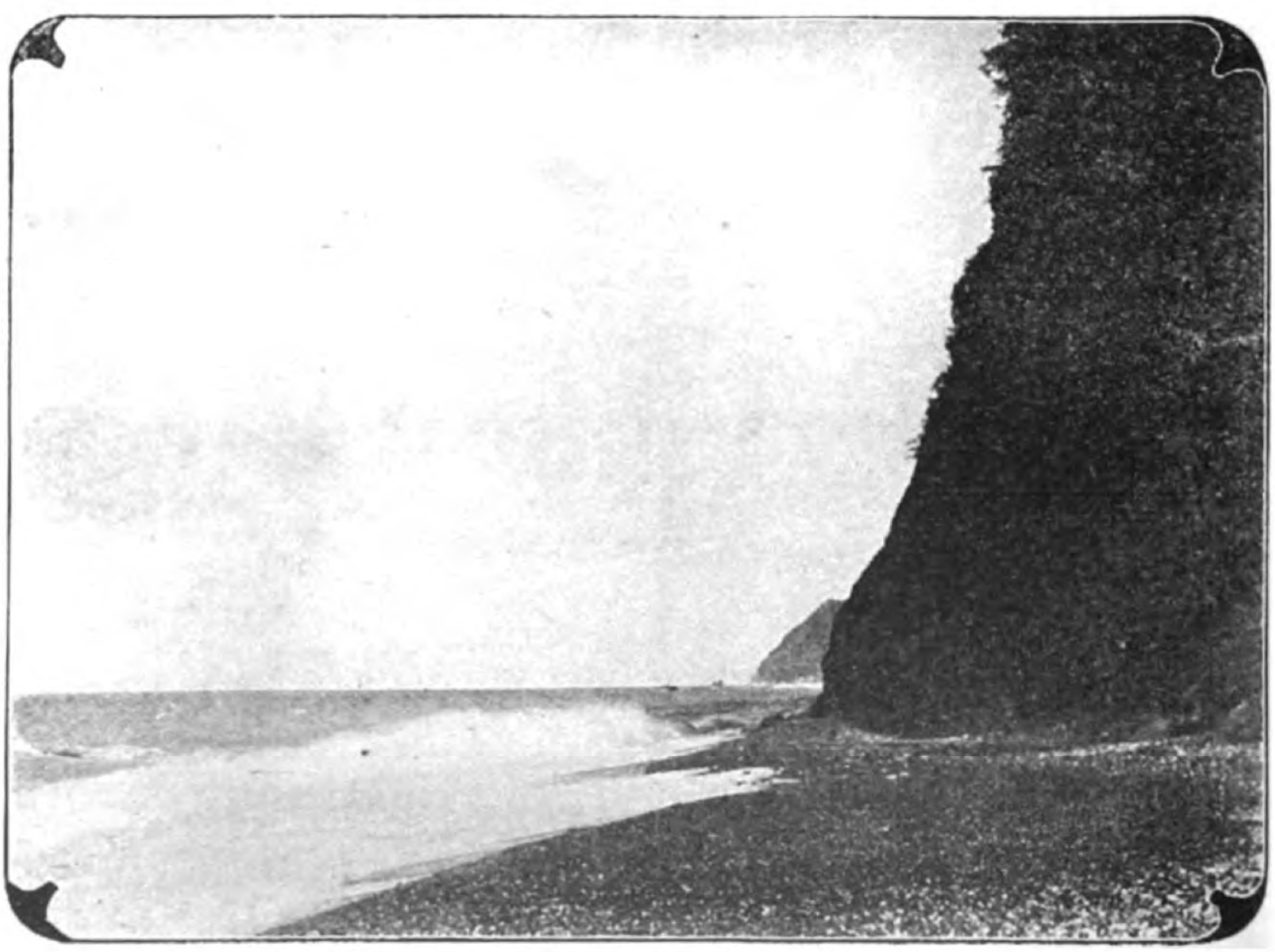
發行所 東京市日本橋區疊町一番地 近事畫報社

（乙ノ二）

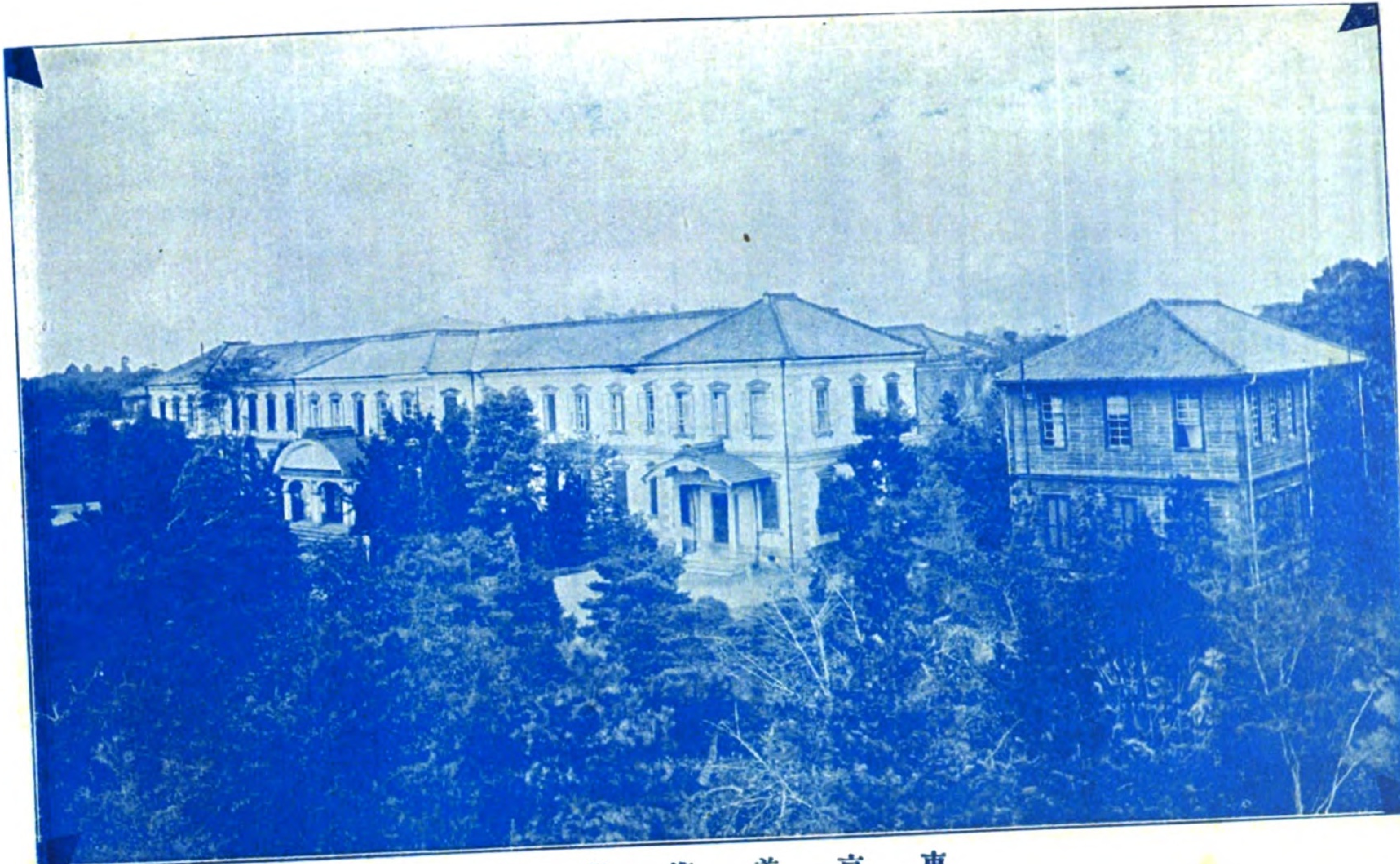
秋の海

（越後親不知の海岸）





常陸平潟港



東京美術學校



女子裁縫高等學院生徒



竹柏會秋季大會

新案 福引種本

石橋思案序　加野孤雁編

附錄　一トロ噺

正價拾五錢　郵税四錢

サア〳〵笑ふ門には福が來る、福引種本の新版が、いよいよ來る十一月の中旬から出版になります。これは今まで世間にありふれたものとは事かはり、編者が苦心に苦心を重ねて、その材料を百人首やら發句やら、地理やら歴史やら、みんなお爲になるものばかりから取り集めましたので、どこまでも上品なのは申すまでもなく、天下此上なしに面白くつて、可笑くつて、そして附錄のおまけに、珍無類

輕口の短編落語が數十種添へてありますから讀んで罪がなく、買つて損のないこと受合、胸が開けてお座興になつてそして値段が安いといふ三拍子揃つた上、製本までがヅッと凝つた當世流行のハイカラ式、歳暮の配物や新年のお年玉には、それこそ持つてこいの珍本、品切れにならぬ内早く御買求めの程永當〳〵。隅から隅までづらりづうと願ひあアげ奉りまアす!!! 評判!評判!

東京　博文館

發兌元

(丙の二)

女子高等師範學校教授 黒田定治先生校閲
學習院教授 英和女學校講師 長谷川乙彦先生著

新編 女子用教育學

全壹冊 洋裝上製美本 正價五拾五錢 郵稅六錢

●本書は文部省所定の教授要目に遵ひ編纂したるものにして高等女學校、女子師範學校其他女子の教科用講習用として最も適切なる良書なり。

●本書の特色は重きを家庭及び幼稚園教育の理論方法に置きたるにあり。

●本書は又家庭教育の天職を帯べる母たる人の必ず一讀すべき良書なり。

●日本女史

重野文學博士 小松文學博士序 帝國大學卒業
華族女學校學監下田歌子君序

須藤求馬氏著

（全壹冊洋裝美本） 正價壹圓廿錢 郵稅十四錢

發兌元 東京京橋弓町 三松堂

女學生必携

明治卅七年日記

▲格言、事蹟、詩歌、俳句、月令、女學校案内、作法、割烹、祝祭日唱歌其他必要事項採錄

◉菊版半折美本定價廿五錢郵稅四錢

「あなた。い丶ご本ねえ。それはなあに」

「これが此頃評判の有朋館の女學生日記なの、ほんとうに便利で有益なのよ」

「そう。一寸拝見。まあい丶のね私もぜひもとめませう そうして皆さんにも、さつそくをしへて、あげませう!!!」



東海散士著

日露戰爭 羽川六郎

東亞地圖挿入

●全壹册定價金九十五錢●郵稅金拾二錢

日露の關係は我神州未曾有の國難なり今は實に憂然一聲烟火將に爆發せんとする瞬間に在り唯其れ海戰は如何陸戰は如何露國及列強の狀勢は如何、抑勝敗の決は果して如何此書は小說にして小說にあらず實傳にして實傳にあらず東海散士が縱橫なる文藻を確實なる事實に寓し。平易に明暢に此問題を解決して我國民諸君の一粲を博せんとするものなり。

發兌元 東京本郷四丁目八 有朋館

（丙の三）

村井弦齋著　（家庭第一實用の書）

増補註釋 食道樂 夏の巻

正價　八拾錢　紙數四百餘頁郵劵代用必一割増

送賃　▲市内五錢▲地方十錢▲臺灣、朝鮮清國三十錢▲米國行開封廿四錢

口繪　岩崎男爵家二階建臺所眞景　挿畫十枚註釋澤山

附錄　西洋食器價格表百三十種
　　　西洋食品價格表三百五十八種

◉夏の巻と云ふと雖も所載の料理法は四季通用なり

病人曰く「私どもは毎日何んな食物を戴いたら可いでせう

醫者曰く「食道樂を讀んで消化吸收の良い料理をお拵へなさい

▲▲一升の酒を飲まんより此書一册を買ふに如かず

▲▲有名なる白鉛廢止論は夏の巻にあり

春の巻は二十版　正價郵税夏の巻に同じ

附錄日用食品四百五十種の滋養分明細表あり

發行所　東京市京橋區卅間堀三丁目　電話新橋二千三十六番　報知社出版部

大賣捌所　新橋　新橋堂　神田　東京堂　京橋　東海堂

（丙の四）

●新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、味淋酒醤油參倍増法、速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内……無代進呈す酒造家右今回披露の爲拾萬部限り望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる大有益の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚確實くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授産館

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白化藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やく下し

本劑は胃膓を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及悪血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



●わきが(腋臭症)根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

(丙の五)

十千萬堂藏版

紅葉先生の病むや天下擧げて嘆惜せざる莫く文を贈り藥を貼りて同情を寄する者多し、殊に門下生に至りては、殆んど寢食を癈して先生の枕頭に侍し其快瘉の速かならんを祈れり然も至誠を致すもの悉ゞらんを恐れ、相謀りて各心を籠めたる一文を草し床下に献して秋夜の伽と爲す、曩日各新聞紙上に美談として傳へられたる『換菓篇』此なり、小説あり、隨筆あり、句あり、歌あり、紅紫錯互金碧掩映して一幅の美觀を極む眞に此れ文壇稀に觀る所の佳話にして先生師弟の情の如何に濃かなるかを見るべしや今剞劂漸く成り併せて天下有情人の淸覽を辱ふするに至れるは本堂の光榮とする所なり。

十千萬堂出版部 敬白

尾崎紅葉山人發病

一ヶ年後の肖像入

換菓篇

- ●藥草取　鏡花　泉鏡太郎
- ●宇宙の目的　風葉　小栗磯夫
- ●出獄　秋聲　徳田末雄
- ●花見車　白峯　中山重孝
- ●異形　雨泉　新井幸太郎
- ●馬　若花　鈴木陽
- ●靈藥　吟葉　篠山克己
- ●靑切符　嶺葉　篠原璽瓏
- ●入營祝　西男　田村榮造
- ●年の湊　水葉　山里弦二郎
- ●公用　夏葉　瀨沼郁子
- ●四季五十二句　麥人　星野仙吉
- ●四季十三句　春石　北島英一
- ●御信心　寅外　後藤寅之助

全壹冊洋裝金字入美本

正價金六拾錢郵税八錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の八)

多田親愛先生筆

中納言兼輔

菊のはなたをりては
みし初霜の
おきなからこそ
色まさりけれ

多田親愛先生筆

信濃

志くれつゝ袖もほしあへす
あしひきの山の木の
葉にあらし吹くなり

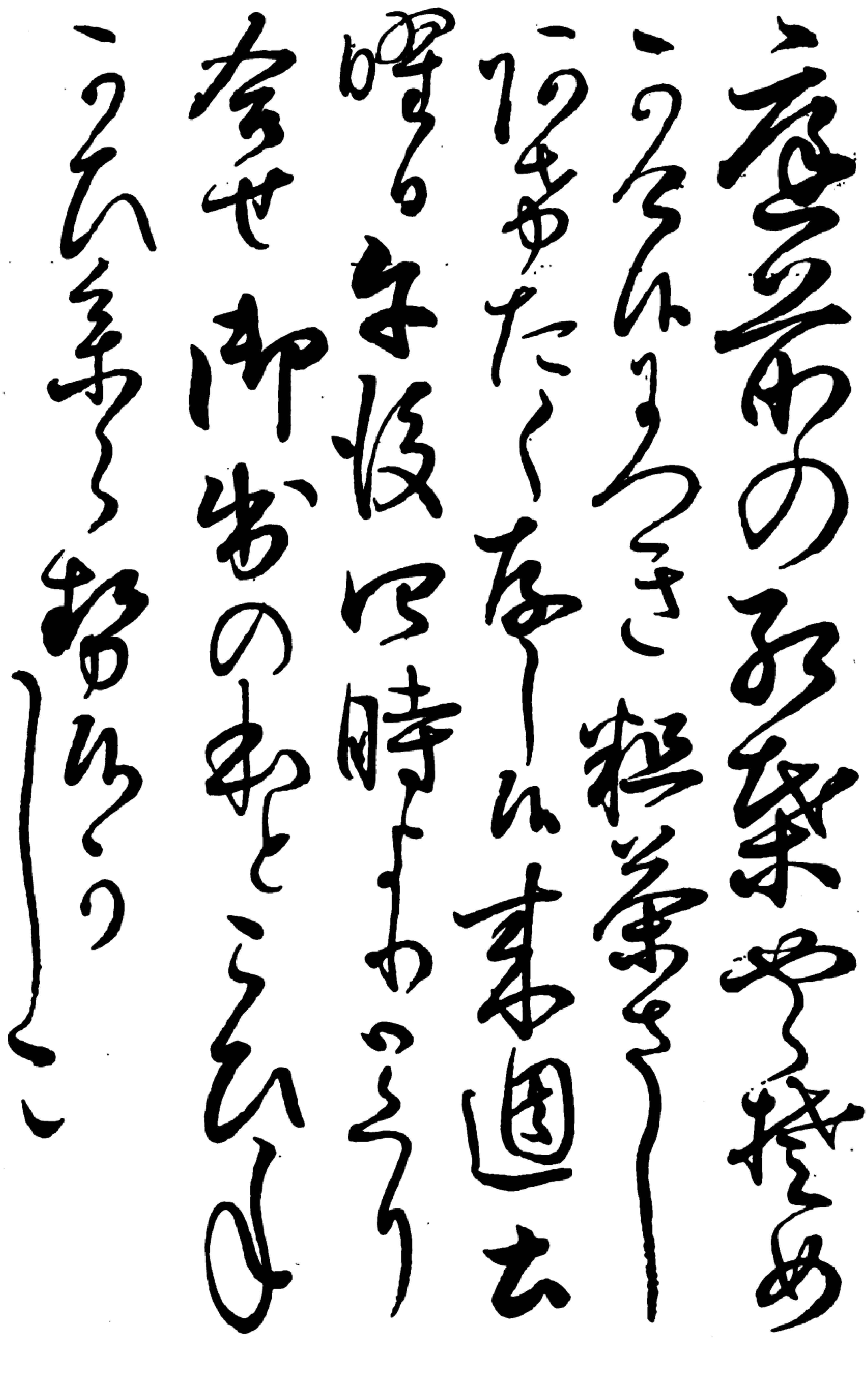
坂正臣先生筆

天長節　新嘗祭

とりのまち　胡君

猿蓑　しくれ忌

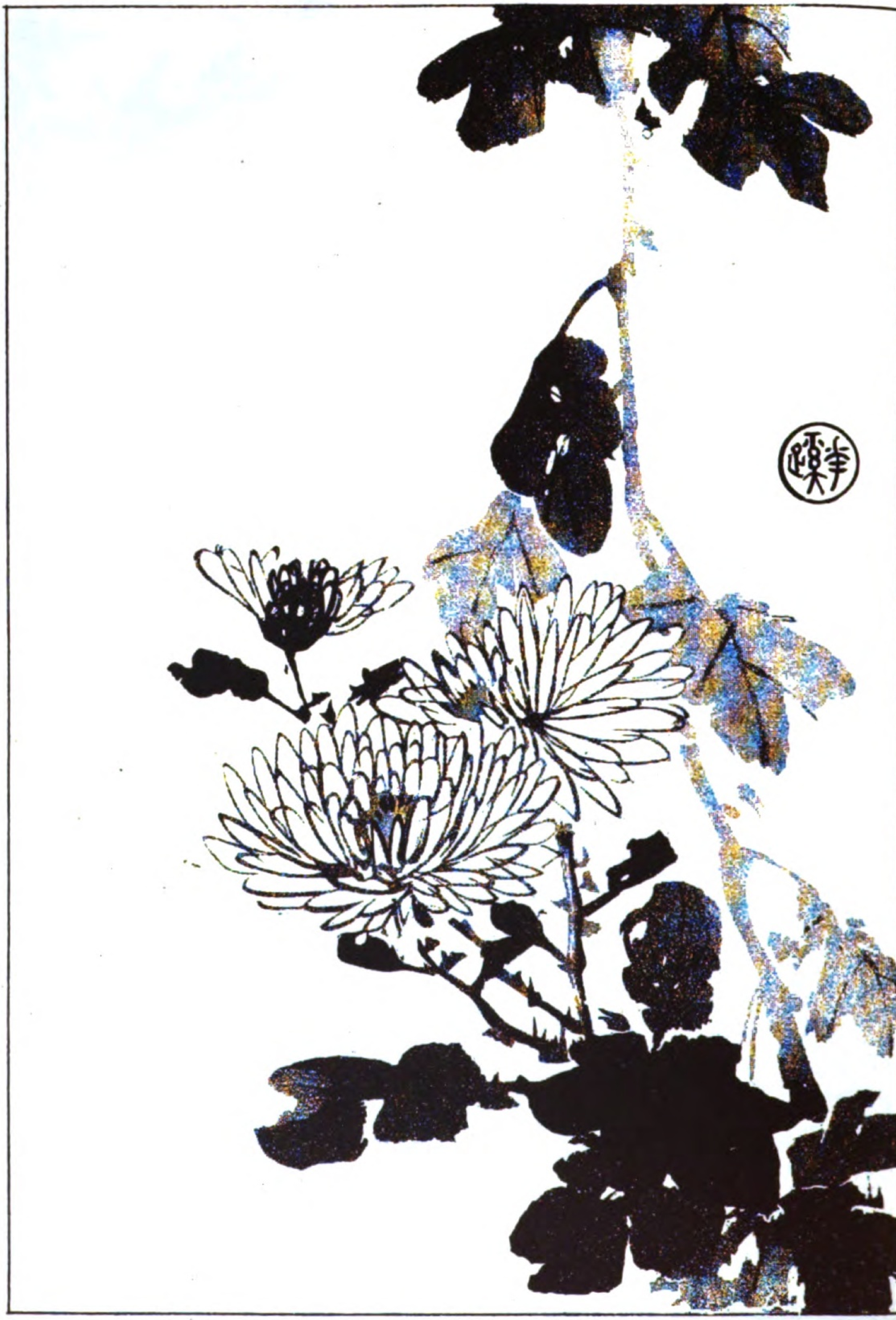
もみちかり　火桶



庭前の紅葉やゝ色め
き候へはまつさゝやかに粗茶さし
上けたく存し来週土
曜日午後四時より御ゆるり
なさせ御出のほとひとへに
こひ参らせ候かしこ

阪正臣先生筆

菊花



跡見花蹊女史筆

暮秋山水

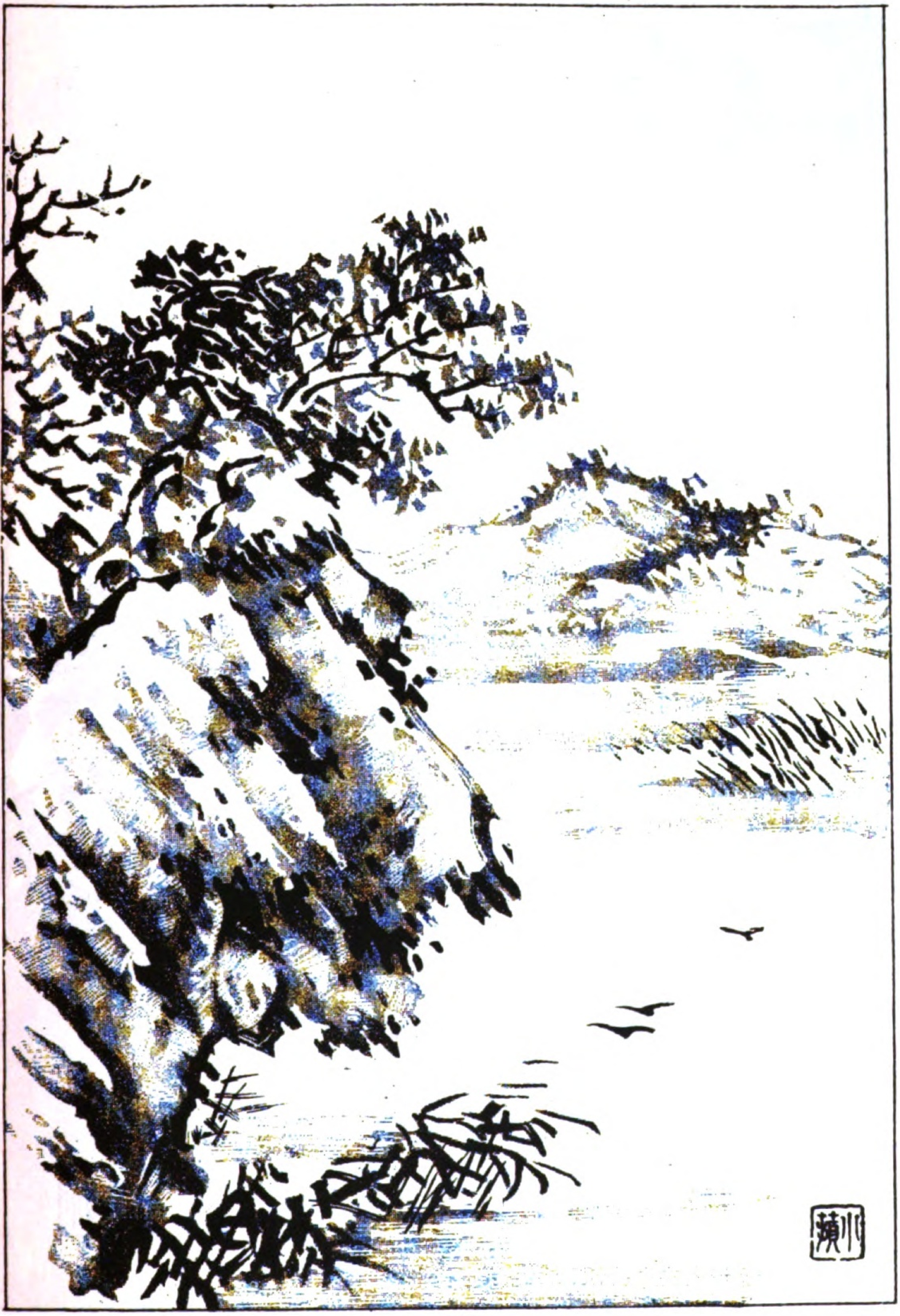
跡見花蹊女史筆





野口小蘋女史筆

秋江清趣



野口小蘋女史筆

少年世界定期増刊

大町桂月君著　中川葦舟君畫

日本少年傳

十一月十五日發行

定價金拾錢

郵稅壹錢五厘

大町桂月君獨特の快腕を振つて、玆に一篇の日本少年傳を著す君が麗筆に染め出されし十箇の英雄豪傑は少年諸君に向つて如何に勇壯活潑なる逸事を談ぜんとかする加ふるに武者畫の名手中川葦舟君が健筆になる口繪八頁はよく本文の妙處を發揮して讀者をして血躍り肉振ふの慨あらしむ◎噫青燈の影親しむべき時此好書に接す讀め天下の少年諸君！　見よ日本少年傳！

春　若　丸

海　陸　大　王

暑　中　大　探　檢

正價各冊拾錢郵稅壹錢五厘

東京日本橋　**博文館發行**　本町三丁目

最も高評ある
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

卅七年
博文館當用日記
懷中日記

發賣廣告（各種共製本既成）

明治三十七年 當用日記

◉紙數 中形大形共各五百五十餘頁 小形五百卅餘頁

大形 菊判 上製（舶來洋紙總クロース金字入）●正價金五拾錢 郵税拾四錢

中形 四六判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）●正價金五拾錢 郵税拾二錢

中形 四六判 上製（舶來洋紙總クロース金字入）●正價金三拾五錢 郵税拾錢

小形 菊判半截 上製（舶來洋紙總クロース金字入）●正價金三拾錢 郵税八錢

特色

用紙（何レモ海外製紙會社へ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ）

印刷（秀英舍新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ）

製本（弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス）

趣向（當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歴史、七曜、支干等ヲ錄シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ」附錄トシテハ紙數十二頁の補遺金錢出納

工業叢書

工學士 淺野幸作君著

アルミニューム製造法

（製本既成）

全壹册

洋裝上製總クロース金字入
正價金七拾錢
郵税金拾錢

「アルミニューム」の發見せられたる當時は其價一斤四百圓なりしも次て金に彷彿し銀に接近し今や銅に迫りつゝあるなり而して其製作品は益々銅の好敵となれり而して其製造方法も始め化學法なりしも今は全く電氣化學法となり尚其詳細なる點に就て益改良せられつゝ其應用に就ても著く發達しつゝあるなり此の如く既に日用金屬となりたるにも係らす我國にありては尚珍奇品として扱はれ之れが製造應用學に干する智識を欠く本書は玆に見るあり曩に著者歐米に在學の日其見聞したるものを基礎とし「アルミニューム」並に「アルミニューム」諸化合物の性質「アルミニエーム」の製造法「アルミニューム」の諸應用及び合金並に之等の分拆等の斬新の新進を網羅して一册とし之を世に行ふと然り

理學士 齋藤賢道君著

工業用植物纖維

（製本既成）

全壹册

洋裝總クロース金文字入極美本
正價金五拾錢
郵税金六錢

歐洲各國に於て近時化學的工業の研究甚だ多き中に植物纖維の調査早く學者及び實業者の注意を惹ける所となれり

本邦に於ては這般の文献は殆んと無く唯だ纖維植物の栽培製出に關する二三の書あるのみにして未だ完全なるものなし編者嘗て該方面の研究を行ひたることあり之を基礎として更に歐米の書を參酌し本邦に適切なる一書を公にせんとの目的に出てたり請ふ愛讀あらんことを

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（丁の四）

竹柏園主人　佐々木信綱先生著

歌集　おもひ草

（製本既成）

全壹冊洋裝
中判頗美本
正價五拾錢
郵稅四錢

●思ひ草は佐々木先生が十數年苦心の作をあつめし書なり

●思ひ草は温雅なる調もて清新の想をうたへる歌集なり

●思ひ草は新派舊派を問はず歌人の必一讀すべき書なり

●思ひ草はかつて出てし短歌々集中最もすくれし書なり

和歌革新の聲盛になりて既に數年、新派諸氏の歌集、世に公けにせられしもの其數少なからずと雖も徒に新奇を衒ひ流行を追ひ、概ねこれ浮華の調眞に人を動かしゝものありや否やわが竹柏園先生頽俗奔波の間に特立し、其操守を變せず孜々として斯道に盡さるゝこと多年、早く國歌革新の旗幟をたて清新の想と馴雅の調と、其特色を發揮して益純固の域に詣らんとすこゝに十數年苦心の作を集め、思ひ草とし、世に問はれんとす、或は惱みある人の胸に限りなき慰籍を與ふべく、或は險しき世路に活らきて休を求むる人の心に美妙の調を傳ふべく、若し延いては、浮薄なる現今歌壇の面目を一新するを得殊に依田學海森鷗外兩先生の序文野口寧齋先生の題詩は長原止水氏が繪事の美と共に錦上に花を添ふるの觀あり

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

（丁の五）

理學士 蘆野敬三郎先生著

科學藝術 純正寫眞術

（近日發行）

全壹册

洋裝菊判美本
正價郵税未定

寫眞の効用近來大に進み實物に據る講究は多く之を利用するを以て實見に次ぐの効ありとせらる然れども從來此術が一般人に知られさるが爲め僅に斯業者及嗜好者に弄はれ實用上の技術として多數に認められざるは識者の夙に慊焉たる所なりき蘆野理學士之を以て科學講究上の一欠點として其豐富なる蘊蓄を傾けて學理技術の兩方面より斯術を講明して廣く一般社會に紹介せらるゝもの即ち本書なり出版の期も遠きにあらざれば是非御讀あれ一度此書に由て寫眞術を知られたらんには其効用に於て興味に於て娯樂實益兩なるら一擧せらるゝものといふも誣言にあらず

發端
一 寫眞術と科學及び藝術との關係……
一 純正寫眞術と應用寫眞術との關係……

學理
一 寫眞術の根本原理……
一 透鏡の作用に關する學理……
一 藥品の反應に關する學理……
一 陰畫と陽畫との關係……
一 藥品材料の性狀……
一 寫眞手術一々の原理……

技術
一 寫眞の撰擇、暗室の整頓……
一 コロヂオン濕板法……
一 乾板製法及寫映術……
一 各種陽畫製法（白金、炭粉、ゴム印畫、
一 撒粉諸法……

補遺
複寫、逆轉、正色、人工光、X線、幻燈、毒藥及應急處理、溶解表、浮秤使用表、現像劑、量衡表、用語字彙、索引目錄

金澤巖君著 ◉ **寫眞及幻燈** 正價廿五錢 郵税六錢

橋本奇策君著 ◉ 實驗應用 **寫眞術** 正價十錢 郵税二錢

（十の七）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

大日本地誌

理學士山崎直方 理學士佐藤傳藏 兩君共編

全部拾卷

●大日本地誌は產業部に於て農業工業商業鑛業林業水產の六部に分類して各地の特業を記述し更に鐵道汽船電信電話郵便道路等の交通機關は素より各地の名勝古蹟神社佛閣の精査は最新の材料に依れり

●大日本地誌は其卷帙の浩瀚なる其叙述の愉快なる其製本の堅美なる其印刷の鮮明なる毛も間然する所なし殊に每册著名都市の彩色地圖と名勝各地の寫眞銅版は斯界名手に成り精巧紙上に光彩を放つ

●大日本地誌は全く在來の地誌と其目的方針を異にし地文人天の關係を說くや極めて詳密極めて明瞭なり其體式は一に歐洲最新の地理書を斟酌し美麗なる精密の圖畫を挿入し本邦大地理書の一偉觀を呈す

●大日本地誌は各地方に於ける山系水系海澤港灣の形勢及び氣象の梗概を詳らかにし又た各地の史蹟を地理的に描寫して古今盛衰興亡の沿革を加述せしめ其他行政司法の區劃關係及海陸軍事の狀勢を詳載せり

第壹卷 關東

正價貳圓五拾錢
小包送料六百匁

續刊

第貳卷	奥羽
第参卷	中部
第四卷	近畿
第五卷	北陸
第六卷	中國
第七卷	四國
第八卷	九州
第九卷	北海道
第拾卷	琉球臺灣

裝幀 脊皮金文字入極美本 紙數全部約七千餘頁

（子の八）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館



女学世界

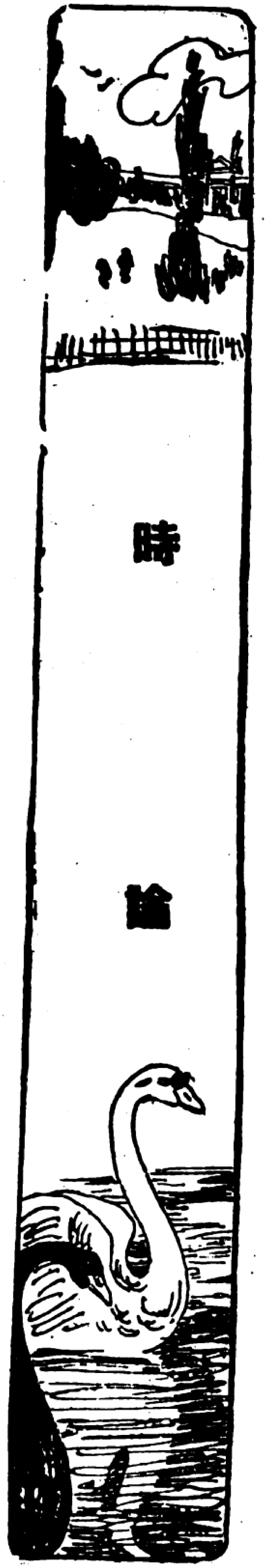
第叁巻第拾四號

凡人教育

父母が其の子に求むる處ろは英雄豪傑にあらず、大臣大將にあらず。平凡なる人間、高尚なる品性、圓滿なる常識を外にして敢てその他を望むべからず。父母の希望は實に斯くあるべきなり、社會の要求も亦實にこの外にあらざるなり。

この人間、品性、常識に加ふるに特種の學問と特種の技術を以て自ら己れの運命を開き以て世に立ち社會に有用の人物となるべし、其の職業には千差萬別あるべしと雖も、要するに年齢を積み勉強を積み、信用を積み經驗を積み、勞力を積み、專心一意己れの目的とする處ろに盡碎せざれば如何なる社會に於ても決して優者の地位には達すべからざるなり。

歎くべからざる例は之を豐太閤の生涯に鑑みよ太閤が匹夫より起つて一國一城の主となりしは年齢既に不惑を過ぎて、社會のあらゆる辛酸を嘗め、常人の及ぶべからざる勉強と耐忍と、勞苦とを以て自己の運命を開きたるなり。太閤が四十餘年の生涯は一篇の勞働史といふも不可なしその稍々世に顯はるゝに至りし時は既に半白の老翁なりしなり。世は亂世にして草昧英雄を起すの時に當つて猶且つ然り況んや文明太平の時世に於てをや、世の父母たるもの深くその子の前途に鑑みる處あるべし。



家庭と學校

安井哲子

人は一生の間に於て三種の生活をなすものなり、三種の生活とは第一家庭の生活、第二學校の生活、第三社會の生活、即ち是なり、諸嬢の内には既に家庭の生活を經過したる方もあるべく、又は經過ぎつゝある方もあるべく又進んで學校生活に入りたる方もあらん、或は又た學校生活を卒へて將に社會生活に入らんとしつゝありし向もあるべし、而して此の三次の生活は個々別々に分立するものにはあらずして、互に一貫する處ろの精神在て存するなり、第一家庭生活とは如何なるものかといふに、皮相の見を以てすれは、單に勞働を休め、食事し、眠り、洗濯するといふが如き類の事の行ふが爲に作られたるかの觀あれど、是れ決して然らず其の實質よりいへば家庭は斯の如き手輕るき場所にはあらざるなり、單に眠るといふ丈なれば、家庭に居るは宿屋に泊ると大なる差はなけれど、家庭と宿屋との異る所は生活を共にする親しき家族が歸り來て共に身心の休息を爲す處ろなり、又單に食事を爲さんと欲するならば、家庭は料理店と撰ぶ所なけれど、其の異る所は嗜好を同うする親密なる家族が食卓を圍むに在ればなり、其他洗濯の事、娯樂の事、皆な斯の如くして家庭固有の實質あらざるはなし、故に家庭の精神を極むれば料理店、旅籠屋、洗濯屋等の如く無味簡單なるものとは遙かに違ひ、

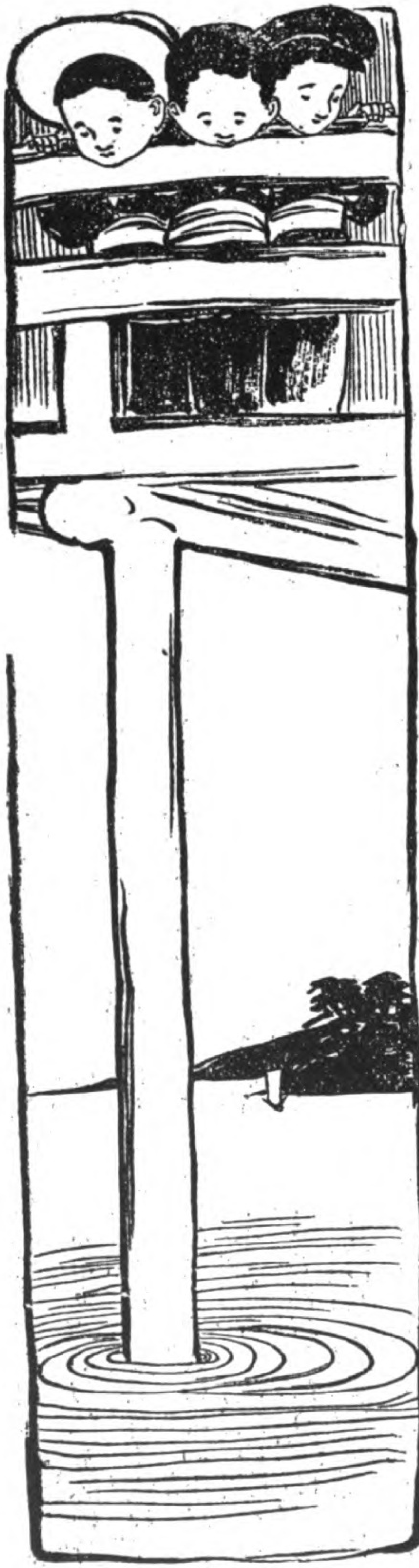
頗る複雜にして而も事々に意味あり趣旨あり、且つ家庭は社會の縮圖なるが故に、社會に在る程の事は一として備はらざるなければ、兒童に向ては誠に好き教場といふべし。即ち家庭は兒童が行々社會に出で、執るべき仕事に就て諸種の準備を與へつゝある所なり、例へば一家には父と母のあるあり、夫婦の相和するあり、親子の愛情なるものあつて、平和の生活を營むが故、其間に鞠育せらるゝ兒童は父母姉妹の溫情に包まるゝを以て、自然心は柔かく溫かに生ひ立ち、軈て社會に立つ時に當りて、溫き愛情を他人に注ぐの支度ともなり、同情を周圍の人に注ぐの準備ともなるべく、以て團體生活に必須の要件を備ふるに至るべし、又家庭は服從を敎え、或る年限の間親の命令に服從せしむる事なるが、此の習慣は後來社會に立つ折、自分の良心に從つて働き得るやうになるものなれば、此の父母に服從せしむるといふことは極めて大切の事なり、かくして親の敎育を受くる間、親の命令に克く從ふ人は、軈て第二期に於て敎師の命令に服從するの學生となり、第三期に於ては社會の制裁と國家の法律に從ふの良民となる、故に親は常に遠き所深き所に注意を置き、その子が將來獨立の素地を準備せしむることに心を用ゐざるべからず、此の道理よりして言へば、子供は玩具の仕末を爲さしむる如きも亦た大に意味あることとなり、何となれば、玩具の仕末は整理の才を養ふ根本にて、成長の後女子なれば一家の整理に長け、男子なれば役所の整理に敏腕を揮ふこととそも得べければなり、かゝれば家庭敎育は小より大に及すの順序を以て、些細の所より敎へ導くを良とす。猶は家庭の仕事が直接間接に子女を敎へつゝある二三の例を擧ぐれば、父母兄弟が一堂中に集りて食事に就き、樂しく愉快に顏を見合せつゝ箸を執る間の仕事は、子女の爲に社會交際の行儀作法を見習はしむるに好き機會たるべく、食事の時間を嚴守せしむるは、社會に出てゝ宴會の招待にも時刻を違へず出席するの良習慣を養ふ源たるべし、故に是等の例を枚擧し來らば社會上處世上に必要なる事は總て家庭に於て養成され居る事を了解し得べし。

英國の家庭は此の點に於て優れたり、家庭に在る間は親の躾嚴重にして、學校生活に入る準備に深切なり、朝起きれば先づ祈禱をなすの規定なるを以て、若しも寢床より起出でざるものあれば、母親は八釜しく言ふて之を確實し、食事の時間も睡眠の時間も規定の時間に於てし、些かたりとも之を犯すことなく、總ての事に規律の嚴正なるは他國民の到底企及し能はざる所なり、故に同じ一家内の内輪同志に在つても、何となく窮窟なる所あり、氣兼する所あり、又た遠慮する所ありて、我儘氣隨とか、勝手放題とか、爲度三昧とかいふ類の事は毫末も見る可からず、實に英國人は家庭を大切にし家庭教育を重要視する國民にして、其の子女を立派なものたらしめんと心懸くる親の熱心は嘆賞するの外なし。されば英國人を稱して社交の忠臣にして將た家庭の忠臣なりと言ひたるも、誠に故あることなり。

家庭に就ては以上にて略々其の要を述べ盡したれば、是よりは學校に就て考ふる所を語らん。

學校は單に智識を澤山に仕込む所と言ふやうなさる淺薄なる場所にはあらずして、家庭と社會の中間に立ち兩者を連結する樞要の場所たるなり、而して家庭に於て授けられたる教育は、學校に入て一層深く反復せらるゝなり、例へば家庭に於て注入せられたる愛情は血族間に止りしも、此の時よりは廣く他人の上、——少くとも同級の學友間に及ぼし、以て交際の一端をば會得するに至るべし、又た服從に於ては親の命令に從ひし如く教師の命を奉じ、親密に於ては兄弟仲よくせし如く、運動場に在て學友互に睦じく嬉戲し、整理に於ては玩具を仕末せし如く、教場内を片付け、之に依て以て一層其才能を啓發せしむ又た級長となりて諸生を指揮監督するは、軈て家長となり長官となりて部下を率ゐる時の稽古にあらずや、かゝれば學校は生徒に將來の準備を與ふる所と言ふべきなり。

學校の課業を怠りて濫りに欠席する如きは、將來の爲に宜しからざる事にて、此の習慣は己の職務に精勵す



るを得ざらしむるに至るものなれば、此の怠惰僻に陥らざるやう注意するは學校の任なり、其他時間の規律、約束の履行等の諸徳は悉く學校に於て敎へらるべきものなり、故に學校に於ける敎師の精神と、家庭に於ける父母の精神とは常に一致せざるべからず、別言すれば即ち學校と家庭の連絡を保たざるべからず、然るに若し之に反して學校と家庭と精神を異にする時は、例へば生徒の作法の如きも學校用と内輪用と別々のものとなるが故、一貫したる敎育の目的を達せんことは得て望むべからず、要するに家庭も學校も社會の生活に必要なる資格を準備せしむる場所たれば、兩者常に心を一にして子女を敎育し、所期の美果を收められんことを切望す。

（以上は女史が女子實修學校に於てされたる講演の主趣を筆記したるものなり文の責は記者に在り）

持參金の目的

文明社會の生活が日を逐ふて繁多に趣くは自然の約束にして隨て女子が世に處するの道も又自から多端を來さゞるべからず。而かしてこの多端なる世事に當つてよくその務を完ふし、女子一生の間は如何にしても他人の厄介にならざる樣心掛くべきものなるが、中に就て最も注意すべきは財產に就ての覺悟なり。社會組織の複雜するに隨て財產は一身を護るの武器となりて婦人が世に處し、家に居る間も亦此の武器の護衛に因つて立つの場合多きに至るは自然の勢なれば。彼の嫁入仕度、持參金等に就ても又昔日の如き放漫蕪雜を許すべきにあらざるなり。

女子生れながらにして富貴の家に人となり、深窓の裡に育ちて世の風波を知らず、親の威光によりて良家に嫁つぎ、幸にしてその夫善良ならば、末長く幸福なるべしと雖も、世間の實際はこの如く誂らへ通りには行かざるものなり。良家とおもひて嫁したる家、存外の始末にして、中途にして破產零落することもあるべく善良とおもふて契りたる良人又存外の愚物にして家を誤まる事あり。夫は不品行にして愛情のなきあり、姑舅は頑冥にして人情を解せざるあり。いづれも嫁の身に取つては大問題にして、斯る際にも及ぶ可く丈け忍耐、克己して身を處すべきなれども、人の身の上にはいろ〳〵の事情もありて、不本意乍ら破鏡の嘆を見る事あるべし。斯かる時に當つて再び父母の家に寄せんか、是れ人生悲痛の極にして何人も同情なき能はず況んやその父母に於てをや、然れども同情は唯一片の同情に過ぎずして眞實その身を立ち行かしめんと欲するには何は扨おき、まづ財產なかるべからず、然るにその財產は父母のものにして最早父母の自由にもならぬ場合あり。父母の家には嫁あり、若夫婦あり、夫婦の中に又小供も出來たらん。然らば、その家の實權は既に新夫婦の手に歸して、最早父母とは利害を同じうせざるの事情となれり。財產の一條甚だ面倒なり。然らば終生兄弟の厄介になりて父母の家に寄食人となら

んか女の身として恥辱この上もなからん。強いて財産の問題を起せば、父母の家には必らず風波を起すべし。娘の身として忍びざる處ろなるべし。さらばとてみす〳〵厄介となるも恥辱なるべし。凡そ婦人の身として斯る苦痛に遭遇せば、必らず已往を顧みて後悔すべし。何故に我身は今日の苦痛を豫期せざりしか、玉のかんざし、錦の帯も何かせん。斯かる事のありと知らば錦帯玉簪何するものぞ、嗚呼惜しむべし、惜しむべし。と振袖を着て血の涙に咽せぶ。女は世間に其例甚だ尠からざるなり。

人情の冷熱、世態の反覆必らず此の時に於て知るべし不斷は結構なりし嫂も斯る時には乾度柳眉を逆立てゝ物をいふべし。さらばとて人を怨むべからず、我身の覺悟の足らざりしを悔ゆるの外なし。

さりながら是は破鏡の際に於て見るべき歎きなれとも婦人一たび嫁げば終生その家を離るべからず、不幸にして家の零落する場合あらんか、何を以てかよくその子女を教育すべき。此の際に當つては是非とも主婦の覺悟を要す。されど深窓に人となりたる婦人は容易に世の艱難に堪へず、又容易に人事の實際に馴れず、是に於てか、非常準備の金なかるべからず、即ち嫁資の活用をなすべき時にして嫁入仕度の金が此の時に於て始めて活動すべきものなり、されど世間を見渡すに嫁の持参金が、零落せる家に活きて働らきたる實例を見ること甚だ稀れにして多くは中途にして夫に使用せらるゝか、又は嫁自からが贅澤なる身の廻りの雑用となりて消滅するが常なり。是の如きはこれ持参金の必要なきのみならず、寧ろ始めより持たざるに若かじ、元來持参金なるものは嫁の身に取つて非常準備金にして、その性質は恰も政府の備荒貯蓄と同じく天下太平の世に於ては深く内帑の奥に秘め置きて滅多に鍵を開かざるのみならず、最愛の良人にも子にも實はその所在を知らしめざる位にすべきものなり。然るに世間多くの婦人は動もすればこの武器の多きを誇りて密かに喜ぶものあり、是れを以て獨立心の薄弱なる夫は何かの場合に無心を言ひ出して一時の融通を依頼することあれ

は妻も又これを誇りとして貸出しを躊躇せざるなり、而かも一度び鍵の手を開かんか恰も金庫に賊の入りたる如く、非常準備の大切なる金は忽ちにして烏有に歸すべし、是の如きは是れ一身の爲めに不利なるのみならず、良人にも子にも又不利益にして、後日の悔を遺すに過ぎず。抑も持參金は親がその娘の前途の爲を謀りて萬一の要愼として與へたるものなれば、娘の身として是を使用するの不心得は申すに及ばじ、良人の身として妻の持參金に眼を懸ける位なものならば、始めより獨立心の薄弱を表するものなれば、斯る良人に伴れ添ふ女房は後日の難義を想ふて、要愼の上にも要愼すべきものなるにそれに一時の融通を許すが如きは夫婦の情愛上止むを得ざるに出でたるものなりとは言へ、實は是れ人情に溺んで利害を忘れたるものにして一家の幸福を思はざるの甚しきものといふべし元來妻が夫に身を任かすは情死せんが爲めにあらず、人倫の大義を完ふせんが爲めなり。然るにこの持參金を良人に融通するは恰も良人と情死するが如きものにして、人倫の大義も一家の幸福も、子孫の計も何もかも一切萬事抛擲したるものゝ如し、妻たるものゝ獨立心の薄弱なるを知るべし。されば眞實妻の心に良人を愛するの念あり、家を思ふの念あり、子孫の幸福を冀ふの念あらば、斷乎として良人の請求を斥けて、その鍵鑰を握らざるべからず。

是れ眞に良人を愛するの至情にして、良妻賢婦とは正に斯る人をいふなり。

右の所説によりて持參金を不斷に費ふことの有害なる事は了解さるべし。然らばその金は非常の準備金にして良人に知らしめざるのみならず、妻の金にして妻の自由にもすべからず、深く内帑に藏蓄して萬一の世變に備ふべきものなり、幸にして境遇に變化なく、一生を順境に置くを得ば、これをその子女に傳へ以て他日彼等が獨立の資となすべきなり。

婦女雜觀

女子と日本の家屋

大町桂月

日本の家屋は、すわるやうに出來居れり。その影響する所すくなからず。日本の衣服は坐るに適し、歩くに適せず。日本人の體格も、坐るにつれて、脚短く胴長き畸形を呈せり。女は洋服着ても、目にたゝねど。男が洋服きれば、脚短くして、格好太だ惡し。胴の長さは、外國人と異ならねど、脚短き故に、身長低して、小人島の觀なしとせず。明治の世になりて、學校、役所、會社など、椅子を用ゐるやうになりて、脚も幾分か延びたるやう也。父親と息子とつれだつて歩くを見れば、槪して息子が高く、母親と娘とつれだつて歩くを見れば、槪して娘が高し。いづくにても、女よりは男が高く大なるが常也。されど、西洋の男女は、身長の差甚しからねど、日本の男女は、其差甚し、女の髷男の肩にまでも及ばざる夫婦あるは、めづらしからず。これ男は外出すること多ければ、女は坐つて居れば也。又男は家にゐる時、膝をくむこと多けれども、女もし橫膝すれば、忽ち母親にねめられて、常に跪坐せざるを得ざれば也。されば、日本の男ひくけれども、日本の女は、なほその低き男とも釣合が取れざるまでに低き也。起居擧動も、亦坐る家屋、坐る衣服につれて、非常に制限せらる。女子殊に甚し。人もわれも立つてのみ居れば、腰より以下の擧動は、目にたゝぬものなれども、坐つて眺め、寢轉んで眺むるやうに出來たる日本の家屋の構造にては腰以下の擧動が大事也。男の子だから亂暴でもよしと親が許してくるれど、女の子で見れば、許してはくれず。手の指の先から、足の先に至るまで、しとやかに、やさしく、更に進んで小笠原式にしつけらるゝ也。この點に於ては、洋服着たる西洋婦人こそ氣樂なれ。肩胸のあたりが、豊かにふつくらとして居れば、それで格好がとゝのふ也。腰

以下には、少しも配慮を要せず。日本にても、男の服には、上に羽織あり、下に袴ありて、身體の形をあらはさゞれども、女の服は、たゞ帶が大なる腰をかくしてくれるのみにて、下に袴なく、禮服となれば上に羽織も着られず、夏はことさら薄き絽の單衣、肌の色まであらはすものなれば、身体中、到る處に氣を配らざるを得ず。餘り氣をくばり過ぎる故、却つて顏の方がお留守になる也。日本人は西洋人に比して、人種が劣等なれば、いたし方もなけれど、西洋人の顏のいき〳〵したるこそ、見ても氣持よきものなれ、單に顏の外面によりて、動物に優劣をつけむには、表情の有無多少を以て判せざるべからず。最下等動物には、顏なし。やゝ進めば、顏あり。されど、表情なし。犬猫の如きに至れば、少し表情あり。今少し進んで猿、狒々などになれば、大に表情あり。なほ一段進んで、人となれば、更に一層表情あり。人の中にても、人種によりて表情の多少あり。西洋人の顏、最も表情に富めり。日本人の顏は、其表情西洋人の顏よりは、むしろ猿の顏に近し。同じ日本人の中にても、馬鹿な人よりも、利口な人が表情に富み、學者文人よりも、政治家が表情に富み、貴婦人よりも、藝者が表情（但し下品なる）に富む。尤も優劣は表情の點のみにては判せられず、表情少なき貴婦人が劣等にして、表情多き藝者が優等なりとは云ふべからざる也。殊に日本にては、のつぺりとして表情なきを上品とするならはしなりければ、お公家樣よりは、店屋の番頭の方が表情あるやうになれり。女はなほ更つんと澄ますを高尚としたれば、表情の發達せざるもことわり也。澄まさば、またしも、女はあまり顏を見せぬ方針を取れり。嬌羞を帶ぶる娘時代はなほ更也。人にあへば、うつむきがちにて、口よりも頭のかんざしに物言はす。否、情を表す。そのかんざしの大にふるふは、笑ふ也。その時は、顏を袖に埋む。少しふるふは、微笑する也。動くともなくして、微にゆらぐは、切なき思あるにや。かく少女は顏より髮を見するをならはしとすれば、髮の結ひ方を氣にして、顏の表情に注意せず、表情も發達せず。さ

は云へ、表情は必ずしも下品なるものにあらず。然るに顔を呈せむとする藝者の表情こそ下品になりたれ、高尚快闊なる情を表する顔肉の活動なしとせむや。吾人は、日本の婦人に向ひて、髮の結び方よりも、腰以下のふるまひよりも、顔の表情に意をそゝぎて、冷かにすまさず、さればとて、媚態を呈せず、優雅にして、爽快にして、生動せむことを勸むる者也。

かく家屋の構造に制せられて、日本の女子は、腰以下に意を注ぐこと多ければ、男には一寸眞似が出來がたし。女形の役者、腰以上は女になれるも、腰以下まで女になり得るものは稀なりと聞く。胴のかゞむもの多きも。亦家屋につれて起れる也。啻に見てみぐるしきのみならず、健康上にも害あり。殊に身長の高き女に、胴のかゞめるもの多し。ひよろ〳〵とひよろ長きは、格好よきものにあらねど、すらりと高きは、美形なるに、日本の女は、身長の高きをいやがるが故に、かくかゞめる也。馬鹿げたる次第といふべし。

女子が家の内にばかり居て、坐つたり、起つたり、歩いたりするのみの世ならば、頭より足のさきまで、小笠原流にしこまれて優美の観を呈すべけれど、外出せざるを得ざる時世となりては、木から落ちたる猿たるを免れず。さらでだに身長の低き日本の女子が、胴をかゞめて、内輪ふみて、小股に刻みゆくさまは、一種のポンチ繪也。坐る時世には、坐る様式ありき。歩く時世には、歩く様式なかるべからず。女學生が、靴はきて、海老茶袴はきて、元氣に歩みゆくは、これ今日の時世に適應せる様式也。これを室内に應用しても差支なし。かくては、粗野也、女子の美を害すとて非難する頑冥者流あるべけれども、習慣となつて仕舞へば、それで目にたゝぬもの也。更に繰りかへさしめよ。日本の女子が腰以下にむけし下らぬ注意を、顔面に集冲して、表情の美を發揮せざるべからず。

女子と旅行

達磨は面壁九年、足がくさりて無くなれりとかや。

日本の女子は、室内におしこめられしこと一千年、それでもなほ足のわるこそ不思議なれ。新婚すれば、婦の住む新室をつくれり。故に御新造樣也。家の奥ふかくとぢこもれり。故に奥樣也。老いては、更にひッこめり。故に御隱居樣也。たま〳〵出で、山にのぼらむとするも、女人堂ありて、遮られたり。富士山にのぼりしもの、日光に遊びしものなとは必ずや女人堂の痕跡を見しなるべし女人堂とは。山に詣づる女が、こゝにて禮拜をすまし、それより上に登ることを禁せられたるが爲めに立てられたるもの也。これを足弱き女の事ゆゑ、山下までくれば十分思が屆きたる也。御苦勞に山上まで上るを要せずと、坊主が情をかけてくれたるものと思はゞ、とんでもなき間違也。實は女は罪ふかきもの、汚れたるものとして、輕蔑して上るを許さゞりし也。男とても、幾日か垢離とりて、はじめて上るを許されし也。も



し維新以前、女子にして、日光に遊ぶものありとせむか、東照宮は見ることを得む裏見、霧降の如き下らぬ瀑は見ることを得む。されど、天下の大瀑なる華嚴瀧は見るを得ざりし也。劍が峯の紅葉は見るを得ざりし也。華嚴についで日光中の大瀑なる湯瀧、龍頭瀑は見るを得ざりし也。幽趣この上もなき山中の湖の中禪寺湖は見るを得ざりし也。湯本温泉は浴するを得ざりし也。

明治の世になりて、女人堂はこぼたれたり。されど依然として、女の高山に上るものなし。唯西洋婦人のみは、先んじて到る處の高山に足跡を印せり。何ぞ西洋婦人の元氣にして、日本婦人の意氣地なきや。



日本の女子にして、明治の新社會に仲間入りせむとせば、先づ歩行することよりはじめざるべからず。歩行し得るならば、旅行して、自然の美に接せよ。必ずや卿等の氣宇を宏濶にせむ、卿等の趣味を高尚にせむ、卿等の精神を皷舞せむ、卿等の塵慮瑣念を一掃せむ、知識をもひろめむ、役者のうはさ、衣服の品評、姑の讒訴以外に、多くの話柄を得む。

芝居をねだり、三井の呉服をねだる、妻君ありて、旅行をねだる妻君なき間は、日本の女子は、社會以外に敬して遠ざけられても仕方なしと思はざるべからず

返へらぬ繰言

返へらぬ繰言、幾度くりかへしたりとて、とりかへしのつかぬものなり。愚痴をこぼすことはやめよとはよく人の言ふことなれど、これその一を知りて、未だその二を知らざる也。死んだ子の年を數へたればとてその子が生きかへつて來るものにあらざれど、かなしさの餘り、口へ出して、思ふ存分言つてしまへば、それで却つて氣がはれるものぞかし。たとへば、陰雲かさなり合へる五月雨の空の、降つて〳〵降りぬきたる後ならでは、さつぱりとはれざるが如し。心にくよくよ思ふとを、こらへて言はずに居れば、陰雲ますます重り合ふのみにて、はるゝ時なし。愚痴をこぼして、たまれる涙を流してしまへば、雨ふりつくして、空快く晴るゝが如く、心却つて慰さめらるゝ也。これを察せずして、あの人は悲しみ居れば、氣を引きたてゝやらむとて、面白さうに罪なき話しかくる人あれど、これは慰めにはならずして、却つて苦痛を與ふる者也。愉快に樂しめる人に、かなしき話もち出せば、その人の興を破るとひとしく、悲しめる人に、樂しき話をもち出すも、亦興さむるわざ也。子でもうしなひたる人ある場合に、その人に向ひ、思ひ切つてあきらめよ、かなしみたればとて、取りかへしがつかずとていさめ勵まさむとするは、これ冷かなる理を以て、人に推すなり。それくらゐの事は、本人とても百も承知、千も承知、承知して居りても、思ふに任せざるが、人の感情なり。心に似ぬは涙なりけりと詠じけむ、感情が冷かなる理にて律せらるべきものに非ず。その御悲みは御尤なり。われもむかしこんな悲しき目にあへり。あんな苦しき思をなせりと、合槌うちて、共泣になくを見て、わけのわからぬ人かな、あんな悲しいと言ひ出して、更に涙を添へしめけるよなど、冷に嘲る人もあ

れと、その方が、却つて悲しめる人の心をなぐさむるわざ也。すべて人はつれを求む、笑ひたき時は、共に笑つてくれる人あるを喜び、陰氣にて泣きさうな人をよろこばず。悲しき時には、人の共に泣いてくれぬがうれし、快濶にして笑ふ人は、癪にさはる也。

泣きたればとて、それが何にもなるわけにはあらねど、泣かずには、居られず。これ理性以外の問題也。愚痴をこぼして何の益になるかとは、お門違ひの反問也益無益以外、愚痴をこぼしたきが故にこぼす也。感情を以て、之を解釋すべし、理性を以て解釋すべきに非ず。

女は男に比すれば、なは更感情に富める者なれば、愚痴をこぼすことも甚し。されど、愚痴もしくは不平をこぼすにも、多少事柄と場合とを考へざるべからず累を人に及ぼすとは、深くつゝしむべき也。姑に對する不平を、心に忍ぶ能はずして、下女に向つてもらしたり、更に下りて出入の商人にもらしたりするは、思慮の足らぬわざ也。すべて、かげにて、人の噂せざるやうに心掛けよ、とんでもなき禍をまねくとあれはなり。よしや甲が乙に對する惡口を聞きたればとて、言はでもすむ事なら、言はずにすますべし。うかと言ひつけぐちして、迷惑な目にあふこと多し。口かずは多きを妨げず、その言ふ所罪なくして、趣味あるべし。みだりに人を品評し、褒貶し、人の秘密をもらすべからず。古人も言ひけむ、口は禍の門也。

女の子

三人まで、男の子ある上に、今一人生れたり。その子、女也。瓜の蔓に、茄子は生らず、父は、ひよつとこの出來損ひ、母は酉の町の賣れ殘り、汝も美人には縁遠かるべし。學資だけは十分に出す考なるも、家貧なれば、美衣はまとへぬものと覺悟すべし。在來の家庭教育の如く、女としての特別の教育は加へざるべし賣物として育てざるべし。唯人として教育せむとす。長じて、嫁したくば嫁せよ。材能を以て獨立せむと思はゞ處女に終れよ。父は汝の天性嗜好を矯めざるべき也。

女子と英語

今日の女子は、一種妙な境遇の中に置かれてある、即ち學校と家庭との間に板挟みにされて居るので、折角學業を卒へて校門を出る、嫁に行く、其先は大抵舊弊な家庭であるから、學校で受けた教育は何の役にも立たない、此弊殊に華族女學校などに多いやうで、兎角大名は大名と婚し、公卿は公卿と婚したがる、尤も近頃は富豪の家へ嫁りたがるもあるやうだが、その富豪といへども概して舊弊の家庭であつて見れば、學校で得た新智識新思想は何の用にも立たぬ、用に立たぬのみならず、或は反つて邪魔になる程で、即ち御飯の炊き方を知らぬとか、女の癖に生意氣な本を讀むとか、兎角舊風とは相容れない、從つて隨分苛い思ひもする、氣の弱い女子の事とて途に全くその家風に融み込んで了つて卒業後一年經つか經たずに、全く前日の面影を失つて居る、まことに氣の毒でならぬ、で斯ふいふ人に會ふ時「どうです。この頃英語の方は……」と尋ねると、「どうもあちらへ參りましてから、英語など復習の暇がありませんので……もうすつかり忘れて了ひました、斯んな事なら英語などより、モツト裁縫か何かの方を教へて頂いて置けば宜しかつたと思ひますヿで……」と答へる、十人が八人まで之れだ、寧ろ殆んど全體であると云ふても差支ねがない「英語より裁縫」是れ實に今日の教育を受けて結婚した後に發する所の叫聲なのである、學校と家庭、新舊思想が調和して居らぬとは、一般に於て然りだが、殊に上流社會に於て甚しいので、華族女學校出身者などには、一層この感が深いのである、然るに之れと相對して面白い現象がある、おなじ華族女學校卒業生たる稲垣運羅公使の夫人、秋月公使館書記官の夫人などに會つた時、私は前と同じ問を發して、「どうです、近ごろ英語の方は」答は前と正反對である

「お陰様で、彼國へ參りましても、左したる不自由もムいません、斯ンなヿなら裁縫や何ぞより、モツト英語や佛語の方を勉强して置きましたら宜かツたらうと、今更後悔致しますのです……」

との答である、之れは即ち其の學んだ所を活用したのであるが、活用し得る境遇に入つた人は、如何に幸福であらうか、親たる人は大に此點に注意しなければならぬと思ふ、女子自らも己が將來に就て考へねばならないのは無論である。（華族女學校幹事淺岡一氏）

社交

貴婦人の嗜好

中村鈴子

島田三郎氏夫人

夫人のぶ子は横濱市なる西村喜三郎氏の長女にして明治八年六月を以て生れ同二十五年を以て衆議院議員毎日新聞社長島田三郎氏に嫁し愛國婦人會、婦人矯風會及び禁酒會等に盡瘁しつゝあり

秋雨漸く晴れて四五日以來にない温度でしたが、彼岸の入りもてゝ兩三日と過つた故かメッキリと秋の氣色を現はして、中六番町なる島田氏の御門を入りますと紅白の萩が今を盛りと咲き亂れて居りました。書生さん四人ほど机を列べて勉强せられつゝある御玄關より洋書棚幾つか列べられた廊下を通つて、一の應接室へ導かれましたが、御床の掛花活には朝鮮朝貌が風情優しく活けられてあり、葭戸越の御庭先には松、檜、青楓などが枝と枝と擦れ合ふほどに茂り、垣に傍ふて白芙蓉や百日紅が咲き誇つて、木の間から漏れ來る光線を浴びて居りました。記者が坐に着くや否や、サッサと出て來られた夫人は、スラリとした御體格で、御納戸子持縞の縮の浴衣、白地に鉄革色の楓を散らした友禪縮緬と黒襦子の晝夜帶を小さく結ばれ、艶かな髪をアッサリと纏められた束髪は、水際立つた額と配合美しく、二重の張りのある御眼元を濃く秀でた眉に凛として御氣象を表白され、締つて御口元に言ふべからざる愛嬌を湛へて、寶石入の指環を嵌められた眞白の指先を揃へて慇懃に御挨拶あり、記者の請を幾重にも斥けられましたが、遂に否み兼ねられ――、

▲宗教

跡見女學校に居ります時分は、トント宗教の考へも御坐いませんでした。尤も偶像を拜することは大嫌ひで御坐いましたが、十五の年學校を出まして横濱へまゐり、英語を習ふ爲めに宗教學校へ通ひまして、教師ブーリテンに就きましたところ、却々の熱心家で、禁酒禁

姻の方には殊更力を入れた人で御座いました。其二階が飲食店(西洋の)で下が學校と云ふ組立でしたので、父が御辨當を其處で食べて來たら宜からうと申すので左樣致した事が御座いましたが、ブリテンは酒を飲まずに水ばかり飲んで居りました。それから私も漸々基督教の話を聽いて耳を傾ける樣に爲り、海岸や山手の教會へも日曜毎に出て說教を聽いて居りましたが、一個人に就いて導いて貰つたとは御座いませんでした。さて種々世の中の有樣を見ましても、宗教を信ずる方と信じない方とは、品行から事業、それからチヨツトの演說まで大層相違があると存じて、信者になりたいとの希望は充分に持つて居つたのです。

▲洗禮

此家へ嫁いてから、宅では御承知の通り基督教熱心で御座いますが、私は眞成に宗教が解つたならば可いが今少し研究の上と存じて却々容易に洗禮を受けませんでした、漸く一昨年になつて、私は矢島さんに精神を打明けまして、何卒導いて下さいと御賴み申した所、矢島さんは涙を流して喜んで下さいまして、今老體で毎日曜には出られないが、貴方の爲に必ず出やうと仰しやつて、夫から御引立下すつたゆゑ、追々心靈上の事も判る樣になりまして、日曜日には何樣な用事があつても繰り合せて出る事に定めました、矢島さんが御出でなくとも私は參る樣に爲りました。併し洗禮だけは成るだけ信仰が固まつてからでなければと宅でも申しまして、漸と今年受けましたので御座います。

▲心靈の變化

私なぞ未だ心靈の過ちばかり多いので、お耻かしう御座いますが、それでも無宗教の時と較べますと、大層安心が得られると存じます。先あチヨツト致したとでも、會なぞで皆さんの立派な御服を見ると、女ですから欲しくなるとも御座いますが、直に考へ直して、それを求める金があつたら慈善にでもと存する樣に爲り、又毎晩祈りの時、毎日の心の汚れを反覆して悔ひ改めますと、誠に淸々と安心して眠られる樣な次第で何時も何時も心の悶なく送りますのは、此上もない幸

福と喜んで居ります。

▲令息

二人の子供(長男孝一氏十一歳、次男悌二氏八歳)も日曜毎には日曜學校へ通はせて居ります。唯今の御若い方でも、信者の御方の御話は自然高尚で、子供等に聴かしても至極宜しう御坐いますけれども、信者でない方が何の氣なしに仰しやる藝妓とか娼妓とかチョット御話の中に混りますと子供があとで『母樣あれは何の事なんです』と問詰めますので返答に困ることが度々御坐います。

▲禁酒會

宅で禁酒會に入りましてから六年になりますが、其前は政黨の御交際上から御酒も烟草も頂きましたので、私が何卒てれだけはと始終頼んで居たので御坐います。一體私はブリテンの薫陶から致して、非常に此事を歎いて居る所でしたが



島田夫人

(一九)

ら、宅へも五月蠅く頼みました處、自分でも惡い事と氣が付いて居りますので、土曜日だけと定めました。併し折々其定りが崩れまして、木曜日などにも今日だけは勘辨して貰ふなぞと申す事もあり、如何しても止め切に參りませんでしたが、女子學院で松本荻江さんの追悼會の時、安藤さんが禁酒に就て大層よい演説をなさいましたのを伺つて、斷然禁酒會に入つたので御坐います。それで安藤さんに、自分は今迄如何しても止め得なかつたが、毎度大學や專門學校へ入學する學生の保證人に立つた事がある場合に、其學生に向つて成るべく酒や烟草をのまぬ方が宜いと勸める。併し自分が平生飮んで居るから、何だか心耻かしい次第で、年を取つてからは飮んでも宜いなぞとは言はれず、且つ我家の子供には親が飮んで居ながら戒める事も出來す、非常に心苦しいと思つて居たとを述べて入會致したので、私もそれから矯風會へ入りました。

▲酒の到來物

私の家では、書生でも車夫でも一切禁酒と致して御坐います。車夫なぞ餘所で飮むかも知れませんが宅では少しも飮みません(尤も料理の味淋だけは使ひます)それですから他から正宗のダースなぞ頂きました時、無愛嬌とは存じますが直に御返し申すので、置つ放して御歸りの方へは旅籠屋まで屆けて返上致します。如何か致すと、汽車へ御立ちがけに麥酒など置去らるゝ事があつて、實に當惑致します。車夫も禁酒致して居ますから遣れませんし、禁酒會員の家から他家へ麥酒を遣ひ物に致す次第にも參りませんし、據ろなく近處で懇意な人の車夫に飮んで貰ひます樣な次第で……。

▲禁　烟

烟草盆を一切御客に出さぬが可いと、宅では申しますが、こればかりは御交際上不都合で、出さぬ次第には參りません。御客樣の中には隨分葉卷を吹かしながら御入來の方も御坐いますから。

▲御　飯

人樣が御入來でも、御飯時分に仕出し屋から取ると云ふとは決して致しません。手料理を差し上げるとに定

めて置きますが、其代り初めて御入來の方でも、時分が來れば何でも有合せで差し上げる事にして、家族一緒のテーブルで樂しく食べる樣に致します、子供も矢張り御一緒に食べさせますから、子供が自づと食物に就いて好嫌ひの我儘を言はなくなります。私の郷家では何故か御飯の時苦情が多く、御飯が剛いの柔いの御副食が甘いの辛いのつて、三度〳〵女中に八釜しく申して居ましたのを、私は始終厭な事だと思つて居りましたが、宅では小言が大嫌ひですから、御飯の時には如何な事がわつても、決して文句を言はぬ事と定めて御坐います。それですから、郷家の女中は氣が利いて居りますが、私共の召使は何時までも下手で、御客樣の前へ出しましても失禮ばかりで、これには困りますよ。

▲儉約

「あなたの處では嘛經費が掛るだらう」と皆樣がよく仰しやいますが、ホントウに心を放したら限りはありませんので、直に人樣の御厄介になる樣な次第に陷りますが、其處は私が最も注意して、自分達の事で省けるだけの冗費を省き、贅澤は少しも致しません。當年も鎌倉へ四十日ほど參つて居りましたが、御承知の通り彼處は物價が高う御坐いますから、百姓屋の二階を借りて、大概の物は東京から持つて參り自炊致して出來るだけ質素に暮し、豫算の剩餘を鎌倉の孤兒院へ寄附して參りました。

▲旅行

私は旅行が大嫌ひなので、一週間も居ると直に歸りたくなりますが、一つは東京や横濱にばかり住み慣れまして、田舍に慣れない故でもありますし、元來潔癖で家では湯殿でも自分の思ふ通りに掃除も致しますが旅行先では左樣も參らず、何ですか周圍が汚いやうな心持がして厭なので御坐います。御友達が其樣なに田舍が嫌ひなら茅場町あたりの中央へ住まつて屋根ばかり見て居たら宜からうと笑ひなさるが、決して熱鬧が好きと云ふ次第ぢや御坐いません、規律の整然とした都會の風が宜いのです。それで宅でも、是非私に旅

行の興味を覺らせ、田園生活の價値を味はせねばならぬと申して、鎌倉では大原村に宿を定めました。彼處は周圍が悉皆畑で、其中央の百姓屋の二階でしたから毎日農夫の生活を實地に見て、穀物野菜の育つ順序を子供達にも覺えさせ、却々面白くて飽きることを知りませんでした、それで當年ばかりは四十日を短く感じました。

▲海水浴

毎年鎌倉逗子大磯などへ參つても、海へ一度も入つたとが御坐いません、あの海から出ては砂に轉がつて居る風俗を見ると實に嫌になります、私は若し入るなら水から出て直に宿へ驅け込むが宜からうと申します。それで皆さんから、貴女は餘り規帳面過るから不可と諫められますが、性質が極窮窟で、夏でも宿屋で卷帶一つで居ることが出來ません。

▲髮

銀杏返しは大嫌ひで、此家へ參つてからズット丸髷ばかりに結つて居りましたが。三年ほど前から束髮に致しました。これならば獨りで結べますし、奇麗にわげたければ女中にも出來ますから髮結を宅へ入れる世話もなく、揷物の必要もなく、餘程節儉になります。從來も別にわれこれ買ふ風ではなかつたのですが、出入の小間物屋が種々な頭の物を持つて參つて勸めますと要ないと存じながらツイ買ふ氣になる樣な次第で、束髮になつてから小間物屋の出入は全然廢して了ひ、多少慈善の方へ廻すとが出來ると存じて喜んで居るのです。但小間物屋の出入を止めてからは、チヨット袋物を直して貰ふのにも不自由で、鄕家の方へ賴む樣な次第です。

▲衣服

これも撰好みを申しては、私共の身分として丈へ切れません。それで何にも搆ひませんが、唯だ色の釣合の惡いなぞは氣にかゝる方です。跡見女學校の校友會の時は、何時も銘仙の黑紋付を着てカシミルの袴を穿て出ることに定てありますが、愛國婦人會や其他の會へは普通に帶を締て出ます。此帶も厄介な物ですが、何

かこれに代用すべき装飾品は無いでしやうか知らん、あの下田歌子さんの召される被布なとは好いと存じます、尤も歌子さんが召すからかも知れませんが……。改良服にも餘り好い型がありませんね、洋服も日本の婦人には不格好ですし、從來の裝でも多勢の集會の場所へ出た時見すぼらしい樣です、畢竟何處も此處も沈み過ぎて引立たない故かと思ひます。彼の支那婦人は兩頬に臙脂をさしたり、耳環を下げたりして、割合立派に見えるぢや御坐いませんか。日本の婦人もモー少し色の配合を考へて、派手〳〵しく見えるやうに工夫したらば如何でしやう。無暗に價の高い地質を撰ぶには及びませんが、唯だ配色一つで引立つかと存じます

▲白粉

日本の女は何樣に色の白い方でも、白襟を着ると黒く見えて、素面では實に見つとも無いので御坐いますね私は女中共には山脇さんの御說の通り身仕舞を致させますし、自分も外出の際は大抵白粉を用ゐます。一體白粉禁止論なぞ實際行はれた話ぢや御坐いません、男子が女の裝飾にまで喙を容れるのは不都合千萬で西洋婦人なぞは男子に裝飾の世話を燒かれるのを大恥辱と致して居るさうですね。男の方でもコスメチックで頭を撫で付けたり、指環を嵌めたり、種々なお洒落をして居らつしやる癖に、女の世話まで燒きなさるにも及びますまい。隨分白粉禁止論者の奧さんでも粉屋の泥棒のやうに塗り立てゝ指の股や爪の間の白粉を洗ひ落さずに居らつしやるのが在るさうですよ。或酷評家が『何某は自分の妻の拙い塗樣を見て白粉が嫌になつたのだらう、誰しも每日彼の細君の白粉顏を見て居ては、白粉禁止論者にならざるを得ないね』と申しましたが、マサカ左樣でも御坐いますまい。

▲裁縫と書見

主人のお古を私が着るとか、長男の物を次男に廻すとかの工夫は、私がチャンと積つて縫ふのは女中に致させます。自分で手を下ろして縫ふ必要もありませんし、針仕事が極好と云ふ方でなく、どちらかと申しますと本を讀む方が勝手なので御坐います、左樣で御坐

ひますす、文藝倶樂部や新小說は宅へ入れません、藝者の寫眞などが澤山入つて居ますから……。蘆花の小說は嫌味がなくつて大好です、「不如歸」も思出の記も黑潮も皆見ました、あの黑潮には實に感じまして、喜多川夫人が可哀想で〳〵目を泣き腫しました、それでキマリが惡くつて二階から降りて來られませんでしたよ。貴方はあの五來の「未だ見ぬ親」を御覽でしたか

私はあの本を鎌倉で二度繰返して子供に讀んで聽かせましたが、長男は感じて淚を流したのです。あの太一が可哀想な處へ犬が出て來て一層深く感じさせますよ。これまで漣山人の御伽噺を讀んで聽かせても餘り感じない樣でしたが、「未だ見ぬ親」では非常に泣いて、母さんモット讀んで下さい〳〵と申しましたのです。

▲俳句

私は和歌よりも俳句の方に趣味を有つて居ますので以前少々ばかり學んだとも御坐いますが、宗匠の手を離れてから、偶に想が浮んでも纏りが付きません。私のは舊派の方で、極軟かな句ばかりしか出來ませんのです、宅や御友達に見せますと、モット勁い句を作らないかと言はれます、併し日本新聞の墨汁一滴や病床六尺は面白く讀みました。

▲新聞雜誌

新聞は宅で從事して居ます每日の外に、國民、朝日、二六、萬朝、日々などを大抵朝飯前に目を通します、日々の近事片々なぞ好きで御坐いますよ。基督敎の新聞雜誌は大抵讀んで居ります。

片山博士夫人

夫人顯子は舊幕臣田邊孫次郎氏の長女にして三宅雪嶺氏夫人花圃女史の從姉なり文久元年を以て生れ明治十二年を以て今の工學博士片山東熊氏に嫁す天性重厚にして花圃女史の才華煥發なると絶妙の對比たり

晴れるかと思へば又降つて來る五月雨空の朝、赤阪丹後町なる祖師寺の前に長塀を遶らしたる御邸へ伺ひました。取次の人をも勞せず、御自身に出迎へられし夫人は、二十餘年前牛込の華塾で折々御目にかゝつた御

容子と變りなく、唯だフサ〳〵として丸髷が小さい東髮になつて居られたばかりでした。秩父銘仙の袷に黒七子の羽織、時候にわはせては其厚着のやうですが、平常皮膚の御弱い方であらるゝ故でせう久々にての御目もじに、故師本多錦吉郎氏及び同窓生に關する昔話ありて――、

▲畫

年を取つて子供のないほど寂しいものは御坐いません其割に何にも出來ませんよ。畫も半途で止して惜しいことを致しましたが、男の生徒が多勢で囃されたので忍耐が出來なくなつたのです。一躰私は母が寡婦で因循一方に育てたものですから、怖々ばかり致して居たのですよ。本多先生はホントウに親切で、教師としては完全な方です子



花畑に於ける片山夫人

片山の友達にも大分先生に學んだ人がありまして、毎

度先生の御噂が出ますよ。建築と畫とは關係の離れないものですから、少々習ふた畫が片山の話など聴くには大層助けになる樣です。

記者は屏風の畫「橋下の鷺」を指して伺ひましたところ、大層夫人の御氣に入りの品で、

あれは永德です。左樣ですネ、光琳の風に似て居りますよ、能くは存じませんが光琳は狩野から出た宗達と光悦を融和して一機軸を出したのでしたか、外國でも光琳の畫を模樣に使ふさうですネ。あの三幅ですか、あれは落款がありませんが、探幽だらうと思ひます、眞中の鍾馗の顏が黑田清輝さんに肖て居るつて、皆さんが御笑ひなさいます。あの洋畫の方では舶來の色摺に佳い物が御坐いますこと、草花など實物の色が眞に其儘に寫して御坐いますが、近頃は大分日本畫風の枝ぶりに品を付けて畫いてあると思ひます。ハイ片山も畫は大好で、片山の兄(陸軍監督監片山中行氏)も極熱心な人ですから隨分古いのを持つて居ります。丁度預かつて居る品がありますから、少し御目に懸けませうか。

記者は夫人の御厚情に甘へて、名作の古畫を拜見致しました。其一二を擧ぐれば、啓書記の觀世音、探幽の三聖嘗醋、光琳の富士、抱一の草花、梅逸の花鳥、容齋の夜討曾我、狙仙の猿、狸を始めとして、珍幅數へ切れませんでした。平生斯道に注意深くあらるゝ上に、斯樣な御趣味の空氣に包まれて居らるゝ夫人は、天性の雅趣を一層高めらるゝ御事と存じて、羨望に堪へませんでした。夫人は展覧會で落款の不分明な物を御覧になれば、御歸宅後必ず畫家人名辭書で調べらるゝとの御話でした。

▲旅　行

旅行は大好で、其中にも海の方が一番です。よく人は海の音を聞くと哀れに寂しいとか言ひますが、私は却つて氣が晴々として快活になります。私の實家は舊幕臣で維新後沼津へ參り、明治七年まで片端町に居りまして、始終海邊で遊んだ故で、斯樣に海が好きになつたのでせう。あの鵠沼には親戚がありますので折々參

ります、彼處の海は遠淺ですが、波は却々暴い方です人氣は極質朴な處ですよ。私は一躰田舍の風俗や景色が大好で、何時も住みたいと思ひます。あの藁葺家根の格好だの、夕方漁師が裸躰で濱邊へ出て居る色合なぞは、宛然畫のやうで……勝景に臨んだ時ですか、左樣ですネ、歌よりも畫にしたらばと考へますネ。

▲和　歌

少しの間中島歌子さんへ参りましたばかりで何にも出來や致しません。佐々木信綱さんの樣な新派の歌は却々六ケしう御坐いましやう。

▲新聞雜誌



溫室內の植物

元から時事を見て居りますが、日清戰爭の時分には日々を取りました、日々は戰爭に就て却々詳しくつて報導も敏う御坐いましたから……新聞は論說が好きでして、凝つて見て居るうちに用が出來ることが多く、三面を見る暇が無くなります。「太陽」なぞも矢張り小說までは滅多に讀みません。併し女が人の前で論說の事など話すのは、西洋人でさへ忌むさうですから、私も決して人に話したことは無いのですが、唯だ見るのが好きなのです。

記者は質問會といふ會のあつたのを思ひ出して、唐突ながら其成立を伺ひました。

左樣ですネ、女子教育が勃興した明治十二三年頃、柳谷謙太郎さんが、米國からプリンス、イサベラとプリンス、メリーの姉妹(彼地で學校を開いて居た人)を連れて歸られ、高等女學校の教師にしました。其後十年ばかり經つて森有禮さんが亡くなつて、一時女子教育が頓挫した時分、解雇になつて暫くマゴついて居ましたのを、柳谷さん始め二三の人が氣の毒がつて、岩崎の家庭教師(イサベラは裁縫家政、メリーは學理)に住み込ませ、他の華族方へ御世話したり、又會費三十錢ヅヽで質問會といふ會を起して姉妹を講師に立てたのです。姉妹とも品行の善い人で、姉さんは丁度妹さんの細君のやうに、萬事世話を致して居ります。彼の武田錦子先生や津田梅子先生も、此質問會には御盡力なさいました。私は高等女學校へ少しの間參りましたが、其時分加藤さん今の武田錦子先生に御厄介になりました。其後質問會で時々武田さんの通辯を伺ひましたが、實に御達者なものですこと、西洋人の話す間はヂーッと落着て聽いて居らしつて、一くぎりになるとチヨット西洋人に目ばくせ成さいまして、それからスラ〳〵と通譯演説をなさるんですが、洋人の言葉の足りない所は補ひ、順序が正しくつて又判り易く、其御容子の立派なこと、實に恍惚する樣でした。僅かの間ですから御馴染申しは致しませんでしたが、學識と柔德と備はつた眞に婦人の模範だと始終お慕ひ申して居りました。先頃御病氣と聞いて病院まで出ましたが、病院を聞き違へて參つたものですから御目に懸れず、殘念で御坐いました。津田さんは御若いこと、今でも全然御孃さんですネ、爾うして御心の清いこと、天女と云ふのは彼の方でしやう。

此時チヨット來客との取次があつたので、夫人は立つて行かれました。其間に欄間の珍らしい彫刻をツク〴〵拜見しましたが、養老の孝子と源平八島の戰とが欅の裏表に彫られ、其刀痕が大膽で雄健なのに感服しました。軈て出で來られし夫人に其由來を伺ひましたところ、これは芝公園に住はれた時の御宅が昔し將軍の御休憩處であつたさうで、其處の欄間

を其儘用ゐて普請なされ、又今の家を建られる時に持つて來られたので、全躰に赤黒く艶々として居るのは、其むかし香爐の烟で燻つた故でせう。向は違棚の襖は、白茶地に萌黄刺繡の唐獅が二匹向合つて居る如何にも珍らしい意匠でしたが、これは能狂言の衣裳の切れ地なので、神官などに扮するとき、袖の紋様に付くものださうです。

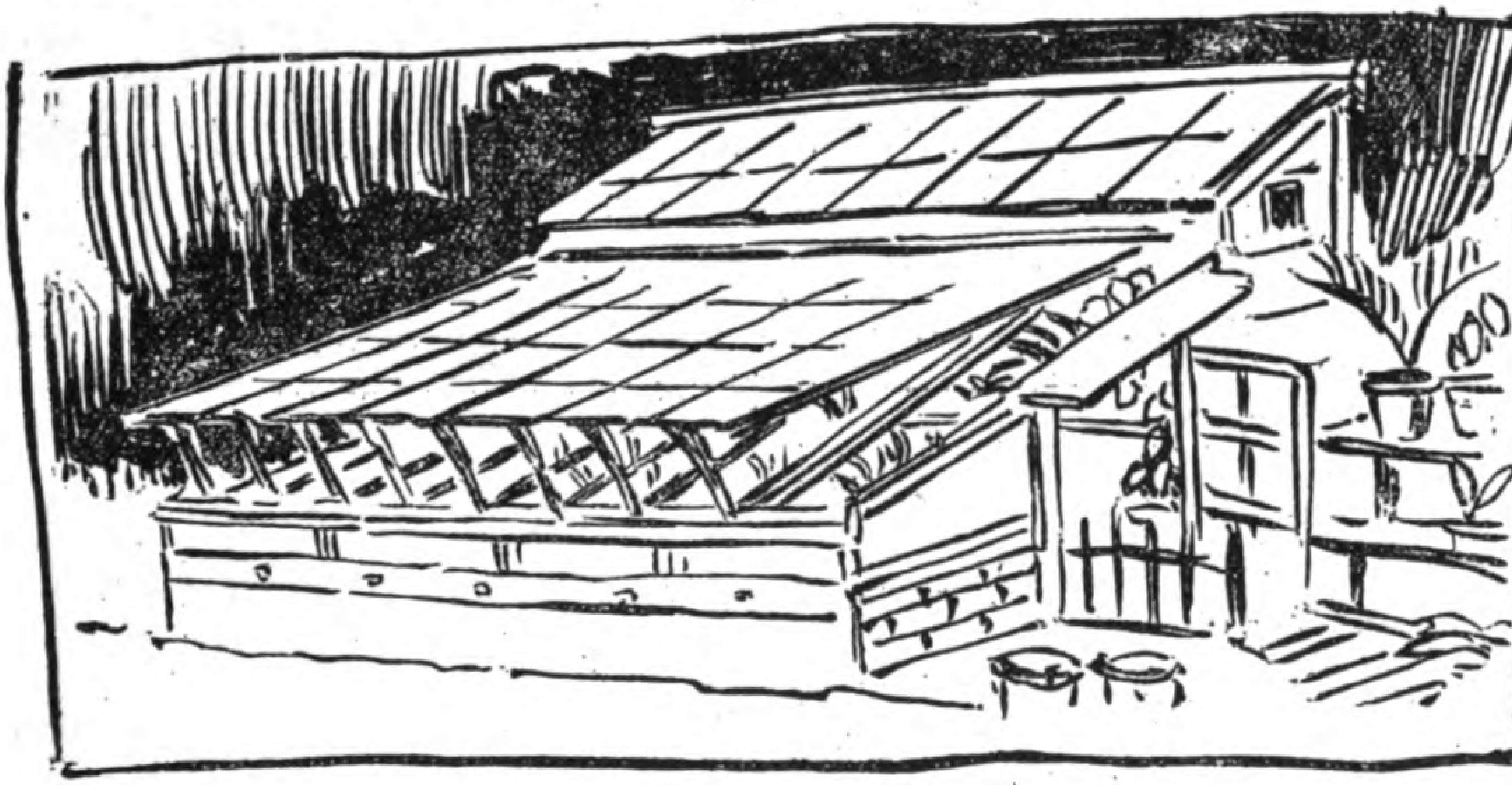
▲小說

小說は好きです、一葉女史とは懇意でしたが、彼の方の小說は實に別ですネ、其中にも優れた作は「たけくらべ」「濁り江」などだと思ひます。濁り江とは旨い題を付けたもので、われを泥水としましたら、チヨツト厭に聞えますが、同じとでも濁り江と云ふと大層好いぢや御坐いませんか。私が女史に感服しますのは、作は申す迄もなく題の付け方の好いとです、チヨツト手帳の表紙にも雜記とか備忘錄とか露骨に認めないで、宮城野とか何とか寫意的になさる事でした、尤もこれは婦人に相應しい付方と男子に相應しい付方で御坐いませうネ。飜譯小說では若松賤子、歷史物では澁柿園のが好きで御坐います。柳浪ので御坐いますか、われは思想は感心しませんが、唯だ文章が上手なので見ます、蘆花の「不如歸」は評判の作ですが、ツイまだ見ません、弦齋のは上品ではありますが、何時も同じ樣で格別面白くも御坐いませんネ。脚本は坪内先生のを見ただけです、餘程上手なのでなければ厭で御坐いますから……。

▲能樂

近頃の芝居見物は商人や會社員で持ち切つて居るかと思ひます、其他の上流の方々は大抵「能」を御覽になりますさうですネ。先づ第一等は淺草の梅若、其次は寶生會、觀世で、芝の能樂堂は舞臺は立派ですが、近頃よい人が出ません。梅若は御承知の通り毎月十六日と定まつて居ります、私なぞは滅多に參りませんが、貴族方は席を定めて置いて御出でになります、梅若は元青山家の舞臺であつたと聞きましたが、却々立派で御坐います、棧敷は二疊が一室づゝで御坐いまして、間

旋する男も御坐いますが、決して其男に祝儀なぞを遣る賤しい風はありませんし、全躰の仕組が極上品で御坐いまして、御辨當も御持參の方が多い樣です。能見物をなさる方は皆始終謠の本を手に持つて讀みながらちよい〜舞臺を見て御出でです、能も平生謠を聞かない方には興味が淺う御坐いましやうが、上手下手だけは初めて見る人にでも判ります、上手は身躰の据りが違ひますもの……。イヱ幕と云ふものはありませんで、狂言と能と一齣づゝ交代ですから、チヨツト立つ間もない樣に面白う御坐います。左樣で御坐いますネエ、狂言も能も各自好々が御坐いますよ、一躰能役者が舞臺まで參つた時よりも、謠ひながら橋掛りへ出て



片山博士の溫室

參る時の方が、趣味が深いので御坐います。

▲音　樂

何でも好きで、長唄なぞも自分は致しませんが、度々聽き慣れて居りますから、矢張り樂みが深う御坐います、慈善會の音樂會切符は能く買ひますが、召使に遣りましても聽きに參りませんので、惜しいと存じして私が參ります。

▲圍碁と角力

碁は出來ませんが、見て居るのが大好で、假りに自分を白とか黒とかの味方に定めて見て居りますと力が入つて少しは活死が判つて參ります。角力は一度も見ませんが新聞の勝負付を見るのが樂みで、こ毎日氣に致して見ますから、能く

覺えて居りますよ。

▲針仕事

仕事は始終休みません、もと〳〵是ればかりで育てられた人間で、小學校へも參りませんでした位ですから見聞は狹う御坐いますし、迚も皆さんの前で御話しは出來ません。

▲夏と冬

夏は元氣が好くつて、朝早く起きて洗濯を澤山致したり、張物を致したりすると、ホントウに心持が淸々として居りますが、冬は意氣地が御坐いません、矢張皮膚が弱い故だらうと思ひます。併し近來庭いぢりを始めましてから、大分丈夫になりました。

▲園藝

片山が園藝を致しますので、私も全然花屋さんになりました。刈込も植木屋を一々賴むと大層ですから、低い所は大抵私が致します、チヨツト御覽遊ばせ、

と夫人は玻璃障子を開けて庭下駄を直され、廣い擂鉢形の前庭をダラ〳〵と下りて土橋の架けた池の邊まで導かれました。此時小雨がパラ〳〵降つて來ましたので、引返して蝙蝠傘と花鋏とを携へられ、今度は裏庭の花園へと案内せらるゝ時、夫人は飼犬が裾にまつはるのを愛されつゝ、植物園式の廣い花畑を廻り、白百合の香を慕ひ來る胡蝶幾羽を見送られつゝ、

蝶の珍らしいのが何時も澤山來まして、動物學者が網で採りに參りますよ。花が御入用なら何時でも入らつしやい。此白百合を津田さんに上げたら嘸お喜びでしやう。菖蒲は日本のと餘り變りませんネ、強い花ですこと。此レツトポーカーは本當に煙突掃除の器械に似て居ます。薔薇は芝公園に居つた時、モツト澤山育てまして、これだけは種類別にして寫生して置きました。

白百合、海芋などを惜氣なく切られ、寫生せよとて與へられ、

白いのばかりでは調子が惡う御坐います、瞿麥も持つて行らつしやい。ハイ最早毎日笠も被らずに草むしりですから、顏も手も眞黒で外へ出る時には、糠で洗ひ

でもしなければ見つともない位です、併しお蔭で肥りましたこと。これだけの花に水を遣るのは随分一役です、肥料は主に木の葉ばかりで御座います。澤山の落葉を穴に埋めて、三年ほど腐らしたのが上等の肥料になります。温室は片山が留守でダイ無しになりました。温室の中には、臺灣の蘭、日光の苔、其他面白い植物が數多く列べられてあつて、夫人はこれに就き、一々記者の質問に答へられ、記者は花の香と夫人の厚情とに醉ふて時の經つたのを忘れて居ましたが、降りしきる雨に促されて、惜しき御別れを申上げました。頂戴した花束を提げて茫然と。

室内の装飾

人の装飾化粧が、身體容貌のいかんによりて異なる如く、室内の装飾も、亦家屋の構造いかんによること勿論なり。故に西洋の室内装飾と、日本のと異なるは、一にこの點に在り。而してこゝにいはんとするは、日本家屋に於ける装飾なり。然れども、今日室内の装飾にてもなさんと思ふ家に在りては、概して中以上なるを以て、或は西洋室のもあるべし。故にまづ初に日本室と西洋室とに於ける、大要の心得を摘記すべし。

西洋室は、どこまでも西洋的なるべきは、いふまでもなきことながら、西洋室に日本品を飾らんと思ふものあるべし、しかるときは、漆器、銅器、金銀器等をよしとす。その他之を日本的にするはよろしからず、又日本室に、西洋品を飾らんとせば、模造品にても中古の古雅なるものを用ふべし、キラ〳〵したる品は、日本室の装飾を害するを以て、よく〳〵注意すべし、畫も油畫は適せず、よろしく水彩畫、又は墨畫類似のものを採るべし。

要するに、日本室には清楚瀟洒なるを貴ぶべく、西洋室には、濃厚華麗なるを貴ぶべし。しかもこれ一の程度なり、清楚なるべしとて、淡泊に失すべからず、華麗なるべしとて、濃厚に失すべからず、いづれもその中間を取るべし。これその主人たるものゝ品位に應じて異なるものなれば、よく注意すべきなり、あながちに西洋に拘はるべからず、道具屋の店頭に似るべく、さりとて日本に拘はるべからず、明麗たるべし、静韻を日本に取るべく、器具は西洋に取るべし。

家庭

家内の用を減ずる工夫

羽仁もと子

◎家内の雑用を多くする人は、誰れかといふと、申すまでもなく主人と子供で御座います。まづ大概の主人は、起きる時間にきまりがありません。主人の寝室はいつでも朝の掃除に取殘されて、女中が臺所で御飯茶碗を洗ふ頃、それお掃除とまたも呼びたてられるといふ始末、石鹸も齒磨も洗顔の水も揃つた所で、今度は着換に煙草盆、坐蒲團に、新聞と、此樣にきまり切つたもの丈ならばまだしもでありますが、手紙を認める日になると、巻紙から硯箱、誰某の住所はどて、今日は幾日と、一本の手紙を書くために、丸で奥さんと二人がゝりです。やつとの事で出來た手紙はそこにその儘打ち棄てられる、矢張細君を煩はして、下婢の手に渡される。用紙も硯箱も元の居場所に落附くのは、これまた奥さんのお蔭です、習慣ならばこそ怪しみもせず、さして面倒とも思ひませぬが、斯う考へて見ますると、日本の家庭は、實に用事の多い筈であります

◎安部磯雄氏のお話に『私は自分の身邊に、少しも家内や女中の手を借りません』ぼたんの取れた位は自分につけます、買物は學校の往復に大方とゝのへますし車に乗つて歸つて來ても、車夫に『お歸り』と聲をかけさせて、家内や下婢を玄關に呼び出すとは嫌です。車夫はまた靴まで脱がさうといたしますが、それも斷つて自分の靴は自分に脱いで、置くべき所に自分で置きサッサト上つて行く方が、實に簡便でもあり愉快であります。人に依つて、旅をするのがおつ苦うだなどゝいひますが、それは恐らく家に居て、平生妻君や女中などを、自分の手足代りに使つて居る人であらうと思

ひます。『質素の生活高尚の思想』といふことは、私の理想であつて、また最も好むところのものでありますが、質素の生活といふことを私は斯ういふ風に解して居ります。それは粗衣粗食をしろといふのではなく、自分の生活に無益の人手を費しめるなといふことであると。衣食住に贅澤をしないといふのも勿論質素の生活の一部分ではありますが、それらはむしろ末のことでありませう」との事でした。誠にその通りだと思ひます。

◎主人もせめて掃除までには床を出て、顔を洗ふと、要意してある着換の着物を着る位のことまでは、自分に辨じ、書いた手紙は働いて居る下婢を、態々出してやるまでもなく、急がぬものなら、自分の出掛にポストに入れて、何の差支ありませう、よし郵便投函のために、態々外に出たといつても、家長たる威嚴に於て決して欠くる所はあるまいと思ひます、むしろ家人に獨立的氣風を養はしむるために、ドンナに大いなる力あることでせう。安部磯雄氏のやうなことは、是非凡ての御主人方に實行して頂きたいと思ひます。そして主婦たる方々も、良人は今にはじめぬ手のかゝる人だからと、諦めてばかりおいでにならずに、よき折のある毎に、御良人のために人手を煩はさぬ健全の習慣の養はれるやうに、お勤めになることを望みます。

◎子供にあまり人手をかけるなと、いふことは近來大分多くの人に信ぜられまして、玩具の出入れ、學校道具の始末、その外自分の身のまわりを、出來る丈け自身にさせるやうになつて居ります。中には唯に自身のことばかりでなく、年齢によつて、家内の仕事を少しづゝでも手傳はせて行く樣な所もあります。これは大層よい習慣でありますゆゑ、一日も早く多くの家庭に行き渡るやうに、いたしたいと思ひます。

◎私の存じて居ります或家に、一昨年十二月生れの男の子が居りまして、それは毎朝金魚に麩をやることを、自分の勤めといたして居ります。まだあまり頑是ない年ごろでありますゆゑ、初めは別に毎日の役目として、させる積りでもなかつたのでありますが、子供が喜んで致しますゆゑ、今では一種の役目同樣になつたので

す。朝毎に〇〇さん御飯ですと云ひますと、いつも戸棚をわけて、お母さんが忘れずに要意してある、お皿の中の麩を持つて、ヨチ〳〵と金魚鉢の前に行き、ポチャリと水に投げいれて、金魚の喜んで寄つて來るのを、ソレは嬉しげに眺めて居ります。前には戸棚の戸は、開けたなり閉めぬのでありましたが、「戸棚は後でしめるのですよ」と敎へましてから、時々忘れて麩を持つたまゝ、急いで椽側に行きかけても、必ず途中でふりかへるのが不思議です、そしておつ苦さうにもなく引き返して、必ずキチンと閉めるのですと。些細なとではありますが、子供は是によつて、ドンナに規律を尙ぶ心と、動物愛憐のやさしき情とを、養はれるでありませう。唯お斷り申して置きますのは、子供の性質にも種々ありますし、また發達の遲い早いもあることで御座いますゆゑ、私は一槪にこのお子さんの年頃から、何かを云ひつけるのがよいとは申しません。或はズット大きくなつてからでなければ、容易い役目でもあてがはれぬ子供もあらうと思ひます。

また或西洋人の所では、子供が滿四歲になりますと何か役目をあてがふことにいたして居ります。そこには大勢の子供が居りますゆゑ、役目も矢張兄さん、姉さんから、次へ次へと讓られて來るのです。四才の子供は便所に紙を要意すること、その上のが食卓にナイフや匙を並べること、またその上は、椅子やお皿を程よく置くと、その他一二の用事がありました、大勢子供のある家で、一々斯ういふ風にならして行きましたなら、總領の十五六にもなる頃は、子供たちの手ばかりで、出來る仕事が隨分多くなりまして、或はその爲に女中一人の手位が省けるかも知れません。

◎主人のこと子供のことが、以上の樣に始末されましたなら、用事の儉約が隨分出來ると思ひます。なほその外に必要と存じまするのは主婦は每晩、明日の仕事配りや買物を精密にきめて、定めの手帳にでもつけて置くとです。ソシテその中に例へば使とか何とか、子供にでも出來さうな用事がありましたなら、成るべくそれは子供に致させることであります。豫じめ綿密な心積り

といふことなしに、イキなり次第に用事をする風でありますと、人手も時間も無駄になり、たゞ其の日〳〵を間に合はせるといふだけで、少しの餘裕もなく、その他のことは何も出來ないことになります。

◎中井龍子氏のお話に「英吉利ではどこの家でも、一週間に砂糖が何程、茶が何程とキチンと分量が分つて居ります。でそれらのものは、大槪一度に一週間分づつ買つて置きますが、その買物の日は土曜日です。それゆゑ間の日の買物は、その日〳〵のもの丈で御座います」との事でありましたが、私供はじめ日本の普通の主婦には、極く大ザッパなこと丈は分つて居りますけれど、ソーまで詳しくは分つて居りませぬゆゑ、砂糖がなくなるとも、お茶が乏しくなるとも、知らずに居つて、時に煮物にかゝつてから、砂糖が足らないといふやうなことも有勝で御座います。ドーゾ英國の主婦のやうに、注意深くなりたいものだと思ひます。

◎家内の用事を少くするために、また斯ういふことが必要であると思ひます、朝起きて主婦は坐敷の掃除や小まわりのことをする、女中は臺所一切を受け持つといふやうな簡短な家でも、主婦自身の仕事にも、女中の仕事にも、豫め一々〳〵順序を定めて置いて、毎日その通りにすると、またさうすることが必要であります。例へば女中が起きたなら、まづ玄關の戸をあける、次に臺所の戸をあけて、顏をあらひ、火をたきつけ、御飯を仕掛け、火鉢を掃除し、銅壺、鐵瓶などを洗ひ、お汁の身を要意するといふやうに、家人の食卓につくまでの女中の仕事に、悉皆順序を定めてやるのです。あとかたづけ、晝の支度、買物、晩の支度、寢る前の要意など、一々順序をきめて置きますと仕事も早く出來、ソシテ洩れるといふ心配もありません。その上女中が代りましても、ソーまで定まつて居りますと、新しいものもなれやすく、また前の女中に比べて、仕事の仕樣が早いか遲いか、丁寧か、ぞんざいかもよく知れまして、女中を使ふ上によほど助け(參考)になるものですソー〳〵細かいことまで、此方の思ひ通りにさせるといふと、餘り干渉すぎるやうに、女中を機械同樣に取扱

うやうに、思ふ方もあるかも知れませぬが、何事にも研究の念慮に乏しい今の女中に、物事を任かしてばかり置いた日には、随分損なやり方をして、いつまで經つても氣が附かないといふやうな譯であります。で特別に賢い働きのある女中は別として、一般の女中なら却て細かく考へてやる方を、向ふも氣樂だと思ふて、感謝する位であらうと思ひます、且つ此方の考へたとは、ドコまでも完全であるとして、女中に強ゆる譯ではなく、「若しもこれでお前にやりにくいと思ふ所があつたなら、遠慮なく云ふがよい、考へて見て直しませう」と、云ひ渡して、向ふの意見を聞く餘地をも存して置きますことゆゑ、一向不都合はありません。

◎起きる時間、寢る時間、食事の時間、買物の時及び月曜には、洗濯、火曜にはどこの押入掃除とか、水曜には何々といふことを、定めて置く必要のあることは申すまでもありませぬ。

◎最後に申し上げて置きますのは、家内の用事を少くするとの目的は、決して主婦自身をはじめ家人の安逸のためではありません、家庭が一体にモー少し規律正しくなりましたなら、外に出して居た縫物も、家内で出來ることになり、讀書の時間も、人に無沙汰をしないとも、家人が快く團欒して、談話することも出來るやうになるであらうと、思ふからで御座います。妻は良人の出る前に、側について居て何から何までの雜用を手傳ひませんでも、夫のことは出來る丈け夫自身にして貰ひ、自分はその間にサッサと家事を取りましたなら、夕方良人の歸つた頃には、ゆる〳〵その日の出來事でも語りあふ暇も出來る譯でありますゆゑ、夫婦の親しみにも欠くる所はないと思ひます。

未亡人の處世法

水原翠香

◎古より貞女兩夫に見えずの教はあれども、此言のある故に却て身を誤つ女子多し、之は是貞烈金鐵の如き

賢女が、潔く身を守るを稱譽していへる言にして、一般の婦女子悉くしかせよと教たるには非じ、三十にだも滿たずして夫に死別したる婦人兒なきは勿論、たとひ一二人あればとて其家の資產乏しく稼人の主人死亡して收入はなく、遺子の成長を俟間の取續き覺束なきが如きは遠く其父母親戚相計りて然るべき方へ兒を引とり、或は一兒を附て再蘸さするを可とす、女子の心は進まずとも熟末の事を考へて今强て貞女を立てむとして、後年に至り難澁に陷落むよりは、意を曲て父母親族の言に從ひ、公然再嫁して身の納りを全ふするの增れるや萬々なり、是前に譽は得られずとも、後に譏なきもの也。

◎凡寡婦の始は貞淑なりしも、中途より不品行と成ものゝなかち淫婦のみにも非ず、日本の昔は何事も唐を學びて儒經を尊びし故に、女は獨立せぬ者としたる習慣の久しき、萬事西洋ぶりと改りたる今日も、猶且女兒に財產を分與する親は尠ければ、獨立したくも爲べき財なし、女子も又甘んじて男に養はるゝを通常と思へり、未亡人となりて再嫁せざれは實家に依るの外なし、實家なりとて一度他に出たる者再度厄介となるは萬事氣兼なるもの也。况て實家にも依らずして眞の獨立せむ事は餘程の女丈夫に非ざるよりは爲能はざるべし、大かたは艱難を凌く耐忍力欠乏するより、我にもあらで不義に陷る者多し、其情を察すれば又憫むべき也。

◎友白髮と契し妹脊の中も、無常の嵐に吹裂れて夫は最愛の妻子を遺して冥途黃泉の客となりぬ、空き骸に取付て、共に死なむと惑ひこがるゝを、人々に諫められて、葬りも畢り、中陰の程心にもあらで日を送ればみる物聞物につけて亡夫の事のみ眼に浮びて、心中露も忘られぬ程は、再蘸の事杯人のいへば穢らはしやと耳をふたぎ、奚操を破るべきかと蜂ふき云ふを、父母親戚とも未うら若きに末覺束なしと危ふめは、是みて呉と髻を剪て俄に姿を替もすべし、是に於て人々も然迄の決心ならむにはと引退りて、再蘸の事は沙汰止ぬ斯て年月を送る程に始のうちは心も澄て思ひ任ふるま

へと、女の獨住は萬に附て不自由多し、それも親の在るうちは慈愛の袂に覆はれては、兎も角も成行くめれど、父母共になくなりての後は生家といへども次第次第に賴母し氣なく成ゆくものなり。これ世の習ひなれば詮方なし事に托、折に觸ては口惜き事、悲しき事、誰に談らむ由もなく、男子あらば斯迄は侮られじ、此事もかく爲むものをいかで男の賴母しき人もがな、事ある折の談合相手にせまほしやと、閨淋しとには非ざるも、男戀しき心のつくは强ち色氣に非ずして、自然の人情として免れ難き弱點なり、さる折柄近處に男子在てふとせし機會に心易く成、女の手力に及びがたき物の擧卸し、或は區役所抔の公用の代人を勤めなとすれば、殊の外重寶がり能人を得たりと嬉しくて、綻をぬい、洗濯を引請、時に酒食をふるまひ抔、次第〳〵に親密に交際すれば、男はいつしか野心あり、先其兒より手なづけて物をとらせ、物見遊山に連歩行て、欲がる品を買與へなとすれば、兒は伯父樣々々と、慕ふ程に、女心の淺はかにも計畧とは心もつかで、實の伯父にも兄弟にも增りて實意ある人と信じ、大小の事打明て相談に及べば、男は得たりと附入て、金子をさへ用立る事ありて斯て十分に義理を掛たる上にて、いひ寄られては否み難くて、十人に八九迄も墮落もの也、元より貞心堅固ならぬ婦は、まづ經濟の點より、又我兒の爲身の爲にも之に增す事なしなとゝけしからぬ道理をつけて自ら許し、男のいひ出ぬ先よりほのめかすも有り、一度此味をしめては濡ぬ先こそ露をも厭へ、此男故ありて別れても又他の男を引かけ、後見まうけて世を樂に渡るをかしこき事と思ひ、其始髫を剪し時の心は忘れ果て、殆淫賣婦に等しき醜行をなして憚らざる者あり、此事汚水中に生たちし女子ならば多年の習慣然もあるべし、されど普通の家の女にして斯くあるは歎くべしまして女先生など稱して生徒を集へて物の敎授する人にして猶且然るものあらば、そは淺ましき限なりさるを世にはこの女先生にして其門人中我と同じ運命に遇ふ人あれは說誘して後見人を周旋する抔、眞に沙汰の限ならずや。

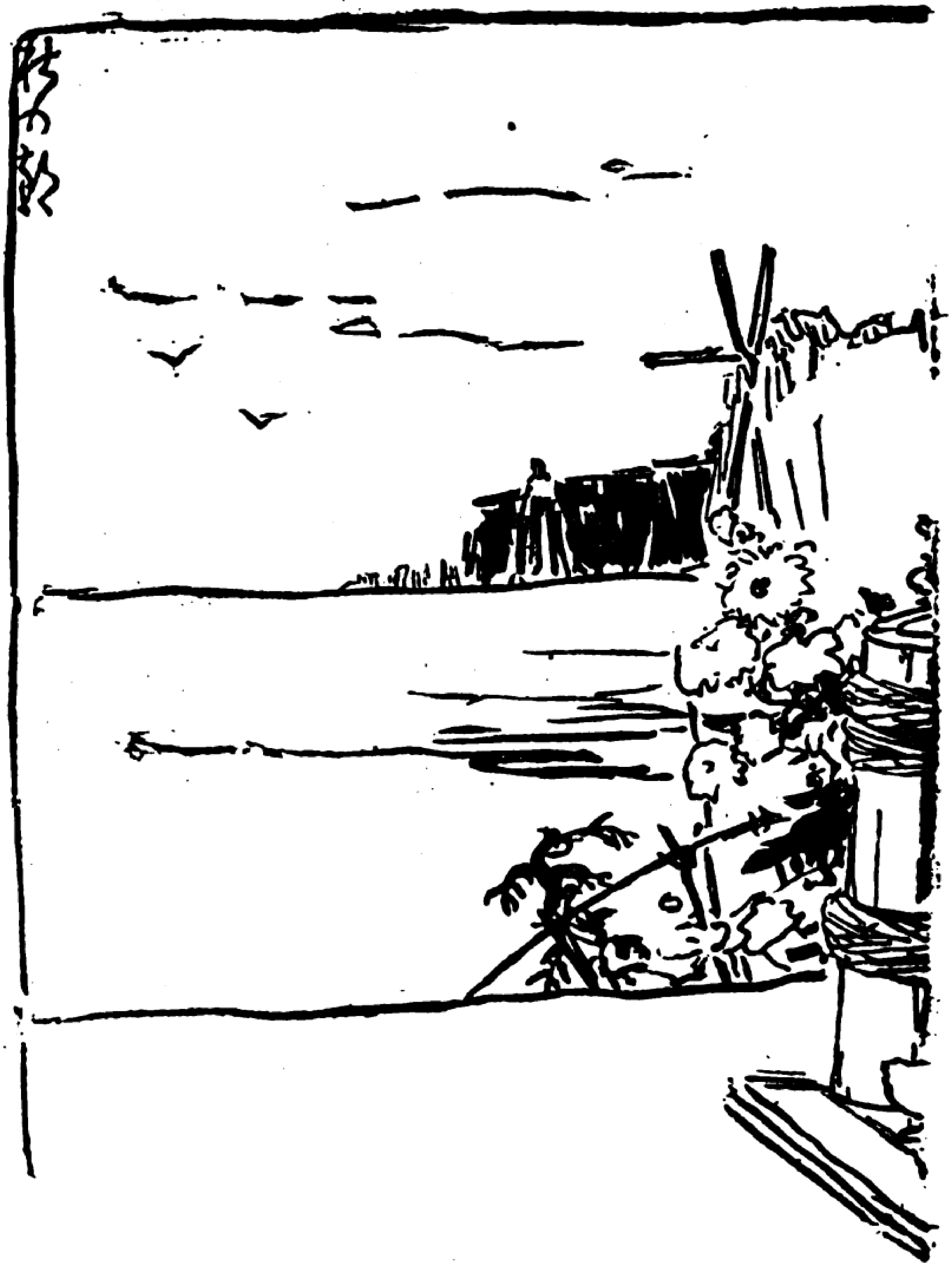
〇夫陽は獨り行かず、陰は獨り立たずの理にて、獨住すれば必物の不便を感じ、男は女を欲し、女は男を思ふ、是に於而偶然相近づけば自然情動く、只良心の內に攻て情欲の惡魔を攘退するのみされば若婦婦の家には決して男子を心易く出入せしむべからず、若止を不得場合に男子の助力を借る事あらば、速に相當の謝禮を贈りて是を敬して遠ざくべし、又故由なきに物品を贈る男子わらば、油斷すべからず、何處迄も辭して受ざるを上策とす、萬止を不得受たらば均等に返禮して、義理の掛らぬ樣にすべき也



◎總じて男子に應接するには侍女にても誰にても一人を傍に在らしめさし向ひにならざるを可とす、若他聞を憚る要談ならば冬にても建具を開放

して人を遠ざけ、扮傍へ寄らでは聴えぬ程の小聲にて談ずべし、障子紙門を閉れば却て人の疑を惹出し、又偸聽せらる丶の恐あり、男女に限らずすべての密談此手段を最上とす。

◎身の行儀を厳粛にし、閨答慇懃に夏日と雖假にも膝を崩すべからず、男子に野心有とても斯嚴然と構へられては云出さる丶物に非ず、垣堅ければ犬入らず、人



の情操を傷む偸盗は閨門の厳ならぬより附入るもの也、慎で心の戸ざしを緩めず忘れても猥々敷談話など爲べからず。

◎性質酒を好むとも女子は飲まざるに不如、殊に若婦婦は断じて飲べからず、酒程心の亂る丶はなし、平素堅固なる人も酒に依て思ひの外に節操を破る事あり、醒てのち千萬悔とも一度堕ちては取返さる丶物にあらず尤恐るべく愼むべきは酒なり。

◎世に寡婦として獨立すべき資格ある者は
第一世襲財產ありて主公なくとも世計に支閊なく又其財產を保管するに確乎たる法の立たる家。
第二心操强固凜として犯すべからざる女丈夫。
第三亡夫の父母のうちに病又は老衰して是を介抱する者婦より外になき塲合。
第四子女多く在て是を手放すに忍び難く、又强て忍ぶとするも其養育を引受る人なき塲合。
是等の事情ありて生涯の空閨は守り得べき也、それすら猶四十歳を超す迄はとにかく他より種々の惡評を立て易きものなれば、兩親或は親戚の中慥なる尊族を後見監督人として萬事其言に隨ひなるべくは同居し、事情の許さゞれば邸內或は隣家等に住て世間の嫌疑を避くべし、彼の髮を切垂の鬟ふくらかに出し、紫の打紐にて結ぶ抔は演劇の後室の扮粧にて却て色めかしく見ゆる物なれば、只何となく目立たぬを專一として、年增ぶりに結ふがよし、衣服も派手なるは其儘賣拂ひて更に恰當なるに替へ染かへの利は無地とすべく、とにかく四十以上の老人造なるを可とす。

◎物見遊山も婦人連は好し、男子と同行すべからず、若止を得ぬ時には二三步間を隔て步み必用なき限り途上にて談話すべからず、又他家にて謂なく止宿勿れ是等の事よりわられぬ風說の種を蒔事あれば也、たとへ無根の事なりとも一度新聞などに揭載せらるれば取消たりとて何の益かはある、男子と逢ひ婦人殊に寡婦は餘程平常に注意して殃を未然に防禦せざれば後悔臍を咬とも及ばず、一物なくして影は寫らず、火の氣なき處に煙はたゝず、些にても人の疑を惹く種あれば忽に尾鰭を添へて一人ソウヲシといへば、聞く者夫に逢ひ有間じといひ、次には然也と定めらる、世上に有名の家程針小棒大にいひ噪ぐ也。

◎寡婦は夫ある婦人よりも身は暇あり、又何事にても我爲むと思ふ事は爲し得らるゝ物なれば、たとひ財產ありて今日に不自由なき人なりとも何か一の職業をなして是を貯金とし老後の資產を造るを可とす、生む處の子成人の後幸運にして發達すればよけれども必然り

とは保し難く、何時いかなる天災病難なしとも計るべからず又順境に立て世間より羨まるゝ程の身と成ても其子母に孝養の志薄くて存外不自由を感ずる事なきに非ず、とにかくに我が資産だにあれば、如何なる場合に附ても都合よきもの也又我身に餘りあらば慈善事業に寄附するもよし、財産を造る事は壯年より心掛ざれば老後俄には出來得る物にあらざる也。

◎おのれ筆を採れば又しても職業、貯蓄を操かへすと讀者は笑ひ賜はむが、人の腦髓に深く印せし事は我知らずして幾度もいはるゝ也、予が斯迄此事の心に染たる由來を懺悔せむ、我が生家は京都に其名を知られたる舊家にて、幼時やゝ物心を知る頃家運逆境に遭たりさて其挽回策を講ずるとて父を始一家中每度額を鳩て其議する事ありき、母も日夜苦慮せらるゝを見聞して共に小さき胸を痛め、巧黠くも何を欲して我も手助せんと志を起したる折しも、手島の道話の繪入本の有けるをふとみるに、二分を積めよといふ事あり、曰何事にても爲つけたる事を全く止るは人情の忍び難き物なれど、二分の堪忍は出來易し、譬ば百の物は八十、十の物は八ッにて堪忍し、其廿と二を積べしと有けるを讀みて、幼心に實尤と感じたりければ、此事を母に告げて今より我身に付ての費用をば悉く二部宛積て賜はれと云出たれば、父母其志を健氣也として其後は衣服粧飾、持物、筆墨に至る迄其價二部を儉約して是を貯金とし、他より我にとて貰ひたる手遊半衿　簪何に拘はらず差當り必用なき時は他への進物として夫を買ふ價を貯金に加へ、如斯爲事多年微塵も積て山なすの諺十八九歲に及ぶ頃は一廉の金高となりぬ、我は始より家の爲にする意なりしも、其うちに家運回復して隆盛となりしかば、其金は緣附の際我財と定められて、其儘實家の店に預かり、利足だけを折々贈られて表立てはいひ難き入用に宛、侍女別家の輩に惠み與しかば、大に人望を得たり、夫家も又三井大丸に幷ぶ豪家なりしかば、予が小遣も裕に給せらるれば月々に餘るを貯金に加乘して次第に蓄財したりけり、然るに德川氏の瓦解と共に家運の盡る秋なりけむ、大勢の別家、手

代中一器量有る者は前後して死亡し、又は傍輩の猜疑の爲に退けられ、殘るは無智の鼠輩のみ、三井白木屋の如く時勢に投ずる伎量はなくて唯私欲のみ逞くして主家の安危を顧ず、終に三都の大店分散となり、主人分は各々些少の金を分ちたれど、座食は山も盡すべし然りとて從來商賣は管代任せにて幼少より榮華を夢みし旦那奧樣の、如何とも方術なし、爰に於てか藝は身を助るの諺に洩れず、我等は夫婦共に少しく文學わり慰に學びし遊藝も彼是あるを幸に、私塾を開きとかくして月日を送るに、夫は大家の主公風失難くして金錢を遣ふにはきれいなれど殖す方は不得手也、我とて身分は同じけれども、彼幼時に聽込たる經濟論の少き腦に印せしか、盛時にも忘るゝ能はず、況零落に及ては家の爲に實家の貯金をも惹出して或る事業を試みしも、なれぬ事とて失敗せしかば、職業にしくはなしと悟りて、自らいふも如何なれど性質小器用にて、何にても一見すれば其大概は悟り、少しく學べば物に成る此小才憖に妨と成て一を守る事能はず、是も遲し、彼は少し増ならむかと種々雜多の職に手を出せど扨思はしき事もなし、さはれ絶ず何か爲て日夜手を空しく徒居する事なかりし故に、日々の小遣ひに事缺迄にはなかりき、此故に金錢の得難く失ひ易き事又其德の有難味の身に染みて扨社斯は贅言もかゝるゝなれ、讀者試に疑似てみ賜へ、成程と同情の發る事あるべし。

臺灣の出產

妊娠すれば敢て腹帶をしむることなきも、出產の際產婆を勞することは猶ほ内地の產婦の產婆に於るが如し。而かも其所謂產婆なるものは其鄕里の老練なる老婆にして、報酬は貧富によりて一定せざるも大概一回四十錢乃至二圓以下なりとす而して兒の始て胎内を出づるや、產婆直ちに苧絲明礬胭脂綿を以て臍を護り、麻油を以て兒の身體を擦り、蠟藥を以て口中の汚穢を洗ふ。而して產婦には再生化湯一二服を用ひしめ、嬰兒には糖蜜及甘草水を綿に浸して飲用せしむ。而して生兒の命名は敢て日數を限らず早きは一週日遲きは一ヶ月に至るあり、而して出生後十二日、一ヶ月及四ヶ月目毎に客を招き祝宴を張るの例あり。

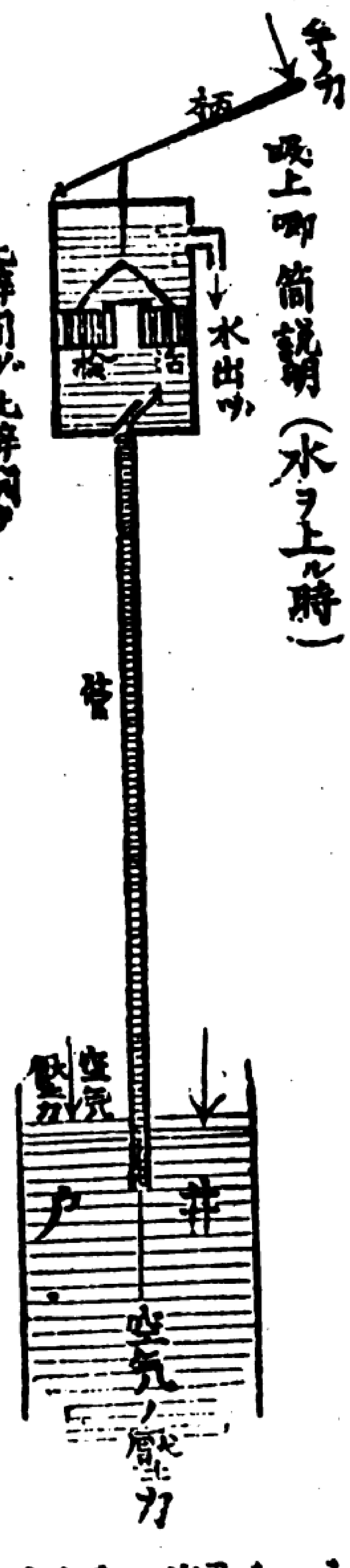
理科應用 家政二十四時

（午前五時より八時まで）（其三）

河西天放

▲水汲み力學―器械

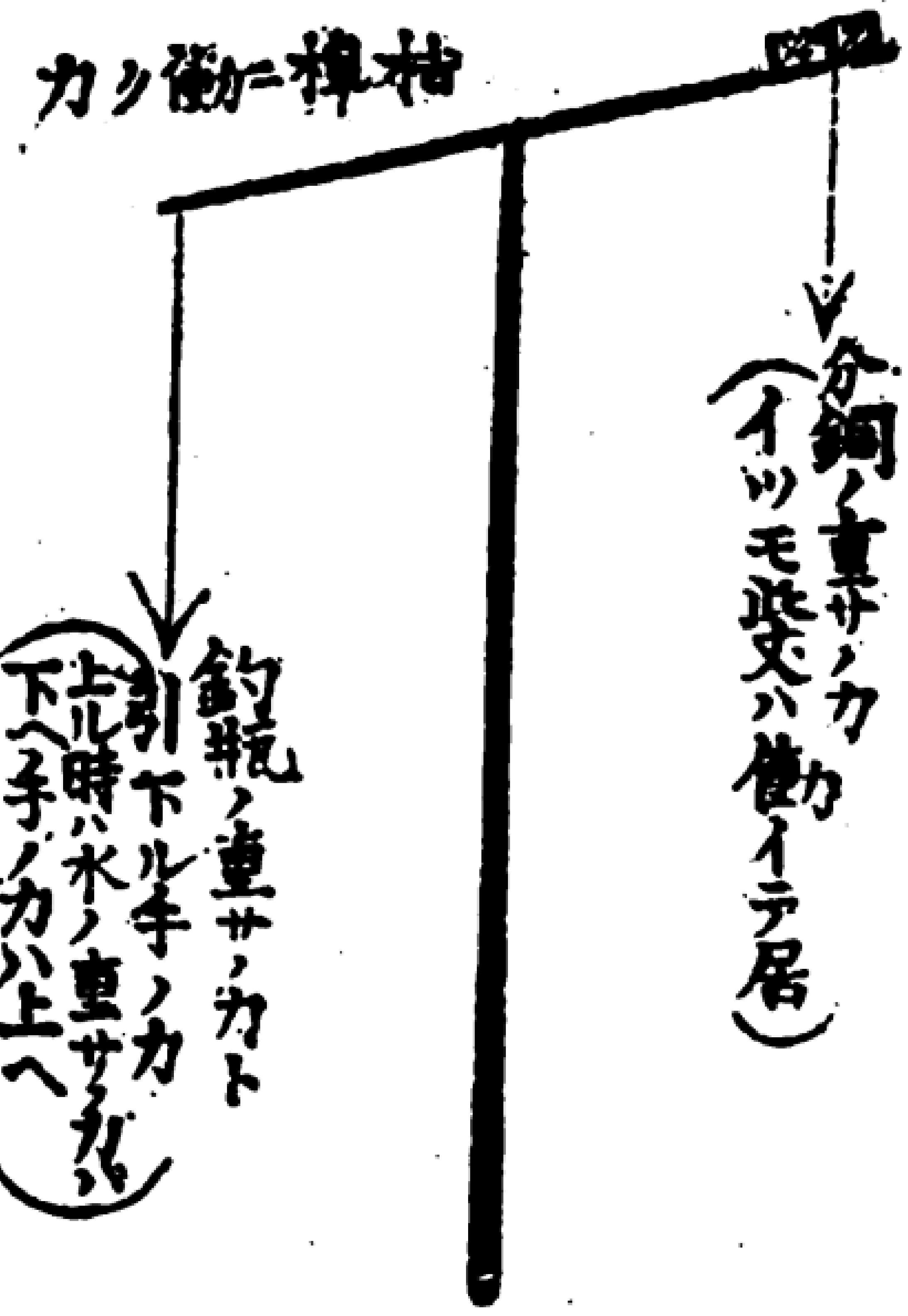
勉強せねば知慧は増さぬ、力を入れねば重い物は上らぬ。これが動かない自然の規則であるのに、水道の水は獨りで出る。一寸考へれば自然に背いて居るやうですが、決してそんなことはなく、溜池の水の面と同じ高さまでは上らうといふ水の性質に基づく、言はゞ子供の玩具の蛙の水吐きの道理で、水の重さの力が代つて骨折つてくれるのですが、只の井戸水を使ふ



方は、汲み上げるのに是非身體の力が入用で、これが爲、水汲みは御婦人方第一の骨折仕事になります。しかし同じ身體の力を使ふにしても、人間の知慧は有のまゝに其力を使はず、器械といふものによつて、力の向を入れ易い方に變へるとか、力の分量を減らすとかどこかに得のつくやうに工夫します。水汲みに使ふ器械は、御承知の喞筒と、滑車と、桔槹です。喞筒は柄を壓し下げて栓を上げ、其下へ出來る眞空へ水を吸ひ上げる工夫で、吸ひ上げられる水の柱の重さが、井戸水の面を壓して居る空氣の重さの力より少くなければ、喞筒の効能はありませぬ。此水の柱の限りは、東京などでは凡三丈四尺、高い山國では空氣の重さが少いから、一二尺は少うございます。實際はどこかに幾分の故障は免れませぬから三丈四尺までは上りませぬが、先づざつと五間位まで

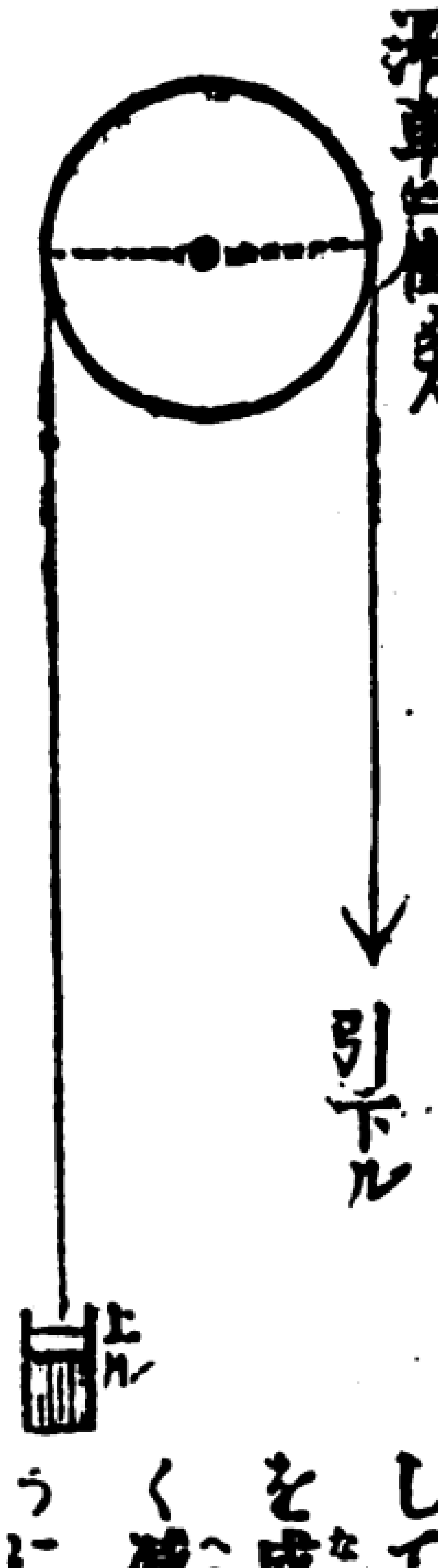
の井戸なら喞筒が使へる勘定で、喞筒といふ器械によつて、柄を下へ壓す僅かの力で、水を少しづゝ上え引き上げる、即ち力を小出しゝて、力の向を樂の方に變へる、外に、柄が槓杆仕懸けになつて居る爲、力の分量も大きに得を見るのでございます。

五間より深い井戸に喞筒は利きませぬ。淺い井戸でも、管か栓に漏處があつて、空氣が入れば、此空氣が水の上る邪魔をしますから、こゝの工合は大切です。それから時々柄の附根へ油をくれて、輕くして置かねばなりませぬ。



桔槹は槓杆の道理で、空釣瓶を引き下す時に力が入り、水を汲み上げる時には僅かの助力でよいことになつて居ます。引き上げるよりは引き下げる方が樂ですから、此器械も二通りの得があるのでございます。

滑車は全く力の向に得を見る器械です。力の分量から言へば車の擦れ合ひ丈は損の勘定です。車には油を挿して此損を成るべく減すやうにせねばなりませぬ。



力は同じでも、力の向によつて樂と苦勞の差違がある。といふ一つの事を廣く考へて御覧なさい。同じ折檻でも、仕方によつて子供の心を直しもする。曲げもする。同じ話でも、話し方で人を喜ばせもする。怒らせもする。自然界の規則も、精神界の規則も、畢竟は同じ筆法で、心一つあればこそ、自然は至極親切な教師・無月謝の大學になるのでございます。

▲水汲み力學―重心

扨かやうに汲み入れた手桶を提げて來る時、なぜ身體

を眞直に歩かないだらうか、なせ首を曲げ、腰を曲げ、手を延して、小刻みに歩くだらうかと、子供などは折々不思議がつて尋ねます。あれは重い手桶の爲そつちへ偏つた身體の重心點を眞中に直す爲で、凡ての物に一つづゝある重心點、即ち重さの集ると見られる中心點から眞下へ引いた通りの線が其物の底の繩張内にあれば立つて居られるが、繩張外へ出れば倒れるといふのが規則ですから手桶の爲偏つた身體の重心點を其まゝにして置けば、其點から下へ引いた線の通りが、身體の底、即ち兩足の周圍の繩張内を外れて其方へ倒れ、重心點は出來るだけ下らうといふことになります。倒れるといふことは、何時も重心點が下るといふことですから、底が小くて重心點が高いものは倒れ易く、底が大くて重心點が低い程倒れ難い。たとへば、開いた四本足の机は倒れ難いが、三本足のは倒れ易い。綱渡りする人は手に傘か何か持ち、坂を上るには前へ屈む。見合ふ時角力取が足を踏張り、腰を落して、兩手を突く。皆此道理です。長い物は横にして置くがよし、茶碗は伏せて置くがよし、臺ランプは臺の大く重い（重い程重心は下ります）のを買ふべし、流れ川を渡るには成るたけ足を開らくべし、年寄や姙娠の者は足駄を廢すべし、など、これに基づく注意はいくらも御坐いませう。私共が歩く時は、身體を前へ突出して重心點を前へ移す。すると規則通り倒れかゝる。倒れまいと片足踏み出して底を前へ造へる。順にかうして進むのです。走る時には、重心點の突出し方を大くする。これに敎はつて足の踏み出し方を早く、大くする。重い物を提げた時は身體の釣合が大事だから、少しづゝ重心點を前へ移す。即ち小刻みに歩くのです。自然にやつて居ること



は、多くは道理に合つて居るのですから、見つともないなど丶いふ考から重い手桶を提げながら、腰も首も曲げず、平常の通りに歩いて行かうなど丶言ふのは、馬鹿げた話です。



水を汲み終つて、牛乳を取り込んで、さて勝手へ戻りますれば、此時もういくらか御釜の下に焚落が出來ますから、これを種火にして、長火鉢なり焜爐なりに炭火を起し、御鐵の湯を沸します。

▲木炭の撰び方

木炭はもと木を炭竈で蒸燒にして造へたもので、此時の蒸工合、木の種類、同じ種類でも山により、同じ山でも表山と裏山の違により、一々質が違ひます。蒸しが不十分で竈に空氣の通ひ過ぎたものや、柔かい質の木の木炭は、どうしてもガサ〳〵で、早く起るが早く燃え切れ、おまけに木理の中に澤山入つて居る空氣が急に膨らむ爲、炭を破つて一時に逃げ出す、言ひかへれば爆る恐れがわります。と言つて、質の緻密過る炭は、理の中に空氣が少く、燃えるとき出入りが不充分だから燃えが困難で立消えが多いことになります。ですから、炭を買ふ時は、其目的によつて堅さを撰ぶべきで、灰の少いのは割合堅く窖でも、立消えは少いものです。



▲木炭の貯藏

木炭は其理の中に空氣を縮めて貯へるのみならず、他の色々のガスをも盛に吸ひ取つて、理の中へ縮め込ん

で持つて居る性質があります。炭の此性質は、泥溝や便所へ炭粉を振り撒けば臭氣を消す、即防臭劑として役立つことになります犬や雞の腹の中にガスの溜る病氣に燒き立の炭粉を呑ませるのも此道理です。炭を燃す時、俗に鼠が小便しかけたのだと言ふ、臭い匂ひが出ることがあります。鼠の小便もありませうが、段々に吸ひ取つて持つて居たアモニアとか、硫化水素とか、亞硫酸とかいふやうな色々のガスか、暖められて、追ひ出されて來るのが普通です。木炭の積み場は御注意なさるがようございます。臭いガスは空氣に混つて炭に吸はれるばかりでなく、雨にも溶けて來て吸はれますから、これも御注意になるが宜しい。

炭はガス類の外、色素其他種々の物を吸ひ取る力が強うございます。此性質により、炭の塊を水漉しや砂糖の精製に使ひます。尤砂糖の精製には、木の炭よりは骨の炭を使ひますが、譯は同じです。挿花に根を燒く中にも、此道理が一つ入つて居るに違ひありませぬ一寸御斷り致しますが、木炭の物を吸ふ力は限りがありますから、水漉しに使ふ木炭は、時々新しいのと取代へる必要があり、一度使つた炭は、臭いを承知で御焚きにならねばなりませぬ。

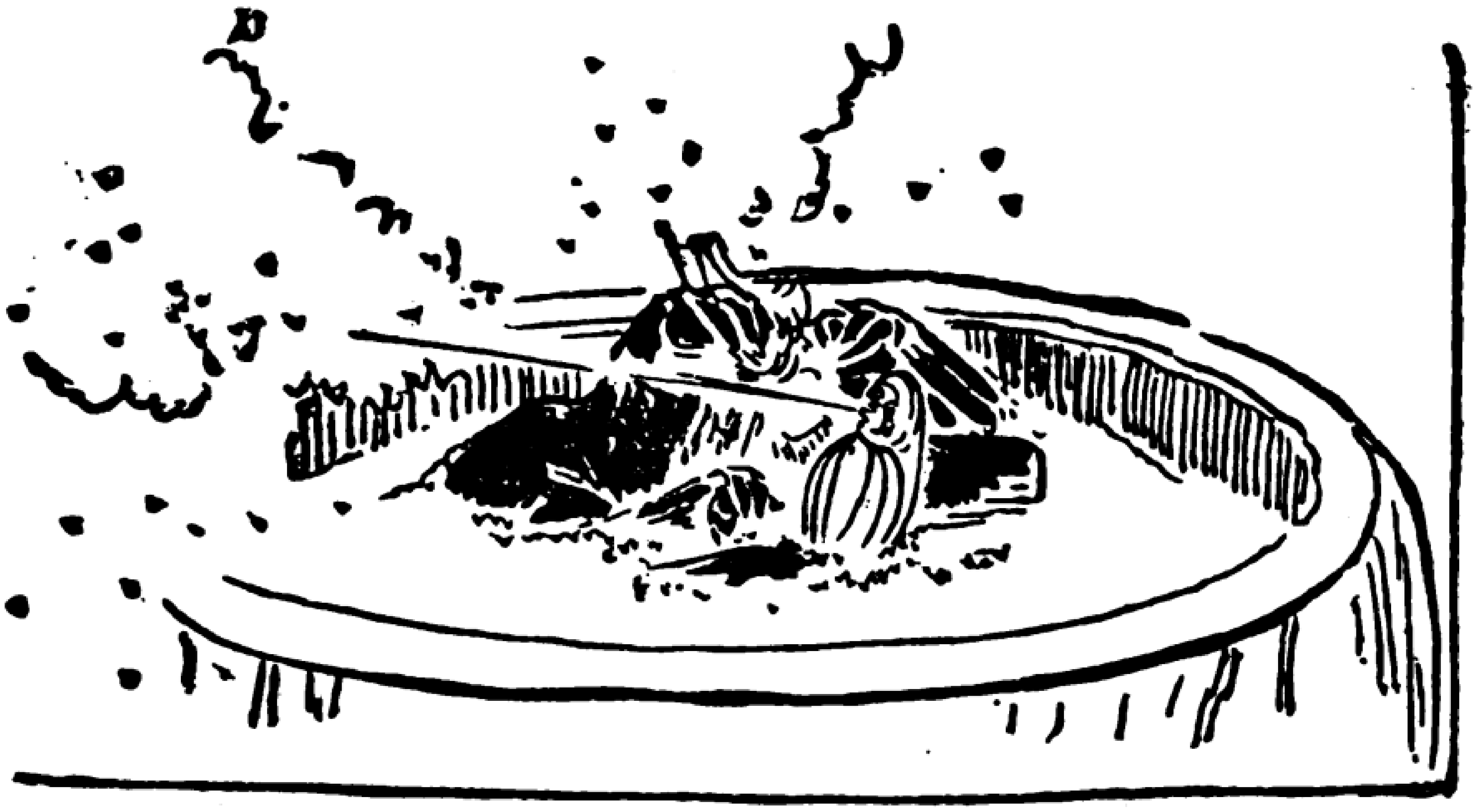
▲灰の効用

火鉢に灰の効用は中々面白うございます。先づ藁灰は徐々に空氣や炭酸ガスの出入を許し、其上、灰とは言へ實は半分炭で、其中には、燃えに入用の、熱を導きにくい空氣が澤山入つて居ますから、藁灰の中へいけた炭火は、そろ／＼燃えて、立消の恐れがなく、炭と熱の兩方に經濟で、手綺麗で、手數と時間の上にも少からぬ利があります。只の灰は、ガスの出入が藁灰程自由でなく、且つ炭火の熱を奪ひ易い爲、これは分量をよく加減し、始終よく篩つて、堅く沈まぬやう心懸けねばなりませぬ。昔ある人が、下女に火を一つ持つて來るやう言ひ付けたところ、生憎手近に火箸も十能も無かつたが、此下女は氣轉の利く者で、一つまみの灰を掌に取り、そして其上へ火をのせて持つて行つたと

いふ、これは灰の中の空氣の熱を導き難い性質を利用した賢い例でございますが、凡ての事に道理を利用するといふことは、極て大切な人間の務でございます。

▲火吹達摩

起り惡い火に火吹竹、澁團扇、鞴ふいご、此等は何れも火の上の炭酸ガスを追ひ拂つて、新しい空氣を送り込む器械ですが、此類の器械の中、火吹達摩といふ物が、一番手綺麗で面白いものです。此達摩を暖めて、中の空氣の一部分を追ひ出し、急いで其口を水の中へつけますと、冷えるにつれ、前に出た空氣だけの水が吸ひ込まれます。そこで此達摩の口を起さうと思ふ炭と種火の間へ向けて、温灰か小い火の中へ



坐らせて置くと、中の水が沸くにつれ、蒸氣が口から出て、強く火を吹いて、炭に燃え移します。水は蒸氣になれば、容積が千七百倍になり、それが出やうとして壓す力は強いもので、火吹達摩では、此力でそばの空氣を吹き込み、蒸汽機關では、此力で栓を動し車を廻すのです。蒸汽機關の改良家として名高いワットといふ人が、蒸汽の事に頭を突込んだ元は、鐵瓶の蒸汽が重い蓋をコト〳〵推し上げるのを見たからだと言ひ傳へてあります。それまで幾千萬の耳に響いた鐵瓶の蓋のコト〳〵もワットの耳なればこそ、十九世紀の文明を支配した完全の蒸汽機關の本源になつたのでございます。

▲御釜の蓋

鐵瓶や御釜の湯が沸き立つて、蒸汽が出て來ても、それが存分に逃げ出せない時は、其壓す力は湯の上に働いて、沸き立つのを抑へる、言ひ換へれば沸き立つ温度を高めます凡て水は上から壓されゝば沸き立つ温度が上り、壓す力が減れば低い温度で沸き立つが規則です。御釜に重い蓋を撰ぶのは此道理で、沸き立つ温度が高い程、御飯なり御菜なりよく煮えるからで、富士山の上で煮た御飯に骨があるといふのは、土地が高くて、空氣の重さが海岸地に比べ、四割から少うございますから、海岸地で攝氏百度で沸き立つ湯は、八十五六度で沸き立つからです。

攝氏四度以上の水は暖めれば膨みます。此道理を知らない人は、鐵瓶の口まで水を注いで火に懸けるかも知れませぬ。暖まるにつれ溢れ出て、灰神樂を上げることと請合です。特に沸き上る時は、急に出て來る蒸汽が湯を推し上げますから、鐵瓶に水は八分目以下と定めるが宜しうございます。



▲新調の鍋釜鐵瓶

鐵の器の新しいのは鐵氣が湧いて、當分誠に迷惑します。しかしこれは藁か、馬鈴薯か、甘藷か蕎麥か、其中の一種を入れて、くつ〳〵煮て黒くなるのを取換へ〳〵二三度して、あとを灰で磨き、乾かして置いて使へば、苦もなく拔けます。氣に入らぬのを高い錢を出して、古を買ふには及びませぬ。ブリキ物は炭酸曹達を入れた湯を三四十分煮て、あとを石鹼で洗ふが宜しい。凡て食物の器に銅や、眞鍮、唐金物は嚴禁です。うつかり白鑞の切れた緑青の湧いたので食物を煮て食べ

れば、恐ろしい銅中毒に罹ります。剝けても酸味のあるもの、鹽氣の强いものは、煮て居る中に盛に綠靑を造へるものですから、氣を付けねばなりませぬ。銅鍋の料理は不味いと言ふのは此毒が交るからです。銅の湯沸しへ口を付けて水を飲んで死んだ人を、現に私は知つて居ます。琺瑯引きの鍋の琺瑯、磁器の釉藥、これは普通鉛を多く含んで居る鉛ガラスといふ溶け易いガラスの類で、鉛も毒ですから、これも保證付でない以上、使ひたくはない物です。鍋釜は鐵が一番宜しい。鐵は身體に藥になります。近頃賣出したアルミニユームの器は、無毒で、輕くて、堅くて、美しくて、錆びなくて、價が今少し安ければ、上越す物はありますまい。アルミニユームは粘土からエレキで造へて、年々代價が降りますから、今に一般使用に適するやうになりませう。

▲味噌汁

御飯が炊え湯が沸く間に、味噌汁の拵へを致しませうか。此味噌汁が早速鍋の撰り嫌ひを致します。味噌といふ物は申す迄もなく、豆へ麹を入れ、成熟させて造へるもので、此成熟るといふことは、麹の中の麹カビといふカビが豆に働いて、豆の中の澱粉を消化れ易い糖類に變へ、其と共に他の細い細菌類が他の成分を造へるのですから、工合よく成熟たものなら、味噌は誠に結構な食物ですが、さて困ることには、こゝに出來た糖類は澱粉類よりは一段變り易いもので、目に見えぬ細菌は空氣中から入つて來て（又は前の麹の中にあるのが働いて、）これをアルコホルにし、又更にこれを酢にし、そこで味噌の味が酸くなつてしまひます。（味噌に麹の大事な譯はこれで分りませう）細菌の繁殖は一般秋春夏の暖い水氣の多い時分に盛ですから、冬の外は中々油斷のなつたものではありませぬ。さてかやうにして味噌は酸くなつて居ても、大抵の人の口は存外鈍いもので、鋭い人には隨分酸く感ずる味噌も多くの人には何の變りも認められず、從つて、平氣で銅鍋などで煮て、食べて、中毒しつゝある向が珍らし

くありませぬ。味噌の酸味に對する舌の馬鹿を知らうと御思ひなら、試に味噌汁へ少し炭酸ソーダを入れて御覽なさい。湧き立つて泡が出るならば、それは酸のある證據で、湧き立たない味噌は、先づ無いと言つてもよい位でせう。酸味のある味噌は消化がわるいのみならず、胃の中に酸い水の溜り易い病氣の人には、よい味噌汁も酸く變りたがるものですから、かやうな人は味噌汁は御廢しになるがよい。

▲味噌の種類と製法

味噌を變らせまいといふには、通例鹽を多く入れて搗き込みます。鹽は物の變るのを防ぐ、言ひ換へれば細菌類の繁殖を止め、又はこれを打殺す力を持つて居るものです。尤も鹽の此力は交せる麴の分量に由ることで、大豆一斗に、米麴を一斗二升、それへ鹽



を三升位入れて造へる白味噌は、三四日で成熟れる代り、直ぐに酸くなりますが大豆と米麴を何れも一斗、これに鹽を三升五合ばかり入れる江戸味噌は、夏は十日許、冬は一ヶ月許りで成熟れ、半年から一年位變らず、大豆一斗に、玄米又は麥豆などの麴八九升、鹽を四升以上入れる赤味噌は、成熟るに二三年かゝつて、其代り中々變りは致しませぬつまり味噌を甘く造へるには、麴澤山の鹽少な、變らぬやうにするには、麴少なの鹽澤山にする、此加減が大事です。味噌の種類には此外、搗いたのを玉にして吊して置き、段々に成熟れさせ、乾いた頃水を交せて搗き込む玉味噌造り、ふすま麴を溫湯でかいて、少し鹽を入れ、一夜で成熟れさせる陣中一夜味噌、蚕豆で造へる蚕豆味噌、豌豆で造へる豌豆味噌尤豌豆ばかりの味噌は變りが早うございますから、大豆と半々に致します。 糠味

噌は香の物用、金山寺味噌、櫻味噌、鰹味噌、鯛味噌などは嘗味噌です。

▲酸敗

少し酸くなりかゝつた丈の味噌なら、柿の枝を挿せば直ります。澁柿を入れるのもよい澤山搗き込んだ味噌は、鹽を澤山振つて、紙を張り付け、其上をよく目張りして置けば、黴び變味を防ぐことが出來ませう。凡て味噌に生物、生水は禁物です。生水で濕した杓子で味噌をすくひ取るなとは、必無しと評さねばなりませぬ。

醬油も原料は大豆で、成熟れる道理も、酸くなる道理も同じですから、凡て味噌同様の心得が要ります。樽へ入れて置く醬油は、夏時はどうしても幾分沸いてアルコホルが出來、其時一しよに出來る炭酸ガスの爲、外へ吹き出る恐れがあるから、其積りで御貯へになるが宜しい。醬油の中へ梅干を一二粒入れて置けば、黴を防ぐ効能があります。

▲豆と朝食

味噌汁に豆腐の實、煮豆に納豆。朝食に豆類は離れぬ仲でございます。乾いた大豆は目方の三割六七分からの蛋白質と、一割七八分の脂肪と、同じ一割七八分の澱粉を含んで居ますから、丈夫な腹には、肉に負けない滋養物で、佛教の爲肉類を奪はれた我國人の、依然強健な子孫を殘し續けたのは、全く豆類の御蔭と、朝毎に感謝してもよい。

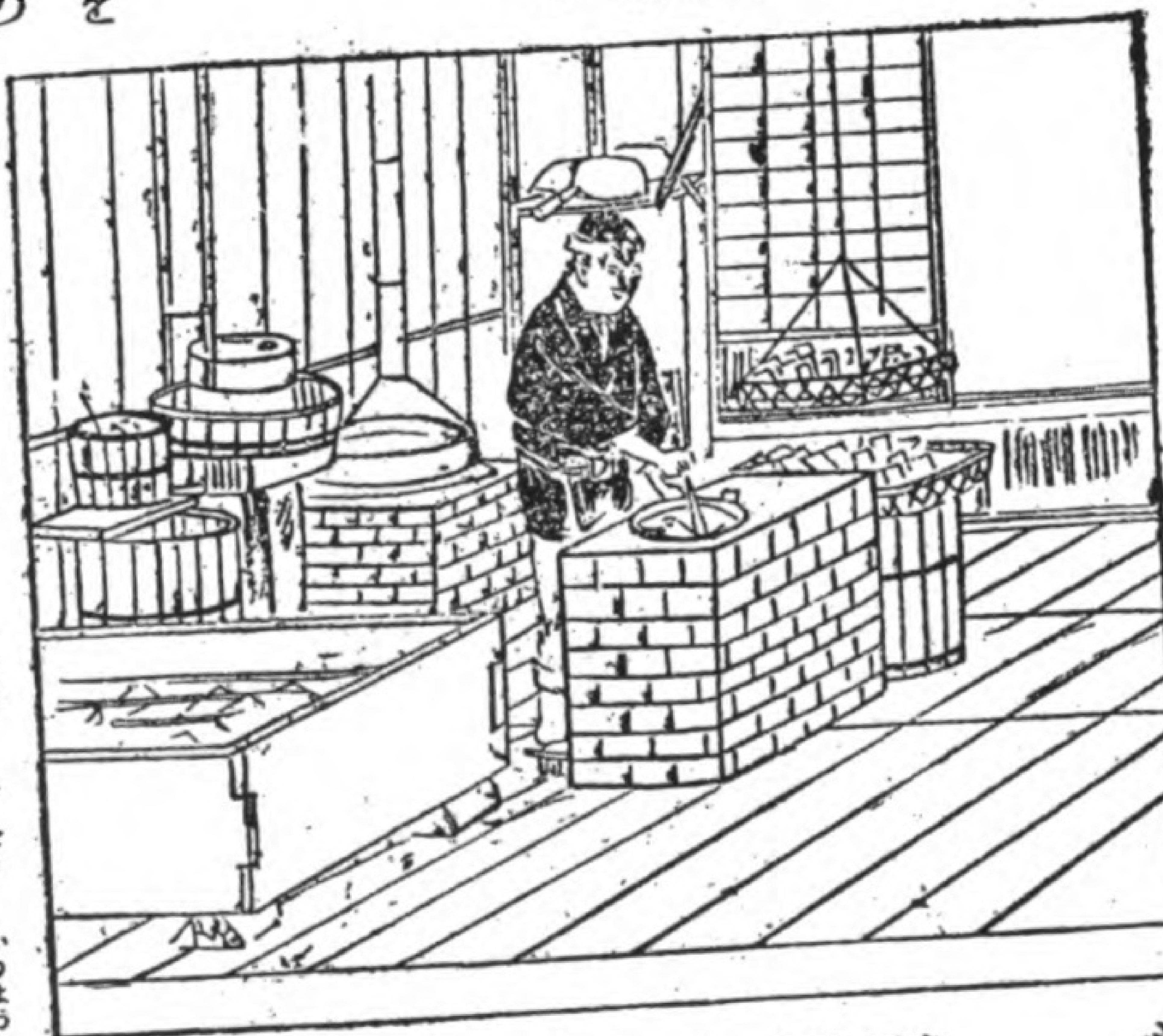
▲豆腐の手製

豆腐、名は氣に入りませぬが、決して豆を腐らせて造へるものでない。水に浸した大豆を磨り碎き、搾つて滓を去り、水を入れて煮立て、蛋白質を溶して漉し、漉液に、鹽から垂れた苦鹽を少し入れゝば、溶けて居る蛋白質は凝つて澱みます。これを四角な箱へ入れて靜かに絞れば、四角な豆腐が出來上ります。絞り加減で堅くも軟かくも出來ます。これが製法です。磨鉢で

磨り砕いて、麻布で絞つて、汁を煮立てヽ、苦鹽を入れて、澱んだのをすくつて、汁の實にする。手輕の手製豆腐で、中々に結搆です。普通の豆腐は、百匁の中蛋白質が六七匁、脂肪が三匁あつて、消化れ易い、腐れ易いものですが、これを氷らせて、其中の水を集め、溶して此水を切つた氷豆腐豆腐を油揚にして、水を蒸發たせた油揚は、腐敗細菌に入用の水が無いのと、油の膜が間を隔てるので、腐りにくい物でございます。

▲湯婆と納豆

上の樣にして蛋白質を溶した水を養詰めれば、上面に薄い蛋白質の膜が出來ます。これが湯婆です。納豆は豆をふかして藁苞へ入れ、暖かい處へ置いて、藁に着いて居る細菌



の働きで變化させたものですから、名から言へば此方が豆腐ですが、此細菌も、出來た物も、決して害にはならず、却つて豆より消化れ易いものですから、御心配なく召上つて宜しい。

▲開戸

勝手で火が仕事をして居る間に、雨戸を繰つて、掃除でも致しませうか。工合のいヽ雨戸なら、明けるのに何の手間暇も入りませぬが、澁いガタピシ戸と來たら、誠に癇癪の種でございます。戸障子の澁いのは、それと敷居との擦れ合ひ、即ち凸凹の喰ひ合ひの深いのが重な原因で、かやうな戸障子を引くには、此喰ひ合ひを引離すのに、餘計の仕事が入用で、此仕事は、只戸障子の足をすり減りし、喧しい音と、無駄の熱を出し、癇癪を起すだ

けのことで、一つも利得はございませぬ。何の造作もないこと、敷居をよく拭いて、十分油を御塗りなさい。油を塗るといふことは、凹いところを埋めて平らにし、從つて喰ひ込みを淺くする工夫になるのです。

木は水を含めば膨らむものですから、空氣中に水氣の多い頃はどうしても澁く、冬になれば、乾いて、縮んで、浮足になりたがります。生木で造へたものも乾けば同じ結果です。梅雨や時雨の頃、澁いからとて鉋を懸けま



すと、冬になればゆるくて、外れて後悔なさいませう。家の歪んで障子に隙間の出來たのは、處々竹で突張りをかへば、容易に直すことが出來ます
障子を開け閉てする時、凄じい音をさせたり、ノロマの三寸開け殘したりするのは、平常の心懸けが見透されて殘念です。手を懸けて引き始めは徐々、それから段々力を入れて平に强く引き、終りに又力を抑へて音せぬやうピタリ柱に引き付ける此手際は一寸むづかしいか知れませぬが、馴れ、

ば自然になつて、誠に心持のよいものでございます。敷居へ油を呉れた時など別けても此心得が大切でございます。

▲掃除

「清潔―此一語こそ健康法の始にしてまた其終なれ。」とドクドル、ホルソン氏の言はれたのは、動かない格言でございます。されば雨戸を繰つて、さて釆配箒を御持になる時、掃除は一家健全の本源で如何に新鮮の空氣も、滋養に富んで居る食物も、一たび塵埃の形を以て浮游し寄生する病菌の汚れを受ければ、忽ち變じて恐ろしい毒物になるといふことを心に留めて、可忌の仕事だからとて「茂右衛殿の御祝儀」のやうのことをせないやうに、とて迄も丁寧に眞面目になさらねばなりませぬ。

掃除用の釆配、白布を裂いて造へれば、强くて、洗ひが利いて、徳用です。机、鏡臺、簞笥の上、書物、床置などの塵拂ひには、乾いた白布、又は羽釆配が宜しうございます。大きな鳥の翼を其まゝ使ふも重寶です此翼は竈の前にも結構です。



持運びのならぬ物には、覆ひ布を用意して置いてこれを懸け、掃除が濟んで埃が落付いてから、これを取除けて拂ふが宜しい。絨氈のやうな物を久く敷放しにして置くのは、埃の巣を造つて置くやうのもので、不衛生上無しです。時々取放して大掃除をし、平常は鹽か茶殼を振り撒いて箒けば、細い埃は立たずに付いて取れて、至極結構です。疊も茶殼の濡つたのを撒いて箒けば、理の中まで奇麗に取れます。

掃除は障子を外して風下へ箒くやうにせねばなりませぬ。細い埃の澡々として居る中に障子を締めるなら、掃除したと言ふよりは、埃を搔亂したといふ方が適當

で、何の役にも立ちませぬ。成程荒塵は箒き出したでせう。然し恐ろしいのは細かい埃で、荒塵は二の次です。風が無くて埃が外へ出ないならば、暫く經つて二度箒が必要です。此丈の心得がある人なら、座敷を丸く箒いたり、折角與へられてある埃の關の鼻毛や、鼻の粘膜を遊ばせて置いて、ハアヽヽ口で呼吸をしたり子供を箒先に遊ばせたり、折々石油で拭く手數を嫌つて、硝子障子を半透明にしたり、疊の間隙を蚤の卵の巣窟にしたり、天井に蠅の死骸を年中ぶら下らせて置くやうのことは、萬無いことゝ斷言したいと存じます御子樣方や、大人になり始めの處女方は、外の人々よりは餘分に眠らせねばなりませぬ。さやうの場合に、餘り早く雨戸を繰つたり、采配懸けなりして、睡眠を妨げるのは、心得違ひでございます。邪魔にならぬところだけ、音をさせぬやうに雨戸を繰り、掃除も極靜かに、成るべくは采配拔きた、それで十分奇麗に出來ぬならば、荒掃きだけにして置いても、皆が起きてから本掃除をし直すが宜しい。

家庭衛生

一日醫者（其八）

糸左近

▲麻疹（はしか）

〔原因〕 本病は熱發性の傳染病であつて、其の病毒は病者の汗、涙、唾、呼氣、蒸發氣、痰、器具、空氣、及び本病者を見舞つた健康者から傳染するものである。さうして、一生涯の中に、一度これに罹らぬ者は殆んど無い、其の代り二度傳染することは甚だ少なく三回罹るに至つては、殆んど無いと言つても可い。其の罹る年齢は通例幼者を襲ひ、男女に依つては區別が無い。本病に就いて接種法があるだらうと、色々研究した人も數多くあるけれど、未だ確然たる善い結果の無いのは、如何にも殘念なことである。故に本病に罹らぬ幼兒の親達は、心配なことであるから、能々本章

を讀んで聞きたいのである。
〔病狀〕病の潜んでゐる間は、十日位で、其の間は何となく勇氣の無い容體であるが、愈々發はるゝといふことになると、俄かに熱が三十九度或は四十度にも昇り、それと同時に噴嚏、衂血、鼻汁、淚を溢し、結膜が紅くなり、羞明がり、續いて咳嗽を發し、聲は嘶嗄れ、脈は速くなり、四肢に疼痛を感じ、食慾が減り、屢々嘔吐を發することもある。又小兒は大抵譫語を言ふ。三四日經つと、發疹するやうになる、即ち最初は眼の近傍にあらはれ、間も無く顏中になり、次第に頸軀幹及び四肢に蔓こり、皮膚は紅に少し藍を帶びたやうな色になり、輕く隆くなる。それが七日目或は八日目には其の絕頂に達し、熱も亦四十度乃至四十一度にも及ぶ、されど八日目或は九日目には体溫及び脈數は直に平常に復し、赤い疹は稍蒼白くなり、續いて黃色に變じ一兩日にして悉く消え失せ、其の他の諸症も大いに緩ぎ、食慾は平日よりも進むやうになる、併し咳嗽は尙殘つて四五日乃至一二週にも及ぶことがある、

斯くの如く全快すると雖も、身體の上皮が剥けてザラザラになる、これは最初發疹の初まつた部に始まり、顏面から段々軀幹及び四肢に擴がるものである。されと輕いのは此の皮剝が殆んと分らぬのもある。兎に角皮剝あるにしても、發病から大抵二週間にして全快するものである。

右は通常の經過であるけれど、中には甚だ重く所謂窒扶斯性麻疹といふのは、熱、脈及び譫語なども遙かに多く、發疹も亦從つて多いさうなると、八日や九日では、治らぬのみならず、遂に昏睡の狀態になり、其の儘永眠するのがある、所がこれと正反對に、極めて輕いのがある。即ち輕症麻疹とて、通常麻疹の眞似したやうなのがある。斯ういふのは、其の經過も亦從つて短く、患兒を寢床或は室內に止めておかうと思つても隙を窺つては、逃げやうとするものである。親たるものは、慈悲といふ繩を以て留めておかねばならぬ。又無疹麻疹とて、唯結膜や口內が少し赤くなり、淚や鼻汁が出で。多少の熱が出る位なのもある、又結節性麻

疹とて、稍大きな隆起したる疹の出で、他の症候は通常のと異ならぬもある。又水泡性麻疹とて、水泡の出るのもある。又出血性麻疹とて、出血するのもあるが、何れも甚だ稀である、さうして就中窒扶斯性麻疹は、一名惡性麻疹と言つて、最も恐るべきもので、通常のは大抵治るけれど、これは一割以上の死亡數を來し、徒らに親をして、

頼もしと朝な夕なに撫し子の
　哀れ墓なく萎みゆくとは

と、嘆かしむるのである。

〔療法〕病兒を隔離し、他の健兒と逢はしむるとなく、可成は其の母なり、父なりが病兒と共に、小兒の居らぬ親戚、或は知己の家に行き、攝生治療を加ふるに如くは無い、何れにしても、暗くて靜かな室におかねばならぬ、されど暗くするとて、雨戸を鎖し、屛風を立て廻し、新鮮なる空氣の運入らぬやうにすることは、甚だ惡いことで、これが爲に病氣を尙々重くする恐れがあるから、暗くしておいて、時々新らしい空氣を入るゝやうに注意せねばならぬ。すべて年齢が長ずれば長ずる程、病が治り易いから、可成傳染させぬやうにし、七八歳以上になつたら、却つて善性の麻疹を早く傳染らしむるやうにするが可い、されば、他日惡性のを病む憂が無くて、不幸中の幸と謂はねばならぬ。臥蓐は溫暖にして、令ひ小兒が夜具を撥ね脫がうとしても親たるものは子の愛に迷うてはならぬ。斯くの如く、身を溫暖にしておかねばならぬ、けれど、多少の冷飮は與へても差支無い、食物は流動性の物、即ち生の卵黃或は牛乳、飯汁、水飴などを食はしめ、溫湯洗拭、皮膚摩擦なども適度に行ふ方が可い、藥としては熱四十度を越えぬものは、唯鹽酸リモナーデを服ましむる位で、別に心配は要らぬ、鹽酸リモナーデとは、

稀鹽酸　〇、五或は一、〇　單舍　八瓦
水　一〇〇、〇（半合）

をいふのである、便通が無つたら

リチ子油　五、〇（一歳以上の小兒に用ふる分量）

を水或は茶に浮べて服ましむるが可い。

されど熱四十度以上もあり、或は他の合併症があつたり、さうで無くても、一歳以下の小兒は秋萩の葉に溜まれる露の如く、甚だ消え易いものであるから、醫者の診察を受けて天毒を全うせしむるが肝要である、又全快期の上皮剝がれた後が爛れたりするときは、

亞鉛華粉を撒布するか或は

亞鉛華軟膏を貼くるが可い。

又眼瞼が餘り紅くて、甚しく羞明がる者には

硼酸　二、〇　　温湯　一〇〇、〇（半合）

を以て眼を洗ふが可い。

［合併症］には、氣管支加答兒、肺炎、中耳炎、百日咳、或は稀に肺癆、腎臟病を發することがある、親たるものは油斷してはならぬ。

▲痘瘡（天然痘 或は疱瘡 ともいふ）

［原因］これも前のと同じく、熱性の傳染病であつて、其の毒は痘疱疹から出た汁の中に在る、殊に其の疹が膨れて、濃い膿汁を有つてゐるときは、其の病毒も亦强いものである、されど能く乾いた結痂や、或は室内の空氣にも在ることがある、又患者の衣服、所持物或は死体から感染することも尠く無い。この毒は甚だ强い生活力があつて、之を硝子瓶の樣な物に入れ密栓をして貯ふるときは、五六年の永い月日を經ても其の傳染力を失はぬものである。して見ると、一つのバクテリヤなることは疑ふことの出來ぬものである。此の病に感染するの性質は人に依つて異る、或は直に傳染り易い人もあれば或は容易に罹り難い者もある。されど天一天上の日に生れた人は傳染らぬと、昔から言ひ傳へて居るが、取るにも足らぬ愚說である。現に余は「此の日に生れたから、傳染らぬことは勿論種痘しても接かぬ」などゝ自慢してゐる馬鹿者に種痘を行うた所が、普通人よりは一層能く接いた例がある故に斯樣なことを夢々信じてはならぬ。さうして本病は麻疹とは大いに其の趣きを異にし、年齡に依つて、何の關係も無い、生れたての赤ん坊も罹れば、弓腰の老人も傳染り、又血氣盛んの若者も、矢張襲はるゝものである。その麻疹と似てゐる點は、一回これに罹れ

は、免病質になることである、けれども其の免病質は、麻疹程に効力が無くて、十年位經てば、大抵其の質を失ふ、甚だしきは、一二年で全く其の効を消滅するのもある、さうして眞の天然痘に侵された人は、種痘の者よりは、免病質が長く續くやうである、又二度三度と重なるに從うて、輕くなるは爭はれぬ實驗說である。

〔病狀〕潜んでゐる間は、十日位であつて、百人中一人位は身体何となく平常に異なるやうではあるが、多くの人は何の徴候も無く卒然戰慄を發し、熱は四十度或は四十度以上に昇り、これが三日間續き、三日目の夕には四十一度若しくは四十二度に及び、脈は百乃至百三十も搏つ、婦人は尙多い、頭痛甚しく、口渴き或は嘔吐を發し、或は便秘鼻血などがあり、又强い譫語をいふこともある、其他諸關節が痛くなり、婦人に在ては月經容易に來り、往々流産することがある。熱は四日目からは緩き、九日目に至つて、更に昇り、それより又次第〳〵に下り、十五日目に至れば、平温に復するが通例である、發疹は重きは二日目、輕きは四日目に、小豆粒程の紅い色の尖つた點が出で、後忽ち全身に蔓り、口腔鼻の孔、氣管、食道、胃腸の粘膜及び耳などに、痘疱が出來、五六日經つと、發疹愈盛んになり、其の痘の尖が透明なる水泡に變り、漸々大きくなり、さうして濁り、又痛みを帶び、九日目には膿と化し、其の周圍に、廣くて赤い色の暈を作り、痘瘡は集つて、皮膚一面に腫れ、恰も其の大部が膿胞を以て被はれたるかの如くになり、顏面は識別の出來ぬ程腫れ、鼻の孔は塞がり、眼は見ること能はぬまでに眼の周圍が膨れ、全身が著しく目方が増したやうな感じを發し、嚥下困難となり、眼炎・耳炎・咳嗽を發し、胃腸病にでもなつた如き狀態となり、精神恍惚として、譫語を言ふ、この時が最も危險な生死の界である、此の坂越えて、十一日或は十二日目になると、痘疱が乾いて痂皮を作り、甚だ癢く、皮膚の腫れは大いに減り、十五六日經つと、痂皮が落ち、赤い色の斑點或は圓い形の瘢痕を殘す、之を俗にアバタと言ふ、兎

に輕きは二十日、重きは六週間を要ぬと、其の全快はせぬものである。

〔種類〕右に述べたのは通例の痘瘡であるが、其の外に、(一)湊合性痘瘡、(二)出血性痘瘡、(三)痘瘡性紫斑、(四)假痘、(五)水痘などある。

(一)(二)(三)は重く、殊に(三)は最も危險である、(四)(五)は甚だ輕く、必配するに及ばぬものである。今かい摘んで其の病狀を言へば、(一)は熱度高く、神經徴候甚だ惡しく、大抵死を以て終るものと言つても可い。(二)は(一)に比ぶれば少しく輕いが、手足の如き刺戟の多い部分から出血するものを名づけ。(三)は强壯なる弱年者に多いので、初めは全身に稍大きな出血が出來、それから眞の膿胞を形造らぬ先に、速かに死んで了ふのである。(四)は一度眞痘或は種痘をしたものが、再び感染するので、如何にも輕いのである。(五)は初め斑狀に充血して、小さな水胞を作り、其の中に水樣液を含んでゐるけれど、四日目に乾いて固くなり、一週間位で、すべて全快して了ふ。

〔治不治〕小兒老人及び妊婦は、成蹟が宜しく無いが、發疹と共に熱度の降るのは、必らず治ると言つても可い。初め發熱し二三日經つて出疹し熱の依然として去らぬのは、恐るべしである、斯ういふのは、百人中十五人乃至四十人は歸らぬ旅路に赴くものである。

〔療法〕種痘を再三再四行ふは、最も善い豫防法である。初めて呱々の聲を發した嬰兒が、七十日此の世の空氣を吸つたら、直に種痘をなし、それより二年、三年、五年、七年、十年目の六度位行ひ、其の間にまた流行することがあつたら、念の爲め種えておくといふやうに、注意して居れば、決して傳染る氣遣の無いものである。天より稟けた此の顏、イヤ此の身體を、全うずるも或は虫喰のやうに痘痕を遺し、一生砂ッ原の夕立面など、誹らるゝも、皆両親が一日々々と種痘を延し怠つた結果である。あはれ撫子の一株を暴風に散らすも散さぬも、前以ての注意如何に依るのである此の種痘法の無つた世には恰も今の麻疹と同じくこれを防ぐことが出來なかつたから、今日まで絶世の美人

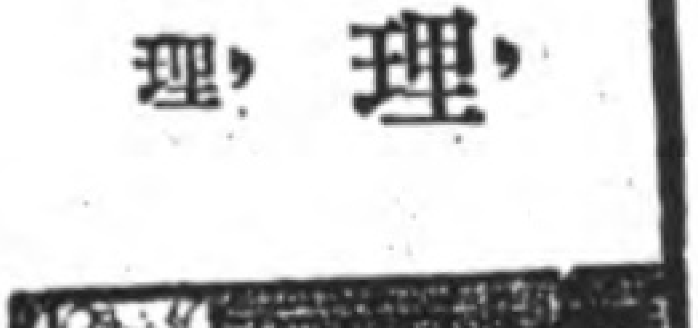
と持囃された妙齡の女子も、明日は類稀なる醜婦となつたのである、然るに西洋紀元千七百六十年に大慈大悲の醫聖 Jenner 先生は、人工的に牛痘接種法を發明せられて以來、幾多の人民を救ひたるか、嗚呼學者の世を益する實に莫大なものと謂はねばならぬ。されど何かの事情に妨げられて、此の恩澤を蒙ること能はず、此の恐るべき病に侵された時は如何處置したら宜いかといふに、これは醫師社會に於ても、これといふ確然たる信ずべき治療法は無い、唯待期療法とて、其の經過に依つて處置するのみである、されば素人の方が、手前療治の出來るものでは無いが、先づ室內を清く冷かにし、麻疹に與へたやうな鹽酸リモナーデを服ましめ、或は氷片を含ましめ、五％の石炭酸軟膏を麻布に塗り、之を顏面に貼りおかねばならぬ、さうすると、一つは痛みを減じ、一つは痘痕が淺く、或は全く防がるゝことがある。眼はこれも麻疹の章に述べた硼酸水を以て屢々洗はねばならぬ。又最も注意すべきは爪を以て痘瘡を搔くことである。搔けば痘痕が深くなるから、小兒などに在つては、手の周圍に布片を纏ひ、搔くことの出來ぬやうにするが肝要である。何人もこれ丈の事を心得おきて、倘醫師の指圖に從はねばならぬ。

（以下續出）



季節總菜料理

手輕西洋料理



▲牡蠣豆腐

まづだしを作り味淋と醬油にて加減し沸立たる中へ牡蠣を入れ夫に豆腐を手のひらより切り落して汁の中へ入れ 一ふき沸立つを待ち直ぐに膳に上すべし。

▲秋刀魚の料理

秋季のさんまは淡鹽のものなれば燒て直ぐに食ふべし、されど是れを味噌漬、粕漬にして燒て食ふもよし、又酢うでにするの法あり、これはさんまを片身づゝにおろし骨を去り、よき程に切りて酢をかけるなり

▲大根の胡麻煮

初冬の頃、根の大きだいこんの皮をむき、輪切りとなし大鍋に入れてよくゆで、胡麻味噌を入れ混合せ、文火にて蒸煮となし温きうちに食すべし。拵胡麻味噌の拵へ方は、白胡麻を適宜に煎り擂鉢にてよくすり味噌に白砂糖を少し加へたるものを入れて又よく擂りてつくる

▲菌のスープ

何にてもよし新らしきものを撰みて小く切り二時間ほど塩に浸したる後水より取出し鍋に十分水を入れ之れに菌を投じ、蓋をしてその軟になるまで之を蒸煮にし、小麦の粉とバタを二さじづゝ加へよく掻き混したる後適宜の胡椒と食塩とにて味をつけるべし

▲牛肉のスチウ

牛肉のよき所ろ二斤（切らずに買ふべし）を十二片位に切り之をスチウ鍋に入れ、水を肉の浸るほど入れ文火にて凡一時間ばかり煮たる後、煮汁の上に浮きたる 滓をすくい取り胡蘿蔔一本を五六分位に切り、 馬鈴薯六個位皮をむき之を四つ切となし 玉葱五六個を刻み大匙一杯の食塩同量のメリケン粉に茶匙半杯の、胡椒粉を入れ鍋に蓋をなして更に一時間とろ火にて煮るべし但し煮る時焦付かざる様注意すべし

▲コロッケの製法

牛肉又は鶏肉を細かく、たゝきて薄く丸め之にメリケン粉を塗りて其上に鶏卵の黄身をひき又其上に麺包粉を万遍なくふりかけ、フライ鍋に牛油を沸騰させて此中に煎りつけ、褐色になりたるを度として皿に取り出し 洋芹を添へて出すなり

▲栗　飯

先栗の大なるを撰み上皮を剥きざつと ホーロク鍋に入れて火にあてれば渋皮は容易くむけるものなりこの栗を二つ割にし 常飯を炊くに常よりも水を少し増し飯ふき立ちたる頃右の栗を上に置き炊上ぐべし、あまり栗の煮過ぎたるは砕けて手際あしきものなり

▲林檎の砂糖煮

餘りよく熟さゞるりんごの皮をむき、四つ切りにして之も同量の水にて凡そ十分間許煮たる頃、 林檎五ツに、白砂糖五十目を入れて尚徐かに煮込み、りんごの溶けぬうちに火より下し其温氣のある中ビン詰となすべし、 但し一週間前後なれば目張せずと之を貯へ置かるべし。

▲鰯の滓ずし

いわしの頭と腸とを取去り、背の方より割り骨を抜き去り酢に塩を加へ其中へいわしを浸し置き豆腐の滓をザッと湯煮に煮て是 に酢と砂糖少し入れて加減をし、其滓を一寸五分位の長さに丸め酢にひたしたるいわ

しを開いたる儘滓に卷開くるなり

▲薩摩芋の茶巾

さつま芋の皮をむき灰を出し蒸し、毛篩にて裏漉にし鹽と白砂糖入れてよくねり、團子の如く丸め、布巾に入れつまみ絞るなり、扨て紛のくづれぬ樣布巾をほどき燒魚のあしらひに盛りて出すなり

▲燒物いろ〳〵

燒物は直に火の上にて燒くと蒸燒きとの二種あり西洋料理には直燒なし、又日本には沙鍋燒き加斯亭羅燒き等の外には蒸燒きの法なかりしが洋風傳來して種々の燒方を考案するに至れり、燒物は都て味濃もの故酒宴杯にては客の醉はざる前に出すをよしとす

一　蒸燒　乾蒸と書く方宜し此蒸方は乾蒸鑵にて燒なり罐を密閉して裏表より火にあつべし、鴨、鷄、魚、牛、猪、其他、鍋等何にてもよし少し焦目を付けんと思へば火を強くすべし

二　沙鍋燒沙鍋二枚兩方共に鹽をふり魚鳥何にてもよし鹽の上に並べ二枚の沙鍋を合せて上下より燒くなり。

三　加斯亭羅燒魚を擂身となし鷄卵を多入れ玉子燒きにて燒くなり。

四　螺燒先づ魚を鹽燒きかに醬油付け燒きかになし置き鷄蛋を上に塗りて燒くなり

五　海膽燒先づ魚を白燒きとなし置き後海膽を酒にて摺て魚に付けて燒くなり又海膽に鷄蛋を加れ摺りて塗付け燒くもよし

六　醬燒普通の田樂なり豆腐は第一に宜し魚牛肉、鷄肉等は白燒きとなして數味噌葱のみじん付けて出す

七　照り燒醬油に味淋を加へて魚を付け燒きにするなり

八　香燒、味淋、酒、砂糖醬油を合せて煮つめたれを作り扨一旦鰻を白燒きとなし置き後右のたれにて鰻を燒きて漆盆に入れ蓋をなし能くむれたる時に出す

九　濱燒前の沙鍋燒きの通りにて宜し若し焦目を付け度ば燒けたる後鏝を燒きて好き所に燒き目を付くべし併し鹽田にて發ふる眞の濱燒きには焦目なし鯛の濱燒きは腹を披き腸を去り鱗は去らず

十　合せ身燒はさよりを披きて骨を去り身に蛋白を塗り鹽少し振り掛けて二枚の身を合せ、暫く置き後燒き好の品を添へて出す

▲玉子豆腐

大玉十個を割り鉢に入れ能くまぜ、煮汁を作りさめたる時これを二合五勺位を入れ味淋一合を五勺に煮つめて三勺ほど入れ鹽二匁醬油三勺をまぜこして丼へ入れて蒸すなり、尤も二十分間位蒸すなり蒸し上りたる時はさまして角なり算木なりに切り椀盛又は茶椀によし

家事のいろ／＼

肉食と菜食

ミセス、コーツ

先頃加奈陀政府から、大阪の博覧會に出張いたして參りました人の話に、日本の西洋料理には、朝・晝・晩とも肉ばかり澤山で、野菜類が乏しいので、腎臓病が出かけて困ると、云ふことでありましたが、私も、平生とうも日本の方の中には、西洋人と云ふと肉ばかり食べて居るものかの樣に、誤解して居らるゝ向も多いかと思ひます。で、西洋料理と云へば、直ちに肉料理といふやうに、考へられる傾きが御座います、併しながら健康に注意する西洋人は、大方一日一回肉類をとる位のもので、しかもその一回の肉さへも、野菜の二三種と共にたべます。

一體肉類は人の身體に、どういふ働きをするかと云ふと、それは主として筋肉の消耗を補ふ丈で、骨も造らず、力も體温をも增すものでありません。で、肉を多量にとりますと、筋肉の消耗を補つた餘分のものは、却て身體を害することになります。何せなれば、餘つたものは皮膚や腎臓から、體外に排泄しなければなりません。即ちその餘りが多ければ多きだけ、餘計に腎臓を疲らせることになり、遂に病氣になるのです。

成長最中の年輩ならば、或は肉を多食しても、左程の害はありませぬが、旣に成熟したものが、肉を食べすぎますと、直ちに惡結果を見ぬまでも、老年に及んで腎臓病、リウマチス等に罹ります。私は肉類の身體を養ふ力を、餘りに信じ過ぎて居らるゝ方に、アスリート（西洋で體力の競爭をなす人、日本の相撲の如きもの）とスコットランドの男子を御覧なさいと申したいスコットランドの男子と云へば、世界に於ける强大なる男子の別名として、考へられて居るのでありますが、彼等の食物は麥類と乳とが主で、肉は極めて少量で御座います。またアスリートの中で、殊更肉食を避

（未完）

けて居るものも澤山あります。朝飯の折パンと肉類とを取るよりは、煮た麥に乳をかけて用ゐる方が、晝飯まで疲れずに、種々の仕事を續ける事が出來ます、近來米國などでも、宗敎や經濟上の制裁のためでなく、全然健康の上よりして、菜食主義を取る人が、年一年增加しつゝあるので御座います。

玩具の積木

玩具屋に賣つて居る積木といふのは、至つて小さいものでありますゆゑ、筋肉の働きが單純で、込み入つたとの出來ぬ、幼兒のためには取扱ひが(玩び方)六ケ敷すぎて、腦を疲勞させる恐れがあります。で此の積木をズント大きなものに拵へて(木はドンナ粗末でも構ひません)、形は長方形のもの、その半分の長三角形、前の長方形を眞二つに切つたもの、そのまた半分の三角形等、各十二程づゝ取揃へてやりますと、子供の無器用な手にでも、自由自在に玩そばれますゆゑ、この積木を以て椽側などに大建築物を造ります、あまり長い間大人しいので、ドーしたのかと行つて見ると、子供は建築物の構造に餘念なく、意外に珍らしい趣向を凝らして、獨り喜んで居るともあります。普通の玩具なら、ドンナに珍しいものでも、恐らく半時間とは飽かずに居りますまいが、この積木をあてがつて置きますと、忘るほど、長い間實に大人しく遊びます。そして年々子供の智惠の進むにつれて、同じ積木で種々と變つたものが出來ますゆゑ、宅などでは八歳の總領から四歳の幼兒まで、男の子も女の子も皆喜んで一番好きの玩具にして居ります。危險でもなし堅牢で而も以上の様に子供の智惠次第で、變化の多い玩具でありますゆゑ、是非皆様にお勸めしたいと思ひます。大體の大さを申しますと、一番元の長方形が長さ四寸位、巾二寸、厚さ一寸位で、長三角はこれを二つの三角に切りわけたもの、外のは元の長方形を横に眞二つに切つたもの、またそれを二つの三角に切りわけたもの等です。(以上ミセス、コーツ)

美貌の秘法

左の二篇はアメリカのある雜法に載つて居た、婦人方への忠告です。風俗習慣其他の違つて居る我國の御婦人方にて此通りなさるが宜しいと御勸め申す譯ではありませぬが、其中には大に御參考にならうと思ふふしがありますから、摘譯して御覽に入れることに致します

性來色の黑い顏、日に燒けて黑くなつた顏を氣にして、色々の藥を買つて付け、甚しきは、心易い醫者に相談して、劇藥でどうかせやうとあせる向もあるが、畢竟色の黑いのは、膚の厚い上皮の下に原因があるといふことを知らないからで、よし藥で上皮を剝ぎ取つて新しいのに取換へ得たところが、たとへば蓋硝子を取換へても、其下の畫の色彩の惡いのは何とも仕方がないと同じこと、却つて不潔い硝子を箝め換へるやうの結果になりませう。そんな事言ふても現にこれ〳〵の藥を付けたら、日に燒けたのが取れたと言ひ張る方がありませうが、黑い顏を苦にして家に內にばかり引込んで居れば、自然の作用で、藥は付けずとも色素は減つて、色は白くなるに定つて居ます。

毛染藥は少くとも三週間に一度塗り換へねばなりませぬ。毛には始終養毛液を用ひねばなりませぬ。

眼を涼しく見せる爲に、ベラドナのやうな毒藥をさす人がありますが、かやうな藥は必ず禁物で、思ふ通り瞳は開いても、それが爲に眩しくて、窓の方へ向くことも出來ぬやうになり、其上、多くは咽喉に祟りが來ます。かういふものは醫者の專用物で、素人の用ふべきものでない。

要するに、容貌を根本的によくしやうと思へば、左の方法に據るべしです。

一、毛髮をよくする爲には、時日を定めて洗ひ、洗つた後へ少し光澤液を塗り、そこで朝一度夕一度、十分間程づゝ刷子で擦り、成るべく毛髮全體に日光を當てるやうになさい。髮洗ひの期間は毛髮の質で違ひませうが、ねばる人ならば二週間に一度、粘らぬ人ならば三週間に一度で澤山でせう。

一、色艶をよくする爲には、毎日生の林檎なり、桃なり、蜜柑なり、時々の菓物を御上りなさい。肉類は

多くとも日に二度、食事の時間は一分も違へぬ程嚴重に守り、ニチヤつかず、ピリヽツと來ない石鹼で毎朝よく洗ひ、毎日少くとも三マイルづゝ運動なさい。

以上極めて平々凡々で、こんな事がと御思かも知れぬが、眞理は平凡の中にあり、試に一ヶ月やつて御覽になれば、其價値が必と分つて參りませう。

歩き方と品格

一、歩く時は肩を振らぬやうに。極下品に見える惡い癖です。

一、歩く時あまり反身になり過ぎて、肩の方が臀より後ろへ出ないやうに。

一、兩手を固く棒のやうにして下げて置かぬやうに。

一、あまり屈んで歩かないやうに。身體はいつも眞直で、胸を張り、臀は程よく後ろへ突き出して。

一、あまり足へ力を入れて、土を荒く踏まぬやうに。踏む足は輕く、態とらしくなく、確乎と、上半身の重みを交る〲左右の臀に載せ、しかもあまり臀を振らぬやうに。

一、踵の力で足を踏み出さないやうに。踏み出す時足の力は、くるぶしから、輕いバネ仕懸けで彈き出されるやうな心持で。

一、兩足は交る〲眞直にならねばなりませぬが、さればとて棒のやうに固くならぬやうに。

以上の調子工合を呑込んで蓮歩を運べば、筋肉の仕事は最少で、疲れ方が少く、心持がよく、健康と美貌の法に適ふのみならず、見たところがいかにも上品で、位が上ること請合です。

一、歩く時頭を下げて居る人がありますが、頸の力を惜んで、軀體に餘計の力を使ふ此結果は身體活力の爲不經濟であるのみならず、見た所如何にも不調和で、締りなく、賤しげのものです。

一、歩く時は何時も、鼻の先から下へ引いた線が足の親指の一寸前へ落ちるやうにと心懸ける、これが完美歩行法の規矩です。

一、歩く時あまり膝を曲げぬやうに。馬がダクを踏むやうな歩き方は、決して詩的ではありませぬ。

一、踵の曲つた靴、踵の高い爪先の細い靴を穿いてはなりませぬ。これは必ず美の敵です。

一、いかに急ぎの時でも、馬のやうな躍り歩き、跳ね歩きはなさらぬやうに。

一、腰を「く」の字に屈んで歩くのは野卑です。

、運動の爲には餘り長い路程はいけませぬ。そろそろ疲れが來そうなところで御止めなさい。

一、階子段を千鳥に上らぬやう。

一、階子段を上るに荒い音をさせぬやう。

一、階子段をかけ上らぬやう。階子段を上る時は、十何貫といふ身體の重みを高く持上るのですから、成可しとやかに、輕く上つて、無益の勢力をせぬやうに心懸けねばなりませぬ。

一、階子段を上る時は、爪先ばかりでなく、爪先も踵も同じ力で、平らに、輕く、しつかりと段を踏むやう。そしてあまり屈んで胸を壓さぬやう。階子段を上る時は平地を行くと違つて、餘分の仕事に對する餘分、呼吸が入用ですから、肺を壓迫することは、身體の爲によくありませぬ。重心を失はぬ限り、胸を開いて御上りなさい。

凡て自分を上品に見せる爲の工夫に費す時間を惜んではなりませぬ。風采の上品といふことは、顔の美しいのと相並んで、特に御婦人の上に、得難い貴い雙璧でございます。

泰西禮法 交際のしをり

秋高ふして馬肥ゆ、驕陽爍鐵の夏と嚴烈肅颯の冬との中間に於て天は我が人生に與ふるに爰暫らくの好季節を以てす、花壇の菊花今や盛りにして黄白色を競ひ、梢上の紅葉將に染めなんとして是より千段の錦を見るべし。以て客を饗すべく以て宴に趣くべし、この如くして人は人と交はり、平素の疎情を和らげ、交友の禮義を敦ふし、又新たなる知己を得て互いに趣味の交換をなす。誠に人間交際の要義にして生活の餘裕を示す

ものといふべし。即ち是に泰西の禮法中我が生活に適應せらるべきもの二三を摘記して聊か參考に供せん。

●紹介の手續

西洋にて人を紹介するには塲合によりて種々の異式あれども、通例其紹介すべき双方の人を對座せしめ、其内一方の身分の高き方、乃至年長の方（但し男女なれば身分年齢に關せず女子を先にす）の方に向ひて其名を呼び紹介し終れば次に双方の住所職業等を知らしむべし。又一人に對して數人を紹介する時は、一人の方は一回其氏名を呼び引合すべき人々の氏名は銘々に之を呼びて双方に低頭するを例とす又數人を一時



倫敦に於ける交際社會の服裝

に紹介する時は、單に何の某と其氏名のみを述べ、紹介せらるゝ人々は相互に挨拶して對話に就くべし。握手は爲すと爲さゞると人々の隨意なれとも男子の間には之を爲すを常とす、又年長の者と年少の者との間には屢々之あり、未婚の女子と男子との間には之を爲すこと稀なり、唯双方の間に少しく頭を低るゝを常とす又既婚の婦人男子へ紹介さるゝときは、握手するもせざるも婦人の隨意たるべし。

握手をなす時は同時に其人の起居を問ひ、或は珍らしきことなどを問ふことと普通の習慣なり、而して其手の握り方は全掌を以て先方の手を握るべし、唯二指若しくは三指のみを出すは不敬にして禮を知らざる野鄙の者のすることなり、又先方は懇ろに握手の禮を爲すに勢なき仕向を以て之に對するは不敬の甚だしきものなり、凡そ握手は双方互に確と手を握り合ひ、二三秒間相搖つての後全く手を引き離すを可とす、然れとも妄りに堅く搖り過すは又失禮と知るべし、又手を握ること餘り久しく且つ餘り長くなるも却て失敬なり、握手の際先づ婦人より手を出すは常のことにして隨意たるべきも男子は斯くさるゝにあらざれば自らまづ手を出すべからず、又婦人は己れの居宅に於ては都て來客に對して手を捧ぐるを禮とす。

◉尊稱の事

對話の際に於て先方を呼ぶに用ゆる尊稱によく心得置きて誤なきやうに用ゆべし

▲親族の間柄　夫婦は家族の內に於ては互ひにその名のみを呼ぶと雖も、他國人の前に於ては互に其名の上に「ミストル」「ミスセス」等の冠字を加ふべし、又親疎の別なく親戚の間に於ては互ひに名のみを呼ぶと雖とも一般の知人及び他國人の中にありては互に其姓名を呼ぶべし。

▲他人の間柄　すべて他人と對話する時は成可く尊稱を用ふべし、即ち其人裁判所の判事ならば「スクワヤー」といひ、醫師ならば「ドクトル」といひ、知事ならば「メーヨル」と云ひ、代議士ならば「セネートル」と

稱呼すべし、特に公務に從事する人の面前に於ては最も尊敬を加ふべきものとす、又人の妻と對話するに當り、其名に夫の官名を添へて「ミッセス、サー、ゼント、ジョンス」或は「ミッセス、コロネル、ミッス」なと稱呼すべからず、又親戚外の者にて十五年未滿の少年と相接する時は其名のみを呼ぶべし、若し十五年以上にして多少事理を解する能力ある者ならば「ミストルユニオン」或は「ミストル、キング」などいふが如く其姓を呼ぶを可とす、少年は槪して感動を起し易きものなれば之を遇すると懸ければ自然心中に不平を抱くものなり、されば之を遇すること親切にして滿足せしむる樣務むべし。故に小兒と雖も其名を知らざる者に向ひては「マイ、ボーイ」若しくは「マイ、リットル、ラッド」と呼び、女兒に對しては「マイ、ガール」若くは「マイ、リットル、レデー」と呼ぶべし、又親戚中たりとも小兒を呼ぶに綽名を以てするは不可なり、但し愛名を呼ぶは妨なしと雖も、之は極めて幼稚の者に限り、少しく成長したるものは正當の名を用ひざるは不敬なり。

●訪問の心得

訪問を爲すには時間、職業、其他の諸關係よりいろ〳〵注意すべき箇條少からず、左に其主要なるものを略記すべし。

▲時間●●　禮式の定法として西洋にては日出より、日沒に至るの間を「モーニング」と唱へ、日沒以後を「イブニング」と稱ふ、而して日中の訪問は正午十二時前及午後五時過になすを忌むの慣例あり、但し被訪者の職業によりては此定法の外に猶忌むべき時ありと知るべし。

夜中の訪問時限は必らず午後九時より遲かるべからず、假令止むを得ざる事故ありて九時後に訪問するも必らず十時後まで長坐すべからず、夜間の訪問時間は通常一時間を以て例とし、親交の間は是より幾分長座するも差支なしと雖も通常の交際にありては務めて長坐を避ざるべからず。

▲名刺●●　何等の訪問を爲すにも名刺は常に携帶して之

を示さゞるべからず、名刺は門口にて取次の婢僕に與へ以て主人に我が訪問を通せしむ、其家内もし二人以上の婦人ゐる時は名刺の一隅を折り裏へ返して出すべし、是れ訪問の一家一同にかゝる意を表するものなり。

訪問の節名刺の用ゐ方は男子は姓名及び宿所を認め既婚の婦人は「ミッセス」。未婚の婦人は「ミス」の字を冠らしむべし、陸海軍の士官は官名を記し、醫師は職業上の名稱を記すべし、但し米國に於ては訪問の名刺に「オノレーブル」「スクワヤー」及び「プロヘッソル」等の敬稱を自ら附するを忌む、又官職上の資格を以てする訪問を除くの



是は倫敦に於ける交際社會の服裝にして晩餐會殊に立派なる宴會には大に盛裝するを例とす而して會に趣く時は必ず胸に生花を挿みて行くの例なり尤も舞踏會には紙製の花を用ゆるよし是れ生花は舞踏の際散亂するの虞あればなり

外は名刺に自己の官位等を記すべからず。

◎訪問に際して忌むべき箇條

▲先方の家内雜沓する時は一時見合せ、數日過ぎて後訪問すべし。

▲零落したる人を訪問するに己れの富裕を誇り衣服裝飾の美をなすべからず。

▲接待の良否を量らずして濫りに他人を伴ひ訪問すべからず。

▲主人又は主婦の來るを待つ間、室内を逍遙し、或は圖畫などを見廻るべからず。

▲既に去らんとして一旦席を立ち特別の用事もなきに再び復席すべからず。

▲對話の盡くるにも拘らず長坐すべからず。

▲勸めを待たずして妄りに病人の室へ入るべからず。

▲小兒又は犬などを伴ふべからず。

▲人の前に坐を占め脊を向くべからず。

▲濫りに室内を見廻し、裝飾物等に目を峙つべからず。

▲食事の時來れば速かに辭して去るべし。その刻限まで長坐するは無禮なり。

◎會食の獻立

盛饌を設けて數十名の客を饗する宴會にはあらずして一寸した披露會とか誕生祝とか又病氣全快祝とかにて親戚朋友等を會して之を饗する時、その會食料理の獻立を一家の主婦又は庖厨を司どる奴婢達の參考までに聊か會食の獻立を述ぶべし。但し歐米諸國の習慣には客を請ずるに必らずその夫婦を招くを常とする故に本邦人にして客を請じて洋食を供せんとせば勢ひ又その習慣によらざるべからず、されば會食の人員は主人夫婦を合せて六人、八人、十人といふが如き偶數に至るべし、故に其の心して食品を準備すべきなり歐米諸國各々その國の風習によりて食物の調理法相同じからず隨て其獻立も亦一ならず、食品或は相同じきも甲國は之を先にして乙國は後にし丙は魚肉を二三回續けて出し丁は鳥獸の肉と魚肉とを互に相交へて供するあ

り、されど茲には重なる國風を折衷して適宜とおもへるものを示すのみ

第一　スープ　是はいづれの國にても食事の第一に出すを常とす、鳥獸肉の製あり、魚肉の製あり又野菜にて製したるものありて一樣ならず

第二　魚肉　魚肉はいづれもその時候のものをフライ、(油煎)ロースト、(蒸燒)又はボイル(煮料理)の中いづれにてもその魚に適したる調理にして出すべし。

第三　鳥獸肉　これは羊、豚、或は鷄、家鴨などの中燒料理を出し夏日なればコールドミート(冷肉)を用ゆべし但し此時オムレツ又はハム鷄卵を出すもよし

第四　鳥獸、魚肉、これは牛、豚、羊、又は稚鷄のカツレツ又は煠たる蝦、牡蠣の蒸燒等を用ゆべし。

第五　鳥獸肉の混和製又は搗肉製のもの以上各種の混和料理にして、コロツケ、フーカデン甘藍卷の類にして前に出したるものと全く異りたる品を用ふべし。

第六　蔬菜料理、これは豌豆、馬鈴薯、或は菌料理の中時候に合ひたるものを出すべし

第七　獸肉、これはビフテキ、又はハムサラダスチウ、の中にて適宜に撰擇すべし。

第八　は寄せ物

第九　菓子類

第十　珈琲或はチヨコレート及び果物

珈琲又は紅茶の類を出すに牛乳及び砂糖は別器に入れて共に出すべし果物は季節のもの二三種見繕ふべし

右の外酒類は第一回のスープを出す前に二種位食卓に上すべし、但し酒類は醱酵製(葡萄酒ビールの如き)のものと蒸溜製(ヰスキー、の如き)のものとを取交せて出すをよしとす。扨右十種の料理は隨分鄭重なる献立にして普通簡單のものとは言ひ難ければ、時宜によりてはその中二三品を減ずるもよし。但し成可く似寄たる種類のものを省き、且つ每回出す處ろは異りたる調

味のもの即ち濃味のものと淡泊のものとを交互して出すをよしとす

右にて卓上に出すべき料理の配合の大凡を知りたらばその食品の盛り方、飾りつけの大要を心得べし。

◎食卓の飾付順序

普通料理の献立に於て卓上の飾り付を爲さんにはまづ其の會食者の員數によりて之に適する丈の食卓を食堂の中央に据へ若し人數多數なれば同じ大さの卓二三脚を配列すべし、斯くしてまづその大さに適する羅紗製の机掛をかけて四隅を絲にて止め、其上を淸潔なる白布にて覆ひ、次に食卓の大小長短に應じて花瓶其他の飾り物を適宜の場所に配置すべし、それより庖丁、肉叉、食匙を各人の前に配列し、庖丁と肉叉の近くに大コップを列へ麥酒など注ぐ爲に供すべし而して二人に一個づゝの食鹽器をならべ食卓の兩側の中央に香料臺を置くべし、斯く諸器物を配列し了りたらば麵包皿の上に手巾を疊みてのせ、其上に麵包を盛りて各席に配り又食卓の二隅に水注、水呑コップを置き最後に各席の椅子を配るべし

而して又食品の盛り方は總じて內端に盛りて成可く皿の周圍を奇麗にし野菜又は果物にて飾るべきものは猶更手際よく飾りつけ、客をして一見食慾を起さしむるやう注意すべし。

西洋にて親戚朋友を會して饗應する時には前以て定式の招待狀を發し、招かるべき客は之に對して諾否返書を送るの習慣にして、日次刻限等聊かも違ふることなし、斯くして其の刻限となれば會主は招待せし人員の揃ふまで先着の客を待合室に案內し置き人員既に揃ふて食卓の用意も整へば之を食堂に導くなり

◎會食の心得

▲凡そ食堂に入る前には顏手足をよく洗ひ殊に爪の垢を取り去り衣服の塵を拂ひ萬事淸潔にすべし既に食堂にて食卓に向ふ時は己れの坐すべき椅子の脊に右の手をかけ、其左側より坐につき正しく食卓に向ふべし。

されど他の人未だ席に就かざる中己れ一人先んじて就くはよろしからず、なるべく同席人の用意せるを待ち各同時に就くべきものと知るべし。

▲食卓に就く時自己の體と食卓との距離を適當にして餘り接近し、又餘り遠ざからざるやう注意すべし、又着坐の時向ひ合たる人の足に觸るゝまで自己の足を突出し又椅子の下或は脇等にて屈曲せしめ又は椅子にもたれ又は食卓によりかゝり及び座席を立つ等は心なき業なりと知るべし。

▲給仕の者に對して粗暴の言を吐き、或は手數をかけることを謝すべからず、是れ其欲する所ろの者を持運ぶは給仕の務めなればなり、

▲食事はあまり急ぎてなすべからず

▲食物を口一杯に頬張るは忌むべき事なり食物を喫するには大口を開く勿れ。

▲食事中に口又は咽喉を鳴らすべからず、又食物を口に含みながら談話すべからず。況んや口中に含みながら席を離るゝが如きは大不敬なり

▲食卓は成べく清潔を保ちこれを汚染すべからず

▲食事中傍らに犬猫を近づけて之を弄ぶべからず、

▲砂糖及び其他の漬物類幷に菓子を食卓外に持去るべからず。

▲肉類は凡て肉刀を以て之を刻むべし又骨をば摘みて之を食ふべからず。

▲パンは手を以てちぎり食ふべきものなり、肉刀を以て切るべからず、又食する時にはパンの兩面へ乳酪を塗りて食すべし。

▲パン又は菓子の殘片を取るにためらうことなかれ、但し取り盡して殘り一個となりたる時は妄りに是を取ること勿れ

▲食物を扱ふには肉叉及び匙の外他の物を用ゆべからず、

▲食卓に向へる間は食物の美不味をいふべからず。

▲食事中齒をほぢり或は口中に指を入れて齒に挾りたる物など取るべからず。

▲飲食の席へは下襦袢の儘、又は乳髮、汚手などにて

嚥むべからず。

▲主人の勸めをまたずして食物の撰擇をなすべからず

▲牛酪を掬ふには己れの飲食の爲め供へある肉叉を用ゐず、之を掬ふ爲めに供へあるものを用ふべし、又之を取るは可成的少く取るべし。

▲桃、梨子、密柑、などを他人に出すには必らず肉叉にて押へ切るべし。

▲卓掛にて手又は口を拭ふは大禁物なり、必ず膝掛を用ふべきものなり。

▲皿物又はその他の事由ありて外見を厭ふ場合の外卓に向ふ時必ず手套を取除くべし。

▲食物を配るに皿に盛るゝまでに盛立て又は人の欲せざる藥味などを强ゆるべからず、

▲他人の飲食の世話を爲す時は食料、野菜等に肉醬をふりかくる事なく必らず皿の一端に滴らしおくべきものとす。

▲食事中は乳酪又は肉醬にて手指を汚さゞるやう注意すべし。

▲自分に供せられたる食物は求めらるゝにあらざれば之を他人に移すべからず。

▲食事中不潔のもの即ち髮の毛、又は小蟲など食物に附き居るを認めたらば密に之を取りて決して人に知らしむ勿れ。

▲肉附の骨をシャぶり。又は皿中何一つ殘りなく食ひ盡すは下品なれば愼むべし。

▲食品の代りを望む時は肉刀をパンの上に置くべし皿に載せて出すべからず。

▲菓物の核皮又は骨などを口中より直ちに皿器へ吐出すべからず、先づ口より肉叉に受けて後に皿の一傍に置くべきものとす。

▲おのれの嗜好に任せて人の注目するをも憚らず、一種の食物を縱まゝにすべからず。

▲牛酪、乾酪、甘味ある菓子、其他似寄の物を多分に食するは最も嫌ふべきものなり。

▲食卓上自分の好まざる品ありとも之を他人に語り又は顔に現はす等のことあるべからず。

▲飲食中は消化に害ある談話をなすべからず、故に專ら意味淡泊なる閑談のみをなし、義理の深奥なる者は思慮を費やして消化を妨ぐるものとす、されば席話は靜肅にして決して感激を起さしむること勿れ、又身振りを以て談話に代へ、或は肉叉肉刀を食卓に排列して又之を振り廻し談話の補助となすべからず。



庭園の話

（日本庭園の沿革及將來の希望）

子爵　秋元興朝氏

我國の庭園に關しては別段沿革史と云ふものがないから正確に調査する事が出來ない殊にこれ等のことは十分に系統的に研鑚を重さなければ分らぬが、先づ口碑に傳はる處と、或る書片に殘つたものと實地の舊跡の存する所とに因て考へると、眞京都あたりにあるのが最も古いものゝ樣である彼の大和の法隆寺には

▲聖德太子の花圃　と云ふのがある、但し是は單に寺僧の言傳へで此處に聖德太子の花圃があつたと思はれる形跡はない、所謂口碑に依つて其名を知る丈けである其次は京都の

▲神泉苑　之れは桓武天皇が嵯峨天皇の御字に造られたので當時は東西二町、南北四町の境域があつて其苑の主位には乾臨閣と云ふのが建てられて之れを正殿とせられて其前の處に池があつて世に天皇の御遊園とせられたとのことであるが、之れは列務と記錄に存して居る事の顯が神泉の賦にも「紅林地廣呑楚夢於胸中、綠池水高鎔吳江於眼中」とあり遊貞王の時にも「三明瀛照龍池閑、二道金迎秋叢橋」とあり又宗時の歌にも「千早振る神の泉のその上や花を見ゆきのはじめなりけり」とあるが爾來屢々荒廢に歸して彼の應仁の亂後は全く廢滅に歸したのを元祿年間になつて僧某なるものが再興して今日までも殘つて居るが記錄に比べると境域が狹いから單に其形のみを募したるものでせう、其次は融の大臣の

▲六條河原の院の庭　是れは陸の奧の鹽竈の潮汲の景色を寫して造つたものである、此園も久しく荒廢に屬したのを德川時代になつて彼の東本願寺を建てる時に發見されたので更に枳殼殿と云ふのを建てゝ舊跡を存じて今では有名な庭園となつて居る、又其庭内には融の左大臣の塔も殘つて居る、又其當時の樹木だと云ふて白檀と云ふのも殘つて居るが、但し其樹木は老樹に相違ないがどうも其時代のものとは思はれません言ふまでもなく後世に至つて植付けたもので、河原の左大臣の庭そのものとは素より判然しません、又

▲鳥羽帝の庭　の跡と云ふのがある、之れは小枝橋の南に當つて居る、けれど今は一體に田畑となつて纔に秋の山と云ふのが殘つて居るが、中は壞たれて茶圃となつて所謂部分のみが殘つた丈けである、都名所圖繪などを見ると鳥羽の帝の庭には春の山、秋の山と云ふのがあつて春の山には櫻を植ゑ、秋の山には紅葉を植ゑて、春秋の眺めに面白く造られたものに相違ないが今となりては其形蹟もなければ纔に殘つて居る小山のみを見て信用する譯には行かぬ、又　後白河天皇の

▲法住寺の庭　と云ふのがある、今の三十三間堂は其法住寺の本堂であつた、そこで泉涌寺の境までは法住寺の境域であつたらしく思はれる又法皇が紀州の熊野山を平生御信仰あつて屢々行幸になり、そして法住寺の庭の中に新たに熊野神社と那智の觀音とを御引きになつて社も佛堂も共に今日に殘つて居る最も其建物は其當時のものとは違つて居るが、境域は大分廣い、即ち天然の地形の高低に幾分か人工を加へたのに過ぎなかつたであろう其次は今日殘つてゐる、

▲土佐繪の庭　の景色である或程これは大したものらしくも考へらるゝが併し此等の繪畫物が果して其實物を描いたものであるか又は全く想像して造つたものであるかは判然しない降つて足利時代になつて

▲金銀閣寺の庭　が出來たが此等も中頃荒廢したのを德川時代になつて修復したものであるが、閣と云ひ池と云ひ主なる部分は足利時代に出來たものであつて、充分當時の意匠を窺知することが出來た、其他のものは皆豐臣、德川以後に出來たもので完全に庭の原形を存するものは此時代以後である

▲庭園の種類　に就いては種々の説もあるが凡そ三種であらうと思はれる第一、山水庭、第二、平庭、第三茶の湯である

▲山水庭　とは勿論山水を寫して造つたものであるが其山水を形どるに就いては實地の山水の景を小さく寫したるものと名人の繪を實地に形つたものと又想像的のものを實地にしたのと三種になつて居る樣に思はれる其中實地の山水又は繪畫の山水から出來た庭に就いては別に細説する程の必要もないかこゝに想像的の庭に就きての好例は

▲桂の庭　に多くある樣に思はれる彼の月波樓の如きは白樂天の「湖上春來似畫圖、亂峰周廻水平鋪、松排山面千重翠、月點波心一顆珠、碧毯線頭抽早稻、青羅裙帶展新蒲、未能抛得杭州去、一半勾留是此湖と云ふ詩の意味を酌んで造り建てたるものである夫れから松琴亭と云ふものもある之れは彼の三十六歌僊の齋の宮の女御の「琴の音に峰の松風通ふらし何れの緒よりしらべそめけん」と云ふ歌の意を取つて造り上げた茶室である、そふして其室の周圍には松の樹を多く植へて充分に歌の趣きを現してゐる、又龍田山の御茶屋の如き、吉野龍田川の花紅葉と云ふ言葉から出たもので、其屋の周圍には紅葉と櫻が澤山植ゑてある、或は園林堂の如きものゝ無量壽品と云ふ經文中の「我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、寶莊嚴」と云ふ句を形に現はしたものである、其外數へ立てると澤山あるが、要するに無形の意匠を實地に顯はしたのである

▲平庭　之れは今尙ほ京都に殘つてゐるが則ち一種の習慣から割出したものであつて、前者に比すると風致もなく、規模も小さく、又其造作も粗末である、庭園として賞するの値はない例へば蓬萊山とか、虎の子渡とか云ふて石を置き、小さい樹を植ゑ添へたものが多い。元來此平庭な

るものは永久的仕組のものではなく、其時の流行に依て造られた樣に思はれる、京都の紫宸殿の前にある

▲南庭　などは唯た左右に櫻と橘を植ゑた斗りで他は總體白沙である、又清凉殿の前の

▲御庭　の如きも呉竹臺、川竹臺と云ふて竹が二ツ植ゑてあるのみで、他は同しく白沙である、此等は庭と稱するよりは廷と云ふた方か實際に當て嵌まつて居る、又公卿方大名などが

▲書院　と稱するものもあるが、其前は矢張白沙で別に形などを造つたものでない樣に思はれる。斯る沒趣味のものが何んの爲めに造られたかと云ふに高貴の人が來られたとか又は何か儀式のある時に其分限に應して一種の裝飾をして平生は元の白沙として置くのか本來の趣意であッた樣に思はれる

▲茶の湯の庭　之れは一種の庭で、茶の湯の配合に適せしむると、茶湯に關しての興味を添へる爲めに造り出したので即ち茶の湯座敷が出來れば其周圍を裝飾する庭もなければはならぬ、と云ふ所から來たのである、茶の湯の起つた時代は最も禪宗の盛んな時代であつて、其配合や裝飾などに關して餘程禪味を加へたものであッて所謂配合や裝飾上に關して必要な所を取り用ゐたものである要するに詩歌や佛話の如き無形のものを取り來りて有形に現したのは「リヤリズム」に當り、實物を縮めて造り出したのは「マテリヤズム」に當り茶の湯の庭の如き物の配合から出來たのは「アイデイヤリズム」に當つて居る樣に思はれる大躰庭の種類を云へば以上のものであるが、其造り方に就いては「ハアモ子ー」（調和）と「ヴエラィエテイー」（雜駁）を得なければはならない即ち「ハーモ子ー」を得てそうして「ヴエラィエテイー」を得る美術の本旨である樣に思ふ

であるから凡て庭を造るには一種の天才と、經驗と、學識とを得なければはならない、從來我國の宿弊としては總てのことに天才と實驗丈けは重するけれとも學識か伴はぬ所より庭の造方に於ても餘程缺けて居るやうであるから將來は是非學識を造庭上の一要素とせなければならぬ

▲地勢と庭園　今京都あたりに殘れる庭園の種類を云ふと大概以上三種中に含まれて居るが、他の地方の庭園と云ふてもつまり此等に倣ふて造つたものであるから、ほゞ相均しきものである。然しながら唯其土地自らの天然的地勢に關して多少の相異る所あるは免れぬものである例令は京都あたりの庭園に餘り築山を用ゐないのは庭の周圍に山かあつて夫れを取り組むことが出來るから築山を用ゐない之に反して東京は四面山を取組むことが出來ぬから隨つて山水の景を造るには是非築山を用ゐると云ふやうな譯で地勢と庭園とは相待つて造り出されたものである。

▲時勢と庭園　古來の學者は繪畵や文章などに依つて其當時の人情風俗を窺ふことが出來ると云ふて居る、庭園も亦た其如くである、其事例は足利時代に出來た庭には禪味を含んでゐるとか、又二條の御城の庭には陣勢を形ち造られてあるとか、又庭造傳中に書院の庭には築山を造るべからず垣も人の丈より高きものを造るときは下部を透すへし刺客の伏匿なき爲めの用意なりとあるか如き。其外同じ庭造傳中に五礀三惡とか三吉二祥とか云ふことも書いてある此等は素より足利時代に起つたものではなく、何れ利久以後に起つたものらしく、兎に角に庭園に依て其當

時の人の思想風習等の一端は確かに窺はれるてゐる

▲庭園の由來　現今に於ける我國の庭園は洵に日本固有のものであつて他に其類を見ないが其始めは支那朝鮮若くは印度等の庭園を摸倣したものであろうか、爾來時を經、世を累れて種々變化したものであろうか、又日本は日本丈けで其必要に應して出來たものであろうかは餘程調べて見なければ判らぬ、が既に足利以來の庭園は日本特有とも云ふべき形をなして居るから日本特有のものとして差支ない、此の庭園が到る所に大廈高樓に添はれてあるのは、元來日本は天然的の山水の美に富み随つて美術思想も發揮せられたる結果到る處に庭園が造られて、山なき所に山を見河なき所に河を見ると云ふやうになつたであろう、然し其直接の原因は第一交通の不便に歸さなければならぬ、即ち最も古き人の別莊などが如何なる所にあつたかと云ふに、多くは



小石川植

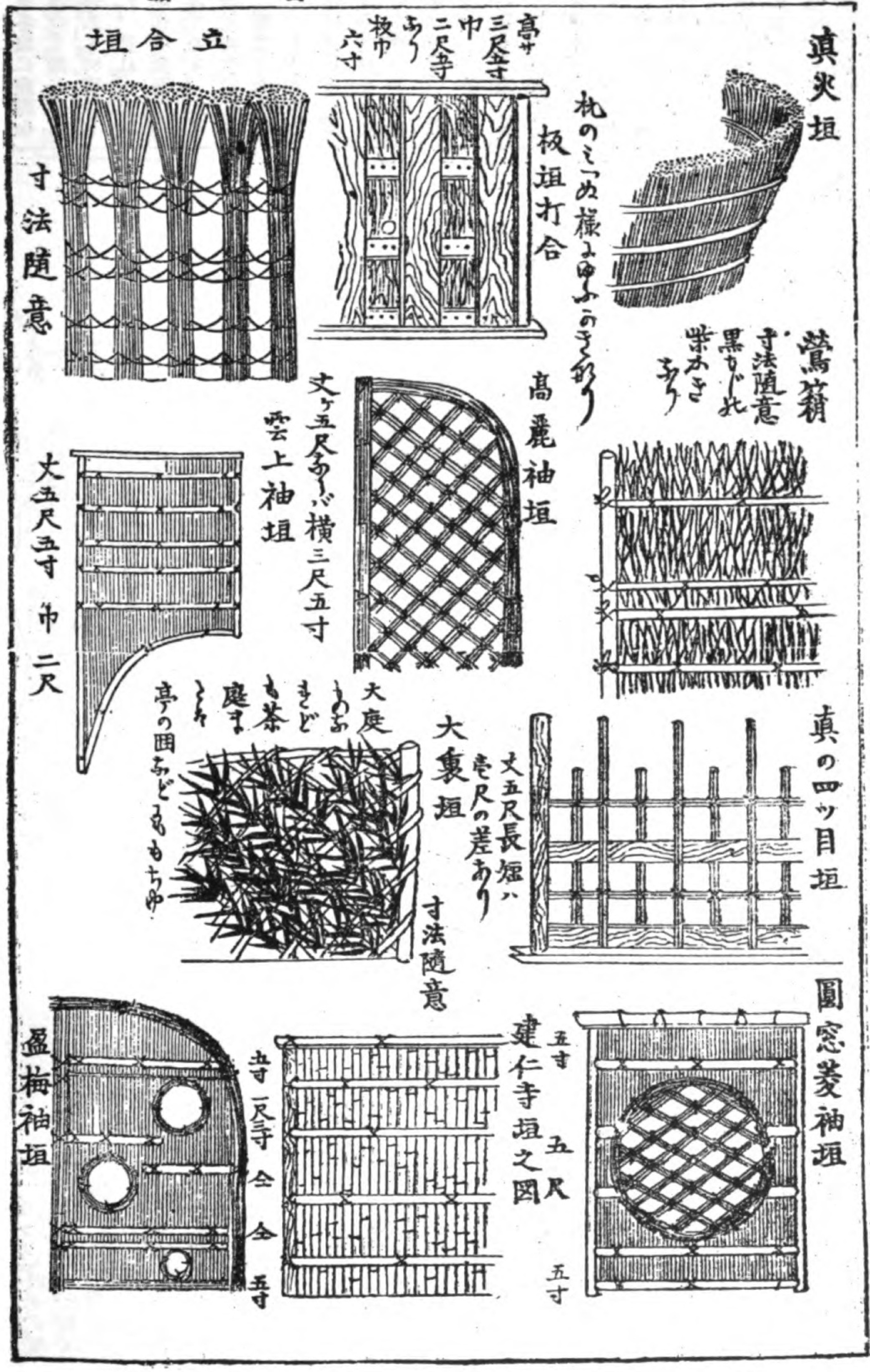
是れ天然幽靜なる山水の滞りに大廈を造り、其山水を見て樂んだもので、市井の邸宅に庭園を造つて心情を慰むるに至つたのは夫れより以後のとと思ふ、何うしても舟車の不便なるのみならず、一時內亂の爲めに群雄割據の時世となつて敵國の間を通らなければ天然の美景に接觸して其風光を樂しむことが出來ぬといふ情から追

を各種に庭園を造つて樂しむと云ふ事が流行した、是れが足利時代の庭園の變遷である、元來徳川時代の政略は封建政治を布くことの出來ぬ事情の爲め、諸國の大名を鎮定する考から半ケ年は江戸に置き、半ケ年は國に置くと云ふ様にして所謂参勤交代をせしめたので諸侯が江戸に居る間は容易に野外に樂しむことが出來ない所から已むなく庭園を造り樂しむことが始つた其れで其の造り方や裝飾方なども漸次に發達して來たのである



物園の庭

▲庭園の將來● 今後の庭園はどうなるであろうか、世の發達と共に日本の如き面積の少ない所では市井に於ける邸宅などには庭園を據へると云ふことなど極めて不經濟である、其有金な、僅かも高價なる土地内を玩具に供するは事實上容さない様になつて來る、詳言すると個人的市井中の庭園は世の發達上已むなく廢される時代が來やうと思ふ好し稀には別邸か何かで庭を造るとかあつたにした所が家屋の構造が從來のものとは全く違つて、タトエバ歐米の風を眞ふにもせよ、又日本の風を殘すにせよ、將來は益々建物が高く大になるから、之れに釣り合はなければならぬ様になる、所で歐米の風を其の儘に移すか又は從來のと折衷するか、或しは別に新案を出すか、何うにかせねばならぬ、私の考へを云ふて見ると從來は西湖の景とか松島の景と云ふものゝ全景を縮めて造り出した



眞炎垣
枕のこつぬ様ニ中ふのまき有り
板垣打合
高サ三尺五寸
巾二尺五寸あり
板巾六寸
立合垣
寸法随意
鶯籬
寸法随意
黒もじ又ハ柴かきあり
高麗袖垣
丈ケ五尺あらバ横三尺五寸
雲上袖垣
丈五尺五寸　巾　二尺
大庭もあるまど茶庭まこそ亭の囲などももちゆ
大裏垣
丈五尺長短ハ壱尺の差あり
寸法随意
眞の四ツ目垣
盃梅袖垣
五寸　一尺五寸　仝　仝　五寸
建仁寺垣之図
五寸　五尺　五寸
圓窓菱袖垣

所が、並も高き大きな建物に適ふことが出來ぬ、今後は寧ろ純然のもの假令ば日光ならば裏見の瀧とか近江八景の中ならば石山の景とか、若くは理想景にした所が其局部を高く大きく現すと云ふことが必要になつて來ると思ふ、其時代になつては是非必要なるは配合のことである、此ことは從來の庭園には大に缺けてる様に思ふ、勿論庭園は主として綠色を取らなければならぬ、同じ綠色にした所が幾種もあるから其等の標準は光線學に待たればならないこれを四季の變革に適應せしめなければならない又花や紅葉の如きものも其配合を能くせればならぬ樹木の培養に化學の應用も必要である、又衛生學なり美學なりの應用も必要である彼の「コンドル」氏などはこういふてゐる、

日本の繪畫は寫生が少くして天然に遠く歐米の繪畫は寫生から出たのであるから天然に近いが庭は丁度其れに反對で歐米の庭園は「ヂヨメトリヤル」であるが、日本の庭園は頗る天然に近くなつて居る歐米でも漸次に天然に近い方を好む様になりつゝあるから何れ庭も模造も一變する時代は遠き未來である

夫れから參考までに云ふて置くが此間には日本の庭園は西洋の庭園に比すると優つて居るとか、又日本の庭は藝術的であるから面白くないとか云ふのもあるが、元來の割り出しが違ふてゐる。即ち西洋の庭と日本の庭とは其性質に於て種々違つた點がある、其違つたものを比較して優劣を定めることは仲々難いことである、西洋のは「パーク」であつて日本のゝは、「ガーデン」である、西洋にも「ガーデン」はないとはないが比較せらるゝものは何時でも「パーク」であるから爰には「パーク」のみを言ふのである。

言ふまでもなく公園と個人の庭園とは性質上から違つて居る、彼の地坪に就いても甚しく差がある、從來日本の庭は公園でなく私庭であるから西洋の公園に比して規模が小いのは當然である、規模が小くなると其設計が巧妙になるのは自然の數である、是れ獨り公園のみではなく、總ての技術上のことも皆そうである、然らば西洋の庭は優つて居るとか、日本の庭は劣つて居るとかは容易に斷ずることは出來ない。唯日本の庭は其家に適合すれば差支ないのである、

何れにしても從來の我國の庭園は將來家屋に對して不適當であるから、歡迎されなくなる、隨つて現に存する有名の庭も遂に潰されて仕まう様になつて來る、甚た惜むべきことであるが、我國の實遂上そうせなければならないのである、そうなると現在の庭ゝは漸次なくなるのみならず其形跡までもなくなる様になるから、折角是れまで進歩した日本美術の一たる固有の庭園に對して、洵に惜しいことであるから、せめては其圖形なりとも殘して置きたいと思ふ、それに寫眞、繪圖、圖式等を添へて保存したならば將來日本庭園の沿革を研鑚査覈するにも甚た有益のことゝ思ふ。

婦人と意匠

意匠會の一員

婦人教育の上に最も必要と思はれるのは意匠である。此點は從來本邦の教育の仕方や美方から見ると餘り重きを置いて居ないやうに思はれるが

今月以後の教育法としては餘程此點に重きを置いて貰はねばならぬ
意匠といふ事は原來ある婦人の性質として、餘程發達した考を持つて居るもので、教へず習はずして相應に意匠上人を驚かすべき程の才能を有して居る然るに女などに意匠の必要はない何もわざ／＼教へなくともよいと思ふ人があるかも知らんが、然し女の行ふべき事の多くは意匠を要する物であつて、意匠を放れては女の任務は零になる、故に余は常に意匠の無い婦人は、色も香も無い野の草花に等しい殺風景の物であると斷言して居る。今何故に婦人に意匠の必要があるかを少し話して見やう。先づ第一に數ふべきは衣食住の三つである、

△衣服

人の身に纏ふ處の衣服は、單に、寒暑を凌ぐ許りの目的の物では無い、着心の好いといふ事は、寒暑の氣候に能く適して居つて、風俗はりが能くて、又美しくなければならぬ。美しいといふ事の上にも種々意匠を要すべき問題が起つて來る、之も普に流行不流行の伴つて起つて來る原因である。
衣服の美しいといふのは、單に紅だから美しい青だから美しいといふのでは無い、似合つて美しいといふ事にならねばならぬ。假令ば縮緬は美しい、之れに黄や紫よりも、黒繻子を腹合せにして帯にすれば配合が好くて一層美しい、之れを十五六の可愛らしい色白な娘に締めさせると更に美しい、其娘の着物も其帯に適せし物、帯揚げも帯や着物の色と衝突し無いものにしなければならぬ。又折角縮緬と黒繻子の帯は出來上つても、之れを締める人との配合則ち年齢が不釣合では何の役にも立たぬ。腰の曲つた婆さんが、縮緬に黒繻子の腹合帯をしめるといふのはをかしからう
帶一本拵ねるにも、其色の配合、年配の老幼、季節の寒暑着衣に對する配色と種々の點から觀察しなければ折角金を掛けても眞に其目的を達し得る事が出來ない。況んや一家の婦人となれば、家内中の人々の着衣の向不向にも注意し無ければならぬから容易では無い。過日余は洋學界の大家と稱せらるゝ某氏と語れる際、織物の衣類に關しての話があつた、夫れはかうである、身幹のスラリとした人には横縞も好いものであるが反對に身幹が低く横に肥つた人となると全然横縞は排斥するがよいとの事であつた。又某富豪の夫人が他の富豪の細君ヽ令嬢達と園遊會的の會合をした場合に、自分は黒紋附といふ對立で、其周圍に友禪づくめで華麗に粧飾した侍女を大勢連れて出て、一座をして顏色なからしめたといふ話もある。之れは誰れも知つて居る事であるが色の白い人と黑い人では衣服の色の選擇を異にせんければならぬ、男は何處までも雄々しく、女は何處までも奥床しく、子供は何處迄も可愛らしくといふやうにせねばならぬ。
又洋裝の似合ふ人と和裝の似合ふ人とある、洋裝には洋裝に就いての注意が入る、其似合不似合を判斷する力が則ち意匠である。
色の配合は好くとも年配に合はぬと困るし、夫れが爲め氣品を崩すやうな事があつては猶は大切である。原來藝奴とか俳優とかいふ連中は常に衣裳に關して苦心して居る丈けに、色の配合などは餘程上手である、爲めに今日の流行は重に標準を彼等に取る、彼等が流行界の中心であると

言はれて居るが、朝餉三食といふ風になると甚だ簡易なものである。兎に角支那の事は際限も無いから切上げて我家に就いて一言するとしやう。

△飲　　食

飲食に意匠といふと何だか妹が違いやうにも聞ゆるが、決してさうでは無い。飲食は甘くして食はせろ飲せろといふのが原則である、此意は飲食物に味を付けろ事とは違つて、既に出來上つた飲食物に、夫れ以上の價格を附するといふ事である。如何したならば夫れが出來るかといふと兎に角飲食者に唯快感を惹起させるといふ丈けでよい。

飲食に對する快感といふ事にも區別すれば種々雜多な事がある、先づ例を擧げれば

（一）　景色で飲食させる事

（二）　器物で飲食させる事

（三）　座敷で飲食させる事

右三個の要件の如きは著しいものであると思はれる。景色で飲食させるといふのは、同じ飲食物でも、山中の幽雅なる場所や、海邊の快濶なる眺望に對して飲食すると、同じ酒でも、同じ魚でも、紅塵萬丈の間、喧鬧たる室内に在つて飲食するのとは餘程の相違がある。又器物で飲食させるといふのも大切な事で、卓上は成丈け必要以外の器物を並べぬやうにする事と、並べる程の器物は皆清潔で、配置も一方へ偏せぬ樣注意せねばならぬ、若し一つの器物に不潔物が誤つて付いて居る樣な事でもあると折角の御馳走も散々になる。食卓以外も其通りで成丈け器物は見て心地の好い物を、順序よく配列せねばならぬ。

座敷で飲食させるといふ事も其通りで、さつぱりと塵一つ無く綺麗になつて居る座敷で飲食する事は、飲食者に取つて一番心持ちが好い、暗い處よりも明るい處、狹い處よりも廣い處、空氣の流通の良い處、庭園に面した處といふ風に、座敷を撰ばねばならぬ。然るに本邦の風習は之れに反して居る樣に思はれる、即ち食堂ともいふべき處は最も臺所に接近した最も窮屈な最も汚い部屋を使用する樣に思はれる。歐米諸國では此點は餘程發達して居る、先づ早速に改良して貰はねばならぬ。

此外食堂の粧飾として草木の花などを活けた花瓶を据ゑる、庭へは打水をする燈籠に灯を入れるといふやうな事も必要である。又座敷中食卓の置場所も撰ぶべきであつて、飲食者が成丈け居心のよいやうにすべきである。

要するに味感の獨立といふものは到底行はるゝものでは無い、見たり聞いたり嗅いだりする事が味感を助けもするし又害しもする。

次に器物の色の配合、之れは食卓の色を標準にして撰ぶがよい、飲食物の配色、器物と飲食物の配色等も注意すべき重なるものとしてある、例へば鮪（マグロ）の刺身と鯛の刺身とは少々を違はせる、皿の色も鮪には白色を用ゐ、鯛には青色を用ゆると言つたやうな事である、可及的色の變化を多くすると、御馳走が非常に目立つて食卓が賑はしく見ゆるものである。

△住　居

住居に關しては前二者よりも注文は澤山あるが、之れも其一部分丈けを述べて置く。先づ住居には清潔といふ事が何處までも基礎になつて居く、清潔になつた上は室内の裝飾といふ事になる。裝飾といふと殊更に何か飾付けるやうに思はるゝかも知らぬが、別段其樣意味では無い、家財道具の備付けといふ事をいふので、配列配置が巧ければ裝飾の一つとなり、夫れが悪かつた日には座敷中如何に立派な道具や器物を並べたにした處で、宛然古道具の店と擇ぶ處は無いに反して、少しでも意匠のあるものが配列したとなると、道具は少く左程價値のあるものは無いにしても、座敷がキチンとして氣品が高く、其座敷に入ると自ら自分の氣位も高くなるやうな心持がするものだ。

第一其家の細君の技量如何は大概其玄關扨ては又入口の體裁を一見してハヽアと合點されるものである。下駄といふ下駄が殘らず投り出してある、中には歯が抜けたり緒が切れたりして既に其用を爲さぬのも其儘になつて居る、對を失つてしまつて居るのもある、逆になつて踏付けられて居るのもある、何れもどれも皆汚れて居る、紙屑とマッチの殻と、下駄の歯で持込んで來た土塊などがゴロゴロして居て、甚しいのは芋の皮や果物の實などが散ばつて居やうといふのだ、之れが必ずしも貧家の入口には限らぬ、隨分中流以上の家庭に見る事が少くは無い、座敷の中は更に甚しい、押入れや戸棚の中と來たら御話にもならぬ、

以上のやうなのは極端の例であるが、主人の居間の掃除迄も人委にせずして顧みない細君に十中七八は居る、床の花が枯れても棄てさするでも無ければ敷物に塵が積つても拂はせるでもない、勿論新なる意匠を以て主人の居間の裝飾を變じて見やうなどゝは思ひも付かぬ、朝の客に出したコーヒー茶碗が夜まで居殘をする。單調な無味な家庭に我慢が仕切れなくなつて、自然主人は外出勝になる、外出すると歸るのが厭ひになる、家庭の平和が破れると言つたやうな結果を見る事は往々ある。

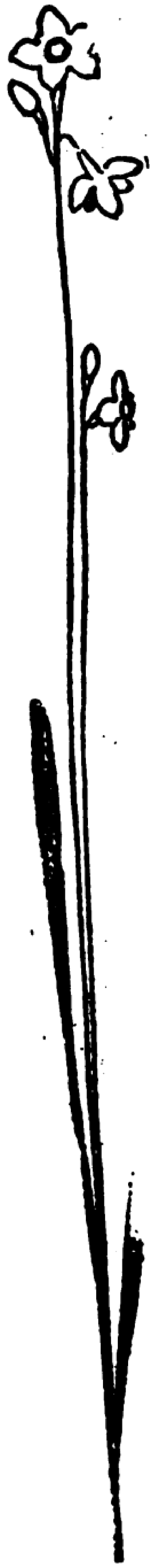
主人は外に在つて一日働いて歸つて來る、一日の仕事に頭は疲れ氣は倦んで仕舞つて歸つて來る、歸つて安息すべき家庭の内が樂しく無い、樂しくなければ自然他に慰籍を求めるといふ事は或點までは恕すべき事であらうと思ふ。家庭の王たる細君は最も深く此點に注意せんければならぬ、唯だ夫のみを怨み、身の不幸を訴へるといふ事は甚だ間違つた考と言はねばならぬのである。

今余が理想的に細君の仕事を如何にして貰つたならばよいかといふ事を描いて見やう。

先づ主人公が務から歸つて來る、門前は早や清潔に掃除が出來て居て、埃も立たぬやうに打水もしてある、玄關を見ると細君は小綺麗にして髮の毛も亂さず、さも嬉し氣に夫の歸りを迎へて居る、靴脱にも塵一つ無い、橡板を踏むと能く拭込んであつて滑りさうになつて居る居間へ入ると、不斷着が揃えてあつて、細君が着換を手傳つて呉れる、夫れから風呂場へ行くと、チャンと湯の加減がしてあつて入浴が濟む、化粧室で髮を整理して居る間に座敷へは何時準備したか知らぬやうに食卓が用意される、細君が一週間は毎日必ず異つた食物を夫に進める事が出來ると自慢の獻立が並ぶ、主人は先づ今日は何品を如何に調理したかを見るのが毎日の樂みだと言つて居る。酒から茶、扨ては茶器までも、一々下婢を呼

立てずとも用が足りるやうに手配してある、室の煖爐には火が入つて、盆栽の鉢は緑色濃しく縁先に二つ三つ並べてある。美しく食事が終ると主人公は書齋に入る、書齋は又今朝散らして出た跡が美事に片付いて、インキを付けたまゝ投出して置いたペンも掃除がしてあり、引出して机へ置放した筆も、書架の書物順に揃つて居る、洋燈は何時も買立てのやうに美しく、机は又拭込んで光つて居る床の花も變つて居ると、今朝用ゐ盡した本入れの木も入つてある、喫煙用の灰皿も綺麗になつて居る、唐木細工の煙草盆には櫻炭が一つ真赤になつて埋けてある、主人公は煙草を一吹しながら机の上に在る來状、或ては其日配つて來た雑誌などを見て居る處へ細君がコーヒーを立て果物皿と共に運んで來て、家庭に於ける其日の出來事を報告する、總て程を計つて退く、主公は書見とか又は手紙の返書でも認める、時間が來ると會するので寢床に入る、夜具も枕も香水の美しい薫がして、皺一つ付いては居らぬ、夜が明け放れる、手水を遣ひに行くと早や手桶には溺々と水が汲込んであつて、不斷齒磨、楊枝も揃つて居る、食堂は顔が寫るやうになつて居る、手拭掛けの手拭は新しいものゝやうに洗濯して掛けてある、顔を洗つて座敷に入ると其日の新聞と、牛乳と、茶器とが主人を待つて居る、朝の食事が濟む、着換ねする部屋に入ると、何一つ不足なく外出の用意がされて居るといふ風にするのが普通であるが、其間に細君の働きの見ゑるやうにする。則ち意匠の用ゐ場處があるので、順序は前の通り無事にスラ〳〵行くとしても、唯スラ〳〵では平板で細君の働きは少しも見ゑぬ。夫れを見せるやうにするのが意匠だ、家が狹いから、人手が少いから、子供があるから、金に不自由して居るからなどゝの理由の下に到底前記のやうな事は出來ぬといふ細君があるかも知れぬ、しかし分に應じて三を四にするか二にするかの相違はあらうが全然出來ぬといふ事は無いと思ふ。容貌を頼み、實家の資力を頼み、紅粉を頼み、夫に盡すべき義務を忘るるやうな賢婦は言ふに足らぬ、苟も貞女といはるゝ心掛けのある婦人は餘程此點に注意して貰ひたい、家庭の幸福は必ず享有する事が出來るに相違ない。

去れば女の子を持つた人々は、幼少の頃から可及的意匠といふ事に重きを置いて、油斷無く教育する事にするが一番大切である。余は終に重ねて斷定して曰く婦人教育の目的は意匠を涵養するに在りと。



實務

新婦と家事

棚橋絢子刀自談

社會進歩して人間の務むべき事漸次複雜するに至れば女子の職務も次第に繁多となりてまた從來の如き閑散を許さゞるに至るべし。而かも多年の習慣は一朝にして變すべからず、彼の學校出の女學生が机上の學問に長じて實際の家務に疎きは今日の弊なり。この弊を一掃せんと欲せば成べく實務上の良習慣を造るの方針を以て誘導せざるべからず、右に付頃日女學界の先覺棚橋絢子刀自を訪ふて女子の實務に關する意見を徴せり。左の記事は即ち女史が談話の要とす但しこの内には專ら年若き婦人が新たに家の主婦となりたる時の注意に就てを述べられたるものあり、これ一に新婦の處世法ともいふべきか文の責は記者にあり。

女子が人の家に入て嫁となりますと、其處世上にも生活上にも一大變化を來たすのであります、實に此際は重き天職が初めて其の新らしい双肩に下る時でありますから、よく／＼注意せなければなりません、試に處女時代の生活と婚后の生活とを比較して見ますと、處女時代即ち兩親の膝下に在る間は、タトへ女子の務として家事の手助をした所が、それはほんの一部分丈の仕事ですけれども、一度親の家を出で丶他家の人となつた時は、俄に家事一切の重荷が其の弱腕に落ちて來た時であるから、一々それを處辨しなければならぬ。即ちこれまで知らない苦心と勞力とを要する場合となつたのです、勿論學校の教課で學んだ所や親から見習つた所は、役に立つには相違ない、けれと扨て愈々實地に當つて見ますと、それが殆んどまゝ事を行つて居たかの樣に思はれて來るのです、良人が出入の世話は言ふまでもなく、朝夕の拭掃除、炊飲の事、應接の事、經濟上の事、下つて下女の使ひ方、其の外いろ／＼の事務が蝟集て來て我が一身を取圍遶むのですら大抵の世話ではありません、之を巧みに取捌いてゆ

ぐは實に困難の上の困難です、故に事に馴れない間は、何から手を着けてよいかとマゴ〳〵して、躰も心も落付かぬまでに忙殺さるゝのは皆様の御經驗にもありませう、斯くて漸く一方を完全に成し終へ、是で先づ安心と思ふてゐると、片方では大きな缺點が出來て參つていくら氣を着ける樣にしても、何處かに手落が出來るものです、丁度初心の演說者が聽衆の前に出た時と同じ事で眼も何も見えなくなり、顏は赤くなり、口は乾くといふ按排で夢暗に水許飲で居るといふ樣な始末、事の要領丈を辛との思ひで演述するのが頂上でせう、まづそれと同じ事で、然るに熟練した者になると悠然と起つて演壇に登り、ヅツト聽衆を見渡して置いて、今日は那ういふ種類の人が多く來て居るとか、婦人の出席も相應にあるから、婦人の益になる事も多少言はねばなるまいかといふやうに、其場の狀況に據て話振を斟酌する餘裕も出來、滔々數千言、辯じ續け、且つ多大の感化を聽衆に與へる事が出來るやうになります、畢竟是は事に馴るゝと馴れざるとの致す所で、一家の事も亦た此通であります、當初は小心翼々として過失しまいと念じながらも、尙は幾多の不手際があるのであります、思ふに此間は自分が事を處するではなくて自分が事に支配さるゝ時期です、けれども段々經驗を積んで家事に馴て來ますと、仕事の手順は着手する以前に旣に胸中に疊まれて居りますから、無駄な手數や餘計な時間を費さずしても濟む、又萬事に行屆いて來る、下婢の如きも自然と命に從つて働くやうにもなります、もう斯うなると自然心に餘裕といふものが出來て來るから、何の樣な事に出逢つても慌てず騷がず、落付いて處理し得らるゝので、家內の事に幾分か心を勞せずして濟むやうになるのであります、故に今迄は奥樣の候補生で在た者も、此域に達すれば、已に其の練習時期を經過して、一人前の奥樣に合格したものと言つて宜しいのです。

▲手近な例を來客の待遇に取て言て見ますと、客來の度に狼狽したり應接の言葉も旨くは言へなかつたり。茶菓子を出すにも下女をまごつかせたりするやうな事

は若奥樣に有勝の事であります、之を初々しいと言へば誠に可愛らしいけれども、何時まで初々しくして居らるゝものではありません、一日も早く一家の事に精通して、主婦たる資格に達することを努めなければなりません、併し家事に馴れて來て是等の事も漸く手に入る樣になると、不時に客が來てもまごつく事なく、作法通りに應接して、談話を面白く仕掛け、一寸次の間へ引込んで、コレコレを出してお呉と下女に吩咐置いて、直ちに座敷に取つて返へし、以前の話を續け、客をして滿足せしむるのでありますが、こゝの呼吸が馴れない内は一寸六ケ敷いのであります。

▲私の心易い或る婦人は客待に長けてゐられた人でしたが、訪問する毎に別に下女を買物に出した樣子もなきに、兼て用意がしてあると見えて、一ツ二ツ話をすると直ぐに茶菓が客間に運ばるゝのです。で、或日の事私が其の譯を尋ねました所、是といふ譯もないが、唯だ私共では宅で拵へた團物でも、又た他から御貰ひ申した物でも、決して其の時に皆な喰べて了はないで、其内幾干かを客來の折の用意として殘して置きます、と言はれました、が成程斯う致せば客を見て狼狽する樣な事がないから、至極宜しい方法であると思ひます、それから座敷のしつらひ方に由て、客の居心が善くも惡くもなるもので、掛物はじめ置物なり、額なり、時に不似合な事をしては甚だ面白くない、ですから、此邊の注意も亦た肝要であります、餘りの亂雜、あまりの不潔には客をして落着かざらしむるが如きは、一家を治むるものゝ恥づべきことであらうと思ひます。

▲訪客のある時は、假令へは己れ今裁縫に多忙を極めておつても、忘れたやうに其を打捨てゝ一心に客を款待しなければなりません、而して客と對話中は今迄仕掛て居た用事を念頭に思ひ浮べてはなりません、少許にでも心に蟠のある時は自づと色に顯はるゝものですから、客は早くも其の心を悟つて匆々に辭し去つて了ひます、斯れでは實に客に對して失禮な事でありますから、克く／＼注意しなければなりません、然れと

も至極仕事を忠勤して了つて談笑に耽るやうな事は慎まなければなりません、客ある内はさり氣なき風にてもてなすとも、客が去れば直に前の仕事を接續る丈の用意を念頭に置かなければなりません。

▲客に向ては寛潤にありたいものです、身上の事やら經濟上の事などコセ〳〵した事を口にするのは、誠にはしたなき業で、聞きづらくもありますから、慎まねばなりません。曾子が曾皙に事へた時に餘有りやと問はれて有りと答へた如く、客に對しても此の心掛を持し、客をして心を傷ましめざるやうにするのが肝腎であります。

▲家事經濟は婦人の天職であるが、其丈に又た婦人の心力を要する問題でありますから、常に研究を怠らずして、一家を繰廻す所の技倆も養はねばなりません、金錢の上にも物品の上にも時間の上にも保存の上にも利用の上にも、其他あらゆる方面に向つて細に利害損益を稽へなければなりません。或は小買が宜い事もあり、又は大買が善い事もあるが、ては畢竟其家の生活程度と人數の多少等に由て何れにも一利一害あります から、一家を經營する者は此の比較を研究してみるが宜いのです、世間の人は經濟に就て種々の説をなすといへとも、人の話を聞いた許では、實際の智識を得らるゝものでない、上等社會はいざ知らず、普通社會では何うしても自分で襷掛に成つて勝手に下りて實驗して見た上でなくては本統の智識ではありません、一寸した事にでも自分が手を下して見ると、釋然として心に會得がゆき、終には經濟上に確乎たる定見を得るやうになるのです、そこで一度此の定見を得ますと、是が生涯家庭の準繩となるのであります、實に家庭內の事は大小となく總て研究の好材料であるから、限から限まで手を卸し眼を透して見るが宜しい、かくして幾多の經驗を積み、些細の事も捨てずに一々之を自己の藥籠中に蓄へて行つたなら、後日の利益は非常のものでありませう。

▲此頃或る婦人が私の所へ來て申しますには、「女中は憎惡を掛て使へと兼て學校の先生より聽いて居りまし

たが、其は寧ろ容易い事です、されど下女を叱る法を教へて下さらなかつたから、誠に困る」と、言はれましたから私は之に答へて「それは御尤の御話である、學校の先生といへども多くは自分で實地家政を執らない人が隨分あるから、教科書以外に人を使ふ骨を教へられなかつたからでせう、人を使ふには恩威並び行はれなければ不可ませんが、さりとて別段煽るにも叱るにも及びません、唯だ自分が先に立つて働くやうにすれば、使はるゝ者は言はずして働き出すものです、我から動いて仕事の模範を示すやうにしたならば。己れが手足の樣に人は働くものです」と申しました、眞に人を使ふは人に使はるゝのですから、坐つて居ては人は使へるものでありません。

▲下女に足袋を洗濯させるにしても、洗濯法を知らぬ者は唯だ夢暗に石鹸を付て擦りさへすれば宜いと思ふてゐるからして、干上つて見ると鼠色で、所斑で落ちた所と落ちない所とが出來るけれども、之が氣に入らぬからと言つて叱つた所が仕方がありません、足袋を洗ふには指の所へ石鹸をつけ、踵をそてに折重ねて、靜かに磨擦すれば奇麗になるものですから、此通りを自分で仕て見せて、實地の手本を示したならば、下女も成程と會得して、其次からはそれに倣ふやうになるのですから、下女を働かせるには幾干か此方で敎育して遣る意氣込で使はなければなりません。

▲一家の嫁となるものは、先づ舅姑のあるのを覺悟しなければなりません、從て之に事ふる一通りの心掛がなくてはなりません、老人は我等の前時代に於て幾多の功績をのこし、其を我等後繼者が讓受けるのですから、出來得る丈尊敬しなければなりません、併し尊敬すると言つて遠ざけてはなりません、老人は兎角平生物寂しく感ずるものですから、若い者が成丈け賑しく樂しく面白く暮らさせる樣に仕向なければなりませぬ、當時の家庭を見ると、若い人達許寄集つて面白さうに話して居るに、次の間で老人が一人ポツネンとしてゐるやうな調子であるから、兎角姑が面白くない感を起すやうになります、這麽事から感情の不和は

次第々々に昂じて来るものですから、嫁となるものは常に温い同情を以て舅姑を遇しなくつてはなりません。

▲新に家庭を營むものは、其の新しい間に良習慣を作らなければなりません。此時もし夫婦が愛に馴るゝ餘り、禮を濫したなら、遂に一生回復すべからざる惡習慣を遺し、家庭を不健全のものにして了ひますから、新主婦と成つたものは、常に家庭の善美を期して、寢ても覺めても放心せず、油斷せずして事々物々に注意周到ならんことを望むのであります。

職業と結婚

田健次郎氏談

目下、遞信部分に於ては、女子を電話交換手は勿論、貯金調査掛、爲替貯金計算掛等にも採用しつゝあり、その成績、男子に比して優るとも劣ることなしといふ。されば更に進んで、郵便電信事務の一部分にも、女子を採用するの餘地あるべきを思ひ、頃日、遞信總務長官田健次郎氏を訪ひ、氏の意見を乞ふ。左は則ちその談話の一節なり但し文責は記者に在り。

歐米の女子が、男子に對して、殆んど同等の地位に立ち、且つ勢力を社會に有する所以は、一口にいへば財産の力であつて、學問、職業之れに次ぐのである、されば如何に才色兼備の佳人麗孃にせよ、若し不幸にして財産がないならば、一顧をなす者すらなき風習である、歐米人は常に戀愛を口にして、結婚は戀愛より成立つといふが、今日の實状は、全然黃金より成立つのである、黃金固より尊ぶべし、而も其極人倫の大道たる結婚の目的をして、單に財産獲得の一點に歸せしむるに至つては、轉た嘆息に堪へぬ次第である。

されば歐米は未婚婦人の多きも、亦巳むを得ざる事情である、又男子の既婚者は、貴女の交際社會に於て、甚だ無勢力なると、是れが晩婚の風習をなさしめた原因である、歐米に於て交際場裡に入る者は、先づ既婚と未婚との別を問はれる、答ふるに既婚を以てするならば、一二の特例を除くの外は、處女に紹介せらるゝことがない、之れに反して、未婚者であるならば、多く

の處女に紹介せられて、盛に持て囃さる丶のである、隨つて婚姻は交際塲裡の勢力を失墜する結果になるので、多くの風流才子、紈袴子弟は、貴女の社會に持て囃さる丶を唯一の光榮とし、結婚の爲めに此光榮を犠牲に供するに忍びないのであらう、併し之れは一小部分に過ぎぬのであつて、主たる原因は財産の有無如何に在るは明かな事實である、故に財産なき女子は、勢ひ職業を求めて、獨立自活の道を立てなければならぬ譯になる。

日本の女子にして、十七八歳の妙齢に達して、結婚せぬ者は、殆んと無い位で、勿論例外もあるが、概して二十歳を超ゆれば、モハヤ母と呼ばれて、子供の二人か三人もあらうといふのが普通である、偶々獨身者があれば、ソレは寡婦か何かであつて、先づ目下の處、未婚婦人は上下を通じて少いのである、然るに歐米へ行つて見ると、五六十歳の令孃は珍らしくないので、七八十歳の白髪だらけの婆さんが、ミス、なにがしでやつて居る、「貴君に何々令孃を紹介しませう」といふから、定めて花の如き美人に紹介さる丶事と歡んだら大間違ひ、齒の拔けた皺だらけの婆さんである、我が日本人の目には實に奇異の感がある、而して此等の未婚者の内には相當の學問あり、相當の職業に從事して居る者も少くないのであるが、而も終生配偶を得ずして畢るのである、要するに學問があつても、職業があつても、財産がなければ、相當の結婚をするとが出來ぬからである、之れを男子の方面から見れば、職業や學問の點に於ては、妻とするに足れりとするも、財産の點が缺けて居るのであるから、娶るとをしない、又女子の方面からいふと、既に學問があり、職業があつて、ソレ相應の見識があり地位があるのであるから、配偶者たる男を選ぶも、多少才能のある人物でなければ、百年の苦樂を共にするには足らぬ、然るにソーいふ人物と結婚せんとするには、憐むべし財産が釣り合はぬ、釣り合はぬは不縁の基、彼等は人物は釣り合つても、財産か釣り合はぬばかりに、良縁も結はれぬのである、之れは多少高等な婦人の事であるが、

普通の婦人に至つては、最初から結婚を斷念して居る有様である、人生れて女の身となる勿れ、百年の苦樂他人に依るなどいふ事は、歐米に於ては通せぬ言葉であつて、百年の苦樂、他人に依りたくも依られぬといふ仕誼である、獨立の女子多きも亦自然の數である。

かゝる狀態であるから、自づから女子の職業も發達して、種々の方面に女子の領分が擴まつて行く、就中米國は、最も女子の職業の多い處で、高等なる階級にまで進んで居る、之れに反して、女子の職業に乏しき國は獨逸である、凡そ文明國に在つて、獨逸の女子はと悲しむべき境遇にあるものはないであらう、先づ第一外觀上に於ても他國の如く女子を敬重しない、又特に怪むべきは、小賣の商店等に於て多く女子を使役するに拘はらず、猶且つ多く遊手の女子があつて、此等は概ね賤業を以て口を糊するのである、嘗て伯林最盛の大街フレドリツキ街を通行中、戯れに一友人に向つて、此群集の婦人中、三分の一位は醜業婦があらうと問ふたらば、其人の答は、否三分の一の正業婦を得ると雖かるべしとのことであつた、以て獨逸女子の境遇の一班がトせらるゝではないか、閑話休題、歐米を通じて、タイプライター、簿記方等には、女子を用ひぬ處はない位、獨逸も亦然りである、又郵便電信の一部分及び電話等にも、女子を使用して居る、但し獨逸は電話交換の一方で、他には用ひない、されば先づ遞信部分に在つては、電話交換丈けは、各國通じて女子の職業に歸して居るのである、只一ヶ所獨逸聯邦のババリヤ王國では、男子を使用して居る、それは舊式の單式交換器だから、立ちながら之れを取扱はなければならぬからである。

我邦に於ても、先年電話交換手として、女子を用ひて以來、追々に電報調査、爲替貯金計算掛等にも、女子を採用して、好結果を得て居る、尤も電話交換手は、初めは晝間のみであつて、夜間は男子を用ひたが、其後夜間をも女子に受け持たしむることになつた、併し之れを實施する迄には、大分議論が八釜しかつた、ソレ

は蒲柳き女子を、夜間まで勤務かしむるは、健康上宜しくない。又風儀上害があると言ふのであつたが、私は其説を容れなかつた、若し健康上に害ありとすれば、その就業時間の分配を健康に適する程度にさへすれば差支へない譯で、又風儀上も其取締さへ行き屆けば、更に憂ふるには及ばない、若し風儀を亂すものなら、晝間でも出來ないとは限らぬ、といつて斷然夜間にも女子を使用することにしたので、今日では電話交換は、全く女子の職業となつたのである。

次に私は、郵便電信の方にも、女子を採用する發議をしたが、此議は遂に成立たなかつた、之れは女子今日の生活狀態か許さぬのである。

先づ第一の障害は、結婚である。即ち我邦の女子にして、妙齡に達して結婚せぬものは殆んと無いのであるから、隨つて歐米の女子の如く獨立して其業に從事する者が少いこと、次には我邦の女子は、結婚後職業に從事する餘裕なきこと等か、重もなる原因である。歐洲では公務の爲めに女子の結婚を禁じてある國もある、亦た只に結婚しても生活が簡易であつて、我邦の如くに、一家を持ちたる上、裁縫の事より洗濯、さては掃除、煮炊き、味噌汁までも調理しなければならぬ生活狀態とは違つて、奏任官若しくは勅任官位の身分でも、家は概して部屋借りであつて、其上裁縫は仕立屋へ、洗濯は洗濯屋に頼んで仕舞つて、更に自分の手を煩はさぬ、食事の如きも、一家を擧げて料理屋に行くといふ風であるから、家事の煩累が無い、隨つて十分に職業に從事する餘裕がある、只一つ困るのは出産であるが、之れとても妊娠期の幾部分と、出産の前後に多少の時日を費すに過ぎぬのであつて、養育は乳母を雇ふなり他に預けるなりする風習であるから、大した差支へはないのである、然るに我邦の女子は、啻に出産時期のみならず、結婚すれば家事の煩累に追はれて碌々暇さへもない、子供もあれば猶更の事であるから、所詮他に出でゝ職業に從事するが如きは、思ひも寄らぬ話である。

斯く獨立の女子なきが上に、結婚後身に餘裕なき狀態

であるから、電話交換とか、電報調査とか、又は計算とかいふ、極めて簡單な、雜作もない職務は、その女子が何時結婚して缺員を生ずるも、容易に後任者を得ることが出來、其日から直ぐ役に立つのであるから差支へないが、電信の技術や、郵便の事務に至ると、多少複雜になるので、何人でも直ぐ役に立つといふ譯には行かぬ、少くとも六ヶ月間位は見習はせなければならぬ、其見習が濟んで更に實務に處して修練を積ませた女子が、忽ちにして結婚し、職を辭するといふ事では如何に官業でも之れに堪ゆることは出來ぬ、之れが抑も我邦の女子を、今日以上の業務に從事せしむることが出來ぬ原因である、之れは獨り遞信部面のみならず、他にも同じ事情の爲めに、女子を用ひぬ方面も多からうと思ふ、若し之れを强ゐて或國の如くに、結婚を禁ずることにでもするならば、社會は必ず其不法を鳴らすであらう。

一體女子を電話とか、又は簡單な調査に使用することは、女子先天の緻密なる性質上、好成績を得ることであつて、殊に電話の交換は優さしく且つ親切でなければならぬから、女子は最も適任であつて、世界通じて女子の職分になつて居るも偶然ではない、之れより以上の職務――電信の方面で見ると、ボードーとか、ビースとかいふ高等機械、或は自動機とか、波動機とかいふ、力を要するか又は面倒なる判斷を要する側には、歐米では總て男子を用ひて、女子には音響機とか、印字機とか、即ち音響機は音響に依つて判斷するので、聞き誤らぬが專一であるから、女子の緻密な性質には適當して居る、印字機は音響機よりも一層簡單で、單に符號を讀み分くるに過ぎぬのであるから、男子を用ひずとも女子で十分である、郵便の方では、電報、書留の受付とか、印紙賣下とか、矢張り簡單な方面に使用して居る、先づ郵便、電信事務に於ける歐米女子の職務の概況は、以上の如くである。

要するに我邦の女子は、終生未婚を以て畢るが如き事なく、又强ゐて職業を求めて特に獨立しなければならぬといふ境遇に居るのでないから、先づ女子今日の

境遇は、左まで不幸とはいへぬ、只女子の地位が低いのが大缺點である、この地位を高からしむるには、敎育は勿論必要であるが、又一つには、歐米の女子の如く財產を有せしむると、之れが先づ第一楷梯ではあるまいか、勿論爲めに歐米の如く、結婚の目的を財產の獲得に歸せしむる樣でも困るが、何しろ今日は金力は是れ權力の世の中であるから、相當の程度まで女子に財產を有せしむるヿも一策であらうと思ふ、今日では三井三菱のお孃さんでも、嫁に行つては嫁入衣物より外に財產はないのである、女子の地位低きも當然の事であつて、更に怪むに足らぬのである。

接客の方法に就て

玄關の取次は自身で爲すヿが第一善いと思へども、左樣に爲し難き場合も多いとゆゑ、然るときは世事に通曉した親切なるものをして此役を勤めさせ、應對には對等の言語を用ゐさせるやうにしたい、往々取次が出でゝ來訪人の何人たるをも顧みず、自分の主人の方を尊稱を用ひて尤も丁寧に來客に語るものがある、例へば殿樣は未だとか、若樣は御不在でとか、此頃は御旅行遊ばしましてとか、之れは誠に不都合な事で、若し來訪人が主人よりも身分の上の時には如何する積りか實に失禮の次第である、偶々來客と對談するに方つて客人の話頭が要領を得ない時は靜かに注意を加ふるが善からうと思ふ、時を重んずる現時に在りては決して不當の要求ではない、若し又食時に際して歸り去らぬ時は客をして去らしむるか、或は主人と同樣の食膳を薦むるか其時の場合に從ふべきである、しかし食膳を供するは成るべく來客の都合をよくし常方の親切をつくすといふ趣意には成べく從ふて爲すべきヿで、形式に無理に勸めるのは甚だよろしくない、又來客に對して主人から長談を試むるのは善くない、來客は遠慮して主人の談話を聞いて居る間に、こゝろならずも長座して食時になり家人に迷惑をかくるヿがまゝある、取り急ぐ用事あつて如何にしても面會の時間なきときは、主人自ら玄關に出て來客に對して辭禮を正しく懇懃に面會謝絶を申し出づるは誠に止むを得ない處置で、又友人の訪問に對しても此事は同樣に爲して差支ないだらう、是れは御互に恕すべき所である。（佐治實然氏）

史傳

立志美談 二宮尊徳翁（三）

報徳生

▲致富術の應用

翁が致富術を社會へ應用したその興國安民法は、宇津氏釆邑の荒廢を復興した一事を見て、其一斑が想像される。

而して翁が此の宇津釩之助の釆邑を復興したのは、其宗家小田原侯大久保忠眞のさせたことであるが、此の大久保忠眞と云ふのは此の頃幕府の老中を勤め、何ちらかと云へば賢明と謂ふべき人で、彼に取つては眞に知己であつたのである。是より先忠眞は、彼が嚮に服部家を改革した手際を聞いて、其用ゆるに足りることを知り、彼が致富術を弘く領内へ行はうとして、之を重用し樣としたが、不次の登用をしては或は人が心服しないこともありはすまいかと云ふ懸念から、先づ之を宇津の釆邑で手並を示させたのであつた。其次第は、宇津の釆邑野州櫻町即ち芳賀郡東沼村横田村物井村の三村は、土地が磽确で、人氣も惡るく、元祿頃四百五十戸あつたものが、文政には百四五十戸に成り、嚮に四千苞の收納があつたものが今は僅か八百苞を納めるに過ぎないと云ふ程に衰へ、爭論訴訟の斷間がなく、是迄之を復興する爲め、度々人を遣はし、幾千金と云ふ程の費用を投じたが、毫も其甲斐がなかつた處である。所を、彼に復興の功を擧げさせれば、十分に彼が技倆を世に示すに足りて、たとへ彼を重用しても優に人を心服させることが出來るからであつた。

して、大久保侯か彼を登用し樣としたのは、文政三年彼が卅四の時からの事で、侯は此歳彼に宇津氏釆邑の再興を命じた。然し彼は固辭して請けなんだ。彼は固

辭して請けなんだが、侯は猶聽さずに再三の命があつたので、其翌文政四年に實地撿分をして、彼は見込を申上げた。其見込は、之を復興するには仁政を以てするでなければ出來ないと云ふことゝ、之を復興しても二千石の地を得るに過ぎない、と云ふのは、土地か瘦せて居るから一段の名義で二段の地がなければ人民が立たないと云ふことゝ、荒蕪を開くに荒蕪の力を以てし、衰貧を救ふに衰貧の力を以てして、經營費は一金も支出するに及ばないと云ふことゝを以てするものであつた。

底で櫻町再興の事は一切彼に委任すると云ふことに成り、彼は文政五年藩へ召出されて五石二人扶持を給せられ、自分の田畑一町八反餘は之を賣却して、祖先の墳墓に訣れ、妻の承諾を得て、共に一子彌太郎を携へて、文政六年三月彼が年卅七の時に野州櫻町の陣屋へ引移つた。さうして彼は例の通り計畫を立て、豫算を定め、勤勉を以て事に當り、至誠を以て人を率ゐ、以て其の豫算の計畫を實行した。

▲廢地復興の計畫

而して其復興計畫は何うして立てた乎と云ふと、先づ精密に最近十年間の調査をして、東沼村横田村物井村三村で、本新田が都合四千百九石一斗二升八合、反別五百一町八畝廿歩、古家數が四百卌三軒、文化九年から文政四年までの十年平均收納米が九百六十二俵二斗五升五合八勺、金か百三十兩永五百二十六文三分八厘であることを知り、文化四年度の收納千五百俵二斗四升九合、金百廿七兩三分永百六十八文九分を新法施行中の納稅額にし、其以上の收益は別物にして所謂興國安民法施行の費用に充てることにし、自分の田畝を賣拂つた代金を其土臺金にして之に着手した。而して謂ふ所の興國安民法は專ら新田を起すのに在るが、彼か櫻町で施行した所は、彼が自分の田畝家財を賣拂つた代金を基金にし、一方は貧困者に租を免じたり、負債を償うたり、米、粟、家、農具、衣類などを給したりなどし、安じて業を勤めることか出來る樣にして、蓄

來の田畝を改良させると共に、一方には其餘力を以て及び處々から人夫を雇ひ集めて新田を開かせ、七八年の間は租税を免るして之を耕作させ、又新に來て土着するものに耕作させ、たとへば水田一段歩を起す時は、其處へ蒔いて採れた米の一石中半分は耕作の費用に充て半分は來年の開田料に充てる様にして、次第に開墾をしたのである。其方法の一端は物井村の農夫岸右衛門横田村の名主圓藏などの爲に計つた處置を見ても、大方は察せられる。

岸右衛門と云ふのは、もと小才もあり性質も剛氣なものであつたが、何分にも非常な吝嗇家で、七年の間彼が興國安民法に反對して始終に妨害を加へつゝあつたものである。さうして「是迄も度々村方再興の爲に來たものが澤山あるが所謂再興の出來た例しがない。見て居給へ、二宮の仕法も其內だめに成るから」と言つて居た。が、新法の實効が着々擧がつて來て愈成功に近づいたので、流石の岸右衛門も大層驚き、人を賴で彼の所へ詫入つて來た。底で彼は其舊惡をば問はずに、其請を許した所が、岸右衛門は是から彼の訓誨に感激し、毎日村へ出て彼の指揮に從ひ、土功の率先に成つて大層働いた。然し其平生が平生であるから、誰も岸右衛門の言を用ゐるものがなかつたのである。是に於て岸右衛門は大層憤悶したが、致方がない。すると、彼は誨へた。「今お前が前非を改めたと云つても諸人は其本心を知らないから其言を用ゐないのも無理はない。若し諸人に心服される様に成らうと思ふならば、金銀財寶を出して窮民の救助をし、又田畝までも殘らず賣つて之を出せ、私欲を去り私財を擲つて村民の爲にするのは大層善い事であるのである。さ



うでなくお前が是迄した様に自分の身勝手ばかりをして人は何う成つてもかまはないと云ふ時は、其は實に禽獸の仕方と云ふもので、耻づべきことである」と。訓誨を聞いて岸右衛門は深く感動はしたもの丶、其通りにすれば一家が廢するに至る乎と云ふことを心配して決しない。彼が「決して路頭に立たせる様なことは吾輩がしないから」と諭したので岸右衛門は始めて決心し、家へ歸つて父母妻子に其事を話した所が、何れも大層驚いて、或は泣くものなどもあつた。其れで岸右衛門は再び疑念が起つて、人を頼で之を彼に告げさせた。すると、彼は「其は家族が不承知を唱へるのではない、岸右衛門の一心が定まらないからじや」と歎息した。其人が歸つて之を岸右衛門に告げたので、岸右衛門は豁然と大悟して「成程是は自分の心の定まらなかつたのである」と曰つて、斷然畝田家財を賣拂つて、餘金を陣屋へ持つて來た。其から彼は岸右衛門に命じて新田の開墾をさせ、又役夫に命じて開墾をさせた田地をも與へ、「是からは此の田地を耕すが好い。此の田地はお前が以前の田よりは上田であるばかりでなく、以前のものは五公五民で、百苞の收穫があれば五十苞の租税が出るが、是は七八年立たない内は年貢は出ない。今お前は年貢の出る田地を賣つて貧民を救ひ、無税の田地を得て之を耕すのだから、一家の生産は以前に倍するであらう。」と曰つた。

又圓藏の方は、家屋が非常に破損したので、幾年も心ろ懸け、やつと材木を求めて之を造り直さうとしたが、二十兩の金が出來ないので之を造り直すことが出來ずして彼の所へ之を借りに來た。所が、彼は村内がひどく疲弊したのは名主の不行屆であるに、自分だけ借錢をして家を造り直さうとするのは、不心得であると云ふことを説諭し、今假に二十金を借りたものとして五年の間に返金（其實積金）をさせ、且利息をも出させた。さうして後全村の復興が出來てから、彼は圓藏に百餘金を出して三村第一の家を造つて之を與へ、且二戸の新らしい家を作つて其子弟二人を分家させた。

▲鷄鳴月夜の勤勉

此の通の遣口で、彼は所謂興國安民法を行つたのであるが、其之を行ふに如何に勤勉で、身を以て衆に先だつた乎は、毎日鷄鳴から初夜まで村内を巡廻し、一戸毎に臨で、人民の艱苦善惡勤惰等を察し、田畝の境界、土地の肥瘦、荒蕪の廣狹、水路の便否を見、何んな大風でも暴風でも大暑でも嚴寒でも一日も休まなかつたのみならず、綿衣の身を掩ふに足りるだけのものを着、食は一汁の外を食せず、行厨は冷飯へ水を濺いて味噌を嘗めて食し、毎日陣屋へ歸つて寢るのは二時間だけであつたと云ふことを見ても分る。其故三村内は一戸尺地も知つて居ない所はなく、勤勉を賞し、怠惰を戒め、貧窮を救ひ、用水を掘り、冷水を抜き、農を勸め、荒地を開き、何事も非常に神速なものであつた。



然し永い間衰憊して居た地方であるから、人氣が極めて惡るく成つて居て、我が仕法を妨害したことは決して小少でなかつた。が、彼は堅忍不屈の精神を以て之に當り、至誠を以て事を處した。功を永遠に收めることを知らず、目前の損益を爭ひ、人の成功を嫉むのは、凡情の免れ難い所であるのみならず、有名な人氣の惡い所であつたのであるから、村中の奸智佞惡の徒は、表面は彼が指揮に從ひながらも裡面では種々に之を妨げ、事毎に故障を申出し、或は密に愚民を煽動して其事を破壞し樣と致し、新田を起させ樣とすれば、「在來の地を耕すさへ手が廻り兼ねるから、何うして新田を耕すことが出來ませうぞ」と苦情を唱へ、越後加賀邊から移住して來るものに一家を與へ、田地農具衣食等

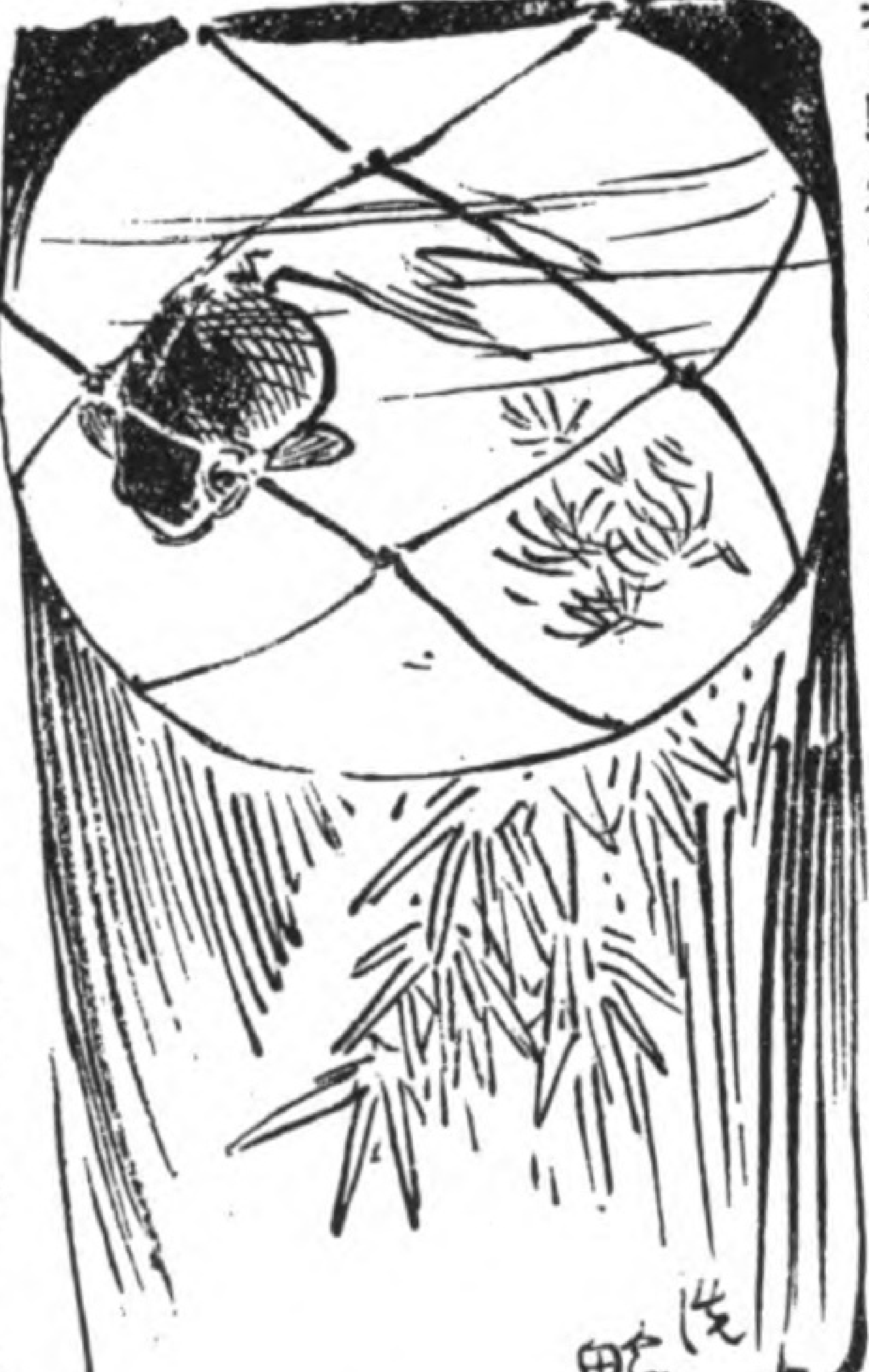
を與へて土着させれば、外から來たものじやと言つて之を侮り、種々の難題を持掛けて之を苦めなど致し、名主は人民の無賴を訴へ、人民は名主の身勝手を申立て、喧々擾々として、殆ど手の着け樣もないと云ふ有樣であつたのである。然るに彼は未明から之を諭して理非を辯じ、根本から道理を說て倦まず、竟に漸々紛爭聚訴のないだけにはした。紛爭聚訴のないだけにはしたが、まだ／＼妨害が息むと云ふ段には至らなくつて、却て小田原から出張した役人の爲に少なからず妨害された。中にも何某と云つて彼より上席であつたものなとは最も甚しく妨害をし、種々僻論を唱へて彼が計畫を阻まうとしたり、村へ出ては彼が命じたことを「吾輩が許さない」と謂つて停止したりなどした。彼が懇々と理非を說いたのも全く無効であるので、後には已むを得ず彼は妻に命じて早朝から美酒佳肴を供へて之を御馳走させ、終日盡きることがない樣にしたので、酒好きの何某は是から村へ出て妨害することをせず、毎日酒を飲で居た。が、數年後に始めて悔悟し、前非を改めて、打つて變つた善人に成つたと傳へてある。

中にも最も甚しい妨害であつたのは、彼が無賴の貧民へ救助をすれば、救助をする程惰けて、到底救助甲斐がない所から、枯木は肥料を施しても再び繁茂することは出來ないから、寧ろ之を時の來るまで棄て丶置き、別に新らしい木を樹へて森林を茂らせるのが植林法であることを考へ、十分に教導をしても猶心を改めないものには、姑息の恩惠を施さないで其亡びるに任せ、其上親族の實直なものなどに其家を繼がせて新なる繁昌を圖らせた時であつた。さうすれば積惡の報ひが旣に盡きて、其家が新に興隆するであらうと云ふ考であつたからである。所が、小田原から出張して居た二三の役人が、「亡び樣とする家を救はないのは、衰邑を復興する法ではなくつて、衰邑を滅ぼす法である」と曰つて騷ぎ出し、人民も之に和して、遂に竊に小田原侯へ訴へ出て、種々讒言を搆へた。庇で、小田原侯は彼を喚び出して聞いて見た所が、言ふまで

もなく讒言であつたので、却て讒者を罰し樣とした。所が、彼は『是は決して讒言と云ふものではない、彼等は私の計畫を知らない所から、君の爲め民の爲めに不利であらうと思つて申立てたまでゞ罪はないのである』と取成し、矢張り彼と共に野州へ行つて復興法を行ふことに成つた。

▲斷食、祈誓

此う云ふ工合に、彼は非常な勤勉と非常な熱誠とを以て事に當つたが、猶至誠の人を動かすことの至らない所があるのを見て、彼は文政十二年、年四十三の三月に總州成田山の不動尊へ祈誓を致し、自ら聖不動經の額を書いて之を奉納したことがある。是の時彼は竊に陣屋を出て、成田へ到り、廿一日の斷食をし、毎日數回の灌水をして、晝夜怠らずに祈誓したと云ふ。其時櫻町では彼が居ないので大層心配し、江戸へ往つたであらうか何處であらうと曰つて人を出し、漸く成田に居ると云ふことが知れて、迎に行つた、所が、丁度滿願の日であつたので、彼は始めて粥を食べて櫻町まで二十里の道は一日で歩いて歸つた。其熱誠と云ひ、其剛健と云ひ、聞く人をして何れも舌を卷かせ、是から内外の妨害が俄に止で、其事業が着々捗る樣に成つたと云ふことである。



之と同時に、彼が沒眼識の熱誠家ではなくつて、頗る思慮もあり、器識もあつたことは、彼が始めて櫻町へ往つた時、里正某が途まで歡迎したに拘らず、彼は普通の挨拶をしたゞけで別に其御馳走を受け樣などゝはしなかつたのを、或人が問ふたら『佞を先にするのは必ず奸人である。是迄君命を受けて此の地へ來たものが數人あつたが、何れも是等を第一の善人だと思つて、共に

事を謀つたから失敗したのである。自分は強て彼を退けると云ふではない、唯彼の術中に陷らず、善を善とし惡を惡とするだけじや。』と曰つたのを見ても分るし、彼が役夫を督することが名將の士卒を督する樣であつたことやら、巡廻した時一役夫の非常に働くものがあるので、同行の役人は必ず彼を賞するであらうと思つたが一言の賞詞もなく、却て其傍へ來て聲を勵まして大に叱し『お前は吾輩を欺かうと思つてさう云ふ働きをするのは甚だ不屆じや。吾輩が此處を立去つたなら屹度惰けるに相違ない。人力には限りがあるからさう働いて毎日續く筈はないのである。お前の樣な不直のものがあると衆人の怠る本に成る。』と曰つて、退居させ樣としたが名主が詫びて漸く許されたことやら、年六十ばかりの一役夫が人が休でも休まずに、毎日木の根ばかり掘て居るのを、何故退けないかと人々は怪で居たが、開墾が濟で、賃銀を渡す時、更に十五兩の賞與を與へ、『衆人は皆起し易い地を擇で、開田の多少を示さうとするのに、お前獨り人の嫌ふ木の根を掘つて休まず、其が爲め開墾が餘程捗ることが出來た。其功は決して衆人の比ではない。』と曰つて、其辭するのを強て賞賜したなどのことを見ても分る。將た彼が凶荒を豫知して之が準備をしたことを見ても分るのである。して、其凶荒を豫知したと云ふのは、天保四年に初夏の頃氣候が、不順で始終雨ばかり降つて居た所が、或時彼は茄子を食べて見て其季秋の茄子の樣な味がするのを見、凶荒の來るのを察して、戸毎に畑一段歩だけの租税を免して稗を蒔かせた。内々苦情を言ふものなどもあつたが、兎に角命令であるから已むを得ず蒔いた。すると、盛夏に成つても雨ばかり降つて、非常に冷氣を覺え、關東奧羽は果して凶作であつたが、三村の人民は稗を以て米の不足を補つたるに一人も飢餓に及んだものはなく、始めて彼の凶年を豫知したのに驚いたと云ふことである。其から其翌五年にも『近年に、飢饉が來るから今年以後三年の間、去年の通りに稗を作れ。』と云ふことを嚴しく令した。前年の豫言が的中した例もある所から、何れも謹で

命を奉じて稗を作り、三年で數千石を備へた。所が、同く七年に五月から八月まで雨が降つて、土用中も重ね着をする程で、有名な天保の饑饉が來り、關東奥羽は餓莩が途に滿つると云ふ有樣であつたのである。然るに豫て用意の三村は全く其憂を免れたばかりでなく、彼は村内の人民を無難のもの中難のもの極難のもの、三段に分け、老幼を問はず、毎人雜穀共五苞の割合に備へさせ、不足のものに之を與へて其數に充たせた所から、貧民は却て豐年よりも豐かで、皆望外の喜びをなした。が、彼は『世間殘らず飢餓に苦む中に獨り安坐して食するのは冥加に餘まることである』と謂つて、朝未明から起きて繩をなつたり、筵を織つたりさせ、禍を轉じて非常な福にさせたと云ふことである。

彼は此の通りの施設をして、文政五年から天保七年まで十五年で、宇津氏釆邑の野州櫻町三村に於ける復興事業を成功した。其結果は分度外の米八千五百四十三俵一斗九升三合、金二百十四兩一分二朱、收納額一千九百八十七俵二斗五升六合、金百六十七兩一分三朱永五文を得た。又天保七年の收納米に八百三俵一斗九合であつたと云ふ。其間天保二年に、彼は四百廿六俵を小田原侯へ獻じたことがある。底で侯は之を別途に蓄へて置いたので、天保七年の小田原領の飢民救助の備米成つた。又小田原侯は、天保二年に日光御用で通行の際宇都宮の旅館で賞詞を與へたことがあり、天保六年に、『誠者天之道也。誠レ之者人之道也』の十三字を大書して之を與へたことなどがある。

其れから中村藩領の方は、彼の興國安民法を行つて、最も大なる成功を見たもの丶一であるが、此は彼が方法を定めた『爲政鑑』と名付ける三巻の方法書に依り、藩主相馬充胤家老草野正辰池田胤直以下が之を實行したので、就中同藩士で彼の高足弟子たる富田久助高慶の指揮した功が最も大なるものである。が、其方法に至つては何れも同じことで、分度を定めて節約を以て自ら持するのと、分度外の收入を資本にして新田を開墾するのと、勤勉力行を以て之を實行するのとの三者

に在つた。即ち之を個人に行へば立身致富の術に成り、之を社會へ行へば一種の社會政策とも見るべき興國安民法と成るものであるのである。然し其主義精神は別に在るので、天地の功德に報ゆると云ふのが立敎の精神であり、仁政即ち共同福祉を圖ると云ふのが其主義であり、誠心誠意を以て事を爲すと云ふのが其道德であるのである。言換れば、此の精神があつて彼の方法を行ふことが出來、彼の方法があつて此の精神が行はれるので、彼の方法があつても此の精神がなければ、其實効は擧らず、此の精神があつても彼の方法がなければ其實効を見ることは出來ないのである。

▲安民法の實行(其二)

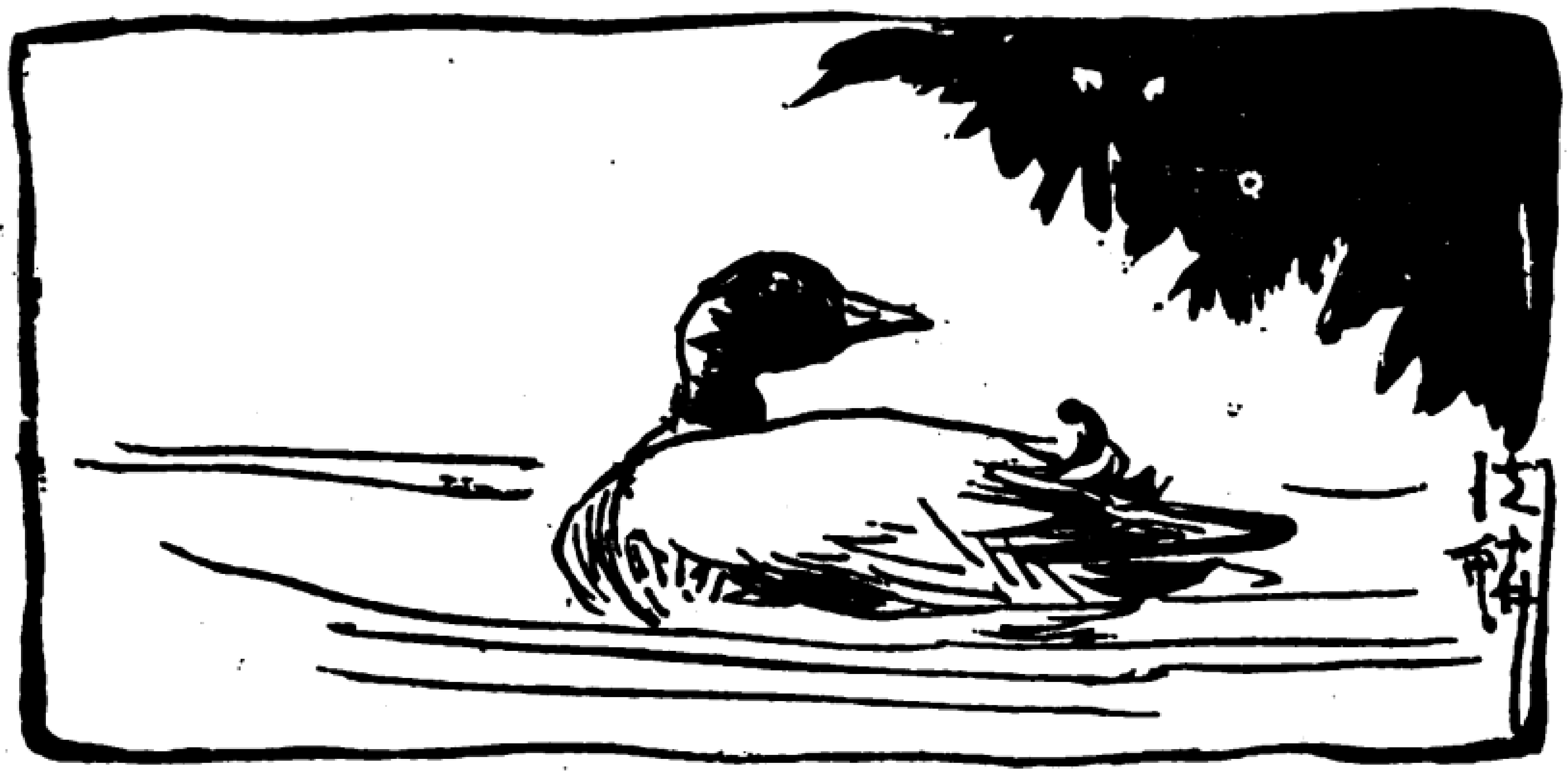
翁が興國安民法の何う云ふものである乎は、野州櫻田で實行した所やら、奥州中村で實行させた所やらを見て、其大畧が想像されるのであるが、彼は此の通りの興國安民法を如何に多く實行した乎と云ふと、大略下の通りである。

文政六年彼が野州櫻田の陣屋へ引移つてから五年目の文政十一年年四十二の時に、幕士川副家の采邑たる常州眞壁郡青木村の人民が依賴に來た。其から其翌文政十二年彼が成田山の不動尊へ祈願を籠めた歲に、其總本家の二宮伊右衛門の再興に着手し、其翌々天保二年年四十五の時には、青木村の人民に糧食を給したり、破屋の普請をさせたりし、越て天保四年年四十七のときには、青木村に於ける櫻川修堰の工事をし、三月七日から同廿三日までの間に仕上げ、是から青木村の復興が出來て七十七町步餘の新田畑を得たと云ふことである。

更に其翌天保五年年四十八の時は、肥後侯の分家たる細川長門守の依賴で、其領分常州筑波郡谷田部四十二村と野州芳賀郡茂木二十七村に於て發業し、而して此の二月に徒士並に進められ、天保六年年四十九の時は幕士齋藤鍬太の依賴で、其采邑常州眞壁郡門井村で發業し、天保七年櫻町三村の復興が出來た歲は、烏山藩主大久保佐渡守忠成の請に依て數千金の米穀を送つて

飢民の救卹に充て、十二月一日から翌年五月まで粥の焚出をして飢民數千人を活し、細川領及び川副、齋藤二氏の邑へも貸付をして飢民を救つた。又相州大磯の川崎屋孫右衛門なるものに、一家再興の法を示教したのも是歳である。

而して其翌天保八年年五十一の時は、彼の生涯中第一の知己であつた小田原侯大久保忠眞が彼の事を重臣へ遺命して置いて歿した。が、彼は之に先ち小原田領内飢民賑貸の命を受けて、東都龍の口の屋敷に於て、侯の手元から千兩を賜はり、二月十一日に江戸を出立して、小田原領内を巡廻し、三月から五月までに粮食を賑貸して四萬三百九十餘人の飢民を活した。又駿州駿東郡御厨郷の仕法を授け十一月には川崎孫右衛門が彼の教に由り、悔悟したが爲め、出獄して宿預けに成つた。たゞ遺憾であつたのは、是歳の六月に烏山領内の仕法が廢業したことであるが、其れでも荒田畑の二百廿四町歩だけの開墾は出來、分度外に千五百俵だけの産出は見たと云ふことである。



▲安民法の實行（其二）

天保九年彼が年五十二の時は、小田原領の足柄下郡上中下新田村で發業し、相州大住郡、伊勢原村の加藤宗兵衛なるものに仕法を教へ、小田原の新侯大久保忠禮から百兩を賞賜され、先侯の遺命に基いて小田原領一圓の仕法取扱を命せられ、兼て石川近江守の爲に常州眞壁郡下館卅村で發業し、藩債の三萬兩を償却し、郡村の衰微を起し、分度外の米五百俵を得た。天保十年彼が年五十三の時は相州足柄上郡竹松村曾比村で發業した所が、七十二村が之に倣つた。其れから川副氏の采邑である青木村は、是歳に再興事業が出來た

ので、彼の所へ御禮に參り、更に他の九箇村を依賴したいと請ふた。又竹松村の竹本幸右衞門なるものが彼の教に感奮して鄕里の甲州八代郡へ報德社を立てたのも是歳であるし、中村藩士富田高慶が櫻町へ來て入門を乞ひ、待つことが半年で漸く許されたのも是歳である。而して其翌天保十一年彼が年五十四の時は、駿州駿東郡藤曲村へ仕法帳を渡し、相州塔の澤の福住佐兵衞の家で小田原領各村へ言渡をし、相州大住郡片岡村で復興法を發業をし、豆州韮山の代官江川太郎左衞門に招かれて往きなどした。

其れから其翌々天保十三年年五十六の時に成つて、彼が位置は地方から中央へ轉じた。即ち其七月に老中水野越前守の達で櫻町から江戶へ出て、要路の人に逢つて諮問を請け、十月に幕府の御番帳入取扱を拜命し、御普請役格に召出され、廿俵二人扶持を給せらるゝことに成り、同時に小田原侯からも麻上下小袖一重を賜はり、總州印幡沼の見分を命ぜられ、實地視察をして見込書二卷を上つた。然し小田原藩の仕法も、公務の餘暇に指揮監督することを許され、更に中村藩からも復興法施行の依賴を受けた。又天保十三年年五十七の時は、下總の岡田郡大生鄕村の荒地開拓を命ぜられて、實地視察をして着手したが、代官が建言した爲に廢止た成つた。然し一方では小田原町民の依賴で民業恢復策を授けて基金百六十兩を與へたり、小島忠次郎、竹本幸右衞門などが小田原報德社を起したり、門人小林平兵衞に知足鑑を授けたり、御勘定所付御料所陣屋付手附を申付られたり、幕府へ召出された爲めに烏山、下館、細川、川副、相馬諸家の復興法施行を辭したりしたが、諸家から幕府へ請ふて、公然之に關與することを許された。

▲安民法の實行（其二）

更に弘化元年年五十八に成つて、日光神領の荒地開拓調を命ぜられ、三年の間調査をして六十卷の意見書を上つた。同く二年年五十九の時は、中村侯相馬充胤の爲に既往百八十年の歳入を平均して分度を定め、三

卷の爲政鑑を作り、其領内の奥羽宇多郡成田村坪田村で發業し、同藩士で其高足弟子たる富田高慶に監督させ、弘化三年年六十の時は、富田高慶に指揮して、下館侯石川近江守の領地、灰塚、下岡崎、蕨三村へ安民法を起し、又相馬領の小高郷大井、塚原二村へも安民法を起して、是から遂に百一村に及だ。が、小田原領内の安民法は故障が出で、全く廢止に成つた。領民は深く歎息したが、君命であるから如何とすることも出來なんだ。して、其翌弘化四年々六十一の時に成つた所が、御勘定所御料所三箇所の手附は免されて、野州東郷陣屋山内某の手附を命せられて、管内の諸村を開墾し、又野州芳賀郡東郷山本、西沼、桑野川やら、常州眞壁郡棹が島、花田、板橋新田、やら、野州河内郡の諸村やらへ安民法を行ひ、翌嘉永元年年六十二の時は、伊勢參宮の歸途遠州濱松掛川等で報德の敎を説き、更に其翌々嘉永三年年六十四の時は報德克讓增益鏡と云ふのを作つて、百兩の善種金即ち基金と共に門人大澤小才太、同勇助、同政吉の三人へ授け、同四年年六十五の時は、幕士小宮山小左衞門の爲に常州眞壁郡五所宮村へ安民法を施し、同五年年六十六の時は、湯本山へ櫻を植付け、其翌嘉永六年年六十七の時は、又々江戸へ召出されて眞岡縣令の屬吏を免され、日光奉行の手附を命せられ、神領の荒地を起こし返し、及び離村復舊の取扱を命せられた。所が彼は丁度病氣であつたに拘らず、病を力めて江戸を出立し、六月の盛暑を冒して神領の八十餘村を巡視し、再興事業に手を着けた。又其翌安政元年年六十八の時は、子孫太郎尊行が普請役見習を命せられ、其翌安政



二年年六十九の時は、野州今市の官舍へ引移り、日光法親王から羽二重二匹を賜はり、兼て函館奉行堀織部正から申立て丶、蝦夷地の實地撿分をし、開拓法の見込を申立てる樣にと云ふ命令が、勘定所から下つた。然し此は日光領復興の創業中であるのと、病氣との故を以て辭し、同く三年年七十の二月、普請役へ進み、三十俵三人扶持を給せられることに成つたが、其十月の二十日に今市の官舍で歿した。法號は誠明院功譽報德中正居士と曰ひ、同町の星顯巾如來寺へ葬られた。

此等は彼が事業の大綱だけで、精しく言へば長いことであるが、彼が終生の事業は、其野州櫻町で行つた通りのことを以て一貫して居るから、暫く之を略す。

之を要するに、彼が生前の事業は是たけで、其材は未だ伸びることの出來ない所がないでもなかつたが、然し今日は、彼の遺意を奉じて所謂報德社なるものを拵へることが諸州へ大分行はれ、明治廿四年十一月に彼は從四位を贈られ、とう／＼諸州の報德社員から報德二宮神社と云ふのを建て丶祀られるまでに至つた。

▲翁の三綱領

翁が全體何う云ふ考を以て此等の事をした乎、其事業の根據は何う云ふ考から出て居る乎と云ふことは、嚮にも一言した三綱領四要天道人道其他の一二言を以て之を推測するに難くない。

○三綱領

立德　開智　致富

○四要

以誠心爲本　以勤勞爲主

以立分度爲體　以推讓爲用

○父母根元在天地令命。身體根元在父母育。子孫相續在夫婦丹精。父母富貴在先祖勤功。吾身富貴在父母積善。子孫富貴在自己勤勞。身名長養在衣食住三。衣食住三在田畠山林。田畠山林在人民勤耕。今年衣食在昨年產業。來年衣食在今年艱難。年々歲々不可忘報德。

○勤身耕田。耕田植稻。植稻得米。賣米

得ㇾ財。施ㇾ財救ㇾ民。救ㇾ民得ㇾ仁。施ㇾ仁得ㇾ國。

勞ㇾ身耕ㇾ田。耕ㇾ田。植ㇾ稻。植ㇾ稻得ㇾ米喰ㇾ米養ㇾ體養ㇾ體保ㇾ壽天道自然

勞ㇾ身耕ㇾ田。耕ㇾ田植ㇾ稻。植ㇾ稻得ㇾ米。施ㇾ米救ㇾ民。救ㇾ民得ㇾ國。人道自然

○荒蕪を開くに荒蕪の力を以てし、衰貧を救に衰貧の力を以てす。

○吾神州往古開闢以來幾億萬の開田、其始異國の金銀を借りて起したるに非ず。必一鍬よりして此くの如く開けたるなり。

○我今汝に唐鍬を與へん。此、鍬を以て貧苦を除き、負債を償ひ、富優を得よ。

○天地の運動頃刻の間斷あるなし、是故に萬物生々息す。人之に法り、間斷なく勉勵する天の運動の如くならば、困窮は求と雖得べからず。

○諸侯の任は、天民を預り、之を養ひ、之を撫し、之を安ずるに在り。其預る所の天民を飢亡に落さば、何を以て諸侯の道あらんや。

○古より國の爲に力を盡すもの、往々其事を遂ぐる能はず、中道にして讒人の爲に廢せらる。豈讒人の罪のみならんや。忠臣も亦其身を處すること至らざるが故也。

○僅々たる一粒之を蒔く時は、年を經て高木となる。人の誠心一旦感發して止まざる時は、至誠天を感ず。

○汝の家屋を破れる驛人は、仇に非ずして、汝の欲心を碎き、祖先以來の惡因を破り、汝をして善心を發し、永續せしめんが爲に、身の罪科ををも省みず、一身を抛て汝の家を破却せし恩人也。

○上國は温泉の如く、下國は風呂の如し。下國の繁榮を保つは、仁政の火力を續くれは也。

○人の人たる道は、己を棄てゝ人を惠むより尊きものあらず。己を利せむとして他を顧みざるは禽獸の道也。

○我か方法は、節儉以て冗費を省き、有餘を生じ、他の艱苦を救ひ、各其業を勉勵刻苦し、終身善行を履み、惡業を爲さす、勤働以て一家を全ふするに在り。

○富道を行へば必富み、貧道を行へば必貧し。

○天下の米財もと乏しからず、唯上下其分を忘れて、費すべからざるに費すか爲に窮乏するのみ。

○天地間の萬物各其時あり。其時を得ざれは一物も爲すべからず。況や大業をや。（完）

お伽芝居

巖谷小波氏獨逸より歸朝して春若丸を著すや、機を見るに敏なる正劇派の棟梁川上音次郎氏は春若丸を脚本として我が興行界に一新機軸を出さんとせしが當時未だ事情の許さゞる所ありて果さず、然るに今回世界御伽噺狐の裁判並に浮かれ鼓弓の二篇を脚色して去十月二日始めて本郷春木町の劇場に於て幕を開けり、是れぞ日本の演藝界に於て御伽芝居の出たる始なり熟々惟るまでもなく日本在來の演劇はその筋書俗惡陳腐にして淑女紳士の趣味好尙に適せず、又其俳優は無學卑陋の輩にして淑德ある婦人の面前に近づけ難きもの多し。加ふるに劇場の組織体裁共に下劣にして芝居といへば直ちに俗趣味を連想せしめ、藝娼妓の引幕を連想せしむるのみならず、劇場その物は久しき以前より多くの婦女を墮落せしめ、多くの男子を淫蕩に導きたるの歴史を有するを以て世に志あるの士人淑女は之を厭ふこと蛇蝎の如く以て增々その嗜好に遠ざからしめたるの觀あり、是の時に當り家庭敎育に多大の關係ある御伽噺を此の劇場に於て演ぜしめんとす。深識ある紳士淑女の疑問を招きたる又故なしとせず。されど吾輩思ふに原作小波者山人は元より常識圓滿の君子なり。抽象的の御伽噺を具體的に發展せしめて完全なる兒童の娛樂機關たらしめんと欲するの志や切なり、是を以て氏は能ふべくんは是も純潔なる家庭に入れ、若しくは家庭と聯絡ある學校に於て演ぜしめんと欲するの希望なりしが如し、然るに機を見るに敏なる川上氏は自家が劇界に於ける勢力の普及并に新機軸を出すに鋭なる技術上の熱心とを以て是れが實行を急ぎ原作者と交涉の上にて出演する事となれりといふ。されば場内に食物を入れず、小兒同伴の外は單獨なる大人の參觀を謝絶せしが如き、聊か以て家庭的演劇に對するの注意のありしを察するに足るべし、その罪惡の歴史を有する劇場に於て演ぜしは萬止むを得ざりしに由るものなり。即ち記して世の淑女に答ふるものなり。

學同

嗜好品の説明

藤葉女史

茶、珈琲、煙草等の嗜好品は其用方適當なれば神經を刺戟して間接に身体の働きを助くるものなり。

▲茶

平日用ふる處の飲料として茶は甚だ宜しきものなり、分拆上、茶素を發見したるは極く近來の事にして上等の物程多くの茶素を含みて眠氣を醒す効あり、茶を湯にて飲むと云ふは其性分が湯に溶けて水には溶けざる故なり、之を有効性分と云ふ、酒精飲料にてはアルコールが有効性分にして之等飲料の有効性分をアルカロイドと云ふ、酸に溶けるアルカリに似たるものにして元素、酸化物に否らずして元素の二ツ以上集りたるものなり、之には種類甚だ多し煙草の中にあるはニコチンと云ひて凡て之等は神經の興奮劑として用ゐらるゝ事もあり、藥用にする事もあり又は激しき毒藥として用ゐらるゝ事もあり。

茶は其葉を生にて味うも只澁きのみなり、此葉を干すとか蒸すとかして初めて茶の味が出づるなり、故に茶の香氣は元天然のものに有らずして人工を用ゐて初めて出來たるものなり、之は元植物中に有りし性分が同じく含まれたる他の性分によりて分解せられ初めて表はれ來るなり、鹽化アンモンが其物のみの時は香を發せざれども苛性カリを加ふる時は初めて香を發すると云ふが如し。

凡て草木中に含まれたる酸とか鹽とかは其物の生活力を有する内は互に相觸れざる様に出來居れども、一度枯死すれば今迄膜の有りたるものが分解して無くなり

水が通ずる樣になりたりして種々の性分が化學的變化を起すなり茶の香味も斯くして出來たるものなり。

茶の製法には、蔭干にしたるもの、水蒸氣にて蒸したるもの、湯に直接に漬けたるものとは皆夫々に味の異なるものにして湯につけたるものはパイキンの働き止む、併し之を操かして煎ると種々の酸特に鞣酸(多くは葡萄糖との抱合物)との分解を起し元茶の内に有らざりし種々の性分即ち味とか香とかゞ出來るなり。

香氣は揮發油の一種にして吾人の最賞翫する處のものなり、之は極めて少量にして化學上未だ分明ならず茶の澁味の内に一種の甘味を有するは鞣酸の働きによるなり。

茶の湯に溶かして鹽化カルシウムを加ふる時は次第に濁りて黄色となる石灰の多き俗に云ふ硬き水にて茶を入るゝと茶中の鞣酸は葉の中に沈澱して少しも湯の中に溶出せず又鐵分が水に有れば黒き茶となる、茶素は冷水に溶けずして温湯に最よく溶くるものなり、余り熱き湯を入るゝと揮發油は皆發散して香氣なきものとなる。

茶の性質は土地の性質に依りて大に異なれ共若き新芽程よく太陽の光線の强くわたらざるものを宜しとす茶の成長するに從つて吾人の好む茶素の分量は多く他のものに變じて鞣酸の分量は次第に増すものなり。

外國行の茶は煎る事内國用のものよりも强し、支那茶は一度醱酵せしめたるものにして揮發油の性質も少しく異なり味は日本用のものより宜しく香氣は却つて内國用の方勝れり。

吾人の日常用ふる茶には茶素の多きを欲するに否らずして澁味に重きを置くなりと云ふ人もあり、食後に用ふる茶は甘きものよりも澁きものゝ方勝れる樣なり、上茶を余り多く飲む時は神經を刺戟する事甚だしく爲に不眠症に陷る事あり、又湯茶の如き飲料物を多く飲む時は胃液を薄めて食物の消化を惡しくする害あり故に何事も度を越さゞる樣に注意すべし。

▲珈琲

珈琲は元亞細亞地方の產物なりしを多く西洋に傳播したるものなり一本の木より多きは七八斤を產し丈け一丈に及ぶものあり、其實は恰も銀杏の如きものにして外部の肉を腐らして其種子を取るなり之即日常用ふる珈琲なり。

之も茶と同じく睡氣を醒すものにして之を分拆すれば大抵茶と同じ樣なるものなり。然れども珈琲は茶と異なり煎りて粉に引きて食するもの故大にコフエン（茶素と同じもの即チィーンなれども珈琲の中にあるものはコフエンと云ふ）の分量少なく日本の茶一杯と珈琲三杯と同じ位の分量なり。

珈琲の善惡はコフエンの分量によりて定めらるゝに有らず、其他の味とか香氣とかに關係あり、香氣は珈琲中に含まれたる糖分が煎られたる爲に元芳香性分が一種の香に變じたるものなり。

西洋にて珈琲を飲むは常習にして廣く用ゐらるれども貧民は價の高き爲本統のものを食する事を得ず髙苣の根を薄く切りて日に干し煎る時は恰も珈琲と同じ樣なる味を有するものなる故に、之を買ひて用ふ、日本に有るものも價の安きものには一度湯にて煎じだしたる搾り糟を利用し、之に種々のものを混じて賣るヿある故によく注意すべし、買ふ時には角砂糖の中に入りたるものは惡し只粉に引きたるものが今一層安心なるは珈琲を生のまゝ買ひて自宅にて製するにあり、其法は余り黑くならざる樣に適宜に煎りて平たきものにあけ平に廣げて急に冷す、然らざれば茶を煎りたる時と同じく自ら火を發して燃え出す危險あり、之を余り細かならざる樣に粉に引くなり、用ふる時には新しきフランチルを今一度灰にて洗ひ清め、先の尖りたる袋に造り器に入れ之に珈琲を入れて上より熱湯を注ぐと非常に泡立つ、此場合にも硬水は宜しからず而して直にふたをなし皆出づるを待ちて飲むべし。

▲煙草

煙草は茶、珈琲と異なりて最毒あるものなり何故に世界萬國一般に行はるゝか實に不思議といふべし。一

度此味を覺ゆる時は如何に貧に陷るも廢する事能はざるものなりとぞ。

煙草を飲むと云ふは其內にある一成分が吾人の神經を刺戟して一の感覺を感ずると云ふに止まるなり、故に何の葉にても宜しき理なれども、人は夫にて滿足せず煙草の葉には他の植物の葉になき一種の性分あり、アンモニアに似たるアルカリ性の物質（植物性アルカロイドの一種）にして吾人が用いて愉快を感ずるは之なり是をニコチンと云ふ、此ニコチンは生の中よりあり先其葉を乾かして重ね置くと、其內に含める諸性分は次第に分解して窒素分はアンモニアとなり、炭素を含みたる性分は炭酸となり、カリのある爲に炭酸カリが多く出來る、是に於て前とは大に其性質を異にして火燃え易き性質のものとなる。ニコチンは之等の醱酵の際に空中より酸素を吸收して蛋白質などは皆分解して仕方によりて大に減ずる事あり、醱酵充分ならざる時はニコチン多くなりて辛き煙草となる時を經るに從つて蛋白質が無くなりて硝酸などが增し、輕く弱きものになりニコチンも少なくなりて猶燃え易き性に變ず。

煙草も土地と氣候によりて大に良否を生ずれども、之に必要なるは第一にニコチンにして燃える樣にするには蛋白質の分解を要し、一方には燃え易き硝酸の增加を要す（元からも多少の硝酸有れども醱酵によりて起さしむるなり）此變化の度合によりて種々の味になるなり。

煙草に火を附けると（卷煙草）先に灰が出來其次の處が赤き火となり其境目に黑き處が出來る此黑き部分が熱せらるゝ時に種々の變化が起るものにして、此部分が酸素を取りて其熱にて葉が焦げる時に出來るものは一部は燒け一部は蒸溜せられて先に至る此中には主にニコチンと醋酸、蟻酸、青酸其他に未だ分らざる性分あり、ニコチンの一部は燒け一部はやにの中に殘る、之等は斯く酸類あるにも係らずアルカリ性なり。

煙草に火を付けてチツチツと音を發するは醱酵して出來たる硝酸の燃ゆる音には有らずして後より人工にて加へたるものなり、煙草は如何に善き性質の物にても

空氣の流通宜しからざれば惡しきものとなる故に、卷き方にも善惡あるなり、尖に出來る灰は成る可く續きて殘り白きものを宜しとす此灰が少なき時は直に火が消え一度火の消えたるものは容易に燃え附かず、又再び火が付きても最早前とは異なりたる性質となりて味が惡しくなる。

茶は茶葉の多きを上等のものとすれども煙草は必ずしもニコチンの多きを善とせずニコチンを多く含みたるものは米國の煙草にして百分中四五を含む日本國内のものには斯く多くあるものなし。

衛生上より云へば煙草は煙管にて呑むをよしとす近來は紙卷出來たれども紙卷を用ふれば紙の煙も共に交りて其害一層甚だし。

煙草は氣の鬱したる時には神經を刺戟して却りて爽快になるものなれども、之を度々行ふ時は終にはニコチンを多く吸ひ込みて心臟を惡しくし、眼力を弱め、咽喉を痛め、寒冒などに罹りたる時は氣管支加答兒などになり易くして容易に治せず、又胃も辛き味の爲に害を受くる事多し。

要するに煙草を用ふるは利少なくして害を受くる事多きものにして、而も一度此味を知る時は終に止むる事能はずして知りつゝ次第に多く用ふる樣になるものなれば年長者たるものはよく／＼注意して世に煙草飲みなるものゝ數を益々減ずる樣に務めたき事なり。

學問と注意力

（修學上の心得を問はれたる時の返辭）

津田信雄

西洋の賢哲が「說明をするよりも、好き問題を見つけることは更にむつかしい」と言ひましたが、あなた方のお尋ねは、まこと得易からぬよき問題で、之に相應しい、よきお答をいたしたいは、私の山々望む處ですが、さて、それは甚だやさしいやうで、然かも誠にむつかしい事なのです。

まづ第一に、「修學上といふ言葉が、甚だ漠として、分

りにくいのですが、あなた方の、お尋ねの趣意から考へますと、學校で授業されるにつき、即、學問を修めるに就き、其授けらるゝ處を十分に會得し、又十分に記憶に存する樣、そして應用のよくきくやう、換言すれば、最も有効なるやうに、學問をしようとするには、如何なる心得を以て授業を受けたらよいかとの、極めて日常の近い事實を意味されてゐる事と思ひますから其のつもりで、次にお答へをします。

修學上の心得、それは頗る數多くあることでせう。併し私は一々それを書きたてる必要を認めませぬ。なぜかと申せば、たゞ智識の上のみでなく、此心得を以て實際に行ひたいといふ、あなた方の、お考へだとすれば、其數多きものゝ中から最肝要なる、そして實際に行へるものを撰んでお知らせするより他に、よき方法はないからです。

さて、かゝる實際的の有効なる方法は、所詮、珍らしいものではないので、世間有りふれた、人皆の、おそらくは、あなた方も、疾くに御存じの事なんです。併し、道は近きに在り、君子の言は帶を下らすとか申しますから、其有りふれた近い處に價値が存るのでせうか、とにかく、次に述べて見ませう。

私は學生の修學習業の心得として、次の三つを最肝要なるものと信ずるのです。曰く專心。曰く審問。曰く復習。まづ、其項目の珍らしからぬを笑ふを止めて、そして暫く私の説明をきいて下さい。

▲その一、專心

之が修學習業の効果を多大ならしむる方法の第一義でせう。授けらるゝ智識、課せらるゝ技能、それに心を專にして、他事を念せず、一意己が心を之に注ぐといふこと、即、注意といふ事が、必要なのです。西洋の學者が一時一事といふことを申ますのも、古來幾多の聖人君子が、修德の一方法として、常に此種の言を立てますのも、皆此專念と申すことが、すべての成功の一要素であるといふ理由に因るのです。元來人の精神は、其一つの物に注ぐ力の度と、其精神の多方面に擴がる範圍とは、常に反比例をするもので、多くの

事に同時に心を擴むれば、どうしても一つ〳〵には注意の度の減ずるわけです。彼のフランクリンが十三徳を規定して、そして之が習慣をつけるに當つて採つたところの賢き方法は、十分専心の必要なる理由を説明してゐるではありませぬか。

若し飜つて、之を彼の幼き童女を教育する、教育者の側から見ますならば、いかに教育者が、教授の際彼等兒童の注意力を保持するに苦勞するかを御覽なさい。時には威力を示してさへも、彼等のぼんやりを刺激するではありませぬか。それはつまり、此注意といふ精神狀態が、學修の根本要素であるからのことです何事にも、自己を制する力の乏しい兒童は、一事に注意する事は、至つて難く、又よし意を留め得たとしても、それは誠に僅かの間です。動搖不定なのは彼等のもちまへですから、教育者は一方に於て、智識技能を授け乍ら、又片方に於ては彼等兒童の注意を保たせるやうな手段を取つてゐますので、つまり一人で二重のはたらきをしてゐるのです。

申す迄もなく、あなた方位の年になれば、今申す其自働の力も大に進んでゐますし、且は女の性質として、その精神及身體の上から、男に比較すれば、むしろ一事に思を沈めるといふ事は、よりたやすいのでありますから、此事は十分すでに實行して居らるゝ事と思ひます。

たまには、どうも、少しも、じつとして居られない心が靜まらない、といふ人がありますが、かゝる人は實申せば、學問をするには不適當な人で、その習慣を打ち破るのでなかつたならば、恐らくよき成功は望まれますまい。

▲その二、審問

心が一つにまとまらず散らばつてゐるやうで、どうして授けらるゝ事が、心の底へ十分に滲み込みませうか換言すれば、よく眞に了解が出來ませうか。記憶が出來ませうか。專心といふ事が、修學上心得べき第一であるといふことは、之で略、了解せられた事と思ひます。

殊更に「審」といふ字をつけた點に氣をつけて頂きたい。問ふは智識發達の一大要件で、審かに問ふは、問ふ事の必須要件です。彼の五六歳の兒童が、常に「何に」「何故」を事毎に繰り返くすのを御覽なさい、天は彼等に智識を得させんが爲に「發問」といふ自然の方法を賦與したのではありますまいか。彼等は此「何に」「何故」によつて、多くの言語をおぼえ、其意味を解し種々の事物、種々の出來事の經驗を得るので、即、彼等の求知心は、此發問といふ形式に表はれて、其答を得る事に依つて、それを滿足させて行くのです。

思へば私たちは、一生疑問に滿ちてゐます。知らねば素より疑問が多く、知れば又更に疑問が多いのです。それを、どうして問はずにゐる事が出來ませうか。

たとひ、日々學校に行き、專心に教へを受けたにしても、其授けられし處を、深く考へ、復習をして、そして其十分に了解せぬ點、即、疑ひの點を調べて、よくそれを質問する事をせぬならば、學業は決して進みませぬ。

質問は、即、自分から出るのですから、かくして明曉にし得た智識は、深く腦裡にきざまれるものです。所詮自ら苦勞して取つた智識でなければ、眞の己が所有とはならず、且又應用のきく活智識にもなりませぬ他人に教へられた百個よりは自分で教へた十個が尊とい又他人に教へられた事は容易に應用が出來ぬが自分で發明した事は直ちに實行か出來るものである。

かくも質問は、大切なものなるにも係はらず、私の知る處によりますと、よく質問をする人、殊に審に質問をする人は至つて少いものです。大抵一級内で、質問をする人は、きまつてゐるやうなもので、他の多數の人はだまつて居ながら、實はやはり分らぬ處があるので、何となく問ふのを耻ぢるものです。折りよく自分の分らぬ處を、他の人が先生にきくのに依つて、其不審をはらして行く位で、さなくば其まゝ通り越してしまひ、かくて試驗の前になつて不審が山の様に積つて來る。雪ならば消えもしませうが、之ればかりは問はずば、どうしても解けませぬ。「問ふは一時の耻、

問はぬは一生の耻」、之は問ふ事を奬勵した、よい言ばではあるもの丶、問ふ事を耻だといふのは、よくないと思ひます。問ふを耻だと思ふからこそ、問ひにく丶なるのでせう。聖人のいはる丶孔子ですら、「予は生れながらにして知るものにあらず」、と（よし、それは謙遜の言ばとしても）言はれた如く、誰れも初めから、何事も知つてゐるものではないのですから、それを問ふのが、何んで耻になりませう。一點でも腑に落ちぬと思ふことがあれば、其時々々に先生になり、朋友になり、問ひ質し、尙は其答をよく考へて、それでも分らぬければ、再三之を問ひ返へす、之を審問といふのです。

若し之を先生の方から申しますなら、先生は質問を歡迎せらる丶のでせう、問ひ多き生徒は、望み多い生徒だと考へらる丶のでせう、夢にも、其問を面倒に思つたり、又はわざけつたり、笑つたりせらる丶事はありません。質問は即ち自から苦しんで物を鑿り出すものでありますから其事柄は非常に尊といものです。

あなた方も、元來、よく質問をせらる丶性の樣ですが、どうぞ、尙は其習慣をつゞけていかれん事を望みます。

女の口數多きは、もとより忌むべき事ですが、問ふ事多き結構な其口をまで、噤めと申すのではありません、こ丶らの道理はよく、お分りになつてゐる事と思ひます。

▲その三、復習

復習、練習の必要なる事は、申すまでもない事でせう。殊に技能的の學科、たとへば裁縫、習字、圖畫、唱歌、體操などに於ては、殊に此反覆練習が必要です彼の疊屋の職人が、あの長き大いなる針を疊の裏より表へ向つて、一分をも違へず、目的の點へ刺し通す熟練を御覽なさい。又彼の印刷局内に紙を折るのみを業とする多くの女工が、いかに巧に、又いかに速に紙を折るかを御覽なさい、彼等の手は、實に器械ではあるまいかと疑はる丶程です。斯かる驚くべき熟練は、實に唯一の數多き練習の結果であります。

今は、もはや其必要を長々しく述べるのをやめて、次に其要點を箇條書にして見ませう。

（一）敎へを受けたその時は、十分了解したと思ふ事も、さて後で一人で、やッて見ると、出來ない事が多い。之が復習の必要なる所以の一。

（二）かくて、明瞭なる點と、不明瞭なる點とを知る事が出來るから、その不審を質問する事が出來る之れ二。

（三）かくの如く、十分に調べて、不明の點を質問し全體を明確にすることが出來る、即、よく記憶に留める事が出來る。之れ三。

（四）明確は興味を生む、何でも硝子玉の中の金魚を見るやうに透きとほッて自分の心に判然とするのは心にせい〳〵して氣持のよいものです）そして明確は復習の結果である、之れ四。

（五）曇りある、不安心な智識は、活用しない、（黒と白とが心の内に判然しない時は、事に當ッて黒とも白とも斷言する勇氣が出ないから隨ッて要領を得ずに仕舞ふのである）復習によりて、十分に鍛錬せられた智識こそ、應用のきくものである、之れ五。

（六）たとひ一時は明瞭になつた事も、時日を經れば其明確の度が減じる、それで度々其上ぬりをして忘却しない樣にしなければならぬ、之が復習の必要なる所以の六。

終りに、一言申し添えて置きたい事は、復習と、下讀との關係に就てゞす。明日敎へらるゝ處を豫め調べて敎場に臨む事、之は申すまでもなく結構な事でせう、併しそれは、此復習といふ事と相伴ふべき筈のもので、或は復習した餘力があればすべき事で、下讀のために復習を怠り、敎へられし處を忘却するが如き事があつては、それは一大事です。

若し私が、敎師としての立場からして、申しますならば、「復習を怠らず、餘力ある者は下讀せよ」と、言ひたいのです。私は彼の、生徒をして下讀のために奔命につかれしめ、已習の處の復習を等閑視するやう

な教授法を、いたく排拆するものです。とにかく復習を重んじて已習の箇處につきては、頗る明確な、そして鍛錬された智識を有するやうに心がけられん事を切に望みます。所詮は、かゝる智識が基礎とならなければ、彼の下讀もさしたる効果はありません。

修學上の心得、述べてしまへば、まづこんなものでせうか、お分りにならぬ處は、御遠慮なくそれこそ審問されん事を望みます。

（終）

石炭瓦斯の應用

石井研堂

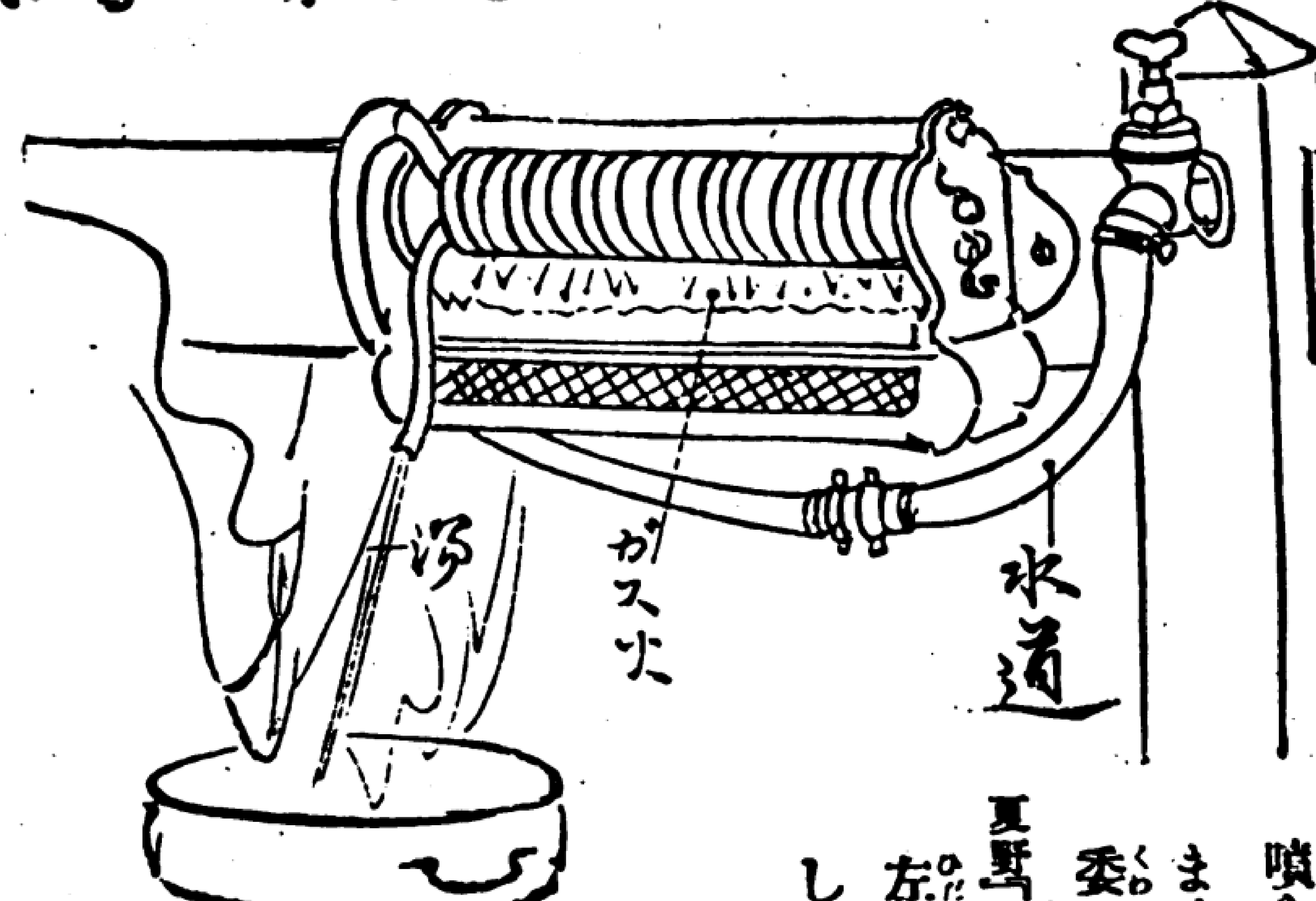
夏野夫人「この節、皆様が、よく瓦斯々々と仰られますが、どうも、私には飲込まれませんですよ。お湯を沸かしたり、御飯をたいたり、お肴まで炙焼ができますなんて……。」

秋山夫人「私は、先日宿に頼みまして、あの瓦斯會社の陳列場を見せて貰ひましたが、それは〳〵、お話の通り、一から、十まで瓦斯で濟んでます。で、早速會社へ頼んで、宅へ今付けて貰ひ、只今では、薪一本焚きませんから、第一、散らけるの、煤けるの、煙いのといふこともなく、そして、時間が大層お早く出來ますから、餘程のお德用になッてをります。三なとも、瓦斯たきになりましてから、薪の濕ッてるの何のとの、苦勞もなく、この毎日の入梅の內を骨折らずにやッて居られ、喜んで働いてますです。先には、どうかと怪んで居りましたが、使ッて見ますと便利でたまりませんです。あなた樣でも、是非お引になッては如何です。……」

夏野「お耻かしいですが、今日の學問を致しませんので、とんと分りませんが、會社から、その瓦斯を送ッてよこしますれば、どんな仕掛になッてるのでございませう。宅の子供たちに、根ほり葉ほり尋ねられますと、赤面致しますので……。」

秋山「それは、私には分りませんですが、いつか聞きましたのでは、水道の水が噴き出すに良く似てるやう

でございます。
秋山「會社の瓦斯製造處で、石炭を蒸焼にしますと、それから瓦斯といふ氣體を發生いたします。それを鐵管で導いて、大きい蓄槽に貯藏いたしますが、この蓄槽に入る、までに、瓦斯に含んでる有害物は皆洗ひ取ッて仕舞ふ仕掛がありますので、蓄槽中の瓦斯は、仕上げをされた精製瓦斯で、すぐに使用することのできるのでせう。
秋山「この蓄槽から、鐵管を町に引き其鐵管は、枝に小枝といふやうに分れ〳〵て、私共の家々へ、其小枝の口を開いてます。
秋山「水道の水ならば、淨水池にある水は、自分の重力の爲めに、低い處に向ッて、流出いたしますが、瓦斯には其力有り

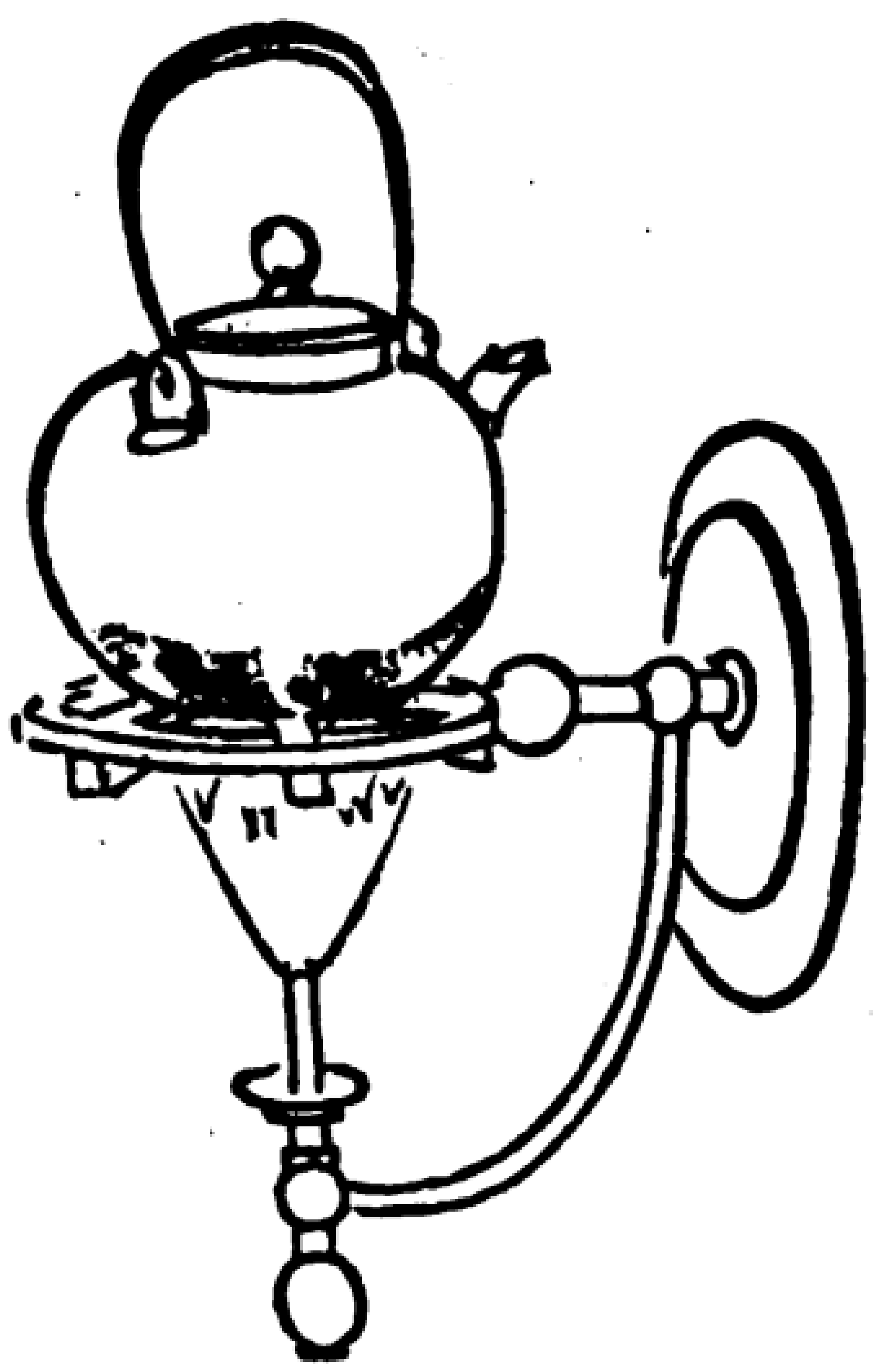


ませんので、蓄槽の中には、ガスを壓縮して入れておくのださうです。壓縮されてるガスのことですから、どこなり、口を見つけて噴き出さうとしてをり、栓を開けられますと、これ幸と噴き出すのでせう。
委しくは存じませんが……。」
夏野「水道も同じいことですが、栓を右廻し左廻しするによッて、開いたり閉ぢたりしますのは、どんな工合なのでせうか。」
秋山「平にあるガス管としますと、栓を或る向にひねれば、管の内徑一杯の舌が、竪に立てられて道を絶ちますが、之を逆にひねれば、其舌が横になり、上下の隙から瓦斯道がつきますのでございませう。」
夏野「それで、はい分りました。どうも、飲込まれませんでしたが……。
夏野「手前に、よく時々お出になる方で、この前に、瓦

斯で御飯を炊きました處が、瓦斯の火の當りました處だけ、火吹竹の太さほどに、釜の内のお米が、底から上まで黒焦になり、その他はお米のまゝでわッたとのお話でしたが、そんなことの、ありますものでございませうか。』

秋山『どうも、聞きませんことでございます。若しや、あの、明りに用ひるまゝの瓦斯管で、お炊きになッたのではございますまいね。それならば、ひよッとして、そんなことが、ございますかも知れません……。』

夏野『それは、いかゞでございますか……。』



秋山『明りの方は、火口が一ヶ所で、一本の管から、ガスを噴く孔が、一つきりでございませんで、火の力も格別に強くございます。が、煮炊をしたり、湯を沸かしたりしますのは、管のさきに、無數の小さい孔がございまして、栓をひねッて、マッチの火を移しますと、その無數の孔から出ます瓦斯に、一時に火が移り小さい青い焔を擧げて燃えるでございます。で、お鍋でも、お釜でも、其底に平等に火力が當りますから、手前などでは、終一度御飯の出來損ねたことなどございませんが……。』

夏野『そんな、小さい焔の集りました火力では、風呂などを立てますには、小半日も掛るでございませうか。』

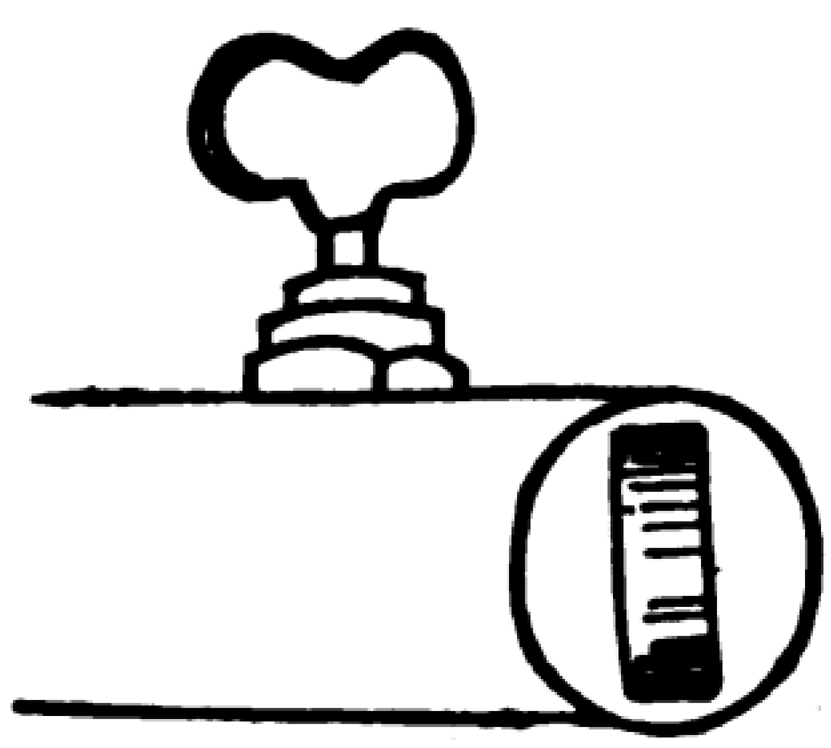
秋山『どういたしまして。手前處のなどは、どんな冬でも、遲くて三十分は掛りませんです。朝起きましても、手水のお湯を沸かしますには、歯磨ブラシを使ッてをります内に、どんなに熱くでも沸きますです。

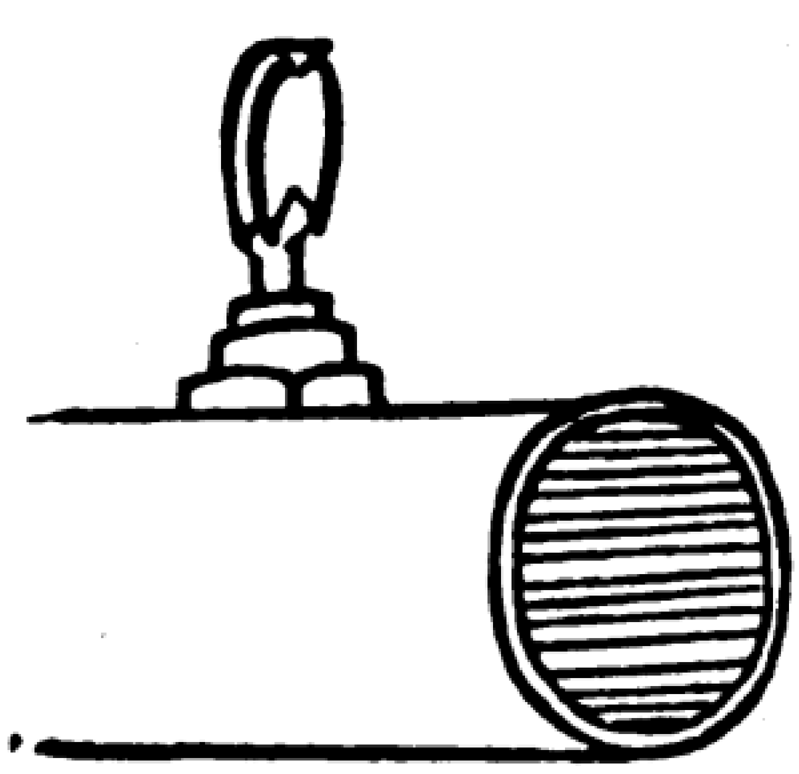
秋山『お手水の湯や、風呂の湯など沸かしますお道具は金盥の底に、瓦斯管が口を開いてるやうな仕掛で、金盥の上にございます水道の栓を開け、それから、瓦斯の方に火を移しますと、金盥の上に落ちます水

だけは、忽ち温りまして、外に流れ出でます。お手水の湯位の温度にしますのは、殆と時間を要しないと申してもよろしいでございませう。水道栓から降ります水は、降りると同時に温まッて、流れ出るでございますもの……。」

夏野「そんなにお早いものでせうか。さぞ、御便利でございませうね。……それから、お魚なども、焼くことできるさうに伺ひましたが、そんなお火では、焦げますまいか。」

秋山「火の上に載せませんで、下の方で焼きますので、焦げもいたしません。こんろが、引出付ともいふやうな風にできてますので、其上に、湯わかしでも、お鍋でも載せ、下の引出にお魚を載せておきますと、上と下と同時に使はるゝでございます。是非、あの陳列場にお出になッて、一通り御覧遊ばしては如何でございます。」





夏野「それにしても、一度伺ッておきませんと、とても分りますまいから……。

夏野「それで、お直段の方も考へなければなりませんですが、薪炭から見ますと、どんなものでございませう。」

秋山「お安いとは申されませんです。併し、瓦斯を使ひましたゞけその、容積に相當した拂ひを致しますので、無駄が立ちません。それに、時間は早く便じますし、薪を納める物置の備もいらず、整理がつきますから、却てお安い割に當るでございませう。あなた様などの様に、御大勢様の處では、三人の女中衆も一人で御用が便ずるやうになるでございませう。」

夏野「その、ガスの使ひ高を調べますには、どうなさりますのでございます。」

秋山「それは、時計の様な、ガスメートルが、手前方の

瓦斯管に付いてまして、手前方で用ひますガスは、すべてこの關門を通ツて參ります。で、この器械は一尺立方のガスが通ます毎に、齒車の齒一つだけ廻るといふやうな仕掛なので、一ケ月に、何百何十立方尺使ツたといふことは、その針さきさへ見ますと直に知れますやうになッてをるのでございます。」

夏野「ストーフなどは、矢張瓦斯で間に合ひませうか。」

秋山「間に合ふ處ぢやありません。大間に合でございます。ストーフも、色々の形にできてますが、手前で取りましたのは、並のストーフの、石炭を焚きます處に、瓦斯管の口が開いてまして、それに、マッチに火を移しさへしますと、その火力の當る處に、瓦片か一二升ばかりでございまして、それが紅く燒けて參ります。その燒けました熱を放散しますので、室内は、二三分間に十分暖まッて參りますから、奥に居る女中を呼んで、火鉢に火を入れさせます時間よりは餘程お早うございます。

秋山「その他、烟草のお火でも、お茶のお湯でも、お坐敷で、すぐに間に合ひますので、使ひつけますと、ほんとうに便利でたまりませんです。」

夏野「それでは、是非その陳列場に參りまして、宅にも引いて貰ひますやうに、賴みませう。」

秋山「さうなれば、どんなに御徳用ですか、知れませんです。餘りお勸めいたしますと、おかしうございますが、手前では、あの會社の株主ではございませんですから、どうぞホホ……。」

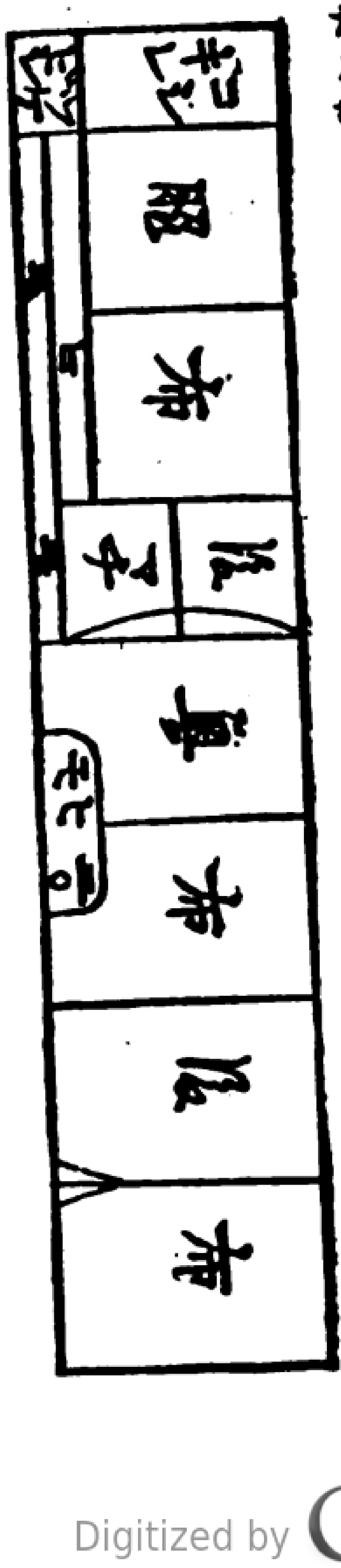
（完）

裁縫實習

男兒七才袴罫引及積り方

小出新次郎

並巾用布曲丈壹尺五寸五分を以て七才袴を造るには後丈何寸の裁切になるか

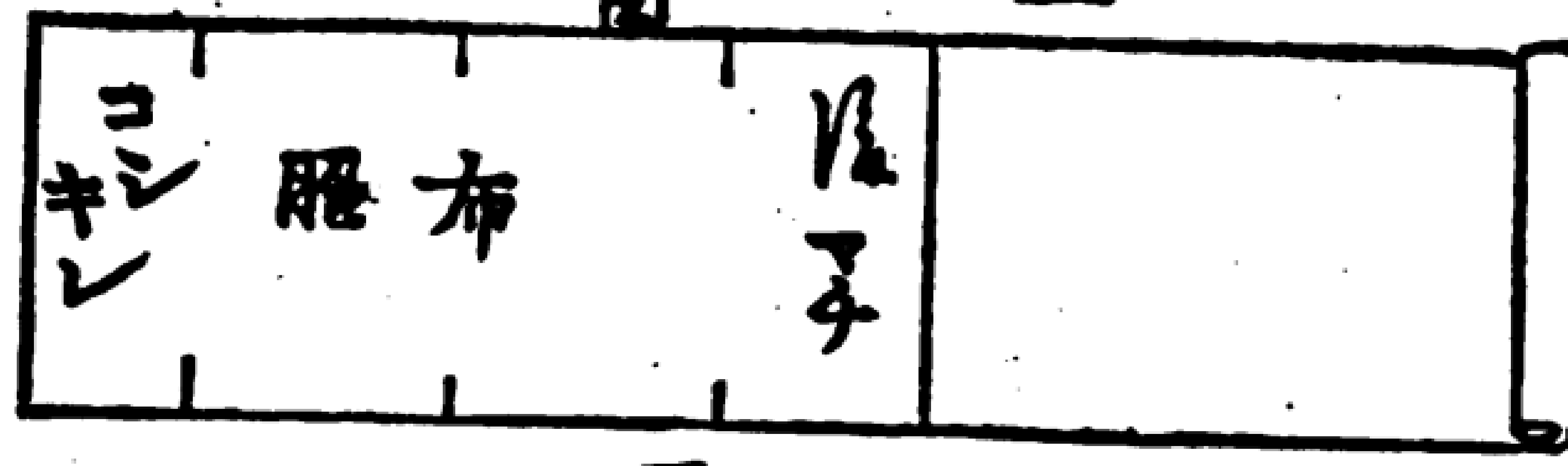


河線{(1185+腰10)−(裾線45+衿肩100)}+10=170

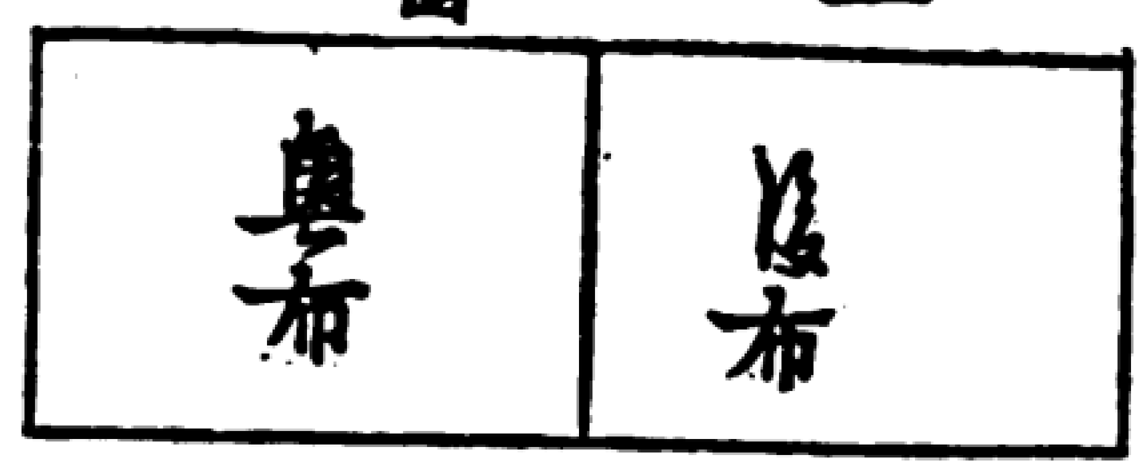
▲裁　方

先づ用布の内第一圖の如く腰紐四寸五分と箆印をつけ次に其箆より脇布壹尺七寸の二倍に箆印をつけ次に第二圖の如く奥布を壹尺六寸五分の二倍とり、殘り壹尺四寸を後布とするなり

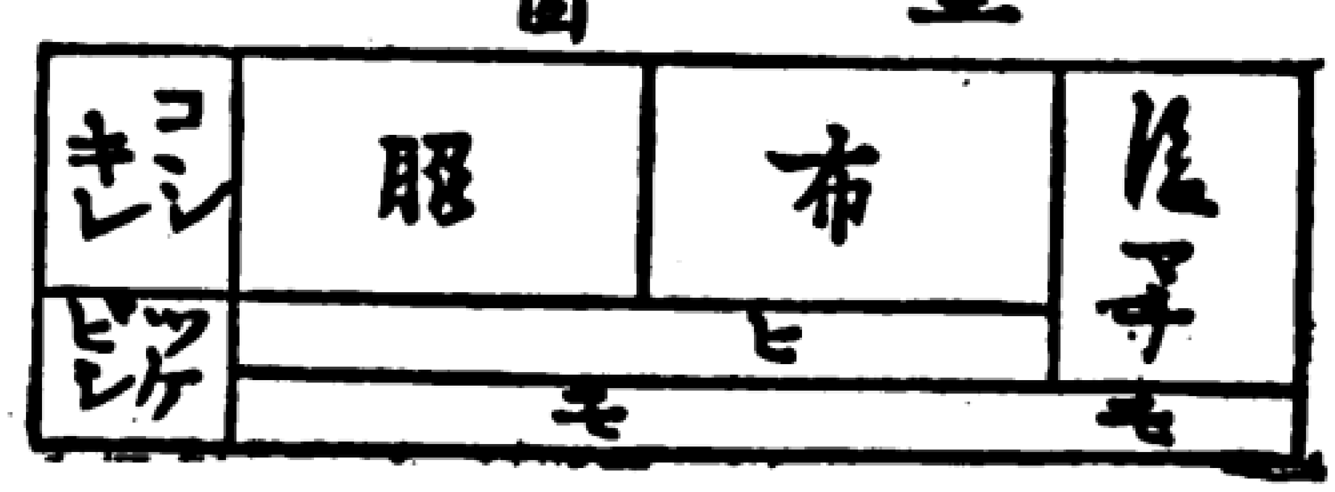
第一圖



第二圖



第三圖



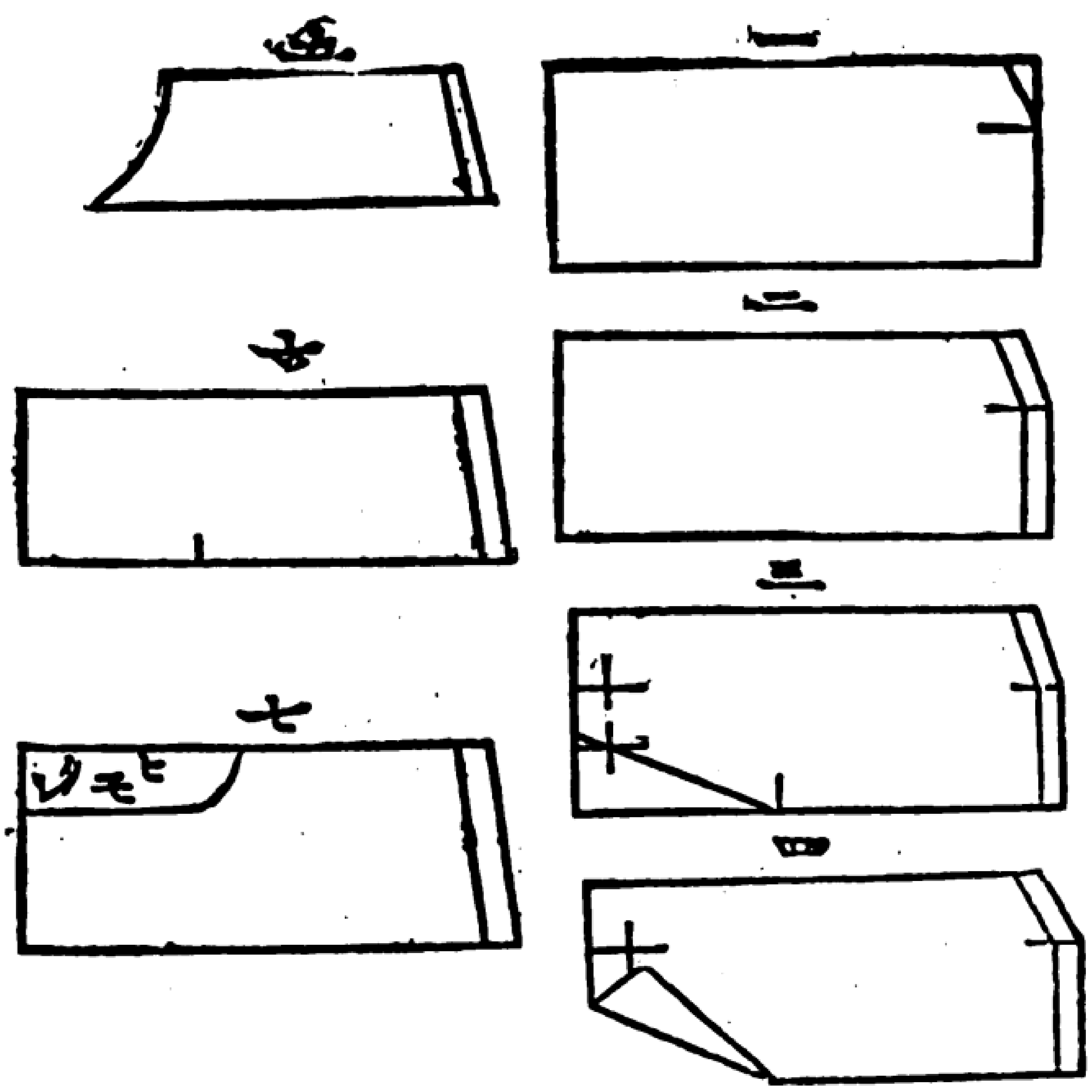
次に脇布の續きにて第三圖の如く先づ腰紐四寸五分を裁ち落し次に脇布後褄の續きにて紐巾壹寸七分を缺ぎ採り次に後褄壹尺を裁ち落し次に脇布貳枚の内より又々紐巾壹寸七分缺き採り次に腰紐の端より附紐貳枚を缺採るなり

次に腰紐を横に二つに裁ち切り二寸二分五厘寛のもの貳枚として又貳本の紐端より壹尺壹寸五分づゝ後紐貳本とりて殘りの衿紐に奥布と相乗とより缺採りたるものを足して前ひもとするなり

次に腰紐、前後紐、附紐紐等は傍へ取除き夫れより脇布、奥布、後布とも中表に横に二つに折り又後褄は縦に二つに折り、夫れより箆附にかゝるなり

▲へら附

先つ後布の輪を右にして正しく置き第壹圖の如く右の輪の處にて後巾六寸と箆印をつけて次に向ふの處にて切り下げ五分と圖の如く箆印を



つけて其の箆と後巾の箆とに斜めに尺度をあて引箆をつけ其の箆より裁ち切るなり。

次は縫繼五分の揃くけ代として箆印をつけ次は第三圖の如く後巾の處にて後丈の箆附をすべきなるが後丈の斗り方は紐下になりを八分加へ肩紐巾六分を加へたるものを後丈とするなり、

また其の處にて前同様後巾の箆印をして其箆より手前へ腰巾貳寸八分と箆印をつけ其の處にて前同様又後丈の箆印をつけ次に相引の箆印を

するなり、相引の縫方は後丈の三分の弐を以て相引の丈けとするなり其の相引の箆と腰巾の箆とに斜に尺度をあて引箆をして其の箆より三つ折にして鏝をあて正敷して夫れより弐枚共くけ附るなり、

次に縦に折りたる後襠弐枚を正しくおき第五圖の如く右の向ふにて切下げ九分よって其の箆と手前の布端とに物指をあて斜に引箆をして其箆より切落し夫れより向前に五分と端くけの箆を附け其の箆より相乗の箆印をつけるなるが此の相乗のきめ方は相引より二寸さげて尺を極るなり、而して其箆より第五圖の如く鋏きとるなり夫れより縦の輪をさきて左右二枚とするのである

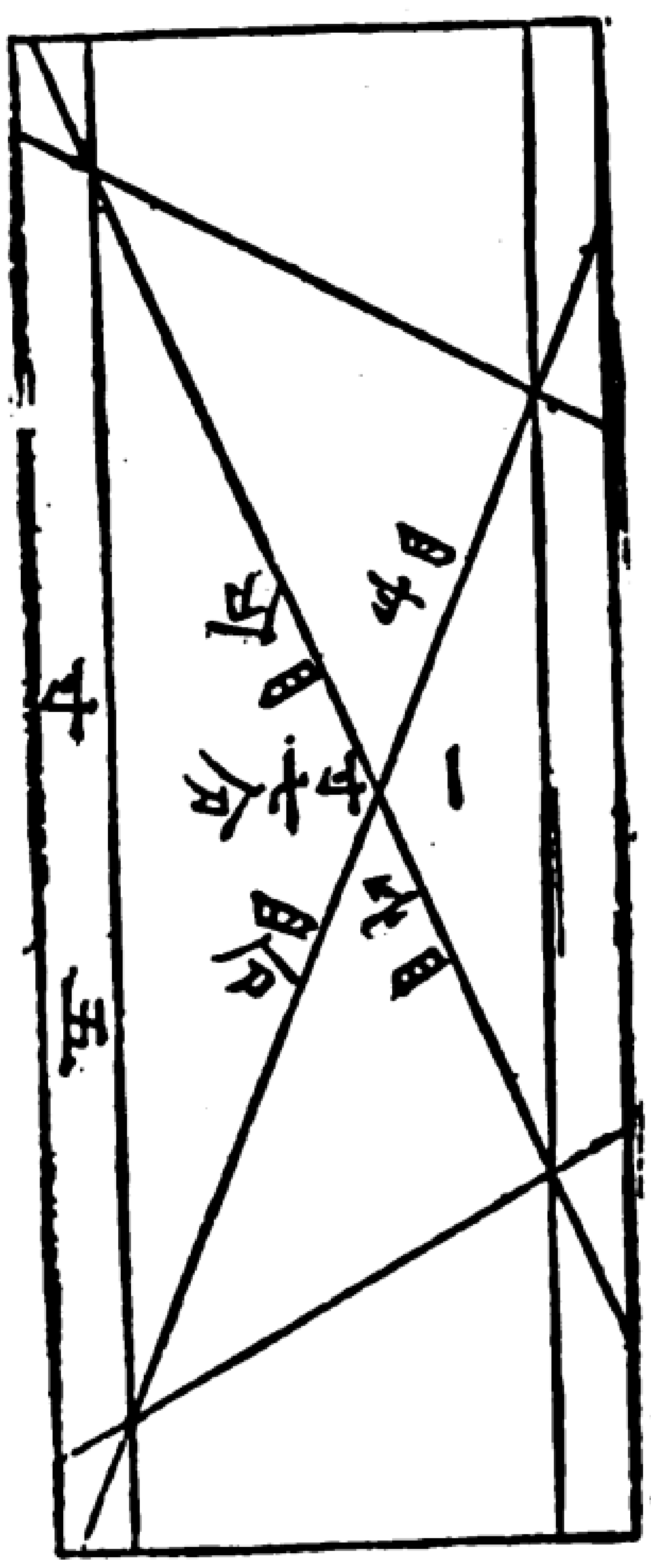
次に第六圖の如く脇布の輪を右にして正しくおき、向ふの處にて五分と切下げの箆をつけ其の箆より前同様斜めに裁ち落し次は五分の端くけ代の箆印をつけ次に手前の處にて相引の箆印なつけ次に奥布の輪を左にして正しくおき第七圖の如く右の向ふにて五分切り下の箆をつけ前同様斜めに裁切り夫より五分のくけ代として次に相乗の箆印をつけ夫れより左の向ふにて鋏採り弐寸の箆をなし其の箆より圖の如く鋏きとるなり

▲縫　方

先づ縫方に係る前腰板を採り而して紙小よりを腰板の下のはしに入れ腰強をはり付又一枚の腰板裏張には紙にて裏打をして又附甍張二枚にも同様裏打をなして、夫れより縫方に係るなり。但し腰板の採方は次の方法によりて採る

次に縫方は最初後布と後襠と縫ひ合せ折目は後襠の方へ返し次に脇布と奥布と縫ひ合せ折目は奥布の方へ返して次に奥布と後襠と縫ひ合せ折目は襠の方へ返し次に脇布と後布と相引の處を縫合せ折目は脇布の方へ返し夫れより端くけをして夫れから相乗を二度縫にして次に前ひだの箆をつけ前ひだの箆は相引の縫目より脇布の方へ三寸六分と箆印をなして次に脇布と奥布との縫目より奥布の方へ二寸と箆印をつけ次に脇の縫目より奥布の方へ二寸と箆印をつけ又片方も同様にして次に後ひだの折り方は兩折にするのである又前ひだは上を六分下を一寸二分としそして腰板及前紐の附方は五才袴と同様の方法にするなり(但前巾は六寸とするのである)

又腰板の採り方は最初五寸と腰巾を極め次に竪を一寸七分と極め上下に引箆をつけ夫れより圖の如く四寸四分と尺度を斜に使ひ夫れより上下の十の字の箆を定木に尺度を當て斜めに引箆をつけ其の箆より裁ち落して圖の如く造る



撿定試驗問題

(問)此の間ちよつと或る縣の撿定試驗問題に十反の布を以て二十人の生徒へ本裁の單衣を教ゆるには如何いふ方法にすればよいかと云ふ問題がありましたから色々考へましたけれども十反で二十人の生徒へ本裁の單を教へられる筈がありませんから其の譯を一寸伺ひませう

(答)夫れは各生徒へ半反づゝ渡して半身縫をさせるのであります固より十反で二十人の生徒へ裏ともに教へらるゝ筈はありませぬ、然る

になぜそれでよいかと云ふと半身あれば裁つにも○附するにも少しも差支へがないのみならず、縫方に至つても袖も衽も襟も皆半身だけ縫ますから之又少しも差支ないのです

勿論誰れが考へたからとて十反で本裁の單衣が二十枚出來樣筈がないのですから其所を熟考して見なければいけません

之れ等が最も試驗問題として然らしむる所以です然るに皆樣の樣にそう一直線に考へた日には到底いつの問題でも其の精神に的中する事は出來ませんから何でも一つの問題が出たら先づ其問題が尋常の方法で出來るか、どうかと常識を以て考究して彌々尋常の方法では出來得べからざるものと斷定したならば、夫れから色々と特種の方案を立てゝ其の問題の精神に的中させなければなりませぬ、



英語實習

蘆生 貞子

英和對譯

(原文は津田梅子女史校)

Beauty and the Beast.

美人とけもの

III.

"Then pick me a white rose, Beauty, and let me smell it."

Beauty ran and picked a white rose and gave it to him to smell, and instantly, the ugly Beast was gone, and a tall young prince stood before her. He placed his gold crown upon her head, and said:

"You have saved me. A wicked fairy changed me to a Beast, and I was condemned to keep that ugly form until some good, kind-hearted girl should care enough for me to promise to stay with me always and to give me a white rose as a pledge of her promise. You are good and kind, and though I was so ugly you cared for me. So I am free at last from the bad fairy's power."

Then he turned to the father who was standing near by watching in great surprise the strange to his daughter.

"それならあなた私に白薔薇を摘み取て私に香はして下さい"

美人は走りて白薔薇を摘み取り香ふ爲めにそれを彼に與へましたすると直に醜き獸は影を沒して、たけ高き若い王子が其女の前に立て居ました。彼は其金冠を女の頭上に置き、そして申しました:

"あなたは私を救ふて下すつたのです。或る惡るい仙女が私を獸に變化させました。そして、或る善い、心のやさしい娘が、いつも私と一緒に留まつて居る約束をして、其約束の保證に白薔薇を私に與へる、それ程に十分私の事を氣に掛けて具れるまでは、あの醜き形を其儘にして居れよと、私は宣告されました。あなたは善良で親切です。私があれ程みにくゝても、あなたは私を心に掛けなすつた。それだから遂に今わたくしは惡魔の力を脫して居るのです"。

そこで王子は娘の父の方を振り

"Will you give me Beauty for my wife?" he said.

The father consented and so there was a grand wedding at the castle. When the two elder sisters came to the castle and saw all the splendours of Beauty's new home, they were so envious of her good fortune that they turned to stone, and if you visit the castle, you may see them standing, two ugly statues, one on each side of the door.

(THE END)

向きました。父は娘と話して居る見なれざる王子を、いたく驚きて見ながら、傍に立て居ました。

"あなたは美人を、私の妻に下さるでしやうか？" と彼は申しました。

父は承諾しました、それで盛大な婚禮が城内でありました。二人の姉は城へ來て美人の新しき家の壯麗なのを逐一見ました時、その幸運を羨みました。其ために石に化してしまひました。諸君城へ行かれるならば、門戸の兩側に一つ宛二個の形みにくき像となつて立ち居る彼等を御覽になることが出來ます。

（大　尾）

英　文　和　譯（會　話）

A. Haw old are you Umeko san?	甲　梅子さんあなたはをいくつですか、
B. I am sixteen years old.	乙　私は十六才でございます、
A. You are quite young yet.	甲　あなたは未だお若いと、
A. When did you come to Tokyo?	甲　いつ東京へお出でになりましたか、
B. Last spring.	乙　昨年の春でございます、
A. Is your elder brother well?	甲　あなたのお兄さんは御機嫌ですか、
B. Thank you he is very well.	乙　有難ふ大丈夫でございます、
A. Your brother is very dilligent and smart.	甲　あなたのお兄さんは大變御勉强でお發明ですとね、
B. Yes he studys very hard.	乙　さよーでございますずいぶんよく勉强致します、

A. You are very kind to help him.	甲　あなたは兄さんをお助けなさるのは御深切ですーネー、
B. I only keep house for him.	乙　私ははんの家政のことをして居るのでござゐます、
A. Do you attend any school?	甲　どこか學校へお出でゝすか、
B. Yes, I go to Joshi-gakuin every day.	乙　はい毎日女子學院へ參ゐります、

和文英譯（會話）

主婦　お初お茶を持つてお出で、	Misstress. Hatsu, bring some tea.
下婢　はい、	Maid. Yes m'am.
主　おまへお菓子を買つたかい、	Miss. Did you buy some cakes?
下　いゝえ奥樣未だそとへまいりませんでした、	Maid. No m'am, I do not go out yet.
主　それならよいかすてらと上等ななしを買つてお出で、	Miss. Well, go and buy some good sponge cake and nice pears.
下　なしをいくつとつてまいりましよーか、	Maid. How many pears shall I buy?
主　十ばかり、	Miss. About Ten pears.
主　ごはんは仕度出來たかへ、	Miss. Is our dinner ready?
下　はい午飯は皆出來て居ます、	Maid. Yes m'am the dinner is all ready.
主　お魚はよいのかい、	Miss Is the fish good?

下　さよーでございます大變新しいのでございます、

Maid. Yes m'am the fish is very fresh.

熟語用法練習

At one's feet.

その若武者は人々を皆服從させて居ました。

The young hero had all the men *at his feet.*

At his feet—服して、足下に伏して。

At one's pleasure.

あの人は氣の向いた儘に其本を讀んで居ます。

He reads that book *at his pleasure.*

At his pleasure—心のまゝに、興にまかせて、己の欲する時に。

At one's service.

机が御入用の時は何時でも私のをお使ひ下さい。

When you need a table, mine is *at your service.*

At one's service—仰にまかせお用をつとめる、何時たりとも用立て得べき。

At random.

彼の女は其手に開いた聖書を持ち、そして、どこといふ的もなく取つた一節を聲高く讀みました。

She held an open Bible in her hand, and read aloud a passage taken *at random.*

At random—手あたり次第に、無暗に。

At sea.

先生が其問題を尋ねますと、あの人は一言も答へが出來なかつた。

When the teacher asked that questions he was *at sea.*

At sea—茫然として言ふところを知らず、まごつく。

英語の諺

English Proverbial Sayings.

Time and tide tarry for no man.

歳月人を待たず。

Out of sight, out of mind.

去る者は日々に疎し。

（目に見ざれば、心にも忘る、といふ原文の意）

A friend in need is a friend indeed.

樂しき時の友はいくらもあり、されど困難の時に際して友たる人こそ、眞の友なれ。

A small leak will sink a great ship.

小さき漏れ口は遂に大船を沈む。（萬里の堤防も蟻の一穴より崩る）

Much coin, much care.

富む者は憂ひ多し。

Never too old to learn.

學ぶに、餘り老ひたりといふ事なし。（八十の手習ひでも結構なり、人は終生學ぶべし）

Haste makes waste.

急いでは事を仕損じる。（急げば廻はれ）

此と同様の意のものなほあり、即ち

The more haste, the less speed.

急げば急ぐ程却て速力少し。

Sweep before your own door.

汝の戸の前を掃け、（他人の事を彼れこれ言ふよりも先づ自己の過を改めよ）

眼の記臆 (禽鳥の部)



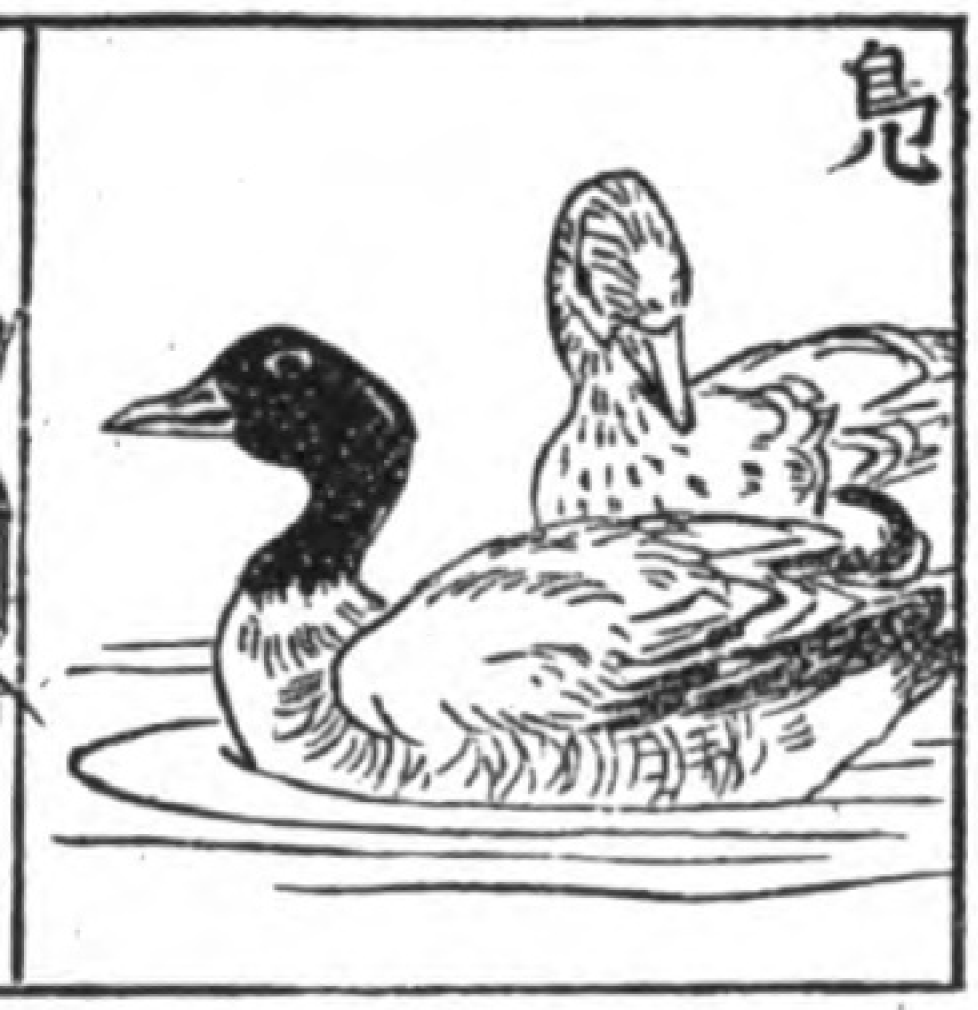
鳩は大きさ七八寸許り頂より背にかけては綠、頰の邊は黄に、胸に斑文あり、家鳩、山鳩、珠數掛鳩など種類多し、



燕は雀と同程の大きさあり、軒端に泥を以て巢を作る、古語に燕去月とあり、竹取物語には燕の子安貝とあり、今昔物語には雌雄の燕のやさしき譚あり、或は又た蒔貸さうよ濕れ燕などいふて、日本文學とは綠故深き鳥なり、



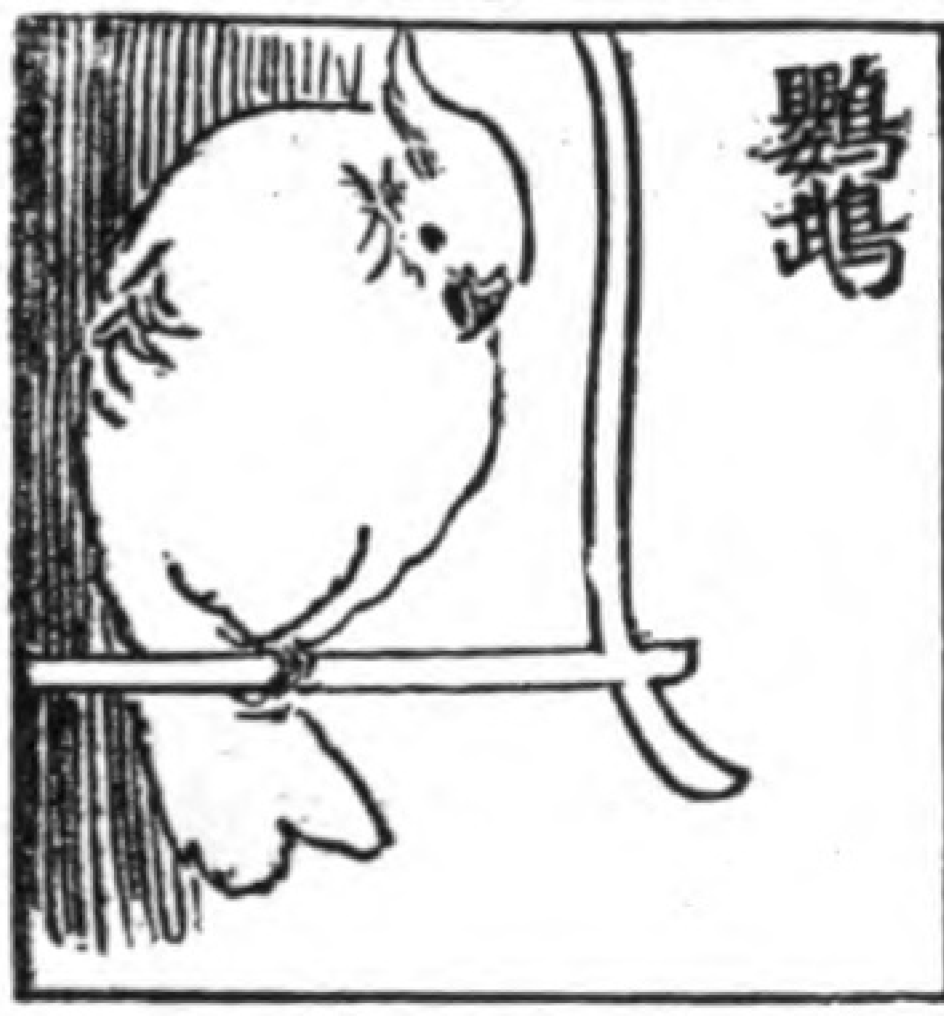
雀は好みて穀物を食ふが故農家とは仇敵の間なり、頭は森の頭の如く、目は山椒の目の如し



ケリは鴨に似て小さし、常に水邊に遊びて魚を捕ふ、頭と脊は灰色、胸と腹は白く、翅は黑白交はり、嘴は黄色にして、横紋あり。



カハセミは雀より稍々大きなる鳥なり頭と頰とは綠にして青斑あり、翅は青白く、嘴長大にして尾と、脚は共に短し、常に水邊をあさり水中に潛りて小魚を捕ふを職とす、



鸚鵡はよく人の言葉をまねぶ鳥なり、羽白く、嘴赤く、頭に毛冠あり、熱帶地方に產す、



翠鳥、又の名を翠雀といふ、其の形雀に似て、翅の色、靑きをもて此の名あり、



レンヂヤク鴨の一種にして体は小さく黑し、長々しきしたり尾は眞白にして練りたる帶の如し、



マメドリは俗にまめまはしといふ、大さもずの如く、体は茶色、尾は藍色、嘴は黄色にして太く短し、此の鳥豆をふくめば、嘴にて旋轉するより此の名あり、

眼の記臆　(植物の部)



藤は春夏の交紫色の、花房を垂らして、旋り開く、又白藤といふ一種あり、花綿の如く、白し、花落ちて後、なた豆に似たる莢を結び、内に碁石の如き實を畜ふ、池のほとりに咲きつゞく藤波の美しさは繪にも文にも及び難きよ、



トコロは蔓草の一種なり其の葉は山の芋より大きく、其の蔓は長く、花は小く實は青し、根には山の芋に似たる細根毛生す、味は至つて苦し、今春東奥の饑饉に之を食用としたり、



菊は花の隱逸なるものとまで尊ばれたり、花は數十品あれば一々擧げ難けれど、色には白、黄、赤などありて、とり〳〵にめでたし、貫之集に「けふまではわれをおもへば菊のへの露はちとせの玉にぞありける」



蒲、水中に生ずる草なり、菖に似て葉と莖とは細長し、編みて蓆とす、夏の頃褐色の花を開く、



カリヤスは草にて、山中に生ず、葉は萱に似て、それよりも細く、秋の初に穗を出す、[illegible]九十月の交取入て、染料となす、絹を染むるによろし、



蓮は池、沼などに生じ、夏の初美しき花を開く、色には紅と白とあり、又實と根とは食用に供せらる、蓮は葉を荷といひ、根を藕といひ、花を芙蓉といひ、實を蓮蓬といふ



オニタデ和名犬蓼又は鬼蓼といふ、高さ六七尺、葉は煙草に似て尖り、且つ毛多し、秋の初桃色の花を開く



荏（エ）ハ葉も莖もしそによく似たり、實よりは油を搾り取る、之をゑの油といひ、香氣頗るよし、



藍は染料なり、毎五六月の頃くれなゐの花を開く、其の葉は蓼に似たり我邦の阿波は有名なる産地なり、

雜纂

女子と財産問題

法學士 S M 生

曾て英國大宰相グラッドストン翁は、女子の戸主に選擧權を與へたい爲めで、英國の女子の戸主が若干あるかを綿密に取調べまして、法案までも議會に提出いたしたことがあります、即ち女子の戸主と申すものは、男子と同じく町村會の決議を以ては、町村費を徴收されますし、縣會の決議に對しては、尙且地方稅を負擔いたさねばならず、國會の決議には國稅をも納めますにも拘はらず、政治上には一言の喙をも容ることが出來ない、是れは無理な話だ、自分が政治上に立たずとも、切めて投票權位は與へるが至當であらうと、八年間骨を折られましたが、遂に保守黨と政府黨の反對の爲めに失敗いたしました、爲めに英國の女子は、今に選擧權を得られませんのです。

然るに阿米利加では、四十五州の中の四地方だけは、すでに州會議員の選擧權まで與へられて居ります、而して其四州丈けは女子を官吏に用ゆることを許してあるのです、さて其結果は如何かと申するに、至極よろしいさうで、第一、女子に選擧權がなかつた間は、單に其人の力量とか、運動とかで、議員に擧げられて居りましたのを、女子が選擧權を得ましてからは、伎倆や運動は少しも効目がなくなりまして、一寸でも不品行な人間は、決して當選することが出來なくなりました、さすがは女子、直ちに其人の品性を論ずるのです、是れが一つ、も一つ例を擧げますと、女子と申すものは、何に就けても綿密な考を持つて居りますので、今までは此四州にも、衛生の點火夫を月給で雇つて置きました、然るに女子はソレは無駄な話である、ソンな者を置くのは懶惰な人間を餘計にすると同じことである、何故と申すに、この點火夫といふものは、夕方に一寸と出て、一町ばかりの間の自分の持場々々を、トツト〳〵驅け巡る丈けの役目で、ソレが終ふと、明日の晝までも、夕方まで寐て居ても濟む譯で、ソレを月給で抱へるといふは、好んで懶惰な人間を製造する嫌があるのみならず、不經濟な話であると主張して、遂に請負の制度に改めました、こんな例は一つや二つではありません、何れも女子が發見したことです、爲めに女子に選擧權を與へた州では、大分經濟上に餘裕を得ました、得た其餘裕で、教會堂を設立したと申します、是等が女子に選擧權を與へた好結果の實例です。

かく米國では、政治上にも女子の權利を認めます丈けに、各州とも大學があつて、その大學の卒業生の團體が一般に廣まつて居ります、而して男女同等の權を得るを期する、その期成同盟會があつて、その會員は何十萬人かあるさうで、斯くの如く團體は、英吉利にはズツト少なく、佛蘭西になると、會の類は澤山ありましても、百人以上あるのは少なく、まア小分裂の姿です。

此等の點から申しますと、女子の權利も米國が魁で、次が英、次が佛といふ順序でせう、曾て此米國の婦人團體が、英吉利をも佛蘭西をも、その團體の中に聯合させやうとしまして、頻りに勸誘しましたけれども、英國にも佛國にも守舊派のものが、婦人界に幅を利かして居ります所から、遂に聯合することが出來ませんでした。

財産制度は、英佛米共に共通です、即ち夫のものは女房のもの、女房の

ものは夫のものでして、只女子は定年未滿の男子と同じと、財產は共通ですけれども、其處分權は女子には無いのです、卽ち定年未滿の男子の後見人と同じく權利を夫に持たせて居るのです、されば愈よ處分の事になると、夫に權利があるから女子は如何ともするとが出來ないのです、然るに此點になつて、この國にしてこの制あるかと驚かるゝのは露西亞です。

露西亞は財產分有國で、一家の經濟でも、法律上から見ますと、汝五十圓を出せ、已れも五十圓出すといふ、卽ち百圓の身代なら五十圓づゝ持ち寄りで、女房の物を亭主が使ふとが出來なければ、亭主の物を女房が使ふとも出來ないのです、露國には國會はありませぬが、州會はあります、この州會の選擧權まで、女子の戶主に與へてあるのです、露國としては珍らしいばかりか、歐羅巴にさへ斯る例はないとで、然らば敎育はと申すと、女子は中等敎育に限られて、大學などは有りません(一時女子が大學を建てよと政府に迫つたが、建てないので獨逸へ失奔したものがある)亦州會議員が樞密顧問官を選ぶとになつて居るので、して見れば、女子は間接に樞密顧問まで選ぶ結果になつて居ります、財產分有といへ、選擧權といへ 露西亞もなか〳〵隅には置けません。

我邦では、女子は封建時代から度外視されて居りましたが、すでに今日の如く敎育する樣になつた以上は、女子の戶主には選擧權位與へるも然るべきではありますまいか、田舍へ行つて見ますと、女子の戶主が澤山あつて、町村會の決議を奉じて、税を出して居ります、縣會の決議にも應じて居ります、然るに女子の戶主は、何の權利もない、アレは無理ではありますまいか、租稅を納めるものは、政治に口を容るゝ權利があるといふ上は、租稅を納める女子の戶主に對して、選擧權を與へても無理とは申されません、又弊害もなからうと思ひます、憲法の註釋を見ますと、日本ではソーなつては居りませんけれども、英吉利や佛蘭西は、租稅を納むる者は、政治上の權利があるとしてあります。

女子と德育

岸本宗道

近來男子敎育の盛大なるに連れて、女子敎育の必要を論ぜざるは無く、女子專門の學術及び技藝を敎ふる學校は設けられる、各府縣には高等女學校の續々設立せられる、少く共家庭の醜風汚俗を洗滌せんとの目的から婦人會は結合せられると云ふ樣に、我日本の女子社會は隨分多忙になつた。因循姑息なる我國の女子を改善すると云ふことは容易の事では無い。無能無氣力なる我日本の婦女子を見上げる程の者に迄進步發達せしめる事は到底一朝一夕の能す可き事では無いが、しかく今日の樣に女子社會の多事多望なるは兎に角 我日本婦女子の爲に大に祝されればなるまい。

唯恐れる所は或人の申した如く、春草の一時に萠ね出づるが如き觀ある女子敎育をなして、燦たる花を着け、郁たる薫を放たしめ、遂に人生の犧祉に供すべき收穫の秋あらしむるを得べきか。若し幾とせの春秋を經、幾とせの星霜を重れ、花も實もなく、たま〳〵人生を害する毒草の蔓々と茂るを見んか、失望も悔悟も何の効も無いので有つて、悲慘痛恨の事であらう。故に女子敎育を論じ、又は其任に當る者は將來如何なる性格の女子を作り、如何なる結果を見るべきかを洞察して、今日より其の方針に進行せなければならぬ。

女子は生きた菩薩の樣な德光を持たればならぬ。女子の德操は超然男子

の上に立つて世の男子をして、憤死せしめる程にエライもので無ければならぬ。是は女子の體質の上からや心性の上からばかり云ふのではなく天の女子に賜つた所の品位であるから、世の婦女子たるものは此の得難い天與の賜を放棄してはならぬと考へる。然るに女子と云ふものは效果ないもので、實に意氣地無いもので男子の輕蔑を受けたり、不品行に陥つたりして至高至美の品位を下すのは誠に殘念な事である。

私は斯様な婦女子のためには露程も同情を持ちませぬ。斯様な意久地なく情の脆い婦女子の有る間は眞子孫の生れやう筈は無く、健全なる家庭なく、圓滿なる社交無く、世は貪婪淫靡風を爲し、賭博謡讌、有らゆる惡事醜行を恣にし、光風霽月の態亦見る可らざるに至らん。あゝ恐るべきは婦女子の破倫不德では有るまいか。しかし婦女子を斯様に惡くするには男子も關係有ることは免れないのである。

女子は男子と異なり、情感に於て特殊なる傾向を有するものであるから女子の教育中情育には最も注意を要する。女子の情育の不完全なる時は女子其ものを誤るのみで無く、世の男子をも誤る事であるから、世の女子教育者たるものは女子の情育に注意せられ、女子の情緒をして調和清健に至らしむることに務められたいのである。

從來の女子の情育は、單に柔順なれと云ふことを正面よりも側面よりも教へ立てたので、女子は男子の奴隷の如く、甚しきは玩弄物の如く取扱はれ、其の實たる女子の靈活を缺くに至り大に女子を誤つた。昔風の教方では卑屈な女子殆ど人形同の女子となつて、到底人を使ひ人の上に立つことが出來まい。むかしならばよかつたが今日では役に立たぬ。今日の女子には勇氣おり活氣ある人物を要する。女子は一面に於ては生きた菩薩の様で一面に於ては家及び國の柱となる、男まさりのところが無ければならぬ。沈勇でなければならぬ。

女子の情育には種々な情念の發育を要するのであるが、社會風紀の淵源であるべき女子は、神聖高潔で有らればならぬから、男子よりも一層情慾を節しなければならぬ。今その情慾に就て注意を促したいのは、

（一）體慾。これは飲食の慾、色慾、運動、休息、睡眠等の慾である。色慾は女子は最も謹まればならぬことは明であるが、それが制し切れぬ者の在るは慨はしい。女子は之を缺けば片輪同前であるから、此點は男子とは身體の組織が全く別物で有ると云ふことを、普く知らせればならぬ。

（二）交際の慾。人は此慾有るが故に、長短相補ひ緩離相救ひ、その幸福を増福を増進すること少なからぬ。歐米にては男女交際の道進歩し極めて圓滑なる風あれど、我國の風に於ては古來男女の交際は戀愛の情より多く行はれたので有るから。今日に於ても極めて危險千萬のことで有る。しかし追々には舞踏會も盛に行はれやうし、田舎では盆踊も絶ねないだらうから、男女の交際を穩健にする様に善き習慣を造られればなるまい。

（三）愛の情。この情は能く己と對手との間を和げ朋友家族の間も之が爲に親愛敦篤の交りをなし、一國一社會の間も調和するので、此情を持つて、母らしくし、妻らしくし、女らしくするのが女子の本分である。

（四）恐怖の情。女子は男子よりも此情盛なるものであるから、世の教育者は、此情を減却せしめることに注意せればならぬ。地震などの爲に死ぬのは男子よりも女子が多いさうである。

（五）忿怒の情。女子は殊に此情強く、俗に云ふ八ツ當りを爲すこと多い。故に女子には克己心を養はればならぬ。

（六）同情。人の苦痛を見ては之を憐み、恰も我身に苦痛有るが如くし

又人の快樂を見て之を喜ぶこと、恰も我身に快樂あるが如き感を起すことを同情といひ、女子は愛情と同情とは最も深く持たねばならぬのであるから、教育者はますく\之を喚起して社會に藹然たる和氣を充滿せしめることを務めなければならぬ。女德の淵源は愛情と同情とに有る。世の女子はこの情の權化とならればならぬ。

以上の諸情を制限し、伸暢せしめるのが、女德の根幹となつて、忍耐、恭謙、貞操等の諸德を養成することが肝要である。

禮法の改良

近藤正一

●從來の禮法は、兎角つまらぬことを八釜しく云ふ、一寸例を擧けて云へば水引の結ひ方がどうであるとか、熨斗の折り樣がこうであるとか、その外足の出しやう、手の出し方等、多くは彼の末節に渉ることを主に穿鑿する、それも悉くは無かろう、が然樣な事柄は禮の要粹では無かろふ。

●斯樣に古禮なるものは中々に悠閑的であつて、非常に長い時間と無用の手數とを要する、所謂貴族的綿禮であるから、とてもこれを上下一般に通じて行ふとすることは思ひもよらぬ事である。況やそれが旣に禮の要粹を失ふて居る一種の演劇的儀式に過ぎぬに於てをや、

●斯樣に贅長煩coming...

●彼の禮式即ち古禮式なるものが、如何に迂遠にして實行に遠かつたと云ふことは、一寸した古人の逸話にも、ほんの御儀式丈にとか作法のみになと云ふ言葉を見ても知らるゝ。

●それで、私等の今日興し度く思ふ禮法なるものは全く前者とはその主旨を異にして普通の動作なり、進退なりを可成禮容に適ふやう致し度いのであるが、それには勉めて彼の貴族的綿禮を打破し末節を趁ふことを避けて極々簡易に、且つ輕便に即ち平民的普通的に致されればならぬ。禮の要粹はその大精神だに失はざれば、細目や末節は各自の便宜に任せて差支へぬと云ふ位に寛やかに致すが好い。

●世に禮法家なるものがあつて、或は免許だとか秘事だとか稱へて、例のつまらぬ末節を無上の珍寳視して、容易に人に傳へざるが如きは尤も笑ふべきの甚しきものである。私は今後若し禮法なるものが新定さるゝ場合には勉めて然樣なるつまらぬ事は打捨てゝ、左に記する樣な大綱に注意されんことを識者に望むのである

一　上下通用のものたるべき事
一　貴族的綿禮を避くべき事
一　勉めて簡易輕便なる作法によるべき事
一　時勢の嗜好に適へるものたるべき事
一　高潔の心志を顯表するに足るべき態度を具ふるものたる事

●之を要するに禮は活物で決して、之を印板で刷り立てた樣に定むることは出來ぬ、その時と場合とに應じて活用するが大切である。云ふまでも無く、禮法の主目は典雅敬虔の心思を顯表發動するに外ならぬので、この心術だに具備せば作法の如きは時の宜しきに從ふて差支へぬ、否從はればならぬものであろふ。若し禮法が心志の發動を基として起り且つ風俗の反映でありとすれば浮薄、輕佻、嫉妬、僞善などの惡德を以て滿されたる時代には恐くは、閑雅高潔なる禮法は得られぬであら

ふ。今日の我國の國狀は果して吾人が滿足する樣な立派な禮法を見ることが出來るであろふか。

●兎も角も國として一定の禮の無いのは、如何にも不面目なる次第である。然れば如何にもして美い禮式が定めたい、——定まることを希望する。然し禮法は小笠原流でなければならぬの、伊勢流でなければならぬのと偏狹守舊な考を以て居る樣では、到底も新禮の興ることは六ケしかろふと思ふ。故に玆所は大奮發して丁度彼の維新の際に元老等が思ひ切て政事上の改革を致した樣に、極端かは知らぬが、全く從來の古禮などは腦中から捨てゝ了つて考を立てればならぬ。私は斯樣に申せばとて一切古禮を排斥して新に禮式を作れと云ふのでは無い、作法の如きは何れにても構はぬ、只々高雅な心思を基礎として時勢に適ふ典雅な禮式を定るべく希望するのみである。

●私は先年、禮法講習會創立の時に野津大將から一の御敎訓を受けた、それは斯樣である。外國へ行つても、その國々で種々式作法を異にして居るもので、例之ば國王とか大統領とかに謁見するにも手袋を脫して禮をする國もあれば、手袋をはめたまゝ禮をする國もあると云ふ樣にいろ〳〵違ふて居る、それで我國では　帝家で御用ひ遊ばされて居る禮を基として國禮を定むると云ふ方針を取るが好かろうと。これは至極好い御考案であろふと思ふ。今禮を定むるとしても何う云ふ作法が好いの斯ふ云ふ爲方が好いのとそれは百人百種で、とても定まる時は無かろふと思ふ、所謂百年河淸を待つと一般で際限の無い事であるから、一番早道は大將の御考の樣に、朝家でお用ひ遊されて居る禮に由り禮を基として、先づ公會などの作法を定むることゝ致したれば、尤も早く禮法の實行が見らるゝであろふと思ふ。一寸例を擧げて申せば、祝祭日の公會の式とか　行幸啓に會ひ奉りし時の敬禮の作法とか、その外、公衆集會して祝宴を開く時の作法より、年賀、婚禮等の私人の慶吊に屬するものをも追々に定むる樣に致したなれば、終には國禮として一定の禮法の定る時があろふ。それに就ても此等の勞を取らるゝ先覺の士に望む所は禮の制定に當ては區々の末節を趁ふことなく、禮の大主意大精神を失はぬ樣に注意されむことを殊に熱望に堪へぬ所である。

▲女子と鏡

パサル、フオン、シエーンターンは緇奈每夕新聞紙上に興味ある一文を寄せたり。題して、「女子はその一生を通じて、幾何の時間を鏡の前に費すものなるか」といふ、しかして氏の硏究は、六歳より七十歳に至るまでの間に限られたり。氏の得たる統計的硏究の成果は左の如し。

六歳より十歳まで、	一日平均七分間
十歳より十五歳まで、	一日平均十五分間
十五歳より廿歳まで、	一日平均廿二分間
廿歳より廿五歳まで、	一日平均廿五分間
二十五歳より卅歳まで、	一日平均三十分
三十歳より卅五歳まで、	一日平均廿四分
卅五歳より四十歳まで、	一日平均十八分
四十歳より五十歳まで、	一日平均十二分
五十歳より七十歳まで、	一日平均六分

これを合算すれば三十四萬九千五百七十分、即ち五千二百八十六時となり日に換算すれば、まさに二百四十二日となるなり。こゝにおいてその答案にいはく「女子はその生涯を通じて、八箇月の間、晝夜の別なく、その鏡の前に立つものなり」と。今これをわが國の女子の上に考へなば、いかなるべきか。その最頂點の二十五歳より三十歳までとあるは、恐らくわが國の女子の上には當らざるべく、ことにその最頂點の時間の三十分とあるは、こゝには全く當らざるべし。おもふにその朝に、晝に、夕に外出の折に、歸宅の時に、湯あがりの折に、髮結の折に、その一日のすべての時間を數へ來りなば、わが國の妙齡の女子の鏡の前に費しつゝある時間は恐らくは一時間、否二時間にも三時間にも上るべきか。然らばその生涯を通じての時間の計數は、實に驚くべき多大の年月を算すべきなり。

菓實の調理法

農學士　富益良一

柿と林檎

四季共に新鮮なる果實を、廉價に需要することを得るならば、人の健康を進むる上にも、亦た食卓に對ひし時の愉快の上からも、頗る望ましきことですが、或る種類の果實殊に草苺、フサスグリのやうな小果實は、長時日の保存に堪えないものですから、止むなく之を調理して貯藏する必要がある、それで果實の調理法にも種々あつて、或は成る可く生果の狀態を損せぬやうにするもあり、又は全く其の狀態を變へて調理するものもある、此の調理物を貯藏するには、普通に玻璃壜陶器又は鐵葉罐などを用ひて、其の中に密封するのです、今日新式の調理法が發見せられなかつた前は、果實を調理貯藏するには、必ず多量の砂糖を使用して、所謂砂糖漬にしたものですが、多量の砂糖を使用して貯藏したものは、自然其の固有の風味が害せらるゝことを免れない、加之氷菓子或は氷水などの材料に用ふる果汁の如きものは、成るべく少量の砂糖を使用して、自然固有の風味を有つものが望ましいので、今日では其の方法を取るのです。

今や秋高馬肥、顆果累々として熟するの季節となつたから、此の好時季に際して、廉價なる生果を調理貯藏して置て、生果の得られざる季節になつてから、之れを食卓の上に供へて味はつたならば、其の愉快は蓋し少々ではあるまいと思ひます、そこで茲に果實の調理及び貯藏に對する一般の心得と、當季節に成熟する果實の調理法を述べて、家庭庖厨の一助となさうと思ふのであります。

▲果實の調理に對する一般の心得

(一)果實の撰擇　果實を調理する際に深く注意すべきことは、些少たりとも腐敗或は損傷の徵候を現はして居るものを用ひぬことです、是れは一

見不經濟のやうに考へられるから、何人も僅少の腐敗は省みずに、他の完全なる果實と共に調理するのが一般の通弊です、併し是れは大なる思ひ違ひであつて、若し是等の果實を調理した爲めに、貯藏中容器の中で醱酵腐敗を起すことがあつたならば、獨り調理に用ひた果實其の他の原料を失ふのみでなく、勞力を損し或は容器をも再び使用することを得ざるやうな場合が往々あるのです、夫れ故に、寧ろ少許の損失を犧牲に供して、大なる損害を受けないやうにするのが利益です。

(二) 調理の準備　林果、梨果、桃實のやうな大果實は、果皮を剝き取つた後、直ちに之れを淸水の中に投入せねばならぬ、それは果實中に含んで居る酸類が、大氣に觸るれば酸化する爲めに果肉が變色して遂に錆色を呈するやうになるからである、又た多くの場合に於て、大果實の果肉は堅硬なるものですから、調理前充分に淸水中にて之れを煮熟し、果肉を軟弱にならしめて後、調理に着手するのが善い、又た草苺、櫻桃のやうな小果實は、調理する一二時間前に豫め砂糖を撒り掛けて置けば、一は果肉の敗爛するを防ぎ、其の味も亦た大に佳なるものである。

(三) 砂糖の品質　果實の調理に使用する砂糖は、其の色純白にて最も善く精製したる品を用ひればならぬ、普通に車糖を用ふるが適當である、粗製の砂糖を調理に用ふれば、獨り果實の風味を害ふのみでなく、其の色澤狀態などを惡變し、又た其の砂糖の中に含んで居る有害物から起因して、醱酵腐敗を速やかならしむる恐れがあるものです。

(四) 調理用の鍋　果實の調理に用ふる鍋は其の形狀淺くして大きなものが便利です、而して銅鐵のやうな金屬で製したものを避ければならない、それは果實の一成分たる酸類か金屬に作用すれば酸化作用を起して之を腐蝕するからである、若し金屬で製りたるものを使用する際には、琺瑯にて裏付されたるもの、若しくは酸類が直接金屬に接せざるやうに製りたるものを用ふるが善い、若し又た强て銅或は眞鍮にて製せられたる鍋を使用する場合には、使用前に鹽又は酢にて、能う鍋の內壁を磨き且つ洗はれ、ばならぬ、斯くするも尙ほ綠青が浮て、鍋の內面が多少彩色されるを免れないのです。

（五）調理用の竈　果實の調理に用ふる竈は、石油混爐又は瓦斯混爐のやうな速やかに強熱を供給することを得るものであれば、頗る便利であつて、調理品の風味色澤を害することが少なけれど、若し斯様なる完全の混爐が得られない場合には、此の目的に從て火力を急速に强むることを得べき竈を用ふるのが善い。

▲果實の貯藏に對する一般の心得

（一）容器の種類　調理したる果實を貯藏するには、玻璃又は陶器製の器物に容るゝのが利益である。一々これを罐詰にするときは、其の器物が再び使用することを得ないが爲めに不經濟である。

（二）詰入前の措置　貯藏すべき調理品が煮沸したるものであつて、其の容器が玻璃の如き、強熱に遇て破壞し易き物質から製られてある場合には、調理したものを詰め入るゝ前に容器を熱湯の中に投入して之れを熱め置き、そして其の破裂を避けねばなりません。

（三）詰入の措置　調理物を容器に詰め入れんとする時には、先づ之れを片口の類に移し、箸又は匙の柄を以て、其の內側に浮着せる泡沫を打ち破りつゝ、徐かに之れを注ぎ込むのである。若し容器の口が小さくして、片口より直ちに移し難いときは、漏斗を用ふるも差支ない。又た容器は、水を以て濡ほしたる手巾類を幾重にも折り疊みたるものゝ上に載せ置けば其の破裂を豫防するに善いのです。

（四）詰入後の措置　容器の中に調理物を詰め容れたるときは、直ちに之れに口栓を施して密封し、一夜其の儘に冷却せしむるのである然すれば玻璃は溫度の高低に隨て膨脹收縮する性質あるが故に、放冷したる後には口栓が多少緩くなるものである。夫れ故に翌朝再び口栓を緊め直し、乾燥せる涼冷の場所に貯へ置くのです、斯くして一週間を經過したる後、容器を振盪しないやうにして取り出し、口栓が罎の口縁より凹陷せるものは、貯藏に耐ゆるものとし、多少たりとも凸き出たものゝあるときは、空氣が入つて居る證跡であつて、早晩或は破裂を來すべき徴候であるから、直ちに口を開て詰め更ふるべきものです。

今當季節に當て收穫せらるべき果實類に就て、其

の調理法を述べやうと思ふ。

苹果

苹果は俗に西洋林檎と呼ばれ、和名をおほりんごといひ、苹果とは漢名である、英名は(Apple)、學名は(Malus communis)といふ、薔薇科に屬する植物である、苹果は我國在來の林檎の一種であるが、其の香味も亦た果實の豊大なることも、遙かに本邦原產の林檎に優つて居る、支那には元來此の種類があつたといふことであるが、本邦に原產のものとてはないのである、其の初めて我國に輸入されたのは明治五六年頃で、續て明治八年に佛國から良種が輸入された、我國で率先して苹果を栽培したのは北海道であつて、舊開拓使が盛んに海外から良種を輸入して之れを栽培した、處が苹果の性質が善く北海道の風土に好適したから、盛んに繁殖して同地方に於ける果實の王となり、同道に於ける重要輸出品の地位を占むるに至つた、其の後東北及北陸地方にも移殖され、今日では往々北海道產を凌駕せんとする良種が產出される、苹果は風味が高尚で色澤も美しく、熟期の早晩により て七月から十一月まで、殆んど半年の間引續て產出され、其の晩熟種は翌夏早熟種の市場に出るまで、貯藏することが出來るから、終歲生果の狀態で店頭に跡を絕つことがない、夫れが爲めか今日では非常に其の販路を擴めて、漸く他の生果を壓倒する姿を呈するに至つた。

凡て果實は滋味に富んで、心氣を清涼ならしめ、又た血液を清めて其の循環を良くすることは、多くの果實皆な同樣であるが、苹果は殊に其效の顯著なるものである、夫れ故に歐米では、苹果は果實中最も貴重なる位置を占め、其の古諺に、寢る時一個の苹果を食することは、醫師をして乞食にならしむ、と傳へられ、又た、苹果は神の食物であつて、神は苹果を以て其の精神身體を保養して衰弱を避けた、といふことが、スカンヂネビア人の口碑に殘つて居る、苹果の生果は消化が容易く、其の中に含有して居る成分は、腦髓や神

經を更新し、殊に平常坐食して精神の憂鬱を來し、肝臓の作用が衰弱に陷つて居るものなどには、特に効驗が著るしいと謂れて居る、

苹果は頗る種類の多い果實である、其の味からは甘澁、酸に分たれ、其の熟期からは早、中、晩に類別される、早中晩熟各種共に生食に供せられ、又た種々に調理して用ひられ、殊に澁酸の強い種類は、主もに調理或は貯藏されるのである、今一般に苹果調理法の簡易なる、家庭に於て實施され得るものを左に掲げやう

調製貯藏

充分成熟して形狀の正しい苹果を取り、之を四分して外皮及果心を去り清水の中に投入し置き、別に果實の斤量と仝量の砂糖と果實一斤に對して一合五六夕の割合に熱湯を準備する、斯處で先づ砂糖と熱湯とを鍋の中に入れて、其の砂糖が全く熱湯に溶解し終る迄で之を煮沸し、其の表面に浮かべる泡沫を掬ひ去つてから、果實を水中より掬ひ上げ充分善く果肉に附着して居る水分を去つて之を糖液の中に投じ、文火の上で徐々と煮熟するのである、而して果肉が藁稈で刺し通せる位に、軟かくなつた時、火熱を遠ざけて之を冷却し、充分放冷したるときは甕に移し、嚴重に蓋をなして一週間許涼氣の通ずる且つ濕氣の少ない場所に置くのである、軈て一週間經過したならば、徐かに之を取出し蓋を開て鍋の中に移し、五分間許強熱を加へた後、再び徐かに甕の中に入れて密封するのである此の際に甕の口は、靭性の強い紙例へば膜紙のやうなもので密に之を蓋ひ、其の上に鷄卵の蛋白を塗抹して空氣の進入を避けるやうにし冷暗の場所に貯藏し置くのである、

此の方法によれば多量の果實を一時に調理して貯藏し置き、時々必要なるだけを徐かに取り出して、別に小さな甕に移し置いて用ゐることを得るが故に頗る便利である

苹果を糖液の中に入れて煮熟するときに檸檬汁の少量を加ふれば、頗る果實の香味を增すものである、

罐詰

苹果の外皮と果心とを除いたものを鍋の中に入

れ、其の上より熱湯を注ぎ掛け、鍋を強火の上に置いて煮沸し充分沸騰したところで、次には漸やく泡立しむる位の弱い文火の上に鍋を移し置くのである、而して別に苹果一斤に對して、砂糖三十匁、清水一合五六夕の割合に混じ、善く攪拌して充分に砂糖を清水に溶解せしめた後、三分間許沸騰せしめて糖液を製へる、之れが出來た時に、苹果を網柄杓で熱湯の中から掬ひ上げ、果肉に附着して居る水分を去つて糖液の中に入れ、充分果肉の軟らかになるまで煮熟し直に之れを罐中に入れて封緘するのである、

苹果と榲桲實とを合せて一緒に罐詰にするには、苹果の斤量を榲桲實の四倍にして、此の方法に從へば善い

苹果と鳳梨とを一緒に罐詰にするには中形の鳳梨一個に對して、苹果四五斤位の割合、其の法は先づ苹果の外皮及果心を除くと共に鳳梨の外皮を去りて一々善く鄭寧に肉芽を取り去り、觀目を果肉に付ける、これだけの準備が整ふたならば、苹果を熱湯の中に入れ速かに之れを沸騰せしめた後、五分間許文火の上で徐々と徐かに沸煮するのである、此の際別に他の鍋の中に、清水六七合と砂糖一斤半とを入れ、善く攪拌して砂糖を清水に溶解せしめ、此の中に鳳梨を入れて充分煮熟せしめる、處で苹果を他の鍋の中から掬ひ上げ、水滴を去つて糖液の中に入れる其して果肉が充分軟かになるまで煮込み、前法の如くにして貯藏するのである、此の調理品は頗る風味が良くて、且つ高尚なる食料品である、

ジエリー

ウエリーを製へる時は、其の望むところの色に隨つて、苹果の種類を選ばねばならぬ、即ち紅いウエリーを製へる時には、外皮の紅いものと白いものとの製へやうとする時には外皮の淡色なる苹果の種類を選ばねばならぬ、其所で先づ種類の選定が終はつたならば、フランチルのやうな布片で、外皮に附着して居る塵埃の類を善く清潔に拭ひ去り、其の儘外皮も果心も去らないで之れを輪切にして鍋の中に入れ、漸く果實を覆ふ位清水を加へ、蓋を鍋に施して煮熟し、果肉が充分軟かになつた時に、フランチル又は毛製の布片で製へた嚢の中に汁液

と共に果實を入れて之れを搾るのである、此の際强く袋を壓して搾れば漏出した液が曇色を呈するから、餘り强く力を加へぬやうに注意せねばならぬ、搾り出した汁液は直に鍋の中に移し、一合の汁液に對して、八十匁許の砂糖を加へ善く汁液と混して羹狀を呈するまで、强熱を加へて之れを煮詰めつゝ、表面に浮び來る泡沫を除かねばならぬ、而して凡そ二十分許の後、食匙を以て其の液を掬ひ出し、其の少量を小皿の上に移して、暫時放冷せしめた後、匙の緣で少しく其の表面の部分を劃り其の内部が多少固狀を呈して居ればよし若し亦、た否るときには尙ほ五六分間煮熟を繼續して、再び之れを試みれば善い、ウヱリーが出來上つたならば、之れを容れるべき器物を熱湯の中に浸し、其の溫氣の冷ねない間に詰め入れて、封緘を施るればならない、又た容器に適當なる嚴重な蓋がない場合には、膜質に厚い紙を二枚重れ或は二ツ折にして容器の口緣より外に出る位に之れを覆ふて封じてから、冷水の中に浸した海綿で其の上を抹つて水分を膜紙に與へれば、それが乾いだ時膜紙が幾分か收縮する爲めに、膀胱膜のやうに强靭なものとなる、さりとて膀胱膜を以て膜紙に代ることは望しくないのである、然くして冷暗の場所に貯藏して置けば美い

干苹果

干苹果を製するには晩熟種のものを選ぶのが適當である、干苹果は他に調味物の力を借りないので、其の原料たるべき苹果の味に依て、隨つて干苹果の味も種々異なる譯であるから、原料に就て善く選擇をせねばならぬ、尤も澁氣のあるものも乾燥すると共に澁味は脫けて甘味を有つやうになるが、槪して甘味の種類の苹果から製へた干苹果は品質が優等で味も良い、其の法は先づ苹果の外皮を剝き輪切にして果心を刳り取り、一列に板の上に排べ、殆んど革のやうな色合になるまで、每日日光に曝らすのである、之れが充分乾いた時には紙の袋の中に入れて、濕氣の來ないやうな場所に貯へれは宜しい干苹果は主もに菓子の代用に供せられ其の他調理品の原料に用ひられる

此の他苹果の調理法は苹果酒(サイダー)の釀造の如き或はピツクルの如き種々あるが、皆な多少の器械或は

數種の材料を要するもので、簡便に家庭庖廚で行はれ難いから、茲に省略することゝする
苹果はまた鹽漬にして之れを用ひ或は佛國などでは鰊と共にサラドとし、調理されるといふことです。

柿

柿又柿(和名かき)は英名を(Japanese persimmon)と稱へ、學名を(Diospiros kaki)といひ、柿樹科に屬する植物である、我國では古き以前から栽培せられ、果實中最も多額に産出せらるゝものであつて、ある縣などでは一年七八万圓の巨額を其縣下のみから輸出して居る本邦人は他の果實よりも特に柿を稱揚して食ふ、併し種類に依て甘いものと澁いものとがある、甘味のものは重に生食せられ、澁味のものは種々に調理され、また柿漆を製造するに用ひられる、柿の材は非常に質の堅いものであるから、器具等を造る材料として貴ばれて居る、今茲に澁柿の調製法に就て二三を述べましやう。

醂柿

醂柿は澁柿の澁味を變じて甘くならしめたものであるから、甘味は割合に少ないが、また淡泊として風味の良いものである、其の製法は先づ澁柿の漸く黄ばんだ頃に採て、普通の桶或は樽の中に果皮を傷つけないやうに列べて入れ、温湯を注ぎ入れて一晝夜間其の中に漬て置くので、温湯の温度は大抵華氏百度が適當である、漬て置く間に湯が放冷るから善く蓋をなし、又た樽の周圍は藁のやうなもので厚く包んで置き湯が冷た時には熱湯を加へるやうにする、さすれば翌日は悉皆澁味が脱けて甘美なる醂柿が得られる、併し餘り熱い湯を用ふると外皮が裂けて爛れるから注意せねばならぬ、又た此の温湯の中に蕎麥稈や栗稈或は稲藁から取た灰汁を加へれば一層完全に調製することが出來る、

他の一法は澁柿を酒樽に入れて、其の酒精瓦斯の作用で澁柿を甘くならしむるもので、其の法は酒を明て程たゝぬ未だ酒氣の強い樽の中に澁柿を入れ嚴重に蓋をして一週間許り其の儘に置けば、澁

味は全く去て甘味を生じて來る、普通之を樽柿又は樽拔柿といふ

白柿及烏柿

白柿と烏柿とは全様の製法であつて、白柿の未だ充分乾燥しないものを烏柿といふ、これも矢張り澁柿から製へるので、其の法は澁柿の漸く黄色になつた頃に、蔕に一寸許小枝を付て採り、薄刃の庖丁で頭部から薄く外皮を剝き蔕の處で止める、而して剝皮た果實の小枝の部分を藁で二個宛結付け竹竿に懸けて軒下にでも乾して置けば善い、又た丈夫な新らしい二三尺位の繩を竹竿に吊して、其の繩目の所に小枝を挟んで乾燥せしむる、其の一連の繩には凡そ十個位が適當である澤山に製へやうとする時には此の法に據るが善い

凡そ乾果は雨露に觸れしめないやうにするが肝要であるから、何れの方法に據るも、夜間は舍内に取り込むやうにするか、或は薦のやうなものを掛けて雨露を防がればならない、斯くして三週間許過れば、果實中の水分が減じて果面に黴が出來る、それと共に澁味は全く無くなつて甘味が加はつて來る、此の時に收納て食すれば、果肉も軟らかで甘味も淡泊して居る、之を烏柿といふ、併し之は長い間貯へて置くことが出來ないから尙ほ之を新らしい薦の上に列べ、若し形狀の歪んだものなどがあるならば、指先でそれを直し、其の後十日間許每日日光に當てゝ乾燥する、其處で之を納れて置くべき匣を拵ち來り、新らしい清潔な藁を匣の長さに切り、能く塵埃を拂ひ落して下に敷き、其の上に一ツ一ツ少許づゝ離して列べ、又た藁を布ては白柿を列べ斯ういふ風にして匣に充ちたならば蓋を施して貯へて置くのである、其の後二週間許經過した頃、晴天の日を見計ひ、匣から出して二三日間日光に乾し再び前のやうに貯へる、斯くすれば自然に糖分を增して、白い粉末が一面に表面に發出し、甘美なる白柿が得られる、尙ほ長い間貯へやうとする時には每月一度づゝ匣から出して、一二日間日光に晒らすが善い、白柿を製へる時分天氣が雨續きの時は、炭火を以て舍内で乾燥する

串柿

澁柿の將に黃色にならうとする時分に採て外皮

を剝き、竹串に刺し連られて毎日之を日光に乾し、其の表面に白い粉末が發出したならば、之を匣の中に入れて貯へる

烘柿及包柿

烘柿と包柿とは多小其の製造に區別はあるが、共につゝみがきといふて居る、之も澁柿の黄色にならうとする頃採て、烘柿は其儘之を匣の中に切藁を布たものゝ上に列べて並なして置き、包柿は匣の代りに藁苞の中に其儘包で置き、共に其中で果肉が自然に熟するのを待て食するのである、其味は至て甘く肉は柔らかに口の中で溶けるやうな感覺がする、此法に據る時は凡て外皮を傷つけないやうに注意しなければ、腐敗を來す恐れがある

白柿は菓子の原料に供せられ、美濃地方では白柿から柿羊羹といふものを製へる、此他日向の都城附近では押柿と謂て、柿の實を輪切になし種々な模樣を果肉に付けたものを製へる、又柿團子とて澁柿の果肉を搗き碎て蒸し、之に米の粉に糯の粉を二分位交ぜたものを水で固めて蒸し、此の二つのものを臼に入れて搗き上げたものを、或は其儘喰ひ或は燒て食ふ、此他澁柿から柿澁を採る、それは澁柿を臼で搗き碎き桶に入れ水を加て一二日其儘に置きたる後、之を壓し搾て粕を除き、半年間樽又は甕のやうなものに容れて置けば上等の柿澁が得られる、是は紙類、漁網、樽桶類、器具類或は建築物等に刷き塗れば防腐の効が著るしいので需要も亦た廣い

柿の種類は五十種許であるが、三十餘種は生食せらるゝ、是等を甘柿といふ、鶴ノ子柿御所柿等は就中良種である、核無柿、西條柿、蜂屋柿等は白柿の原料として最も良く以上の種類の外衣紋柿、新平柿等は晒柿の原料に、君遷子柿は串柿に、蜂屋柿は烘柿に小澁柿、信濃柿、わなそ柿等は柿澁を採るに適して居る、

小春日和

茶席の献立

廣田星橋

世に茶の湯料理の献立一通りは書物にも澤山出て居りまして、夫々の方は御存じですが、之を能く味つ

て試驗の上、此献立は自體斯ふいふ式法であるが是は斯ふいふ鹽梅に料理した方が、よいとか惡ひとかいふ實地研究談は餘り記したものがないやうですから、私は多年立派な宗匠や其向の料理人に質問したてと、自身が研究致しましたてとやら取交せて茲にお話し致しますから虚説か實説か有志の方に御試驗をなすつて頂き度と存じます、

偖此献立は書院と圍ゐの茶の湯に依つて區別がありまするが、茶席の料理は常とは違つて事少なにさつぱりとして、殊にかはつたてとを嫌ひまして都て心持工合が肝要と申します、書院の料理は式法がありまするが茶の湯は元來隱者の交會であるから、式法には係はらず有の儘にする心持ですけれとも、膳部は本汁、二の汁、引落し、平、燒物抔の次第は混雜せぬやうにせねばなりませんが、數奇料理といつて好奇心に驅られ、異つた趣向を調理することもありまする、又料理人は式法を知つて調理は致しますけれと偖膳に向つて調味の摸樣出來、不出來の工合は分らぬもので、尤鹽梅、切目どいふことは其責任で、併而雅味、物數奇の工風は度々席へ出て膳へ坐つた方が何となく用意があつて畢竟實地の經驗がありますから、工風が結構でありまする、茶料理は第一に器を見まして其程々に切り方盛り方を致しますが宜しひやうです、先書院、圍ゐに就ての違ゐを申して見れば

◎書院の本汁
たゝき菜、すりみ流し、又鳥のたゝき初茸、松露を添へます、

▲鱠
鯉の細作、子和、海素麪、岩茸か、其外取合せ好し、人參、大根の類を花形に切り細工をするは數奇屋では用ひず

▲猪口
いり酒

▲平
鴨、はり午蒡、初茸、玉子せん、麩、みつば、の類、之を薄葛か「ずまし」にするが宜しひのです、

▲燒物
尾、頭ある物、

◎圍ゐの本汁
たゝき菜、ざく／＼豆腐か常の燒豆腐を切つて遣ひます、鳥を遣へばさゝが

し午蒡を添へます心持が宜しひ、又鳥の切身ならば午蒡おろしも宜しひ、

▲鱠　鯉の細作り、栗のせん、栗なくともいり酒、酢溜りならば猪口のいり酒は要す、

▲平　鴨投作り、か亂切、皮午蒡又は松露の小口切杯宜しきか、

▲燒物　切り燒物といふやうな無雜作が好です

先右の様に取合せる心持が好ひと存じます、献立に餘り異つたことを好むは惡くすると「酢豆腐」といふものに傾ひて味なき品を侑めるやうになりますで、此癖は元調理に委しくないからと申してもよい、兎角會席は空腹をしのぐ爲の趣意でありますから、珍膳佳肴を盡して待遇なさずとも足りるので。立派なのは好みません、併其催主の身分に適應して遣るべきことで、尤同輩貴人の區別に注意するは勿論でありまする、昔日京都に茶道具の塗師で茶人の數奇者がありましたが或來客を待遇すに細工場の奥の四疊半に釜を掛け、新しき「へぎ」に燒飯を五ッ種のせ、味噌燒で楊枝をつけて出し、酒お好みならば差出ますと有合の品を手料理して出しまして薄茶を侑めたといふ話がありまする、是茶の本意ぢやと申します、先貴人への會席には「埋み豆腐」を遣ふはせまじきことで此は侘びた茶席の節に遣ふものと、して居ります、客が富豪の人杯で、ごまめ鱠にウルメ、赤鰯の燒物の類を客へ侑め、亭主は勝手に鴨の平に鯛の南蠻煮杯で遣つた人がございましたが、貴賤の差別なく數奇料理は一汁、三菜に限るがよいかと存じます、菜數の多ひのは狹ひ圍の内では煩はしひ嫌ひがありまする、極侘となれば一汁一菜か二菜も面白ひかでございます、先秋季の料理をお話し申しませう、

(これは普通の献立にも應用さるべし)

▲刺身　鰹をそげ切りにしておろし大根に陳皮唐辛子で用ゐる

▲鱠　生り節をむしり、赤貝を二枚におろし、酢味噌を別に添へる又せいごは短冊に切つて芝海老と酢、鹽、酒に和三盆を加へ味を着けておろし山葵を添へる、

▲和物　初茸の茎を細引で味噌で和へ、赤貝を二枚に剝ぎ白味噌であへ取合せる、
又鮑か鱒を細作りにして味噌であへる、

▲蒸し鱒　鱒を細作りにして葛溜りをかけ擂り生姜を添へる、
又鮹を水と酒で和らかく能く煮て醬油を少分に加へ、煮しめてからタプ／＼切りにして黒胡麻を擂り味噌に醬油少し入れ、酒と酢を加へ、酢気のある程に塩梅して馬尾篩で鮹をあへる、

▲汁　青大豆を擂り流して、白味噌を加へ擂ると青汁になるで岩茸を取合せ、芝海老を擂って「つみ入れ」を豆程の大さに取って一寸ゆがひて實とする、
又寄麩を實とするには生麩一升に魚の擂り身を五合程、玉子を五ツ、山の芋を加へ、酒塩を入れて右摺合せて丸めに作るか又角めか、好み次第に取ってザット湯煮にして用ひ、之を二の汁に用ひる時は、塩醬油で作るがよし、醬油斗りでは苦味を生じて悪ひ、
又貝割菜、即菜の芽出しと蒲鉾を用ひ、辛子を落す、

▲煮物　鯛の鱗をふき、三枚におろし、鎌の下の身を好き程に切り、潮煮にしてみつ葉を切って「せん」とする、
又鯛を一ト塩にして醬油と水を半分々々に加減して、出し汁で煮立る、即せんば煮にするのである、又鰹のつぺいといふを作るに鰹を一寸四角に切って能くゆがひて、慈姑の皮を去り、一寸ゆがき、皮牛蒡を輪切りにして共に味をつけ薄葛をかけ、擂り山葵を利せる、

▲葛引鯛の刺身　(此以後晩秋の献立)、此は鯛を刺身のやうに作つて葛の粉をといて能くこれを包み、ザット湯をくゞらせ、水に一寸漬けて刺身にする、

▲鯖膾　鯖のカブラ骨を程よく切り、湯がひて辛子味噌で用う、
又松茸を其儘ぬく灰に入れて焼き酒塩、酢、砂糖を加減して煮立せ用う、

▲玉子和　此は黄味、三分の一、味噌三分の二の割りで能く擂り、松茸の湯がひたのをあへて用う、

▲崩し豆腐の汁　此普通は豆腐其儘入れるが一寸汁で煮過ると味が悪しくなる、で一旦湯煮を一寸して小口から崩して入れ、直に用ひる、

▲合鱵　鱵を開ひて骨を抜き、別の魚を擂り身にして厚さ四五分程に塗り、上から別の鱵の開き身を合せ、醬油の付焼にする、

▲同身玉子　新鮮の玉子を鍋杓子で受け、煮湯の上へ浸し、杓子へ湯の入らぬ程にして身の固まる迄支へて煮る、

▲小鳥薄葛　小鳥の毛を引き、能き程に切り、はらゝ子、初茸、短冊に切た大根を薄醬汁で煮、薄葛をかけて用う、

▲鮭の薄身　鮭の塩を戻し、好ひ身を薄く剝ぎ、好き程に切て

松茸を剝ぎ、薄醬汁で煮る、

▲蛸煮　蛸をツブ／＼に切り、湯がひて牛蒡をセンに打ち、黒豆と共に煮る、

▲葛蕪　天王子蕪を能き程に切り、前記の玉子の製にしたを切りにして葛溜りで用ひる、

▲鮑小煮　鮑を好程に切り、湯がひて、むか子と肉桂を取合せて煮る、

▲貝燒　海老を湯がき前の如き玉子を輪切りにして鮑と木茸を細引て取合せる、

右は當季大概の調理で、これは普通料理に應用して至極有益な料理法と考へますから皆さん、どうぞ庖丁の勢を取つて頂きたいです、

（完）



遊戯

新式 女子遊戯

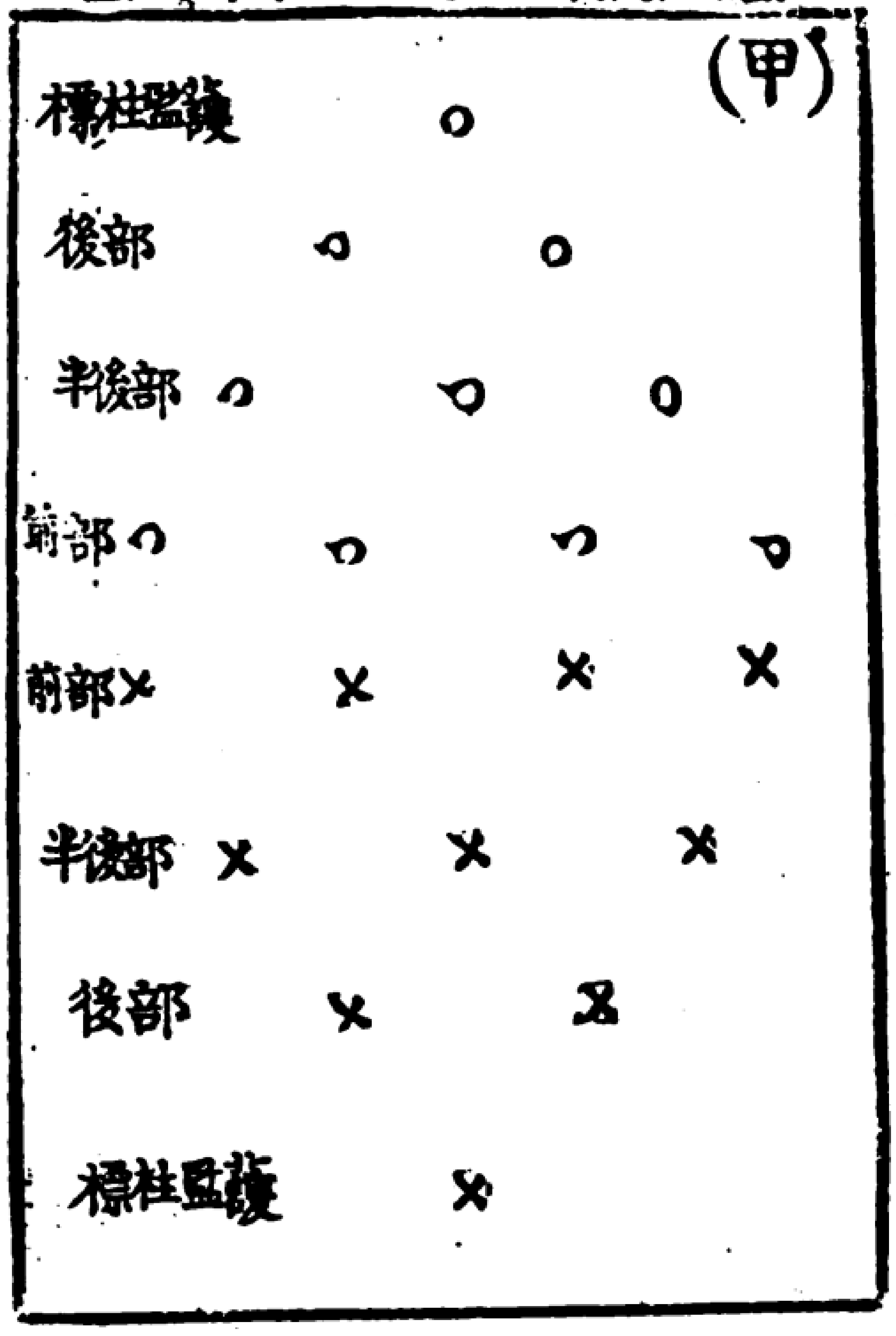
白井規矩郎

▲戯場。 此遊戯は學校でも家庭でも出來ます、少し廣い芝原か乃至は立木の少ない石のない場處を要します、尤も茲にはアメリカ流で大變廣い場處が入る樣に書き出したが日本と米國とは庭や運動場の工合も違ひますから、適宜に縮めてよろしい。

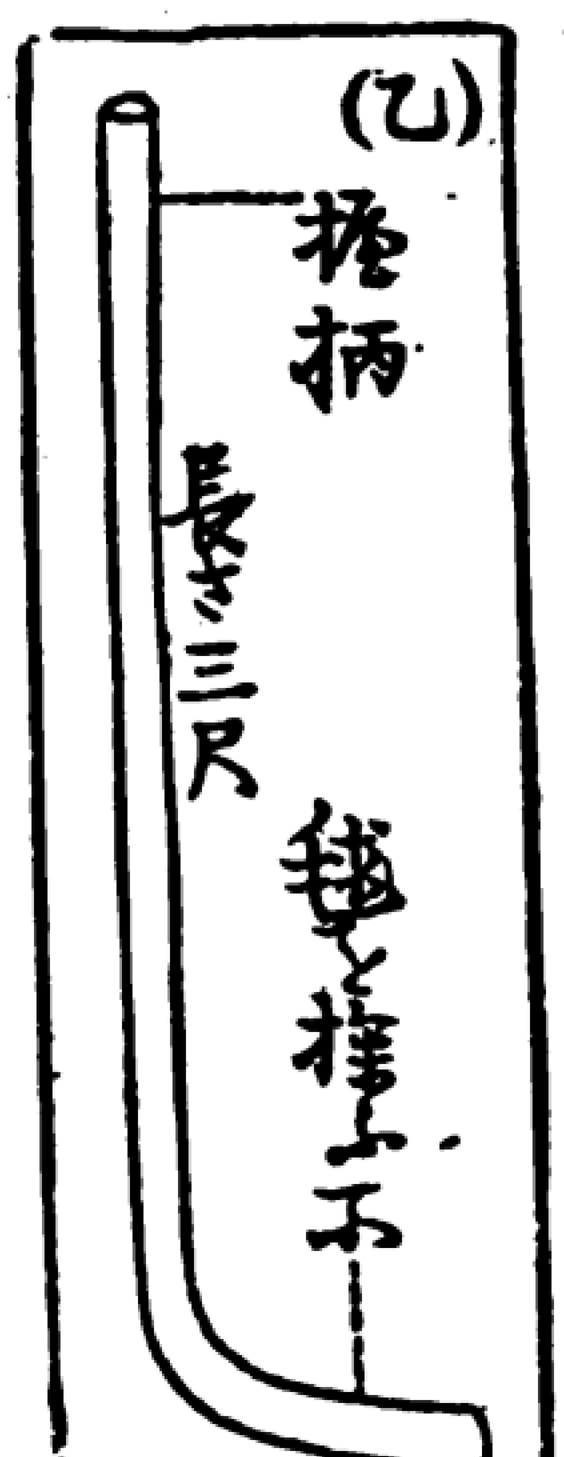
▲人員 全體二十二人を一組として之れを兩組に分ち甲圖の如く、場處を占める。

則ち第一圖の如く兩組とも各前面に五人づゝ、半後部に三人づゝ、後部に二人づゝ、標柱監護に一人づゝを要する。

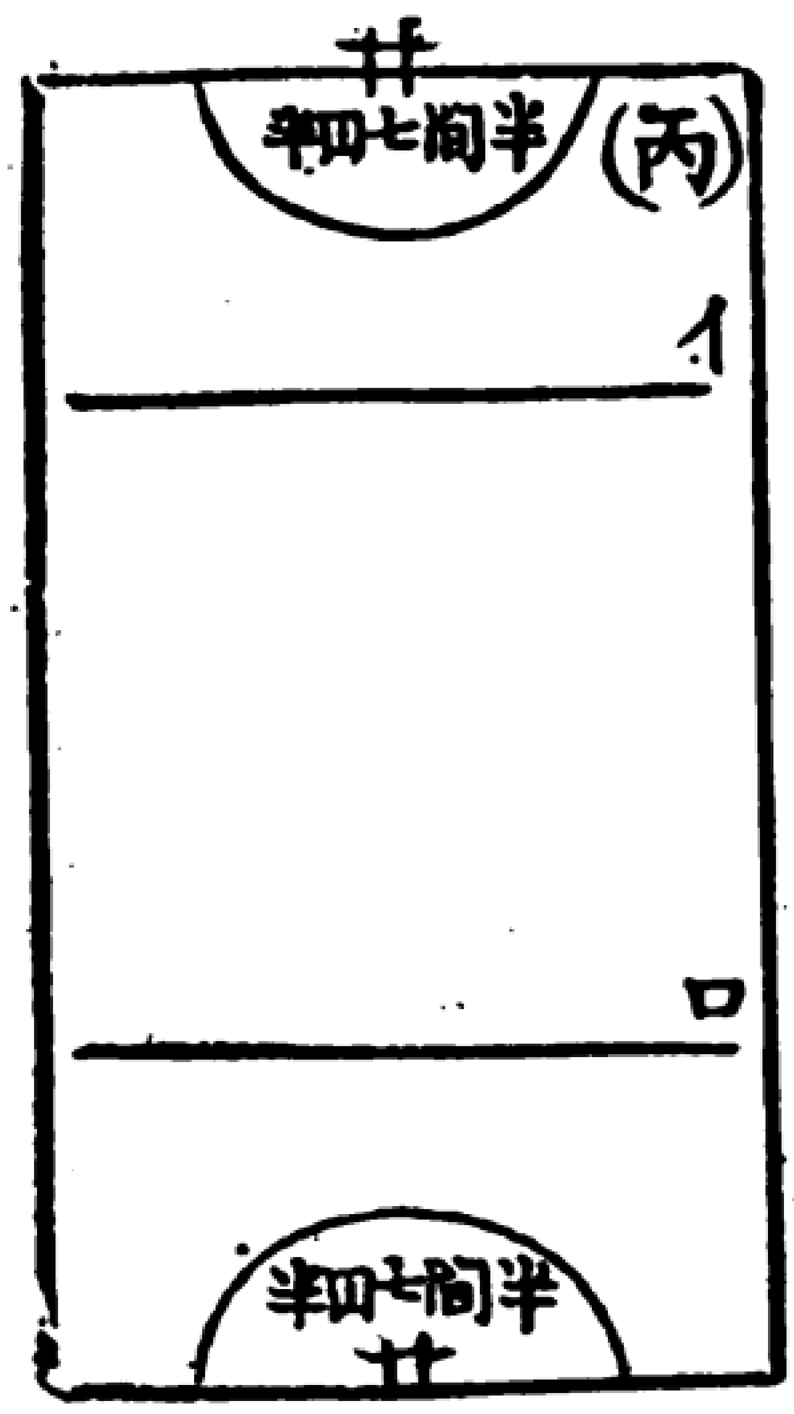
遊戯の始めに各人の占むる位置を示したるもの　○印は甲組×印は乙組



▲用具 此遊びはベースボールに用ゆる固い護謨製の毬一個と、其毬を撲つ投げる棒が一人に一本づゝとして都合二十二本、此棒の形は普通のホッケーに用ひます棒と同樣で、乙圖の樣な形、これは天然の木の枝で挽らへ向の形をして居るものが澤山あるから、其れを間に合せて使ふのが便利です、併し成るべく強いのがよろしい東京では縁日などで賣て居る杖屋から見付けたら幾くらもあります、其れを倒まにして使へば上等、又た地方では樹の枝が何にかで恰好なものが澤山ありませう、



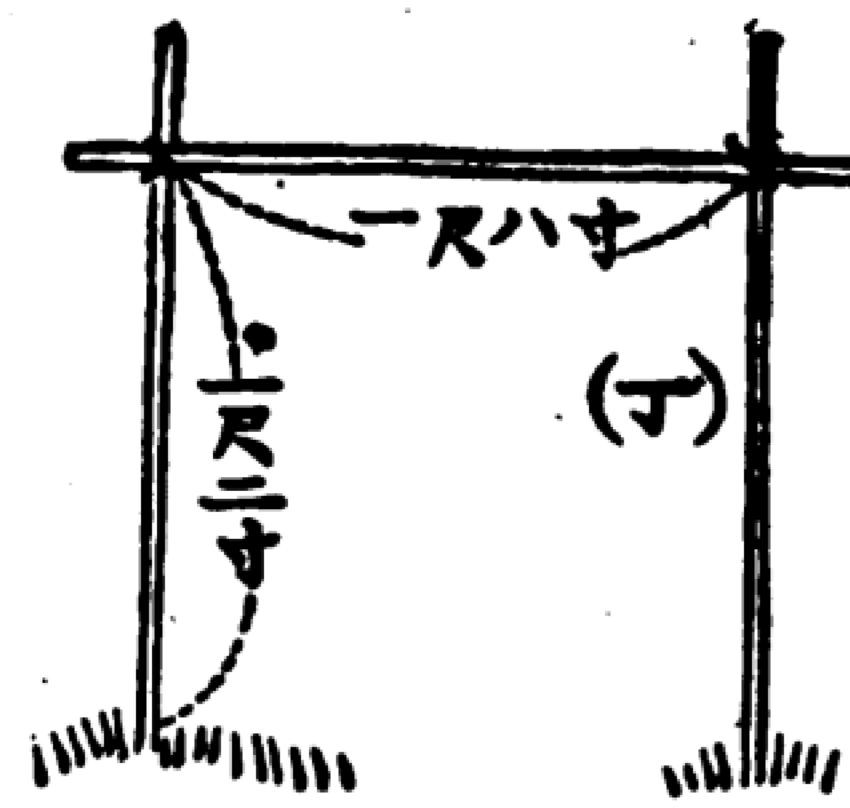
▲場處の區劃 丙圖の如くフートボールと全く同じ結構で、長さ百十ヤード(凡そ五拾間)横幅五十乃至七十ヤード(凡そ二十五間乃至三十五間)の長方形として、其兩端から二十五ヤード(凡そ十二三間)の處へ線を引く



尤もこれでは餘程廣い場所が入ることになるが、場處に應して横縱を適意に縮めても差支ひなし。

▲標柱 は半圓形のある中央へ丁圖の樣にし

て双方へ一個づゝ建てる、高さ一尺乃至一尺二寸、横幅は一尺五六寸位



▲遊戯の目的　鞠を棒で掬つて敵の標柱を通過させるので、其の甘く通過させた組が勝となる。

▲戯者の規め　此遊びはフートボールや普通のホツケーと違ひて、戯者は決して横に走ることを許さない

則ち始めの五人はイ圖の様に、戯場の全面を五分したものとして假想線を置き、其線間だけは縦は勿論横も隨意に動けますが、鞠が一旦其線を逸して隣の線内に這入つたときは、敵味方に拘はらず他のものに譲るのです、

次の三人はロ圖の様に、又た後の二人はハ圖の様に、何れも假想線を置いて其線内で働くのです。

但し監督者は何れも中圖外に出ることは出來ない、

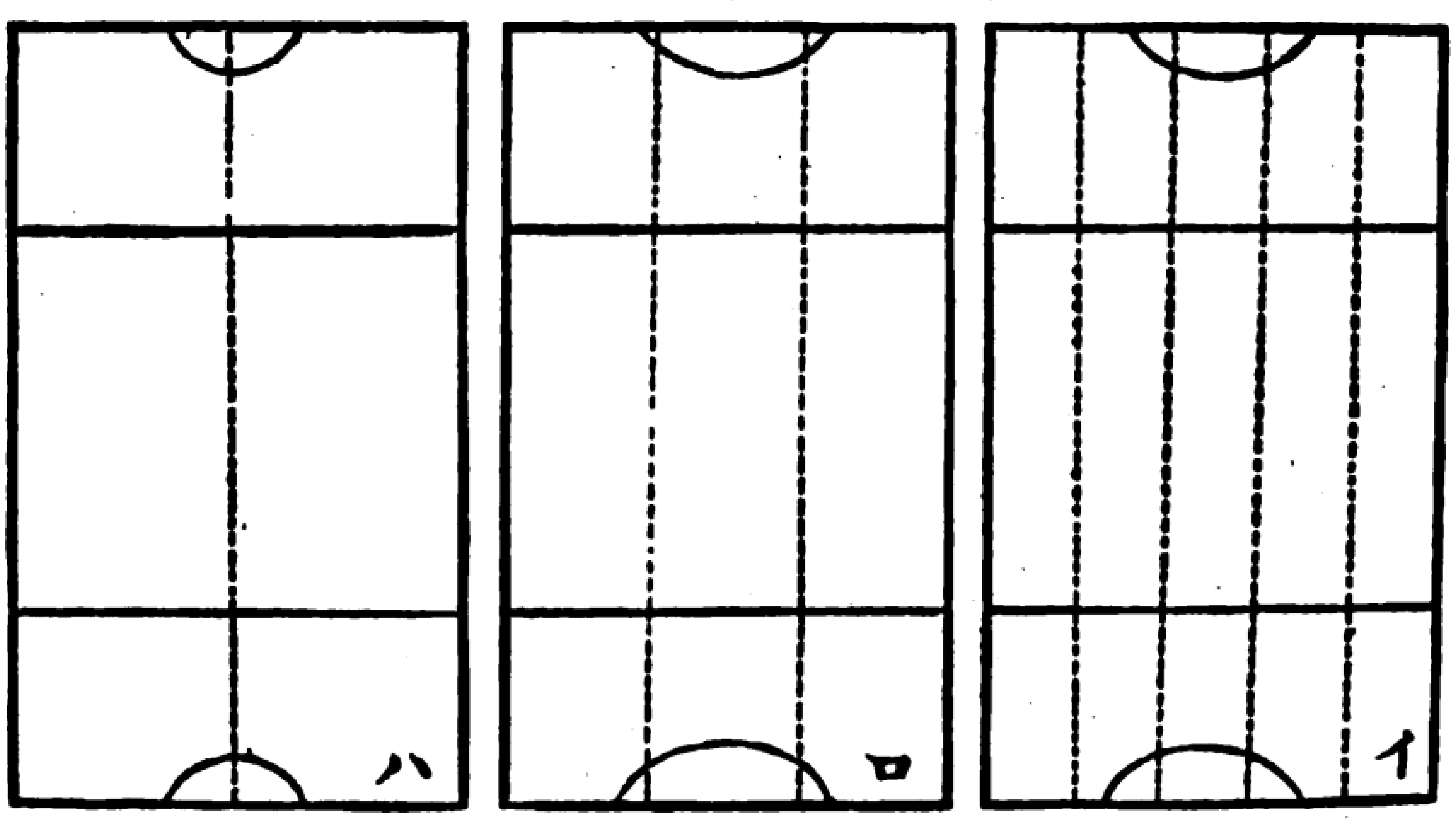
この假想線は鳥渡考へると大分混雑する様ですが、實地で行つて見ると熟練するに從つて、自然と容易に判別が付くのです。

それで鞠が戯場外に跳出しましたときは、丙圖の(イ)又は(ロ)の處へまで持て來て、其れから又た始める。

此遊びに付ての規則は先づ右の如しとしてさて次に遊び工合は如何

場の中央に敵味方が五人づゝ排列して居る處へ、始めは誰れか鞠を徐かに地上に轉送する、スルト五人居る中の誰れかの前で止まるから、鞠の止まつた處に居る敵と味方は、先づ一二三と云ひながら鞠の少し上で棒と棒とが叉形になる様に打ち合す、ソコデ三度目に双方で鞠掬ひ競ふて、其旨く掬た組は直ぐに敵の標柱の方向へ投げるのだが、(矢張其篭柱にて投送するもので、手で投げてはなりません) 直接に手で致す譯でないのですから、二人の中必ず一人は仕損じて一人は甘く掬ふとか、又た二人とも仕損じます、

占線は假想線也



(二人仕損ずれば又た一二三と棒を打ち合せて始めからする、尤も前に掬ひ損じた爲め鞠が陣の人の方へ滑歸したら、前のものは止めて其鞠の前に居る人が始める) 掬つて甘く投げても決して一度では敵の標柱まで届かぬから、直ぐに鞠の後を追つて行つて又た掬つては投るのですが、其處には敵の方にも後部に澤山人が扣へて居るから決して一人の自由にならない、鞠が來たと見ると其近處に立つて居るものは、又た直ぐに掬つて對手の方へ還ひ歸へしますので、中々思ふ様に容易くは敵の標柱を通過しませんし、又た前に申す通り各自の假想線がありまして様には隨意に往復されるが、鞠が横にソレると假令自分の掬ひ投げたにしても、己れが組の中で他のものが走つて來て助けなければ、見すく\敵のものとなることがある。

竹柏會臨時大會の記

石榑千亦

わが耳しひたり。日によりてかも然る、病によりてかも然る。さても豆の如き圓豆の如き歌人のみいでゝ、いまだ北の海千島の冬のさまよみいでしものなく、南の洋臺灣の夏のけしきうたひ出しものなく。天地鬼神はいはずもあれ、活きたる人間の心をも動かすに足る歌なきを歎き、海をこえ、西の方清の國に旅して、新運の榮たらむと雄たけびふるひたちし佐々木竹柏園の主人の君を送らむ園遊會の日なればと、しひてその會場なる小石川區雜司が谷酒井伯の邸にものしぬ。

門を入ればやがて庭なり。庭を入ればやがて一むれの大きなる家あり。家の前に、白地に赤の筋入りたるリボンを蝶々の如くむすびしるし胸につけたる若き人三四人たちて、かなたへと指さす。さゝれし方にゆけば、右に黄散まちの小田あり、青き葉のみ殘れるはあやめ杜若なるべし、花さかばとなつかし。左には廣き池あり。石の橋、瀧水の落ちて小田に注ぐ所なりけり。路はやう／＼に高くなりて小阪をなせるに、大樹小木枝を並べて蔽ひ隠れり。路にそひて池にそひて平らになりたる處藤棚あり、その下に掛茶店しつらへり、[illegible]餅團子など合店なるべし。人の後につきてなほ上りつゝ、花さく草木もて垣のやうにせる處をめぐれば、棟も壁もみな硝子もてつくりあげたる家の前にいでぬ、温室といふものなるべし。石敷きて廣くしたる入口の右にも左にも、この國の種にはあらぬめづらしき木立てり。

洋服きたる人案内す。この室守なるべし。これはかれはと指していふは、其名その説あかしなるべけれどきこえず。ともにゆきし人のかつ笑みかつ語るは、めづらしき花一つその束れたる鉢にさゝまほしといふにかあらむ、其一鉢をわが机の上にもすゑまほしといふにかあらむ。出でゝかの案内人に會釋しつゝ、もと來し路を下りて右に折れ、空を蔽へる大樹のもとより仰ぎ見れば、最高き處に四阿あり、人四五人たてり。何ぞとのぼり見れば、飴細工の翁こゝを占めて、竹の先にいさゝかの飴つけて瓢魚などふきなしつゝあり、歌や文やかくたやすく吹き成し得るものならば いかに面白からむなど、はかなこと おもひつゞけつゝ 下る。

叢薄のなかしげなる茶室あり、籬は苔むして其上に すし店とかける札はりたり。こゝを下りて突き當れば木の橋あり、松おもしろき中島にかよはるべし。島の松蔭には近衛軍樂隊の一隊とり／＼に樂器とりてかなでなり。そこより廣庭の方へ太鼓の如く丸く石の橋かゝれり。わたりて見まほしけれど、妨げにやならむと池につきてめぐりくれば 丸き小山あり。その下はやがて青芝の毛氈たることき庭なり。

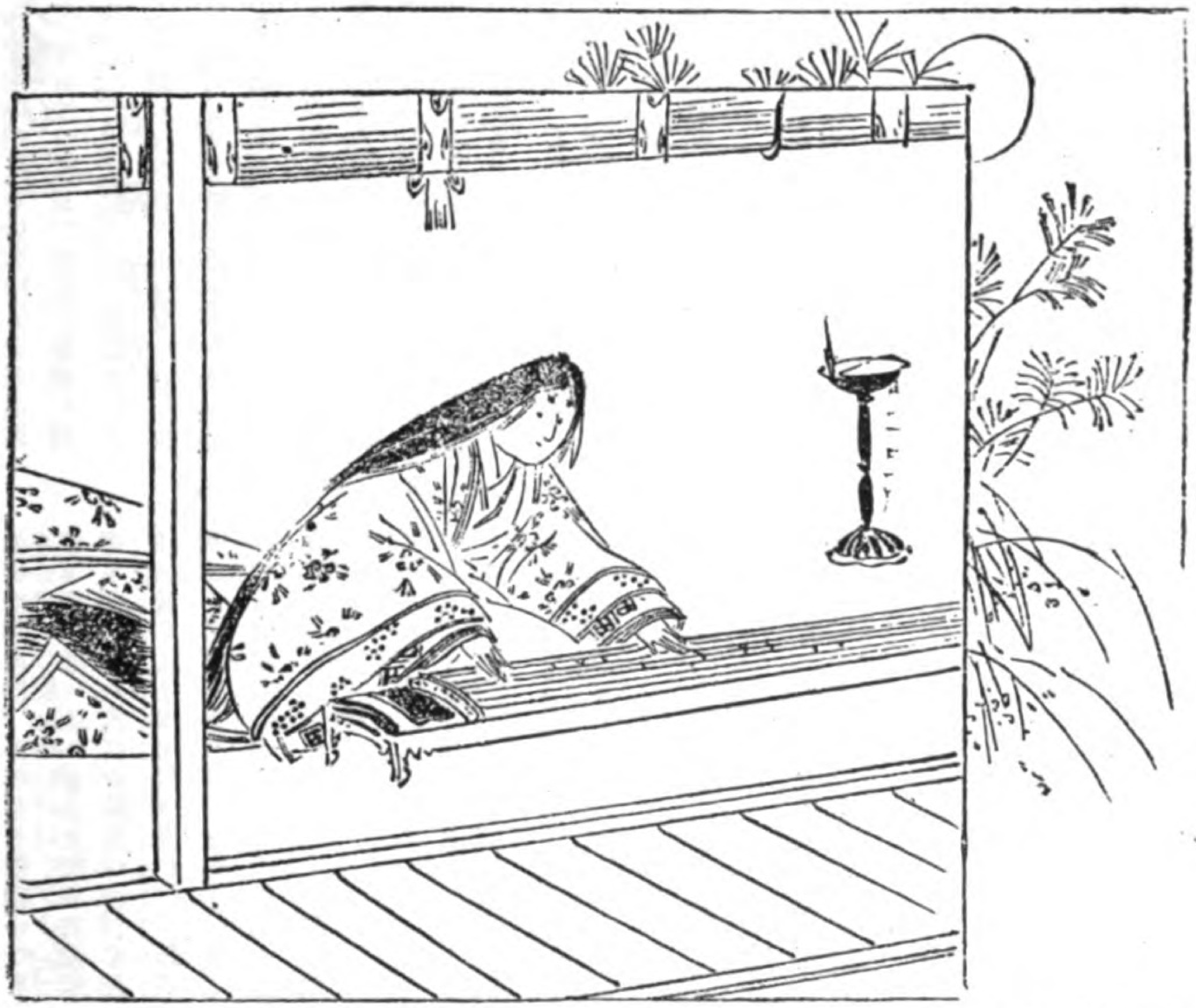
庭の眞中にビール店あり、天幕はりて赤く丸き提灯かけつらね、中には大きなる卓すゑて、コップ酒つぎなどきら／＼しくならべ、いつにても開かるべく客まちがほなり。こゝより來ればやがてかの中島に通ふ太鼓橋の前にいでぬ。めぐり／＼て見る、見るさま處々にかはりておもしろく、一歩あゆみてはとゞまりて見、見ては歩み、歩みては見つゝ、もとの會場の前にもどりぬ。

空殘る隈なくわたりし雲は、一片々々とちぎれておちそめたるに、急ぎ會場の入口にくれば、會主佐々木竹柏園の主人の君は要の君と共に、來る人のをも／＼にこやかにむかへませり。委員の君たちもこゝに集まりて、くさぐさとむつかひをれり。

常に歌によまれけむ竹屋の渡、そも大川のわたしとぞいふなる。釣來た

れけむ竹芝の浦、そも品川の海とぞいふなる。かゝる渡、かゝる海ならましかば、長き袖寛けき袴雪駄駒下駄何にてもあるべけれど渡しといへど七里も横ぎらでは向ひの岸につくを得ず。海、同じ海なれど、幾千噸の大きさ十幾潭の早さにても、一週間を經ずてはかの國にわたるべからず。この渡この海、姫君ぶりの裝にては便あしかればにやあらむ、手なりの袖足なりの袴になりたまへる。起居見るからかひ〴〵しげなり。背丈といひ肉付といひ萬足らひたまへば洋風の衣着たまへらむが見まほしとおもひつゝる事ありしに、まことによくぞ似合ひたまへる。菱形の帽子に金釦の衣、早う大學にましゝ折の寫眞、そは拜しつることありしも、頰痩せて今の御姿にくらべまつるべくもあらずかし。

男は右の方に女は左の方にわかれ居ながれたり。床には不二のかたかける大きなる掛物かけて、父君母君のお畫かけまつれり。その前



には机すゑて、會主の弟君數多の短册とりて立ちませり、一枚つゝ机の上にうつしおく見れば、披露したまふなるべし。耳かいほじれど甲斐もあらず。

八束髯胸元にかいたれ、りゝしき中に愛らしき面わしたる依田の翁は立ちて、唐國ぶりの黃色なる紙かいひろげよむ、祝辭なるべし。何事かあとにて笑みつゝいはれたれど、きこえず。

時の大臣をはじめ謂ゆる政府委員を睨みつる其目つき、叱りつる其口つき自らしるく、威風あたりをはらひたるは島田氏ならずや。しかもたゞ見るのみなりしわれはその文についての言立が、はたしてかの議會にてのやうに、鋭かりしやはげしかりしやを知らず。

はじめて竹柏會にてはなされし春風のされ咄のやうにおもしろかるべき小波ぬしの、それもきこえぬをいかにせむ。

圓朝の名うけつぐべきは、今の落語家のうちにてはたゞこれのみ

といはれし圖衡は、かはりてたてり。

何をかかたるらむ。

見る物なる山本東次郎が狂言狐塚ははじまりぬ、その姿その形のをかしきはさるものから、詞わかぬは興うすき物なりけり。にもなほ聞くものゝ中なるべきか。

これにて家内のははてぬ。皆出でゝ、かのビール店にそひたる小芝山の上にたち、會主の君を眞中にすゑて、紀念の寫眞とりぬ。來ん年はた五年後十年經ての後、五年又十年わかきも老たらむ後にとりいでてこの寫眞見なんか、いかにこの樂しき一日の思出とならぬなどおもひつゝ立てるほどに彼方にては寫眞機にかゝれる黒き布とりて頭さぐ。今は髪なでゝも衣紋つくろひてもやうなきを、なほしらず〳〵手のやらるゝなるべし。整ひゐたりし列は一時に亂れぬ、みだるゝと共にかの店々はひらかれぬ男は男と手携はり、女は女と袂ひきあひつゝ、この店にかの店に、あるは集りあるは散りて、人ごとにねもいはれぬ笑をふくみ、つゝむにあまる



喜びは、さしもに廣き園の中にみちてあふれぬ。この時かの中島なる樂隊は、撥とるは撥とり、笛もつは笛もち、それらが手それらが口は一時にうごきはじめぬ。いかに樂しき聲にかあるらむ。

いつしか凝りに凝りし雲はうすうなりて、絶々になりて夕日さへ花やかにさしそめたり。われは壯なる大なる歌人の壯なる大きなる企と行末とをおもひて、しらず〳〵萬歳を唱へぬ。その聲はた鼓膜にこそとゞかれ、わが心の底なる絲にふれてひゞくをおぼえぬ。あはれつれの耳ならましかば、なほまさりてたのしからむを、うれしからむを。

日本橋の双観
（白木屋と三井呉服店）

觀風子

此程新築落成式を擧げたる白木屋呉服店は、全く舊時の面目を一新して、大々的の[illegible]をなしたり、其の建築の模樣は間口十五間半奥行十三間半

の和洋折衷の三階造にして、階上階下を陳列場に充て、三階を賣出し其他特別の場合に備へたり、向て右を洋服店の入口とし、左を呉服店の入口とし、兩者の中間には厚サ六分六厘重サ七十二貫目といふ大硝子箱を裝置し、中に細工物の大寶船を飾り付けたり、曲階段を昇りて階上に出ると、中央の明取は硝子張の合天井にして、紅白の布を日の丸の旗に擬して四方に張り渡し、大楯玉を其の中心より垂らし、又瓦斯燈の管には造花の葡萄と菊を取付あり、而して其間所々に飾函を配置して帶地、友禪、開眞、帛紗、反物、細工物の類を品目別に據て陳列したり、東部に小き陳列箱あり、細工物の花籠、信玄袋、寫眞挿、巾着の類を並べたるが、こは日本女子美術學校生徒の製品にして、麗しき店内は之により又た一層の色彩を添へたり、階上階下共に二十四疊敷宛の座賣場ありて當時の習慣を宜とするもの〻又は長時間を要する客の便宜を計れり、尚奥深く進むと店の出端に二十四疊敷の庭園あり、其の先にある日本風の二階造は婦人客及び小兒の休憩所に充てん目的にて玩弄品をさへ備へ付たり、立戻つ て再び階上に來れば店側左右の袖に和洋二個の休憩所あるを見る、共に福地復一氏の考案に成るといふ、其の北部は日本風の室にて、十五疊敷の地味な高尚な座敷、柿色絲の備後表を敷詰め、襖の二間四枚は結城素明の筆にて孔雀に小田卷をあらはし白熱瓦斯を絹に て包みしボンボリなど如何にも上品に出來ては居れど、商人屋の休憩所としては餘りに地味過ぎて、何處となく調和を缺きたる形あり、

次に洋室の方は本多錦吉郎氏の筆にて、悉皆アルヌボー式を採用したり四圍の壁は布貼にて同式の百合を油繪にて描き、下部を深綠色とし上部に進むに從ひボカシ行きて黄となり、極薄となり、天井亦た同じ色を以て塗りつぶさる、之に配するに翠色の椅子、青銅色の置戸棚（共に材は桑杏にてアルヌボー式の甚く屈曲つたもの）を以てし、卓子掛の圖案といひ、椅子張に緞子の葛模樣を用ゐたるといひ、總てが朝の野の心にて百合の模樣には露を含ましたれば、何となく朝寒の冷かなる感あるを免れず、而もその道具立は餘りに凝り過ぎて華車なれば、痛々しくて恐りと腰を掛て居られぬ樣な感を持たしむるは遺憾千萬なり、

斯くて殘る方なく觀終りたる後、西洋室の片隅に腰を卸し、靜かにシガーを吹かし居れば、軈て支配人出で來りて言ふやう、當白木屋は寛文二年の開店なれば、二百四十餘年以來の老舖なり、昔は今の通一丁目に數戸の建物を有し、呉服類の外にあらゆる雜貨を商ひたれば宛然勸工場の觀ありたり、然るに九代大村彦太郎に至り時恰も維新の變革に際したるを以て、營業に大打擊を蒙り一時逆境に立つの場合となりしも、家運挽復を圖りし結果、明治十一年店舖を新築するに至り、越ゑて十九年には洋服店を開業し、二十八年には當主十代目彦太郎歐米に於ける斯業の視察を終へて歸朝したるを以て、新組織を實行するの機を待ち、大に準備する所あり、かくて三十五年八月に至り新築工事を起し、此の十月十日を以て全部落成、賑々しく開店するの運びとなれり云々。

每度新聞紙上にも散見する所なるが、白木屋には代々遵奉し來りたる家訓なるもの（商は高利を取らず、正直によき物を賣れ、末は繁昌）あるが故、組織は如何に變改せらる〻とも高利を貪らぬといふ點は古今に通じて變ることなく、先代より賣弘め來りたる二錢五厘の疊一挺を求むる客も、同時に數千圓の買物をする客も、店員に於て待遇を二三にせざるは殊に本店の特色たり、此の際店則を改正して店員一般に營業中讀書喫烟を禁じ、大に意匠部を擴張して新奇の模樣珍柄を陳列し、流行の先驅を着くる覺悟なりといへば、これより斯業界に於ける同店の活動は大に目醒しきものあらん、

以上にて白木屋呉服店の觀覽を終へたれば、觀風子はそこより直に車を

曩つて三井呉服店を訪れたり、同店にては今秋新柄陳列會の開設を機として、新に參考室及び外國人向の陳列室を設け、同時に諸般の裝飾を新規にしたれば、今春あたりとは見違へる程の觀を改めたり、先づ表の屋根上には數十顆の電燈を取付け、表側の周圍には飾窓をしつらひ、其の中に光彩陸離たる綾羅錦繡を陳列したるが、夕景よりは內外の電燈一時に映發して、五彩燦たる光景目も眩く計りなり、場內に入れば階上階下の柱は總て藤色と白の布にて包まれ、長押には紅白の幕を打廻らし、天井には各國々旗を飾りたり、陳列箱を覗きながら右に左に緩く足を運ぶ縱覽者は陸續秩を接して相變らずの賑ひ、就中階下の寄切室には顧客群集して其の混雜一方ならず、陳列箱の上には美しき造花を取付け、而も一見明瞭たらしむるやう產地別に依て各種の反物を配列したれば、縱覽者には非常に便利なり、かくて觀もて行けば何れも此の美しいもの計で人の心を惹き付くるなるが、中にも友禪



十種の長襦袢には殊に多くの注意を呼び起したり、それより階上の參考室に至れば、浮世繪には又兵衛、長春、具慶、師宣等の逸品を蒐め、古代服裝には元祿より文政天保頃に至るまでの繡入小袖を集め、添ふるに天明の染本、牛襟下繪、衣裳屛風等の坊間には容易に見るを得ざるものを以てし、服飾上又た意匠上に進步を促すのたよりとしたり、思ふに茲等が三井の三井たる所なるべし、休憩所は階上階下に各々一ヶ所宛ありて、二つながら西洋風なり、廣さは十五疊許もあるべし、床には唐草模樣の絨壇を敷き詰め、四圍の壁には水色の紙を貼りて、油繪寫眞押繪等の扁額を掛けたり、壁の一面には二個の大なる窓並び海老色のカーテン左右に別れてふくやかに垂れ、其の側に大鏡をしつらひ、暖爐の設備もあれば、之を白木屋の西洋室に比する時は、此の方遙に派手にして而も溫味あり、室の中には三個の卓子と十數個の椅子とを備へたれば多人數の客にも差支なかるべし、卓子の



上には陳列場案内圖、店内撮映の繪葉書、御注文の栞てふ色摺物などが安排よく載せられ、又た窓側の卓子には硯函、封筒料紙などを備へて來客の使用に任せたり、こゝには室番の年若き婦人詰め居りて、入り來る客ありと見れば、直ちに茶を侑むる慣例なり、尙ほ外にも數十名の婦人販賣員ありて、愛想よく客に應接す、呉服店にて女子を採用したるは實に本店を以て嚆矢とす、

三井呉服店は延寶元年即ち今を去る二百餘年前の開業にして、大坂支店も亦た元祿四年を以て開店したり、明治二十六年に至り合名會社の組織となすと同時に、舊來越後屋と言ひ來りしを三井呉服店と改稱し、同二十八年二階丈に陳列場を設け、三十三年に至りて總陳列場に改め、總ての舊習を廢して專ら新意を加へ、銳意改善進歩を計りつゝあり、

要するに三井には三井の特色あり、白木屋には白木屋の異彩ありて、陳列萬端に各々趣向を異にすると雖も、兩者共に流行界の魁を以て自ら許し、新柄模様の先鋒を以て自ら任ずるといふ抱負に至つては即ち其の軌を一にせり、かゝれば今より後の兩呉服店は互に精を萃めて大に妍を鬪はすことなるべし、



才媛詞藻



塚越停春撰

（天）紅葉　　越後　小野わか子

鐘つきて鐘樓下る雛僧の
　　白衣の肩に紅葉散るなり

評云、一篇の「凄」字を露はさず、一篇の「寂」字を點破せず、又一句の[illegible]の[illegible]而て凄[illegible]、寂絶、悲哀限りなし[illegible]、紅葉、擅き、下る、散る、皆凄絶寂寥な[illegible]するものにして、而も明點せざるが爲却て一段の感慨を増すに由る歟。

又云　白衣紅葉相反して、一種の凄味を生す。

（地）菊　　東京　辻野澄子

乙女子のまゝごとすなる
　　裏庭に白菊咲きて畫靜かなり

評云、無邪氣無心の態、清寂靜庭の景、寫し出して此くの如く自然に此くの如く清靈也。情景並び至るものと謂ふべし。

（人）菊　　長野　さくら

色に香に數多かれと白菊の
　　花は御國の姿なるらん

評云、たけ高きこと甚し。氣象の高邁を見るべき也。

秀逸

紅葉　　備中　大西政代子

わら鷲の羽風にちるか朝霧に
　　紅葉舞ひ立つ大比叡の谷

氣格壯宏、名作と謂ふべし。惜むらくは「朝霧に」の一句置き得て安からず。

菊　　三重　高橋らん子

君しまさばともに挿さんをかざゝんを
　　香もなつかしき白菊の花

「挿さんをかざゝんを」の句、千釣の力あり。

鎭守祭　　東京　芳女

勇ましき太鼓の音に千町田の
　　黄金の波も打ちゆるぐなり

格調に辭壯。

菊　　陸奥　松野光枝

いとせめて匂ひのみをやつとにせん

たをるもをしき野路の白菊

余輩は此の種の歌を愛す。

利根川の両岸百里秋ふけて
紅葉に明けて紅葉に暮れつ

紅葉　群馬　黒岩米子

叙景佳し、利根川上流の秋色如レ見。

白菊をもちて君行く鞍馬道
大原わたり朝ぎりふかし

菊　岡山　ゆき子

結構整々たるものあり。

峰遠き濃きとうすきの紅葉ばゝ
夕日のさすとさゝぬなり鬼

紅葉　京都　西澤まつ子

才華とや申すべき。

わかれ來し峰のはとりや夢ひらむ
螢火わはき床のもみぢ葉

紅葉　島根　岸崎濱子

京都宮門の歌情を得たるもの歟、可レ謂可レ咲。

紅葉せぬ木末よりまづ暮れそめて
錦を包む夜の色かな

紅葉　京都　三の宮露子

[illegible]。

紅葉　駿河　菊池武子

鳩一羽霧に消行く影見えて
紅葉まばゆき夕まぐれかな

佳麗。

紅葉　大坂　上野晃子

露しぐれ色なきものと思ひしに
置けば木の葉も紅葉しにけん

所謂腐を化して新となせるもの。

紅葉　東京　河村花子

濃き淡きけぢめはわれと紅葉ばの
赤き心はかはらざりけり

可レ誦。

紅葉　出雲　小泉花子

一葉散り二葉こぼれて紅葉ばの
わはれをそふる夕暮の窓

趣なき句也。

紅葉　美濃　鍋はる子

涙おはき姫君ものを思ふ窓に
二ひら三ひら散る紅葉かな

情景多きを見る。

紅葉　岩代　菅野和子

外國の人は見知らぬ日の本の

秋はなべてぞ綾錦なる

風格高し。

紅葉　岡山　谷八重子

見渡せば紅葉常盤木こきまぜて
山こそ秋の錦なりけれ

巧且妙。

菊　岡山　向井猛子

千たび見て色もかはらず長月の
うつろふ秋を白菊の花

「を」の字力あること甚し。

紅葉　熊本　佐藤しん子

牛曳てかへる乙女のすげ笠に
二ひら三ひら紅葉散るなり

風情あり。

紅葉　伊勢　間島磐子

初冬の巻に通ふ大原女の
黒木にそへし紅葉一枝

趣致多し。

紅葉　東京　松野百合子

錦着て歸り來ませと母の君が
御文の中に紅葉一片

此の如くにして凡ならず。

紅葉　東京　荻野露子

村はづれ酒賣る家の旗見えて
植の紅葉に日は斜なり

如レ畫。

菊　横濱　宮木かね子

去年住みし主はいづこか籬落ちて
荒たる庭に白菊の咲く

思ひ入れあり。

鎮守祭　東京　川井喜久子

うぶすなの神樂は果てゝ歸り路の
夜風つめたく月更けにけり

村落祭終へたるの景目睹るが如し。

鎮守祭　長崎　米田園子

とよめきの猶もきこえて立のぼる
火の氣明るしうぶすなの森

叙し得て妙。

紅葉　東京　菊野花子

もみぢ葉の晴はもとより雨によく
散り行く樣も風になるもよし

造句妙。

紅葉　日向　紀藤柔

山鳩の聲もしめりて山寺の

時雨るゝ庭に紅葉散りしく

寂寥。

紅葉　東京　茂木良子

七日月は鐘樓のやねにかゝやきて
繪のごとけぶる丘の楓葉

詩亦水彩畫の如し。

鎮守祭　山梨　清泉

一つへり二つ消え行くみやしろの
火影淋しく秋の雨降る

清寂。

紅葉　豐前　もと子

錦をすて眞紅のもみぢ手折り來て
妹はさゝやきぬ我心ぞと

「我心ぞ」の一句を得て、全篇始めて活く。

菊　上野　三木たま子

白菊のさくに任せて眞柴垣
とりつくろはぬ宿ぞ床しき

「とりつくろはぬ」の一句一篇の骨子。

紅葉　熊本　安田文子

常盤なる松にやどりをしめながら
秋にはもれぬ蔦のもみぢ葉

匆々に看過すべき句に非ず。

紅葉　東京　渡邊すみ子

今さらに紅葉の錦ふみて行く
我身はづかし故郷の山

「故郷の山」の一語ありて、「はづかし」の意義生動す。

紅葉　東京　河村かね子

村時雨いさ古郷の秋とはむ
柞の紅葉色うすくとも

余輩は此種の歌を愛す。

紅葉　伊勢　大國あや

つたかづらかゝらざりせば色かへぬ
松の秋をば誰か知らまし

然り、妻によりて夫を顯はすことあり。大にあり。

鎮守祭　大坂　田中瑜璉子

これやこの戀しき里の秋祭
太皷の音にも思出はあり

巧に鄙の乙女の痴心を描けるもの。

佳　調

題(紅葉、鎮守祭、菊)　伊勢　寺井露子

[illegible]がきよめおへたる朝庭にふたひら三ひら紅葉ばこぼる

●　東京　安藤よし枝

ひねもすを椎の實ひろひ歸るさの磐の紅葉に夕日さすなり

祈りの鐘の音やみし山寺の徑道つたひ紅葉散るなり　●　日向　紅藤のぶ子

古里の鎭守祭りに子等つれて思ひ出多き旅もするかな　●　備中　大西政代子

紅葉狩手折らば散らむあすもまた眺むるよしのなしと思へど　●　肥前　萩原道子

道標のかたに立ちます石佛の背に散りかゝる柿紅葉かな　●　讃岐　山田よし子

嘆願の親子すぎゆく村はづれ野菊一本やせて花咲く　●　河内　大矢たれ子

[illegible]さびしき窓の[illegible]わが来ればうなじに散りぬ露のもみぢ葉　●　河内　大矢たれ子

はつ時雨も[illegible]山てふ山は色づきにけり　●　長門　山野靜枝

亡き妹の衣うちかへし打かへす秋に出でぬ紅葉二片　●　美濃　荘加ふじ子

岩かげに紅深きもみぢ葉をわが手とぶかで兄君の折る　●　山形　山田蝶子

[illegible]ひ[illegible]へり来る紅葉月夜を胸の嘆き　●　岡山　ゆき子

初時雨いそ山紅葉染め出でゝ海づら赤く照りまさりけり　●　備中　季子

さゝがにの糸にとまれるもみぢ葉の多くも見ゆる故郷の庭　●　山梨　淺川たき子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　●　伊勢　青木敏子

君ゆきてひとりたゝずむ朝もやに露の紅葉のほろ〳〵散りぬ　●　和歌山　岡村はる

秋来ればわびしき賤が伏家にも黄金みだるゝ菊のひとむれ　●　岡山　野崎茂登子

中々に春のながめに勝るなり常盤まじりの峯のもみぢ葉　●　熊本　愛子

年なみのゆたけさみせて村毎の鎭守の祭今そにぎほふ　●　仙臺　菅とみ子

小雨ふる片山里の夕間暮心靜かに紅葉散るなり　●　荏原郡　深堀千代子

豊年の幸かれてうぶすなの神の祭りに村長も舞ふ　●　常陸　三好桂子

此秋は共に紅葉をながめんとちぎりし妹は今あらずして　●　栃木　大河原かめ子

こぞの秋ともにめでにし白菊もけふぞ手向の花となりぬる　●　波島　上野絹子

咲きにしと都の友につげやらむ共にめでにしその〻白菊　●　伊勢　植木景子

姉君の菊を待つ歌着きし夕咲きぬ薫りぬ園の白菊　●　愛媛　田村ため

あへぎ〳〵峠のぼれば媼ひとり茶をにる軒端白菊の花　●　紀伊　ふみ子

波御はてゝ柿實る爺歸り行く彼方の山に日沈まんとす　●　山梨　鋼田靜子

賤が女の水くむ音の筒井筒耙に間なきまで紅葉散りしく

みづからにまもれし妹は今はますず殘る黄菊の花散りかゝる

● 熊本 佐藤しん子

の神樂に鎭守の森はどよめきて野に歡樂の聲みち溢る

● 志摩 濱口しづ子

小春日になさなふくへをかたにかけ孫の手ひきて菊の花みる

● 山城 大久保よそ子

山姫のつかひなるらん溪川を紅葉一枝ながれ行くなり

● 大和 田中しゆん子

小谷川流るゝ紅葉秋の女神のかざしの花かむれのかざりか

● 攝津 登枝

野寺遠し某の君のわびずまゐやれしかきれに白菊咲きて

● 肥前 萩原道子

うなゐらは鎭守のまつり近づくと夜ごと／＼にふゑふきならふ

● 河内 大矢たれ子

もみぢふる森の下かげ日はおちて馬子歌遠き小田のほそみち

● 長門 杉山きくの子

ひとしきり吹く風絶ねて夕日影靜にちりぬ峯のもみぢ葉

● 三重 森脇むれ

うなゐらが鵜飼ひならす秋川の汀に咲ける野菊蝦夷菊

● 備中 大西政代子

賜はりしてふ杯をとりいでゝけふも父君菊をめでます

● 山城 今村庄子

入相の鐘うつ尼の年わかく白衣みだれて紅葉ちるなり

● 長門 藤岡鶴子

なか／＼に手向の花となりにけり妹がめでにし白菊の花

● 前橋 入澤芳子

散りうきし谷の小川の紅葉ばは身にしむ秋のいろとこそしれ

● 熊本 空子

いたばしはちるもみぢ葉にうづもれぬ行かで やみなむふむもいとをし

● 栃木 清水くら子

珍らしき君を迎へしわが友の垣根にめぐし菊のふたもと

● 信濃 竹鼻はる子

晴着ぬひて待つゝありしうぶすなの祭むなしくあめにくれゆく

● 岩手 澤藤綾子

黄色なす稻田の中に旗見ねて太鼓とゞろくうぶすなの森

● 陸前 渡邊しげ子

晴衣きしうなゐのむれの見ねかくれ鎭守の森にはたひるがへる

● 香川 黒家芳子

紅葉散る奥のほそみち秋ふけて夕日さびしき白米の山

● 大坂 野村鶴子

谷河の清き流れに影見ねて枝もたわゝに咲ける白菊

● 陸前 村田さく子

新しき幟りも見ねて氏子等は事足る秋のみ神樂ぞ舞ふ

● 前橋 小林りき

たきゞこりかへる少女がせなの上にかほりゆかしき菊の一枝

● 吳 芳薫

摘ぶ手も香に匂ふなり白ぎくの花の露ちるたま川の水

● 長門 飯田ふじ子

むかすがにとふ人ぞなき陋家も菊のさかりは賑ひにけり

● 村雨にはぜのもみぢの色まして紀の川堤秋ふけにけり　和歌山　山村みゆき子

● 夢ならでよびかへさるゝふるさとの山は紅葉のにしき着てけり　安藝　松阪椿子

● 亡き母の墓前に詣で白菊をたむくる夕秋風のふく　紀州　山本美子

● 大かたのくさ木はかれし武藏野に一本菊のさき匂ひけり　駿河　渡邊ひさ子

● 出るとき紀念にさせしふるさとの垣根のきくも今かさくらん　安藝　松阪椿子

● 限りなきみ代長月に咲出て盛り久しきしら菊の花　播磨　中野隆子

● こゝろも手に香をたにしめてつとにせん手折も惜きのべの白菊　石川　大平かれ子

● 秋は早今まさかりと峯ふもと染つくしたる木々の紅葉　播磨　中野隆子

● 去年の秋君と眺めし欄干に思出多き庭のもみぢ葉　大坂　満壽美

● 酒くみて紅葉を散らす人かげに海老茶式部のうた口すさむ　大森　森波雅子

● 鉄もちてかへる人かげ見ゆるかなもみじ色濃き山の下道　上野　三木たま子

● おいきく山路いそげる旅僧のいたゞく笠に夕紅葉ちる　越後　みき子

● 紅葉ちる岡の下道牛牽きて夕日にかへる人羨しき　河内　櫻井喜子

● 牛のこみ夕の露にきぬゆきていさゝ小川に野菊たゞよふ　岡山　北村幸子

● あれはてし社の前のかたむける手あらひ鉢に紅葉ばの散る　甲斐　細田靜子

● 秋もやゝふかくなりけり古さとの高雄の山は紅葉しぬらん　京都　澁部愛子

● 病いえし母をたすけて三年ぶり鎭守の森に神樂見る哉　深川　澁谷さだ子

● やれはてしまがきのもとの菊の花色ゆかしくも咲きにけるかな　越後　水澤みゝか

● 谷かげにきよき流れをともとしてましろくさける野菊ひともと　靜岡　きん子

● かごとにてもあやかりたしなくれたけの世のうきちりをしら菊の花　下毛　なみね

● 秋深し朝風消し遠里の鎭守の森に太鼓とゞろく　新潟　佐藤はつ

● 人すまぬ深山にもゆるくれなゐはたがをりかけし錦なるらん　下野　なみ子

● いもをとが心づくしの文の奥に色香をこめし白菊の花　東京　紫清

● たゆたへと庭に人なしいさいなんさりとてあまり菊うつくしき　上總　齋賀うめ子

● 朝夕の心つくしのいろ見えてにはもせにさく白きくの花　神戸　尾崎しのよ

茨城 榊 はる子

村はづれともしびあはき一つ家のまがきに笑ふ白菊の花

● 芝 石井せい子

實のりある秋を祝ひの宮角力もろ聲どよむひなの一村

● 越後 小島茂子

岩間よりおちくる瀧の白糸を染むるはきしの紅葉なりけり

● 栃木 田波秀子

あたゝかき菊咲く野路にあきつとびておとゞひ二人あゆみのおそき

● 三重 りき子

ますらをが命すてつる城あとに秋風さむくもみぢちるなり

● 吳 長谷川芳薫

長閑なる御代の惠にうるほいていよゝさかゆる白きくのはな

● 富山 木津房子

高雄山峯の紅葉に霜みねて百舌鳥なく朝の寒くもあるかな

● 越後 荻野てる

霜ふみて庭におり立つあけ方の風寒くして菊の香高し

● 鈴木 藤木友子

霜月の匂ふあたりは一しほの色まさりけり庭の白菊

● 神戸 森K

あいらしき妹が造りし箱庭も秋に遅れず紅葉してけり

● 島根 菊子

道ばたの一木のぎく雨にぬれぬこてふのゆめやいかにつめたき

● 長崎 横山しげ子

久かたの星かと見れば我宿のいけにかげなす白菊の花

● 下總 臨山靜子

我園にゆかしき菊はなてるは友がかたみの菊の一ともと

● 播磨 瀬川あき子

我村はつゞく賑ひがさ㒵神樂車やおりむあせの細道

● 本郷 野村みつ子

ゆくら〳〵のどけき秋をかたりつゝゆくや紅葉くれなゐの山

● 靜岡 山下よれ

あづまやに書を讀む妹が聲のして夕日の庭に紅葉散りけり

● 和歌山 林文子

風死して古城寂しき夕暮を眞の紅葉のほろ〳〵と散る

● 對馬 國澤よし子

菊の香にひとり庵の醉ひこゝろ遠き野末にかたわれの月

● 備前 淺沼定子

武夫のなきからうめしあれ塚にたが手向けけむ白菊の花

● 靜岡 古美ゆり子

ゆたけさの太鼓とゞろく氏神のあかき鳥居に夕日かゞやく

● 岐阜 白つゆ

うすくこく松の木の間に見ゆるかなかゝれるつたやもみぢしぬらむ

● 佐倉 桑宮信子

秋の日のやがて落るをむかひ山もみぢの色は暮むともせず

● 埼玉 小林幸子

秋姫のみけしの袖のほころびて紅葉こぼれて秋くだちゆく

● 蓬萊ノ里 露子

山姫の織れるにしきと見ろまでにふもとの里にちる紅葉かな

● 河内 伊東たがれ

地車のあかれの暮のほの見ゐてちんしゆの杜に時のこゑする

初木の子に紅葉の一枝をりそへて色も香もある乳母よりの使ひ
伊賀　服部かつ子

嫁きたる姉も来りて三年ぶりはらからまゐるうぶすなの森
岩代　齋藤吉子

三年すぎし今日故郷のくづれ垣むかしの色に黄菊かほれる
栃木　澄江

誰が住みし庵の名残かやれ垣のかたへに淋し白菊の花
東京　清鳴

武士のねみて討たれし墓の上にちしほの紅葉ちりかゝりつゝ
神田　君子

庭にしきおりかけたりと見ゆるまで山はみながら紅葉してけり
上野　矢島さと子

ぬしあれば手折らんすべも白菊の袖に香とめて家ずとにせん
静岡　芹澤しん

白菊の下葉も花の心地すれ朝霜白くおけるあしたは
神戸　岩松まさ子

はら〳〵と板の寂屋に音のしてあられまじりに紅葉散るなり
安房　丸春江子

大井川渡らば錦あとたねむ風のかけたる紅葉ばの橋
常陸　三好桂子

長月の月の光もさしそひていよ〳〵白し白菊の花
武州　中島獻子

こる波もかほるまでこそ咲にけり池のみぎはの白菊の花
神戸　中村喜久子

和歌兼題

落葉
礒千鳥
雪中進軍

（〆切十一月十五日）
（披露十二月五日）

▲家庭日記
▲寫生文
▲雜文

（〆切十一月十五日）
（披露十二月五日）

▲庖厨座右銘（募集）

投書文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界さして送らるべし▲投書原稿一切返却せず

婦人に學問をすゝめむとて

後藤靜子

あはれ女たる者の常に守るべきは貞操とかやそはいはずとも誰かはおろそかに思ふべきされど夫につきてもいといたう大切なるは學びの道にこそあれ中古よりの習ひ女は只人の家に嫁して其家をとゝのへをさな子を育て行道をだにしらば事のたれるやうにいひしとかやされど今日此頃開け行大御代に生れ出で生ふしたてられて後には外國人とも交りを結ばむとするにはいかで學ばずでやはあるべきあはれ父母の膝下につかふる頃は兎まれ角まれ眞にかくろひてめやすくも奥ゆかしうも見ゆれど漸々年たけ人の家にゆき一家の主婦とも成りたらん後は文の林をも深く分けにし人と淺きとによりては大なる違ひもこそいで來らめ家を修め子をはくゝむ道は少しく知るとも一度己が家に大事など起りし時我身に學問のなからましかばいかに口惜しからむかし彼の女たる者は學びの道に入らずともありなむといひつる古だに女の身にて家を起し名を擧げたる人學びの道の明らかなりし人ならずやましてかゝる大御代に生れあひては文よむ道こそ眞の基なれされぱこれより世に交らひ給ふ君だちはひたすら學びの道をいそしみつゝ心明らけく眞の德を備へ給はむ事こそ願はしけれ己いまだ年若う固より學びの道にもくらき身もてかゝる事いひ出むはいとをこがましけれど己が心のくらきにも眞に口惜しき事のみ多ければいとせめてはと拙き筆をもかへり見ず只一言かくなむ

秋思

大坂 岡崎鶴子

秋とし云へば早や哀れてふ事の想ひ起さるゝをシト〳〵と秋雨のそぼふる夜床の下にすだくこほろぎの聲さへ亡き人をしたひてなくらむと思ふ許りに、空のみならぬ村雨に袖ぬれてながめやる燈火の影さへいとかすかに、窓の下なる芭蕉葉に注ぐ雨の音のみいと高しや、今宵は親しき友も訪ひ來給はず枕につきて長き秋夜をかこたむよりはと古き雜誌などゝり出でゝそこはかとひろひ讀しつゝあるに思ひは又も亡き人の上に逍遙ひて思ひ絶たむとすれど猶もいや增す哀はしきに果てはなき姿さへ眼に映りて戀しさ懷かしさに身内のいたく打ふるふべう覺えぬ、思へば樂しかりし其往時や、花笑ひ鳥歌ふ彌生の頃は花の香に醉ひ戯むるゝ頃なりしが優愛なる母君の暖き手に紅葉に似たる手をひかれつゝ瀨戸の麥畑に沿へる小川のほとりを逍遙ひし時足下にしほらしう咲ける菫に黄なる胡蝶のとまれるを捕へむとしてはやくも逃げ去られし時小川の上をヒラヒラと舞ふ蝶を眺めてわれも水の上步かまほしと云ひしに母君は優しき顔に笑みたゝへて熱き接吻をわが頰にしたまひしよ、月澄み渡る秋の夜頃常々詣れ給はぬ御身のことさらに秋のあはれを感じ給ひけむ千草をゆする蟲の聲に聽きとれて半面を月に照らさせつゝ安樂椅子により給ひし母上の膝にもたれて好くもまはらぬ舌に聞き覺えのむづかしき言葉もて辯士顔に話したつるわれに一々應へ給ふ君のフト答へ杜切れたるまゝみ顔を仰げば如何になし給ひしか月にきらめく露のまつげに宿りしよ、不審しさに母上よいかになし給ひしとみ顔をのぞき込みて尋ね參らせしにあまり虫の音のあはれさにたゞ何となう涙の催されてと宣ひて膝の上に置ける我手をかたく握り給ひしは今より思へば葉末に結ぶ露にも似たる人

の命の果敢なさを思ひやり給ひしならむ、 其他楽しかりし事共彼所にては斯くありしよ彼時はかう言ひしよなどなつかしき節のみ思ひ出でられて胸に集まる思ひぐさ刈り取るすべもあらなくに、 はふり落つる涙拂ひもあへず、 ツト窓押せば變り安きものにたとへらるゝ秋の空の雨はいつしか晴れて中空にかゝる月の影のみいとさやかなり、 折柄北の方よりとび來る雁の群れにや離れし唯一羽のみ南の方へとび去らんとす、 かりよ汝れは天つみ空を行き通ふ身ぞ、 天つみ國にいます母君の玉章やかけて來し受取る主は此所にあるに、 何故落してや行かざると云へども知らず顔にすぎ行く憎らしさよ、 夜やいたく更けぬらしあたりは寂として萬籟聲なく誰が爲に打つや砧音のみたえつゞきつ、

一日築港を觀る

大阪　千代子

麗らゝかなる小春日和を空しく家にあらんは殘り惜しうて弟妹等と築港に遊ばん事を思ひ立ち花園橋のほとりより電車にのるこは近き頃この地に設けられたればあらそひ乗らんとして至るもの日に絶えず車中の混雑いふべくもあらず我等は幸にして腰を下ろすを得たれども立ちてありし人も多かりきやがて車は青に黄に色どれる田野の間をよぎる疾き事汽車の如く車窓より眺めやれば田面は黄金をしきのべたらんやうにて今年の豐作も思ひ計らる半時ばかりにして築港に着きぬ車を下りて棧橋の上に立てば海風徐ろに吹き來りて車中の人波にもまれ何となう頭重う覺えし身もとみに洗ひ清められて心地すが〱しうなりぬ棧橋の長き事四五町はありぬべしそれよりそこはかとなく歩みをうつせば浮世をよそに釣を垂るゝ翁いと質朴なる田舍人もあり望遠鏡とりいでゝ眺むれば淡路島、 神戸の山々は、 ほのかに見えて盤の如し橋の右には砂取船を所々に浮べて絶えず砂を巻き上ぐる樣いと珍らしく左には碇泊せる水雷艇二隻ひらめく日章旗は晴れ渡る空にうつりよく一きは目立ち見ゆ幼き弟の「僕も大きくなつたら海軍になるのだ」 と力み返りて云し其無邪氣さに我と妹とは思はずほゝ笑みぬかくてやうやく佳境に入る折しも秋の日脚のいと早くはや黄昏になりければさまではとて心をあとにのこしつゝ家路を急ぐ道すがら見かへれば夕日影沈むにつれて海面はます〱藍を染め遠近の山々は夕霧に包まれて築港にあるは畫繪の如しいかなる名工の筆をふるへばとてかくは畫き得まじきを實に麗しきは天然の美なるよ。（今少し文字の遣ひ樣に用意あるべし）

思ひ出の月

姫路　三俣千代子

夢の浮世の日の影は矢よりも早く飛び去りて、 今日は早舊暦の八月十五日、 秋の日足の短かくて、 はや太陽は山端に影かくせしたそがれに何かこつかなく虫は長く短かく太く細く思ひのまゝになきつくすあはれ淋しき秋の夕深き悲しみある身には一きは身にぞしみ渡る一天流石瑠璃に等しく白雲のかげをも見ざる中天に晃々たる鏡の如き月は出でゝ慈愛の父を失ひあはれ涙にくるゝ孤兒の此の身を冷かにてらしぬあゝ月は無情

なるか、はた、有情なるか湧出づる鐘音の情あゝそも去年の今宵は須磨の浦明石の里にあらぬ聞くも淋しき加古川の里に住ゐてありしかど要事知らぬ此の我はこひしき父の「おこし」をば、なで、つゝ、「たゝみ」の上に松のかげならぬ櫻樹のかげを見てたのしく話し方のおかしかりし事共語り合夜の更くるも知らざりき一とせ過ぎてまはり來し今宵また去年に變らぬ月は見ゆされども變る此身には其恩愛の父もなくあはれ悲しき身となり果てゝ加古川ならぬ白雲城下に冷かなる淋しき月を見んとはこけの下なる我父は如何なる世界にまし〳〵て此月かげを如何にながめ給はんあゝ人生はかく計りはかなき物とは思はざりし折から虫の音は一きは強くなきしきる其聲其思ひには變りあれど涙はおなじ我袖にされども月はしらずがほなる如く見ゆ（満月をめでつゝ人は見るらめとわれにはつらき月のかげかな）（評、あはれ、あはれと寫眞的文字並出すは甚だ讀つらし今少し注意あれ）

秋の野

宇都宮　島村かつ子

四季折々のいつはあれど、物の哀れと天地の奥のこもれる秋にしくはあらめや、開ける花のかず〳〵しげれる草葉さま〴〵、千々に響へる野邊に出でなば其おもしろさ春にもおさ〳〵劣らざるべし、皆是れ自然の神の妙を作らんためになしませるみわざなりける。

見渡す限り千草の花の咲き亂れて吹く風の音うら淋しく、廣き野原の上を渡りて草むらには虫の聲々秋を恨むが如く心細くわびしきながめにあなたこなたとさまよふほど、刈萱のしどろに咲きみだれたる、打見るだにも心はみだれがちなり、草のたもとに憂き秋の淋しさをつゝみかねつゝほに現はれて、花すゝきの人を招くも哀れなり、風をつらしと恨み顔なる女郎花も、いつかなまめきて打なびきよるを見てはあはれ花の心も動きけるにこそと思ひやらるれ、かしこにこゝに、うすく、はた濃く、木々の梢におりかけたるにしきは、山ひめがまづこゝろみの手染にやあるらむ、夕日のいろにかゞやき合ひて、見る目もあやなるに、風のまに〳〵木の上に散りみだるさま、ねもいはれぬながめなり、折しも風の吹くまゝに、草笛の音いとかすかに聞ゆれば、たちどまりて耳ひきたつるに、やう〳〵近づき來て、尾花みだれたる野路を此方ざまに、馬に乗れる童の來るなりけり、畫にかきたらんやうなるがをかしくて打まもれば、笛を口にしていとらうたけに鄙歌を吹くなりけり。

野山のけしきにあこがれて歸るも知らでさまよふほど、いつしか八幡山のふもとに至りぬ、此山に上れば宇都宮市を一眸且つ廣き稲田を眼下に見、時しも夕日は田の面をくまなくてらして風に黄金の波よるけしき實に見る目もあやなるばかりなり。

皆人はのべのけしきにあこがれて遊ぶものから此あたりのにぎはひはなほかはることなきのみならず、これもまた常よりは行かひしげし、折から、わらは四五人手毎に目籠を下げて何を得んとかこゝかしこあさりありくに何事をかすると尋ぬれば、松茸をかるといふめり。斯る淺き山にてさるものあるべしやはと云へば、耳にもとめで、散り積る木の葉松の葉かき分けつゝなほも彼方とさまよひ行きぬ、さても無邪氣なる童等なりけるよな、秋の日かげの短かくて、とりも塒に、入相の鐘に聲さへ打しめりて聞ゆ、野末の里よりしげくたちのぼる烟は、古への哀み深かり

しみかどの大御代も思ひいでられ、今の世の治まれるさまもいとかしこく思ひつゞけられて！いと靜なる、なか／＼に見捨難ければ友へのみやげにとて手折し尾花二枝三枝。いざとて元來し道を辿れども何となく此あたりの景色に名殘の惜まれて、又も彼方を見渡せば、尾花が末に夕日は落ちて、うすきり山のふもとにたちわたり、里のともしびのかげ心細く見えそめて、哀れは此眺めにすぎじと思はれたり。(あまり主觀的なる書ざまにて且つ幼稚は免かれがたし)

山ゆき

越後　水澤みか

遊ぶにも又勉強するにも、よき此秋景色如何に一日を野山にゆきて樂しく遊ばゞやと日頃親しき友のそゝのかさるゝに殊更心浮き立て明日こそよけれと約し歸へられぬ嬉しさの餘り夢も結ばれぬ程なりき曉つぐる鷄の音にやをら身を起しねまきのまゝにて雨戸をたし開き天氣如何にとながむれば空は一面薄雲もて蔽はれたればあんじつゝ居るうちに東の空白らみ朝日の昇る頃には天も吾等をふびんとおぼしたまふてにや空には一點の雲だになきよき天氣となれり仕度をとゝのへ父母にいとまをつげ今や吾が家を立ち出でんとせし折しもかなたより友は滿面に笑を含みて來たりぬ共に／＼手をとり交はし語りつゝ行くに、いつしか人家を離れ八千草の花さき匂ふ廣き野邊にいでたりしばしかたへなる石に腰うちかけて自然の美妙なる風景をながむ吾等の登らんとする山は遙か彼方に高く聳へ常盤木の綠の中に立田姫のそめなしたる紅葉のあやなせるさま言はん方なし唱歌をうたひあるは幼かりし時のもの語りなど互に語りなどしてたどりゆくにいつしか山の麓なる寺につきぬ暫しいこひて裳裾を高くかゝげ山に登るさらぬだに苦しき山の細道ところ／＼水道の朽ちたるより水のもりて道足あしくかゝる處にまろびてはと直に注意を加へつゝやう／＼道よき處にいでそれより又うねり／＼し山道を登り行くになか／＼苦しかりき何事もかく艱難を凌がずばと友の言ひしに日頃の怠りも夢さめし心地す山の頂に登りて松が根に腰うちかけて風景を見下したるときの愉快さは何とも譬へんものはなかりきさしも廣大なる自然の風景は皆眼中のものとなりぬ吾等の來たりし道は細く／＼て長き糸の如く見ゆ五十嵐川は白布を晒せる如くそこを舟もてこぎ行くさまさながら小供のいさゝ小川に笹舟を浮べて遊ぶに似たり遠く彼方には彌彦角田の山々など巍然として動かぬ御世の姿を顯はし何とも言はん方なき景色なり寫生の術あらばこの絶景をうつし取らましものを又風流の心あらばこのながめよき風景この趣味ある秋のさまを詠ましものをと思へば／＼拙なき身こそ口惜しき限りなれ母の眞心もてつめたまはりしわりごをいしく食しさてこれより菌をあさり栗を拾はんとて名も知らぬ草木をわけつゝ行くにをゝめづらしき菌よとこ走りて落葉をとりのけ取らんとせばあやしき毒菌なり友のよぶに近よればいが栗の笑を含みたるが所せきまで落ち居ればうれしく勇みて拾ひしにいつの間にかもて來し袋に滿てり暮れ足早き秋の日は早や山の端に沈みければ山に名殘りはつきれどまたくる秋と約してやう／＼麓なる寺に下りぬそれより元來し道をたどりゆく農夫等の鍬を肩にかけあるは馬に荷を負はせ鄙歌うたひて一日の勞も見えずさも愉快らしく見ゆるは秋の實のりの多くあればなるらん夕陽西に沒して小鳥はねぐらに急ぎ歸へり吾等も家路を……入相告ぐる山寺の鐘の音

もかすかになりて吾等を送るが如くきこゆ家に歸へりしは燈火つくる頃なりき（自然を寫すの筆拙からずと雖も想に苦心の跡なく又文字も冗長なりこれを避くる樣注意ありたし）

大阪築港に月を觀る

大阪　池田英子

今宵の名月など㐧打すておくべきぞ我屋上にて眺めんか樓上にて眺めんか否海岸こそ又格別ならめ　さはいへ伴ふ君もあらず如何せんとひとりごつ折からはからずも道子の君來り給ふ吾うれしき事限りなし「よくぞ訪づれ給ひしぞ今も今おうわさせるところ」と吾言ふ「昨今の月にて築港は非常の賑はひ散歩がてら今宵淸遊を試みんと思ひ君に御同意を得んと斯くおとづれしぞと言ひ給ふ「よくぞ言ひ玉ひしぞ吾も同意いで御供さんと吾は支度をなし下女一人打連れ出かけぬ　折から入相つぐる鐘の音ねぐらに急ぐ鳥の羽音げに物淋しきは夕暮にこそ花園橋より電車に打の り築港大道路にて下車しぬつれに淋しき大道路兩側の露店もそろ〳〵　客足しげきに靈閒は客待かほなる仲居下女等は面によろこびの色をあらはし「まあ御休み遊ばせ」との聲も次第〳〵にいさぎよくなり此所の茶店に一かたまり入り彼所の茶店よりは一かたまり出で其賑はしさ千日前道頓堀に劣らざる有樣はしたなき下女等は客を送り出せし後はこゝかしこに打より己が受けし鳥目の多少に依り　或は賞し或はのゝしるなど實に外聞も見くるしくなさけなく思はれぬ我等はもとより茶店にて休まんとてもなければ　棧橋へと歩を進めぬそらには一點のたゞよへる雲もなく鏡のごとくすみ渡り皓々たる月四邊を限なく照し往きあふ人の顔だに明かに見ゆ其心地よさ實にたとへん方なし「あれ嬢樣月が眞正面へ登りましたもそつと先へ參りましようか」　下女の言ふにまかせ棧橋の先へと出でぬ其間には數多の人打より或ははせ。いな。小魚など餘念もなく釣竿たれて居られる樣實に愉快に見受られぬ　又海面に映ずる月を眺め樂しむ人もあり和歌俳句など詠ずる人もあり畫を好める人は此樣を寫しなど皆己が長所を撰びての事實に月は此等の眞材料なり　あはれ奸臣の爲に依り遠く筑紫のはてにさすらいて月の今宵思ひやり或は悲しみ或は喜びて歌に詠じ詩に吟じなど月に對しての樂しみなるべし石山の月を友として才筆を揮ひし紫の君年や月はかはれども　形は同じ月は月ましてや此明けき御代に生れし我等いかなればこそかく文才にうときものかやなど思ひうかべつゝふと目の下を見れば海上に映する月かも　いはれぬ風情さながら別世界へ行きし心地おり〳〵秋風袖をひるがへす樣げに海岸の眺にこそ　いみじきは時なりけり早や十時前となりければこゝになごりををしみつゝ來し道を通り電車にてつゝがなく歸宅しぬ床に就てもなほ消ねやらぬは今宵の月　（文章は晃もあれ觀察淺うして今一しほと思はるゝふしなきにあらず）

雨後の朝

本郷 正木みどり

門過ぎたるけたゝましきすゞの音におどろき目さめて妻戸おしあくればよべの雨なごりなく晴れてさと吹きいる風心地よくたま〳〵おつる木雫の音いとしめやかなり。折しも三四羽のからすやう〳〵ねぐらをたつ見ゐて朝日かげうすもやを通してぞ匂ひそめぬ。めなれたるわが庭も露の光りのきらめきにいと目うつくしく朝日にはゆる柿の實の色一入のながめをそへぬ。しばしは心もうばはれて朝きよめのわざもいとおくれたりな。さらばはやう母君のみこゑせぬうちに。（文章[illegible]）

松下禪尼

[illegible] 淡月

一寸にして其氣を含む蛄もこれをはぐゝむ母蛄なく、二葉よりかぐはしき栴檀もこれを育つる露のなかりせば如何で世の人のめで愛るゝものとはなるべき、孟子の賢も母の教わらざりせば中途業を廢するのうらみあるべく小楠公の忠も母のいさめによりてこそ全きを得たれ人の母たるものは宜しく愛るべくつゝしむべしされば昔より心ある母のいつかは子女の教育をゆるかせにしたるさるが中にも相模守時頼朝臣の母堂こそすぐれたる人にはあれ障子の紙はうすけれど心の底のあつぶすまさとりてみよとの教はやがて身みづから清業を守りし下を率ゐし時頼の心なる世の美談として長く後世に傳はるべきこの教の質は尊けれどもましてゆかしきは尼公の心がけになんある、文化すゝみ事物複雜なる今より考ふる時はあるひは迂遠に過ぐるやうなれ共もし尼公をして今の世にあらしめば必ず今の世ににつかはしき教をのこすなるべし當時の家庭の有樣をみるにいやしきはさらなりやむごとなきあたりにも往々子女の教育を緩にするものありしやうなり、みよ弁を用ひしきりに僴すかの樹木を、もし二葉にしてこれをつみなんには一擧手一投足の勞だになからんを、兒童の惡習もこれにことならず幼時一毫のあやまりもこれを緩にする時は遂には千里の差を生ずべし世の善人といはれ惡人と稱せらるゝもはじめより、さるたがひのあるべしやは而してこれが教育の多くは母によりて司どらるゝをしらば母たるもの之を輕親すべけんやわれ今尼公の逸事にかんじみじかき筆にいさゝかしるしぬ、（文章拙なかられども今少し刻苦精練されんことを望む）

從姉の嫁せる許に

岡山 佐藤露子

思ひ出す三年昔の此頃よ、白衣の天使などゝ共にたゝへし窓ぎはの白萩きのふけふいとゞ美しう咲き出でゝ候、それよ忘れもせぬ過ぎし日曜の

朔なりきビロードの如き猩紅の花びらに幾度もキッスして我が名にせんと手折り給ひし芙蓉の花も昔戀しげに咲きいで候よ、彼の森の彼の千田の木には今年もかはらで一羽の、もづ、折ふし高らかに囀りて平和の秋は永へにつくる事なく候、いかにや故郷の空こひしくは思し召さずや。一夫樣のお寫眞昨朝到着いたし皆々打ちより拜見いたし候、さでもなかしきは人の運命に候よ三年昔の此頃まで彼の美しき學びの園にテニス、クロッケーに餘念もなうひたすらに文の林にさまよひ給ひて世の仇浪の雫もしらで生ひ立ち給ひし君の今日ははや、母としてはた一家の主婦として多くの人にかしづかれ給ふ御身の日頃のたまひし美しき理想の實驗いかに樂しき御事ならんこの事こゝらの友垣の知りたらんには其の感やいかにと獨りほゝ笑まれ申し候。

さても愛らしき和子君かな、目元鼻筋の凛々しきは知られど、ほゝのあたりより口元の愛らしさ君が振り分け髪の昔しのばれ申し候さぞな君がみひざの上にて乳にあき給ひし所に明星の如き眸見はり給ひて母君の御顔しげ〳〵と見入り夢か現かほゝと笑み給ふ事の如何計りかいぢらしき御樣ならんと推し申し候、遠く隔たれるがかゝる時殊に口惜しう思はれ候、來る春にもなりなば初まごの顔見たしとのたまふ母君の御許に必ず〳〵下りたまへやかしこ、（親しき人の昔を想起し、今を想像したる筆つき、優なり）

家庭教育の一ふし

滋賀　藤野てつ子

私の兄に本年五歳の男の子があります、そうして兄は去る四月に亡くなりました、又姉上も今日では他家の嫁となるの止むを得ないので其の子は私が育てゝ居ります、所が私は小學校に職を執つて居るものですから私の事を先生先生と申しまして私が學校から歸りて來ますと私の袖にすがりつきます何分私も愛つた兄の子の事でしかも兩親にわかれたものですから出來得る限り注意して育てゝ居ります、が時々この子供の行爲によりて抱腹絶倒する事やら又悲涙を催すことなどもあります。

此の子は元來魚が大の好物で、食事には何でもよろしいが一寸魚が無いと不服なので私も今暫らくは云ふがまゝにして食事の時には必ずと云ふわけでもありませぬけれども、常に魚を用意して置きます。

然るに、近頃の事ですが、一大珍事が出來ました、夫はこの子供が魚が好きなものですから、長さ四尺あまりの「しいら」と云ふ魚を買ふてやりました、するとよろこんでよろこんで其日から嬉しさの餘り隣家へ行きては、「ボン」「自分のこと」ト、「魚のこと」買ふてもらつた」と云ふてふれてあるいたそうです。しかし私共はその樣なことは知らなかつたのでしたが今日は叔父の御命日であるからといつて、隣家の人々に御茶を飲むでもらうべく案内して集つてもらひましたら、其中の一人が、御家ではどんな魚を買ひましたと、の問が出るや否や十餘人が口を揃へて左樣左樣どんな魚を買ひましたとの質問に全體何故に斯くその樣なことを御存じですか」と反問しましたら、此間中御家のボン樣が御ふれなさいましたとの答へにやむなく其魚につきての始終を御話して御互に手を打ちて笑ふたことであります、子供と申すものはまことに無邪氣で正直なもの

ております故によらず何事でも當前ですることをなすことは子供によりて他に傳はるかと思ひますと家庭教育てふものはよほど大切なもので注意してせなければなりませぬ。

友のもとへいひおくる

本郷　正木みどり

きのふははからずも御あたりちかくまで参りたればむげにも御門邊うち過ぎがたく、一寸御たちよりも申候ひしな、折よくも君には御在宅にていつもながらの厚き御もてなしに、知らず〳〵も時をすぐし御縫ぬひの御さまたげをいたして候よ、されどこれも喜びのあまりの業にて候へばよしなにみゆるし給はり度。けふもきのふにおとらぬよき日和にて候へば、御妹藤子様にはさぞや鎌倉への御遠足、勇みて御出かけ遊ばされ候はんと御様子さへ見ゆる様にて候。昨日いろ〳〵御話のすゑ、女は誠につまらなきものなるよ、この頃の散歩せんにはよき時節をもたゞ家にのみありて、縫ぬひのわざ、夕餉こしらへの手つだひなどのみ日を送るべきか、兄もかしこへ弟もこゝへいつ〳〵はものするになど君の宣ひしに私も御ことばにつぎてとやかく女の身の不そくなと申候ひしな、よく〳〵考へみれば誠におろかなるわざにて候ひしよ。まづ女の身と生れ候ては、日日そこよこゝよといたずらに走りありかむよりは朝夕情ふかき父母のもとにありて御教へにしたがひ御手たすけなりも致し申べき事のふさはしくかつ、幸福にては候ずや。誠に君にはやさしき御兄君さへおはするものな、何にも心の持やう一つにていかにともないものにて候。かならずとも秋の野山に遊ばねともめなれたる我やの庭にて事たるへきと存じ候。もし私ども、日々家をよそにそこよこゝよとはしりありき申候はんには人やかならずよきうはさやたて申まじ。さらばこれよりは、かたみに、一しほ縫ぬひのわざをもはげみ父母の御教へに従ひ楽しき日を送り申候はん。君を思ひてのあまりかくもよしなき事をなか〳〵と書つけ申候よ、御心あしうな思しめし給ひそ。追々寒さにむかひ申候折からせつ角御身すこやかにもちたまへ、末筆ながら御ふた親の君はじめ兄君へも例のよろしうおほせあげ給はり度まづは御禮かた〳〵

あなかしこ

（訪問の翌日の禮狀にかこつけて、友を教へ諭したる文意親切を極む、文も手跡も練熟せり、）

秋の夜

備前　小山松枝

きのふの雨に傾れ臥したる白萩の下にすだく虫の音さへ例ならずあはれ悲しきに、ほろ〳〵となく梟の聲物思ふ身には一入しみ渡りぬ。いかにして里の母上にきこえけむ今日のこの御手紙は、何なる情なき御言葉ぞや、子を思ふ闇に迷ひ給へる親心とはいひながら、わらはに取りてはなか〳〵に断腸の思ひ、一旦人に嫁せし上は共に運命を天に任すが當然たるべきを、不幸にして財を失ひ艱難を究むればとていかで偕老の契り結びし君とわかれまつらんや。まして今でこそあれ、この夏まではたのしく業務に御精勤遊ばされしものを、かくなるも天命なりや、誠に

ふるゝまがつみにわらはゝ心の限り慰めもし勵ましもしつれど、やはりわが心の足はぬ故にや、遂に夫は悪しき街にふみ迷ひたまひたれば、困苦はいよ〳〵加はりゆくのみ。あまつさへ姑御は春方より御いたづきに衰弱し給へるを、この頃の様子暮らじとつとむるくるしさよ。そを察し給ひての母上の御慈愛は有りがたけれど、樂をのみともにし苦をば免れんとは。樂より思はざる所なれば。側に眠れる稚子はうれしき夢や見るらんむ愛らしき口に微笑をもらす可憐さ、あはれはしき兒よ。汝が前途は幸あれかしよ、といのるも涙に咽びつゝ。いかに心迷ひたる夫にてもこの優しき幼子の面を見たまはゞ、可愛とおぼし給はぬこともあらざらむ。さるにても今夜は歸りますらんか、歸り給はゞしか〳〵いさめんかくいはんと小さき胸をいたむるのみ。

先づ母上の御心やすまるやう文して送らんと机に向へば、今まで雲かゝりし月影のぬぐふがごとくさえ渡りて、いつ地行くらむ雁の一つ二つなきて過ぐるに奥には姑御の夜寒に感じやし給ひけむ、ゴホ〳〵と咳歎の聲苦しげなり。（評、孤燈の下に端座して、實家の母を戀ひ、つれなき夫を思ひ、眠れる稚兒を思ひ、老ひたる姑を思ひで、己が心の誠を述べたるあはれさ、そゞろに涙催さるゝよ。）

田家の秋曉

越前　宮川清子

何に驚いてか、喧しい犬の吠聲に樂しい夢の破られて眠むられぬまゝ、細りゆく灯かきたつる折しも、時計は四時を報じぬ、夜の明くるには少しまのあるべしとは思ひたれど、曉の景色亦何かの興味もなくてやはと、そと起き出でつ、靜に雨戸おしやり、欄にもたれて淡暗い空を眺めやりぬ、夜は寂々として、萬籟聲なく朝霧は深く立罩めて神秘の幕に閉されし靜なる天地の中、小川のせゝらぎ調おもしろう、三つ四つ二つ何にむせぶか雁がねの、聲もたえだえ鳴わたるは誰か玉章をかけて行くらん、おが音に鳴く虫の聲々も葎におく露の滋さに堪えでや、恨むが如く悲しむが如く、細く低く、絶えては續き、續きは又絶えんとして、其微妙なる音律は、そゞろに腸を斷たしめ、如何なる妙手の音樂も、かゝる感動を人に與ふべきやはと、深き沈思に耽りつゝ、時の過ぐるをも知らでありしが、蒼々たりし空は今やう〳〵うつろひ初めぬよべ、さやけかりし月は藍うしらけて、西山の邊に殘り、澄み渡りし空にきらめきし星も、今はうすれて、一つづゝ影は消えて行きぬ、見渡すかぎり立罩めし霧もおひ〳〵薄らいて、靜か寺の鐘の聲ならむ、まだ明けやらぬ空をとほして鳴き渡り、沈靜なる美趣は破られ、曉告ぐる鐘の音遠く、かすかに響く時、東雲の空まづ匂ひて、夢よりさめし小鳥の囀も、聲清らかに自然の平和を歌ひ初めぬ、今まで、おぼろげなりし野山の景色も、言ひ知らず面白う。遙なる森蔭、夜目にも目立つ白亞の塀、鎮守の杜、雨風にやつれたる案山子など、清爽なる朝氣の中に點綴して、畦みは紫苑らく續たる長蛇のやう見ゆれしも、刻一刻と移りかはりて、近き小山に生ひ茂れる、松の枝さゝ、おぼろかに讀まれ、田の中を通したる一筋の小川の淡白う見ゆ、二三羽の鳥は明けを勇んで南へ飛びぬ黄金色の久方の雲は、虹と化り、燃ゆるが如き曉の光線は、天圓を縫うて、幾百條となく放たれ、七色の彩り麗はしう、辰霧萬象を染め盡して、

新な生命は與へられぬ、雄大なる美、絶美なる美、如何に風物の詩趣にとめることよ、もろく裏影を宿して輝いた白露、今も枯葉まじりの草の上に、五色七彩きら／＼と冴ゆに冴ゆて、果敢ない束の間をほこすがなるも、拂はぬに、こぼれ、風なきに玉と砕けて散るなど、こよなう可笑し、暫しが程に、旭は悠然と峯の彼方に其姿を顕はし、鎖りし霞は姿を斂め、閉せし霧は山木に名残をとゞめ、興趣なる帷幕は全く開かれぬ、今迄とり／＼の色もて飾られたる草も木も今は自然の色にかゞやき初めし、早稲中稲は大方刈り取られて、只館在せる晩稲の黄穀は秋の色彩を添へ、重たげなる黄金の穂浪、餌をあさる雀の一群二群、鳴子の響きにさはぎ立つ景色も、土用の旱の足りて、豊な年のしるしかと微笑まれ、暑かりし夏の日の汗の雫は、今粒々の實となりて現はれたるならんなど、たごの辛苦の程も思ひやられて、かくばかり感想を深ふしたることなかりき

アゝ今日の好き曉よ、清き朝よ、秋は見るもの聞くもの皆哀れならざるはなきに、獨り淨々たる此朝景色の人を慰め勵ましめ、希望の念を高めしむることよと胸中今無限の感をもて満たされしとき、はや畦道を行く農夫、馬を曳いた牧童、道をやいそぐらん早だちの旅人も、ちらほら見ゆ隣の家には雨戸くる音、水汲む音、物賣る聲、車のきしる響も聞かれて、此神聖なる景色は、はや汚れの塵に犯さるべく始めぬ、狂ひいだせし朝風に小川の邊の糸柳は解けつ縺れつ其無情を怒るに似たるも、庭の松が枝は音も妙に鼓か琴か天津乙女の奏づるにやあらん

秋の夜

磐城　作山美子

暮るゝに早き秋の日は、はや山かげ遠く沈み行きて、名残りなう晴れ渡りたる大空には、夕づゝの又なき光をもらしつゝ、野末なる菊作る翁が庵の上に、二つ大きと小さきとが、恰も何事をか嬉しげに、さゝやくが如くまたゝき初めぬ。東の山の端には一本のびたる古木の松が枝、一つ二つと數へうるまで、さやけき月影さへさし出でたれば、見渡す限りの小萩野は、恰も白き布地に赤き紫色々の模様色どりたらむが如く、しのび音になく虫の聲々も、世をはかなむ人の心には、哀れとも物うくとも、聞ゆつべけれど、自然の神がさゝやぎかと耳かたぶくれば、心なき虫の一聲、露の雫も、皆夫れ夫れの趣こそあるなれ、いかで徒にはかなき虫よ定めなき露の身やと恨みつかこちつする人こそ、中々に駄かしけれ。亂れに亂れたる小萩尾花の中行く小道は、いとゞせまりてうねりうねり行く様は、さながら眞清水の迸る小流れの如く、將又金蛇の走るに似て、末は鎮守の森にかくれぬ。野末はるかなる一軒茶屋の檐は半面暴うして恰も畫繪のその如く、端居近く燈火のゆらぐは見ゆれど、月かげのあまりにさやけくて、それさへ確かならず、只折り折り出入りの客を送るゝにや、小犬の遠吠ゆ聞ゆるのみ。あはれ靜けき秋の夜のさまならずや。れぶれる花になく露のつめたきにひきかへて、温き情の涙は小さき胸にやすからず、今昔の感をたゝかはして、夢多かりし一昨年の秋の別れに涙ぐみし人の面影も思ひ出だされて夫れから夫れと聯想のはしは移りて、徒になく虫の聲々恨む人を嘲けりし身の心なかりしなど、千變萬化の胸の思ひも襟元寒き野風の一としきりやさしき花の夢を破りて小さき袖に訪づるゝにやうやう忘られぬ。紅の袖うらいつまでか、乙女の姿は長からず。やがてあゝ人妻の身となりて、又見む野邊の秋や來む。今の身の悶に苦み、そは無くて。

ヘトン、ケラー、孃の事をよみて

岡山 彌壽子

青葉の春霞、
たなびく野邊にもえ出し、
若葉の中の菫草、
君が眼にうつりなば、
いかにうれしとのたまはん、
月影清き秋の夜に、
尾花が露をたのみつゝ、
草葉にすだく虫の音の、
妙なる聲をきゝまさば、
いかにあはれとのたまはん、
霧をあざむく白ばらも、
紅匂ふ撫子も、
折りてたのしむよしもなく、
やさしきみ手にかきならす、
ピアノの音の妙なるも、
きゝて樂しむよしもなし、
されどかしこき君が身は、
心の眼見開きては、
春のあしたや秋の夜の、
自然をこそは見たまはん、
靈の耳をぞそば立てゝ、

自然の聲をやきゝまさん、
あはれ幸ある君が身よ、
必ず天を恨むなよ、
ちりの巷にさまよひて、
清き血汐をけがさんより、
自然のまゝに生ひ立ちし、
君が心のいか計り、
高くけだかき事ならん、
只滿足をともらしたる、
君が言葉ぞあはれなる、

浮沈

姫路市 三俣千代子

日かげのどけき春の日に
花をうかべてしづ〳〵と
たのしき面にあらはして
流るゝ水よきゝれかし
身はとこしへにかくてこそ
あるべきものと思ふなよ
かりの浮世にある中は
うまゐのゆめと思へかし
黃金とくるばかりなる
夏てふ頃はまのあたり
雲をやく如き暑き日に

枯るゝ葉もあるぞかし
むなひくゝ夏草の
其下かげをたどり行く
清水の友に交りて
たゆまずうまず流れかし
流れながるゝ其中に
露の玉散る秋もきて
おのづと友の數もまし
たのしき時となるぞかし
其たのしさはつかの間に
積ねてあとなき白かれの
六ツの花さく時もきて
氷らん身とはなるぞかし
かく儚なる春秋に
變る姿の浮き沈み
なべてのものは皆かくと
こゝろを低く流れかし

亡き母を思ふ

京都 笑福みつを

いにし彌生の春なりき
匂へる風に誘はれて
いとしき母と諸共に
すみれ摘にし野邊やこゝ

まねし月影地にふみて
　虫の鳴く音を聞きしとき
　かへりおそしと母上か
　　立てまちにしこの木影

嗚呼つれなさの世の中や
　すきもる風のあしたより
　　いとしき母は病得て
　　ながの枕に打臥しぬ

朝な夕なの看病に
　つくさぬすべはなけれとも
　　日々にそほそる息の音の
　　　聲たへ〳〵のかなしさに

くすしのすべのかひもなく
　妾をおきてたゞひとり
　　夜中のあらしと諸共に
　　　ついにかへらすなりにけり

妻のなけきいかばかり
　おさな心の一すじに
　　よべとさけべと聲もなし
　　そとに小鳥の聲哀れ

十たび春去り秋すぎて
　野邊のすみれは匂へども
　　月はむかしのまゝなれと

母樣今に歸り來ず
思ひをはせてかこつ時
雲間の空は打くもり
　やみに杜鵑の聲高く
　　耳をかすめて過ぎ去りぬ

秘密の詩

丹波　三崎恭子

心の秘密を歌ひいでたる
一篇の詩我にあれど
つれに手箱の底深くひめて
人に示すを敢て厭ひぬ
されど秋風空に高く
月朗らかに人靜まりて
夜三更の頃ともなれば
とりいでゝ誦するそもいくそたび
詩の友歌の友我なしとせんや
秘密を告ぐるは月君のみと知れ
こよひまた時我か世となりぬ
こゝしばし神境に入るれば
いざや聲清くうたひいでんを
月よ君よくそらんじおぼねて
都の空のその人につげてん

辻うら賣

大坂　田中しゆん子

病みて居ませる母上や
飢に叫べる弟妹は
すくひの主をまつ如く
あゝ此の我れを破れ家に
さるに白銅一ツ得ず
などて歸れん歸られん
人は快樂に醉ひしれて
あつき血しほの冷ねたるか
めいる心を取りなほし
若きおもひを忍びつゝ
又も辻うらひさけども
犬のみ吠ねて風さむし
と見る彼方の高樓に
衣かざれし幸人ら
すびつかこみて語るらん
笑ぞもるゝ樂しげに
鳥はれくらにかてを得て
父母はらからと安らけく
あゝ眠れるを貧の子は
飢つこゞねつ待つよ死を

女學世界定期增刊冬の卷
第參卷第拾五號

玉あられ

小春は一年中の好季節なり珍禽は林樾に囀り小畜は椽下に眠る、時烈霜未だ到らずして暄和人に宜しく三春の長閑さを初冬の劈頭に見る上帝の恩德大なりといふべし、「玉あられ」は即ち此の讀書的好季節を以て初冬の家庭に一段の新趣味を供せんとす。本篇別ちて▲文藝▲雜俎▲詞藻▲社會の四欄とし各欄特別の面目を發揮せんとするもの、目次下の如し

▲十一月十五日發行

目次



隣の家

露西亜 ツルゲエネフ
嵯峨の屋主人

秋の頃にはワリヅシチップ（小鳥の名）は屢老菩提樹の庭に來て啼が、此樣な庭は我オルロフ縣にはなか〳〵澤山有る、といふのは我々の先祖が住居を作る時は、何時も菩提樹の並木の植はッた五千坪位の菓木園を作つたからで有る、然し斯る士族の古巣ともいふべき邸宅も、五十年若くは七十年の星霜を經過する時は、少し宛次第に地の表面から消てゆく、即ち家は朽果たまゝに破して賣拂はれ、石疊の用部屋は壞壁殘礎の一塊に變じ、林檎の木は枯て薪とせられ、邸の周圍の塀や籬は、跡形もなく取拂はれて仕舞つたが、唯此老菩提樹の並木のみは、今倘耕やされた畑の中に舊に依て美しく生長して居る、其は恰と我々のやうに風の如く飛廻る銃獵仲間に向て、此處にこそ曾て自分達の親兄弟が住みしなれといふを語り貌で有る、而して箇樣な美しき老菩提樹、之に向ては情知らぬ露西亞の百姓さへも、流石に斧を容るゝのを敢てしない、此樹は葉こそ一體に小さい方で有るが、其代り枝は四方に廣がりて天を蔽ふ斗なれば、其下には何時も涼しき氷遠の影が有るので有る。

一日余はエルモライと共に鷓鴣を擊んと野末を走廻つたが、ふと野の一方に當つて住棄られたやうな庭を見出したから、直に走つて其内へと入ると、余が其庭の一端へ入るや否や、忽ち一羽のワリヅシチップが羽蟲をし

ながら灌木の中より飛立たから、余は直に銃を把て之を擊た。すると思ひ懸なく數步を隔てた茂林の中に、驚ける女の叫聲が聞えて、木々の繁みの間から喫驚したらしき若い娘の貌がちらと此方を見たが、直又繁みの中に隱れて仕舞つた、エルモライは余が射擊の音を聞て周章しく走來りながら。

「旦那此處で擊ては不可ましねへ、此處にははあ領主さまが住で居らつしやるのだから。」

余が未だ彼に一言の答もせぬ中、又擊取た小鳥を咀へながら走て來る余の犬が、未だ余の足下に達する暇のなき中、忽ち急がはしき人の足音彼方に聞えて、鼻下に鬚を蓄へた丈高き一人の男が、ぬつと林叢の中より現はれて出で、さも不滿らしい貌附で余の前へと立止まつた、こいつは不可とおもつたから余は出來る丈の辭を盡して余の過失の詫を爲て且自分の名を彼に通じ、その上其領內で擊た獲物をそつくり彼に贈つて仕舞ッた、其時件の男は莞爾として。

「然らば貴君の獲物は頂戴する事としませう、貴君が若し私方で晝飯を食ふ事に御同意下さいますならば。」

といつた、余は有體の處、餘り彼の意に同意するのを好まなかつた、然し自分に過失が有れば、正可にそれも晉なく斷はる譯にも行かず、如何しやう歟と躊躇して居たるうち、彼は倘其語を續けて

「私は御聰及びでもございませうが、此處の領主で、即ち貴君の隣人のラヂイロフと申す者でございます、今日は日曜日の事で、私方の晝飯も平日よりは聊か好らうと思ふのでございます、其でなければ貴君を御招待申すのではございませんが、」

余は斯る場合に當つて正に人の答ふべき答を答へつゝ、彼の後へと續いた、近頃掃除せられたかと思はれた小徑、其をたどつて步みゆくと、道は菩提樹の並木を出て菜園の內へと這入つたが、其處には老林檎の木と覆盆子の木とが、蕪の如く生廣がつて居る間から、椰菜の青白き丸い頭と、雄蕊を螺旋狀にまげたフメリの丈高い

姿とが、ちら〳〵と隠見して見え、又畦には栗色の莖を縺らせながら豌豆の立て居るのも有れば、横様に地に倒れたまゝ大きな平たい南瓜のなつて居るも有り。又塵だらけの四角張た葉の下から真黄色になつた黄瓜の覗いて居るのも有つた其處を過て進みゆけば、彼方なる籬の許には蕁麻が高く轉がる様になつて生て居り、又昔有た花壇の跡には韃靼種の忍冬、接骨木、野薔薇などが生長して居る、尚其先には水溜を以て圍まれた古井が有て、傍には真赤な垢水を以て満された魚槽が浮て居り、又鶩の一群が水溜の中をさも多忙らしく、或は潜りつ、或は跛ひきつゝ泳いで居る、更に其傍を過て進みゆけば、其處は一面の草原で、彼方には一頭の犬が目をつぼめ體を顫はせながら、さも痒氣に自分の體を噛で居り、又此方には斑毛の牝牛がさも怠惰そうに草を啄みながら、瘦た肩へ時々尻尾を投掛て居る、此處にて小徑は折曲つて居たが、余は其曲り角に來たつた時、太やかなラキイタの木と樺の木との間から、板葺家根に折曲つた階段の有る鼠色の古家が、我々の方を眺めて居るのを見た、ラヂイロフは此處に至つて其歩を止めて、

「然し」とさも善良らしくまともに余の貌を見ながら其口を開いた。

「私は今思ひ付たのですが、萬一貴君には私方へお立寄下さるのが御迷惑ではなからう歟と、若左様で有ますれば……」

余は彼をして其語を終らしむるを待たず、彼の家へ立寄て晝飯の馳走に預る事、如何に愉快で有らう歟といへば、彼も今は危ぶまず、然らばとて案内するに、余は即ち家の内へと這入つた、時に青き荒羅紗の長表衣を着た若者一人、我々を階段に出迎へたが、ラヂイロフは之に燒酎を持て來て余の從僕エルモライに與へる様と命じたので、余が銃獵の僕は左も有難氣に大氣なる隣家の主人の背に向て叩頭をした、余はラヂイロフに導かるるまゝ上ッて、室内一面五彩畫の畫紙を以て張詰られ、且鳥籠の釣されて有る玄關の間を過て、主人の書齋と

してある小さな一室へと打通つた、其處にて先づ銃を一方の片隅に置き、銃獵の装を脱して、裾の長い大外衣を身に着れば、世話好らしい一人の小者が塵を拂ふて吳れるやら何やらで、種々と余に手傳ッてくれた

「さあ如何歟客間へお出下さいまし、私は貴君に母を御紹介致さうと思ひますから。」

ラヂイロフは斯く慇懃に言ッた。余は彼の後に從て客間に入れば、其處には中央の長腰掛に、肉桂色の服を着け、白き頭飾を附た瘦貌の、如何にも善良らしい、且如何にも臆病らしい老夫人の、悲しさうな目附をしたのが坐して居た。

「阿母樣一寸貴君に御紹介致します、此方はお隣の御主人で」

とラヂイロフは紹介したすると老夫人は立て余に叩頭をした、其瘦枯た手から太き網の樣な毛糸製の手袋を脫しながらで

「餘程久しく此方にお住居でございます歟」と老夫人は低い聲で瞬をしながら問ふた。

「否、まだほんの近頃でございます」

「餘程長く御滯在の御考でございます歟」

「冬迄の積でございます」

老女は默して仕舞ッた、

「其から此人はヒヨウドル、ミヘーイチといふ人です、」とラヂイロフは、余の客間に入りし時はつい氣着さりし一人の瘦た丈の高い年老の男を指しながら言た。

「さあフエーヂヤ、お客樣に何歟自分の腕前をお目にかけぬかの、何故お前左樣隅ッ子へ潜込で居るのだ」

ヒヨウドル、ミヘーイチはつと肘椅子から立擧り、窓に置てあつた四絃の古提琴を取擧げ、通例は弓の端れを

持ものだのに、彼は其眞中頃を握つて、胸に押當ると、眼を塞ぎながら絃を彈じ歌を歌ひつゝ踊り始めた見受る所、彼は年頃七十歳位でも有らう歟、着たる南京木棉の表衣は、其踊る度に脂氣の拔た骨立る手足にふれては、哀にもばさ〳〵といふ音を立る、其踊るや、時に或は勇敢に體をふる時も有り、時に或は死せる如く動ずなる時も有り、時に或は小さき禿頭を打ふる時も有り、時に或は首を延してとんと足で床を蹴る時も有り時に或は大骨折で其ぎごちなき膝を屈める時も有る、而して歯のなき口を洩て聞える其歌ふ聲には、老衰の樣も見えて、何となく氣の毒に思はれた、ラヂイロフは余の顏色に因て、フユーヂャの伎が餘り余に取て面白くなきもので有るといふ事を悟ッた歟。

「さあ、もう宜老爺、もう澤山だから褒美を貰ひに往つら宜らう」と言た、玆に於てヒヨウドル、ミヘーイチは直提琴を窓の上に置き、第一番に客として來た余に、次に老夫人に、次にラヂイロフにと、順々に叩頭をして、つと客間を出去ッた。

「あれでも貴君彼人は元は領主で有たのです」と我新知人は言ふた。

「其になか〳〵金持でしたが、とう〳〵破產して、今では私方の食客です、……あれでも貴君若盛の頃は、我縣第一等の機敏家でしてねへ、夫の有る夫人を二人迄も迷はせた事が有ましたよ、大變俗歌が好でしてね、常に俗欲を歌ふ者を抱へて置き、自分も又仲々歌が上手でしたよ、其に舞踊も出來る方でしてね、……否、然し燒酎は如何です、お喫りになりませんか、もう食事の用意も出來たらうと思ひますから」

此時最前邸内に於てちらと余の見たる若き娘が室内へ入來たッた。

「あ、是はオウリヤと申します」

ラヂイロフは輕やかに頭を回らして余に注意しつゝ、

「如何歟目をかけて可愛がッてやッて下さいまし……さわ其では食堂へ參りませう」

我々は即ち食堂へ入た。此時食堂には先に客間を出去たヒョウドル、ミヘーイチ、既に褒美として酒を呑だものか歟、鼻の頭を真赤にして目を光らせながら、「勝利の雷鳴渡る！」といふ歌を歌ッて居た、但し彼の爲に特に室の一隅に一脚の小机と器具とが備へられて有たが、其は哀なる老人の身のまはりの余り清潔にも有らねば、幾分歟他の人からは遠けて有るものと見える、彼は十字架を劃すると、やがて溜息をしながら餒の如く食ひ始めた、左樣、食事は日曜日の食事とて、顫へる煮凝凍菓子やイスパニャ菓子なども附て居て、餘り惡い方ではなかッた、食事中ラヂイロフは、曾て其身がアルメイスキイ歩兵隊に十年間勤め、且土耳其の戰爭にも出た事の有る由を語ッた、余は彼の談話に耳を傾けながら、窃にオリガの樣子を觀察して居たが、左樣、彼女は餘り美人と言はるゝ側ではない、然し真白な額の廣やかに濃き髮の毛のかゝりよく、栗色の目の明白として活潑らしく、怜悧らしく、容貌の如何にも雄々しく沈着た處、慥に人の氣に入る顏で有る、彼女はラヂイロフの談話に一語、一語、宛然後を附る如く注意して耳を欹てつゝ、燃る如き熱心の注意を其容貌に現はして居たが、年齡から言ば勿論彼の娘とも見える、且ッ彼は彼女を呼にお前といふ語を用ひて居たが、然し余は一見して彼等の親子でないといふ事を悟ッた、既にして話頭は轉じて、彼の死せし妻の事に言及んだが、其時彼は「是の姉」ですとオリガを指て言たから、余はオリガが彼の妻の妹なる事を知た、オリガは之を聽て羞らう如く皃を赤くして俯向になッて仕舞ッた、ラヂイロフは默して一寸考ふる樣で有たが、忽ち話頭を他へ轉じて什舞ッて、老母は食事中何の話もせず、何の品をも喰はず、又余に向て何等の歡待の語をも吐ず、默然として坐して有たのである、其容貌に因て察するに、彼女は前途何等歟非常に心痛の事、非常に絶望すべき事の生ずるのを待てゝも居た歟の如く、其氣力なき老の面に現はれた憂の色は、一見人の心をして傷心に堪ざらしめるものが有た、

食事の終り頃ヒヨウドル、ミヘーイチは、頻りに客と主人とを賞讃し始たが、ラヂイロフは一寸余と目を見合せつゝ、彼に餘計な事を言はぬ樣にと請ふたので、彼は唇を少し引曲めつ、目を二ツ三ツしばたゝくと、一寸叩頭をして食卓を離れ、席の一隅に退ぞき坐した、茲に於て余等はラヂイロフと共に彼の書齋へと赴いた。

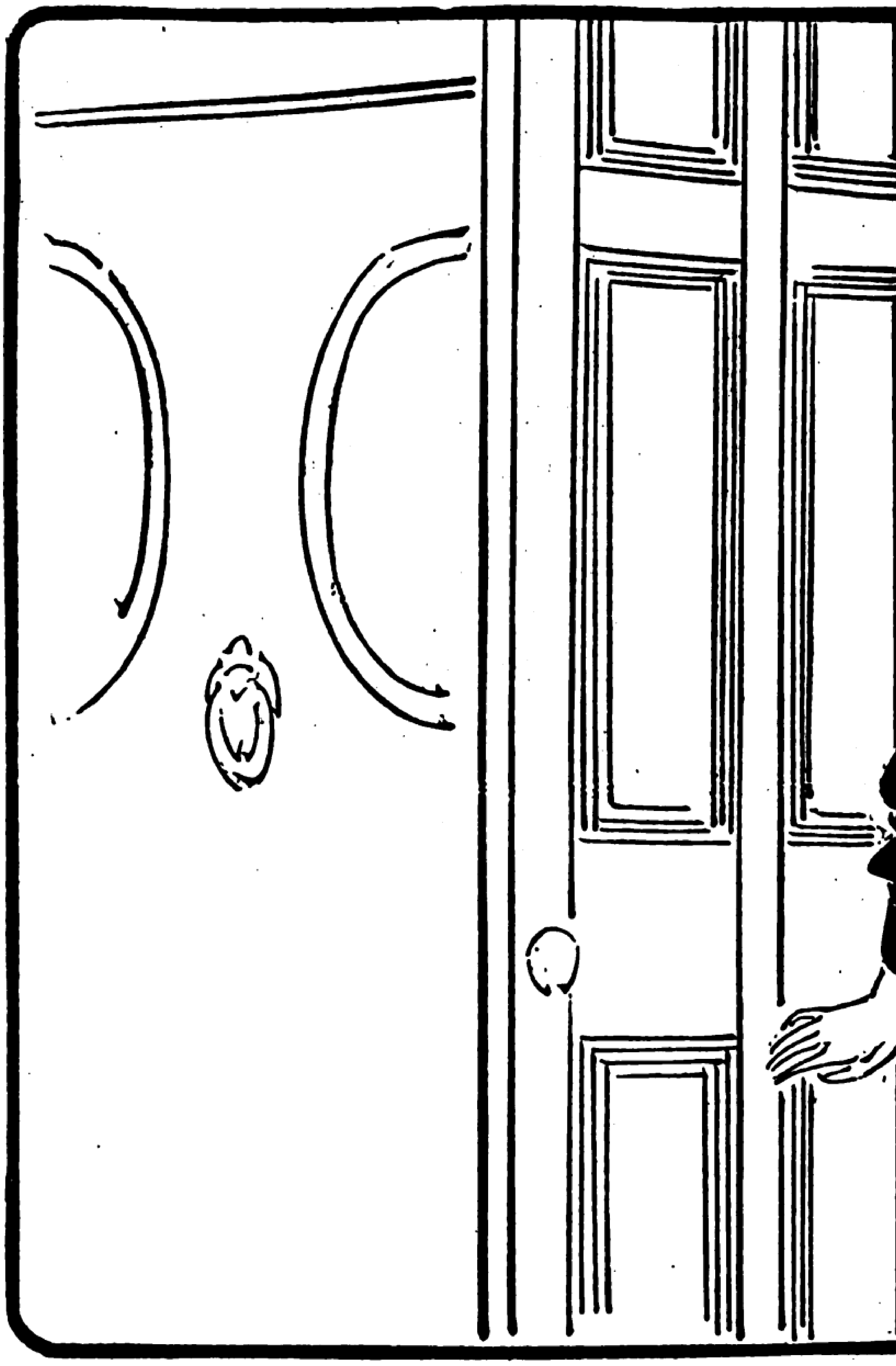
凡そ如何なる人を論せず、胸中常に何事を歟一心に考ふる事の有る人は、其人の性質、才能、教育、地位等が如何に各相異なる共、總て是等の人が他人に接する言語擧動の中には、如何やら普通せる一樣の類似點が有るもので有るが、今ラヂイロフを見るに及びて、余は彼も又此種の人に屬する一人で有るといふ事を信じたので有る、抑ラヂイロフの談話は、經濟、農業、收穫、戰爭、扨は又近村の噂、朋友の婚姻等いふ、さま〲の種類に渉る事を、或は淡白に、或は同情を以て、爲されたので有たが、然し其談話中彼が突然と溜息をしては、恰も非常な骨折仕事で甚く疲れでもした歟の如く、がツかりとして椅子に坐し、手を以て其貌を撫た樣子を見ては、慥に或一ツの感情若くは包むに餘る物思ひの爲に、充溢に支配されて居るもの丶樣に思はれる、從て彼は今如何なる事如何なるものに向ても、何の趣味何の面白味をも感じ得られぬ樣に見える、即ち食にも、酒にも銃獵にも、鶯の啼音にも、病氣に惱んで死か丶ッて居る鳩にも、露國の文學にも、馬の遠乘にも、都見物にも、製紙場若くは砂糖製造場の狀況にも、おまけ半分の快活なる談話にも、茶にも、コヒーにも、旅行にも、かるた遊びにも、玉突の遊戯にも、舞踊の會にも、扨は又放蕩一流の下等遊戯にも、彼が何等の好みをも持て居る樣子が見出し得られないので有る、其處で余は考へた、抑此領主は如何なる人で有らう歟と、然し見受る所彼は決して暗黑の人若くは不平の人ではない、否啻に左樣でないのみならず、彼が余に對する打解た懇切と慇懃とを見ては、此人は慥に出逢ふ所の何人に向ても、常に直に親しまんとする心掛の有る人で有るといふ事を疑ふ事は出來ぬ、然し其と同時に諸君は又彼が何人とも眞に親しみ得ぬ人で有るといふ事を悟るで有らう

尤も其は彼が他人との親しみを要さゞるが故ではなく、只彼が當時一心に思ひつめて居る事が有る故で有る、さりとて余は決して彼を以て幸福の人とは思ひ得ぬ、且彼を以て決して美男子とも思ひ得ぬ、然し彼の眼元にも、微笑にも、其風采態度全體の中にも、何となく言ふに言はれぬ非常に愛らしい處が有る、否有ると言ふよりは寧ろ窃んで居る方が近い、然り其故で有らう、彼は何人からも親しみ愛される事の出來る人で有る、尤も其擧動の中には時として領主らしき所と共に如何にも野人らしき風采の無にしも有らずで有るが、然し兎に角彼は其爲人立派な人物なので有る。

扨我々の談話は轉じて、正に我郡新先輩の噂に及ばんとした時ふと戸口に當りてオリガの聲として、お茶が出來ましたといふに、余等は話を中止して再び客間の内へと入ッたが、此時ヒヨウドル、



ミヘーイチは如何にも謙遜らしく室の一隅なる窓と戸との間の自分の席に、足を重ね合せて坐して居ッた、又ラヂイロフの老母は靴足袋を編で居りオリガは余等を歓待すべく茶を注で居た



室に運入るや否や、明放の窓の方からぱッと香り来る林檎の香心地よく、窓より覗かるゝ秋の空は、如何にも寥廓と澄渡ッて見えた、余は食事の時よりも大に注意してオリガの様子を見て居たが、彼女は一般都の娘の如く甚だ言葉少い方で有る、且其様子に因て察するに、胸中別に悩まし気な感情の有る様子もなく、さりとて又別に愉快らしい感情の有る様子もない、要するに彼女は、ラヂイロフの如く包むに餘る心配の為め、覚えず溜息をするといふ事もなく、又羞らう如く額の下に目を瞬すといふ事もなく、又一般女のする如き無意味の微笑を口元に含むといふ様な事もない、然し只余の

見受し處、彼女は恰も近頃味はふた大なる幸福歟若くは大なる心配から、今は一向休息しつゝ有る人歟の如く見えて、物を見る目元の中にも、何處となく平然とした沈着た處が有る、而して其動作と歩き方とは、絶て人の爲に牽制せらるゝ處なき如く、如何にも果斷らしくふるまふて居た、尚一言を添ふれば、彼女は餘程余に氣に入ッたので有る。

扨客間へ這入ッて後も、余は再びラヂイロフと談話を爲したが、世には往々些細の事柄が、重大の事柄よりも却て多く大なる感動を人に與へる事の有るもので、如何なる動機が此種の談話の端緒となッた歟、今日では余も能覺えては居らぬながら、ラヂイロフは左の如き話を爲したので有る。

『左樣』とラヂイロフは言た。

『私は自分に其を經驗した事が有ましたよ、先刻も貴君に御話申した如く、私は妻を持て居た事が有ますが、尤も暫時の間で、僅三年に過ぬのですが、私の妻は產で取れたのでした、其時私は考へましたねへ、是は俺は妻に死れては、迚も生ては居られまい、必らず悲しみ死に死ぬで有らうと、左樣さ、非常に私は悲しみましたねへ、恰で死人同樣になッて仕舞ひました、妙なものです、左樣いふ時には涙も出ませんねへ、泣たくも泣ないのでさわ、私は恰で愚人の樣になッて、家の內を步て居ましたよ、然し妻には式の如く服を着せて、机の上へ臥して置たです、此室のですよ、所が其中に僧が來る、教會の書記が來る、祈禱を讀む、香料を焚くといふ譯のでせう、私はひざま付て拜をしました、其から妻への手向にせめて涙でも一滴溢したいと思ひましたがね所が如何です貴君、私の心は恰で化石でもした樣なのです、腦髓も其通り、體からして一體に固まり付た樣なのでさわ、まあ始の日は此の如くして過去たですが、如何です貴君、眞實となさいます歟、其夜は私は能眠りさへしましたぜ、然しですね、翌朝目が覺て、私が妻を寢して置た室へ往た時はですね、其時は恰度夏の事で

太陽は妻の頭の頂邊から足の爪先を迄照して居ましたが、左樣さ、然もなか〳〵強く照して居ましたが、……此時突然私は見附ましたよ（と言ながらラヂイロフは覺えず顫へわがりつゝ）妻の目がまだ悉皆塞ぎ切れてなく、且貴君目の上を蠅が徊徊て居るでは有ませんか……私は藁束の如く倒れましたねへ、其で始て正氣附てや、泣た、泣た、如何しても泣やむことと出來ませんでした」

茲に至ッてラヂイロフは其語を止めた、余は彼を見次にオッガを見たが、や、此時の彼女の貌、何と形容して宜歟、余は一生忘れる事は出來ぬ、ラヂイロフの母は靴足袋を膝の上へ置き、袋から鼻紙を取出して、窃と涙を拭ふた、ヒヨウドル、ミヘーイチは不意に立て提琴を把り、皺枯聲を張擧て荒々しく歌を歌ふた、是は多分我々を喜ばせやうとしたので有らう、然し我々は其聲を聽て一時に顫へあがッた、中にもラヂイロフは彼を顧みて、歌を止まる樣にと制しつ、且つ「然し」と其語を續けるので有た。

『然し有た事は如何も仕方が有ませんよ、旣往は回すべからずです、其に世の中の不幸といふものも、暫らく時の經中には又善方へ向て參るものです、慥かウオリテルも其樣事を言て居ましたね』と急はしく彼は言添た

『左樣、勿論の事です』と余は答へた。

『其に如何なる不幸だからと申しても、必らず忍び能ふものです、此世に脫出し能はぬといふ樣な逆境は、決してないもので有らうと思ふです』と余は言た。

『成程左樣貴君は御考のですね？』とラヂイロフは注意しながら、

『如何でせうかねへ？然し或は被仰る通りかも知れませんよ、私は斯いふ經驗も有ますから、其は恰度私が土耳其戰爭に往て居た頃の事でした、不幸にして私は腐敗熱に罹り、半死半生で病院へ這入て居ましたが、何が扨貴君戰爭中の事でせう、病室の樣と申してはないのでしたねへ、臥て居る處の有るのさへ仕合せと言はなけ

ればならぬのです、所へ又貴君他の病人を伴て來たのでせう、何處へ寐かす處が有ませう、醫者は貴君彼方此方と走廻ッて見たが、病人の置處がないのでさあ、所で彼は私の寐て居る傍へ來て、助手に向て斯いふのですねへ、「如何だ、まだ生て居る歟？」然るに助手の答が宜でさあ、「朝はまだ生て居ました」と、すると醫者は身を私の上へ傾むけ、胸の呼吸を聽て居ましたが、此樣子を見て傍に居た朋友は堪かねた歟、斯いふのです、病氣も此樣種類のになッては、眞に馬鹿病氣といふべきだらう、到底數からぬに定まッて居るのに、まだひくひくして場所を塞げ、他人の邪魔をして居るとは、何といふ業病だらう」と、私は之を聽てはッと思ッたですねへ、「非道い事を言ふなあ、ミハイル、ミハイルイチ樣……」然るに如何です、幸ひ貴君全快して、今日迄生殘ッて居るでは有ませんか、ですから貴君、或は貴君の被仰る處が正しいかも知れませんよ」

「左樣ですとも、私の今いふた處は、總ての場合に於て正しいですよ、假如ば貴君、貴君が其時御病死なされたとしてもですね、貴君は矢張其厭ふべき地位から脫出し得るでは有ませんか」と余は答へた

「勿論です〱」

彼は拳を以て礑と計机を打ち且斯言添へた。

「唯決斷を要するですよ、……厭な地位を脫出せん爲には、世評なぞは意に介するに足らぬですねへ、延した處で如何なりますもの歟、何の爲に延しませう……」

此時オヲガはつと立て庭へ出でた、ラヂイロフは、

「さあへーヂャ舞踊歌を歌へ」と叫んだ、ヒヨウドル、ミヘーイチは直其席を立擧ッたが、其態度は恰も手馴した熊の傍へ近付く牝山羊とも言た樣な、一種特別の歩き振で室內を歩みながら、「我等が窓の邊にて」といふ歌を歌ひ始めた

折しも唯歟來りし者有と覺しく、玄關口に輕車の音轔々と聞えしが、間もなく可成太ッた丈高き一人の男が室内へ入來たッた、是は其名をオフシャンニコフといふ豪士で有る、此人は此近傍では可成名高い人でも有り、且著しるしく特種の性質を有する人物であれば、余は讀者の許可を請ふて、他篇に於て彼の物語を致す事と爲し、今は只簡單に此篇の局を結ばんが爲め、只次の事を言て置としやう

余は翌日も尙引續いて、エルモライと共に銃獵に出て居たが、一週間を過て後再びラヂイロフ方を訪づれし時は、ラヂイロフもオリガも家には居らなかッた、然るに二週間を過て後、忽ち此樣な噂が世間に廣まッた。其は隣家のラチイロフが、考母を家に棄置て、亡妻の妹と共に何れへ歟姿を隱したといふ事で、今は全縣是が爲に騷ぎ立ち、人の集る處、必らず此評判で持切て居る、今にして余は始て悟ッた、過る日ラヂイロフの話の時オリガの親附が一種特別の忘れ難き親附で有た原因を、其は單に同情を以て呼吸して居たのみではなく、矢張嫉妬の焔に燃つゝ有たので有た。

扨余は田舍を立去る前、告別の爲めラヂイロフの考母を訪問たが、其時彼女は恰度客間に於て、ヒヨウドル、ミヘーイチと共に骨牌を弄んで居た所で有た、余が彼女に向て、

「御子息樣から音信が有ました歟」

と尋ねし時、彼女は唯さめ〳〵と泣たのみで有た、實に余は二度とラヂイロフの事を彼女に問ぬるに忍びなかッた。

（終）

叢報

▲赤十字社看護婦卒業式

赤十字社看護婦第二十一回卒業式は澁谷なる赤十字社病院に於て十月十六日午前十時より舉行し萬壽婦人會總裁故彰仁親王妃賴子殿下の御諭旨を鍋島會長代讀せられたり即ち左の如し

御諭旨

玆に第二十一回準備看護婦生徒卒業證書授與の式に臨み諸氏が多年勉學の効空しからずして今日の榮譽を受くるを見るは賴子の深く喜ぶ所なり尚將來益々斯業に勉め本社忠愛仁慈の主旨を体して看護婦の本分を完ふせんことを望む

▲農學校女生徒入學

蠶兒飼育は女子に適當なる事業なるにも拘らず從來各地方の農業學校にては養蠶科に女子の入學を許可したることなきのみならず規則上許可し能はざるが如く考へ總て拒絕し來りしが今回靜岡縣知事は此等希望者に滿足を與へんが爲め乙種農學校程度に依り女子のみを入學せしむる目的を以て蠶業學校を設立するを得るや又從來存續せる乙種農學校に於て男女級を異にすれば女子を入學せしめて差支なきやを文部省に伺ひ出で同省は差支なき旨指令したるに付同縣にては早速女子養蠶學校を設立する由

▲東洋女學校設立の計畫

文學博士村上專精、文學士和田鼎、文學士村上龍英氏設立發起者となり大隈伯、渡邊子（無邊）、菊池前文部大臣、山川大學總長、岡田文部總務長官、澤柳普通學務局長、井上文科大學長、高嶺女子高等師範學校長其他佛教界の名士島地、大內、南條、前田諸師、早川千吉郎、森村市左衛門、安田善次郎氏等の贊助を得江湖同感の士人より義金を醵し以て外形內容共に完全なる女學校を設立し校名は東洋女學校と稱し程度は初め高等女學校科程五ヶ年となし漸次設備の整頓するを俟ちて各種專門の智識を授くべき大學部を增設する計畫にて今回愈々其の趣旨書を發表せりといふ

▲第一高等女學校落成式

先般來新築中なりし第一高等女學校（淺草區七軒町）は既に此程竣功せしを以て去月十四日午前十時を以て同校に於て落成式を舉行したり此日來賓の重なる人々は岡田文部總務長官澤柳普通學務局長千家東京府知事府會議員視學官市學務委員及在野の教育家諸氏にして伊藤校長落成式舉行の趣旨次に東京府內務部第三課長視學官岡五郎氏の同校沿革及び建築に關する詳細なる報告千家知事の式辭岡田文部省總務長官の告辭小磯金藏氏の府會議員總代としての祝辭校長の答辭生徒總代の祝辭等ありて全く式を終りて一同退場夫より來賓諸氏は成績品其他の陳列品を縱覽し生徒は運動場に於て体操及び遊戲を爲し夫より茶菓の饗應ありたり

▲日本女學校創立紀念式

本郷龍岡町なる日本女學校にては去月十八日午前十時より第三回紀念式を同校々堂にて舉行校長の式辭に次で來賓者の祝辭演說等ありたり

▲清國行のおモチャ

日本より清國に輸出するおモチャは大抵大阪より出るが、其の種類は金で出來たものでは茶碗位の大サある饅頭のメケツ塗に滊車、同じく喇叭、同じく滊船、鉛では帶鉄と滊船、土製のものでは達磨に馬、紙や綿にて仕上げたものには毬、旗、鼠、兎、犬、虎、鯛、葡萄盆栽で、玻璃製には時計と色目鏡の二ツがある日本より清國に出る玩弄品としては此の外にはないのである

新刊紹介

▲驪語　本田増次郎氏著

是の書は動物愛護の精神を作興するについて此の上もなき良書なり原名をブラックビウテイといふ(黒馬物語と譯したる方適當ならんか)即ち黒美人と命名せられたる馬の物語にして動物愛護感情を養ふの趣意もて作られたるもの、文は自叙體なるが馬を人間として自分の境遇を說明せしめたる處はよき思ひ付にして遂々人を動かすものあり、歐米に於ては當時名高き著述にて感情教育の良書として家庭内に愛讀さるゝ由、文章の極めて平易流暢にして趣味の饒きは彼の若松賤子の小公子を讀むがごとく畜類に對して愛憐の情を起さしめ情育上に稗益すること少からざるべし（定價八十錢）

▲少女　綠岡隱士著　警醒社發行

此の書は婦人の理想を涵養するによき書なり、模範的婦人、忍耐の徳、尊敬すべき處女、女子と奉道へ兄妹の愛、一家の太陽、儉約と勤勉、少女の社交的心得並に天才と結婚、約婚等の各項目につき種々なる方面より說き及ぼして婦人、殊に少女の情操を養ふに務めたりその例を寧ら泰西の傑出せる婦人の事歴に取り、且つ詩中の名句等を引證して反覆丁寧を極めたれば無垢の少女は一讀してこの理想の天國に遊ぶを得べく以て實際の世界に立つの素養を作るべし

▲歐州學生の生活　原田道寛氏編　文光堂發行

この書は歐洲諸國の學校生活を知るによき書なり、文學博士建部遯吾氏曾て歐洲留學の際彼の地に於て親しく觀察せられたる事柄を記述したるものにて、獨、佛、英の三國に於ける各學校の性質制度より家庭教育の有樣並に青年學生の位地、品性、氣力、等に就て精細周到なる觀察を記載したるものなれば彼國の學校生活を知るには簡便なる良書といふべし。

▲女子立志篇　加藤眠柳氏著　内外出版協會

この書は女子をして泰西諸國に如何なる婦人ありて如何なる苦心と經營をなし以て如何なる成蹟を社會に遺したるかの一斑を知らしむるによき書なり小說家詩人、說教家、新聞記者、美術家、學校教師、看護婦、慈善家畫家其の種々なる方面に於て有名なりし女傑の性情行徑を記述して其要を得たり立志篇とはいかゞはしけれど。書の精神を味ひ讀まば身に益する處少からざるべし（定價三十錢）

▲善光寺各所圖會　石倉重繼氏著　博文館發行

この書は各宗本山名所圖會の第七編として出たるものなり、卷頭に掲げられたる善光寺彌陀如來の縁起を讀めば粗々我國に於ける佛寺の如何にして建立されたるかの縁因の槪要を知るに足るべし口繪寫眞版には光格光明兩天皇の御遺物を始めとして各親王の染筆、並に歴代の帝室、將軍家より納めたる什類の如き容易に見るべからざる珍物あり。

▲深呼吸と疾歩は健康に善し

深呼吸をなしつゝ疾歩するときは健康上特に大なる利益あり其速力は一時間四哩にて歩むときは身體を眞直になし十分反り返り、兩腕を振り堅く口を結んで鼻孔より深呼吸を爲すべし右は普通の呼吸にては肺中にある空氣の通路を悉く滿たす能はずして爲めに病氣を惹き起すものなるが故に肩を張り肺を一杯に膨脹せしめ深呼吸をなして肺を十分に張り擴ぐる習慣を付け之に依りて滿足の健康を維持する道理に由るものなりと

次號記事豫告

（第參卷第拾六號十二月五日發行）

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內｛定刊數……………十二册
　｛增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ。

明治卅六年十一月五日發行　第參卷第拾四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工塲
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

再版出來

著者	書名	版	體裁	定價
武田櫻桃君編著	新撰世界地理問答	五版	全壹冊洋裝 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵稅金四錢
松原廿三階堂君著	新撰東洋歷史問答	四版	全壹冊洋裝 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵稅金四錢
長谷川天溪君著	新撰西洋歷史問答	四版	全壹冊洋裝 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵稅金四錢
鷹野止水君編著	新撰國文問答	三版	全壹冊洋裝 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵稅金四錢
太田才次郎君編著	新撰漢文問答	三版	全壹冊洋裝 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵稅金四錢
中村重造君編著	新撰法制經濟問答	再版	全壹冊洋裝 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵稅金四錢
坂本文學士編著	世界史 上	四版	全壹冊洋裝 背皮金字入	正價金一圓六拾錢 小包送四百匁
荻野文學博士編	大日本通史 上	八版	全壹冊洋裝 背皮金字入	正價金壹圓五十錢 小包送六百匁
高木理學士編著	新撰算術	五版	全壹冊上製 並製共刊行	上製五拾錢郵稅十錢 並製卅錢郵稅八錢
内藤藤井兩君編著	分析化學	五版	全壹冊上製 並製共刊行	上製五拾錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
江見水蔭君著	戀	八版	全壹冊洋裝 紙皮金字入	正價金三十錢 郵稅金四錢

發兌元 東京日本橋本町 博文館

(後付の一)

再版出來

編著者	書名	版	體裁	定價
農商務省御編纂	大日本農史	再版	全二冊洋装 中判頗上製	正價金二圓五十錢 小包送料六百匁
大和田建樹先生編著	謠曲通解	九版	全壹冊洋装 背皮金字入	正價金壹圓八十錢 小包料六百匁
佐々木信綱君編著	詠歌辭典	五版	全壹冊洋装 上製金字入	正價金七十五錢 郵税金八錢
博文館編輯局校訂	明治節用大全	九版	全壹冊洋装 背皮金字入	正價金壹圓六十錢 小包送六百匁
大町文學士編著	學生訓	十一版	全壹冊洋装 袖珍金字入	正價金二拾五錢 郵税金四錢
博文館編輯局校訂	馬琴傑作集	四版	全壹冊洋装 背皮金字入	正價金六拾錢 郵税金拾六錢
木寺文學士編著	東洋歴史	三版	全壹冊上製 並製共刊行	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
竹貫登代多君著	新撰算術問答	三版	全壹冊洋装 袖珍金字入	正價金二拾錢 郵税金四錢
竹貫登代多君著	新撰代數問答	再版	全一冊洋装 袖珍金字入	正價金二十錢 郵税金四錢
有賀法學博士著	帝國史畧	十六版	全壹冊洋装 背皮金字入	正價金壹圓五十錢 小包送四百匁
土井文學士著	天地有情	十二版	全壹冊洋装 紙皮金字入	正價金二十五錢 郵税金四錢

發兌元 東京市日本橋

(後付の二)

圖書廣告

著者	書名	版	體裁	價
巖谷小波山人著	平壤	六版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	威海衛	六版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	玉取	十一版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	八幡太郎	十三版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	姨捨山	十一版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	川中島	十二版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	文覺上人	七版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	和唐内	八版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	熊本城	九版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
巖谷小波山人著	宇治川	九版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金六錢 郵税金二錢
高山文學博士著	釋迦	十一版	全壹冊洋裝 密書十數入	正價金十三錢 郵税金四錢

區本町三丁目 博文館

(發付の三)

(後付の四)

圖書廣告

著者	書名	版	體裁	定價
森一兵君著	致富要訣	五版	全壹冊洋裝 二百五十頁	正價金二拾五錢 郵稅金八錢
大和田建樹君著	新文林	六版	全壹冊洋裝 紙數百卅頁	正價金二十四錢 郵稅金六錢
佐々木信綱君校註	土佐日記	十二版	全壹冊洋裝 大判並製	正價金十錢 郵稅金二錢
幸田文學士編著	十九世紀史	三版	全壹冊洋裝 紙數四百頁	正價金五十錢 郵稅金十二錢
巖谷小波山人著	九重の塔	再版	全壹冊洋裝 表紙彩色書	正價金七錢 郵稅金二錢
橋本奇策君編著	合成金製造法	三版	全壹冊洋裝 三百五十八頁	正價金四十五錢 郵稅金六錢
永機柳涯兩君校訂	蕉門十哲集	再版	全壹冊洋裝 紙數三百頁	正價金二十五錢 郵稅金八錢
巖谷小波山人著	一寸法師	十五版	全壹冊洋裝 密畫十數入	正價金五錢 郵稅金二錢
樋口一葉女史著	一葉全集	十一版	全壹冊洋裝 紙數五百頁	正價金十八錢 郵稅金四錢
大町文學士編譯	日露戰爭未來記	十二版	全壹冊洋裝 紙數二百頁	正價金十八錢 郵稅金四錢
內田不知庵君著	社會百面相	三版	全壹冊洋裝 紙數六百頁	正價金五十五錢 郵稅金十二錢

區本町三丁目 博文館

(後付の五)

再版出來

著者	書名	版	体裁	定價
下田歌子女史著	料理手引草	七版	全壹冊洋装 三百三十頁	正價金三十五錢 郵税金六錢
近藤醫學士著	仰臥三年	四版	全壹冊洋装 紙數三百頁	正價金三十五錢 郵税金六錢
大町文學士編著	處世訓	三版	全壹冊洋装 紙數三百頁	正價金二十五錢 郵税金四錢
理學士依緑軒主人著	文明の大破壞	再版	全壹冊洋装 紙數五百頁	正價金四十錢 郵税金十錢
萩野落合池邊君校	日本文學全書 平家物語		洋装並綴表紙石版刷	正價金三十錢 郵税金三錢
恩田農學士編著	農學汎論	六版	全壹冊上製並製共刊行	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
丸尾法學士編著	日常行爲法則	六版	全壹冊洋装 紙數三百頁	正價金二十五錢 郵税金八錢
足立栗園君編著	通俗倫理學	再版	全壹冊洋装 紙數三百頁	正價金二十五錢 郵税金八錢
大野洒竹君校訂	元祿名家句集	再版	全壹冊洋装 背皮金字入	正價金三十錢 郵税金八錢
下田歌子女史著	家政學	十二版	洋装並製 紙數四百頁	正價金三十錢 郵税金六錢
江原春夢君編著	園藝全書	五版	全壹冊洋装 紙數四百頁	正價金七十錢 郵税金八錢

發兌元 東京市日本橋

（後付の六）

圖書廣告

著者	書名	版	體裁	定價
竹村秋香君編著	明治俳句	三版	全壹冊洋裝 紙皮金字入	正價金三十五錢 郵税金六錢
大和田建樹君著	雪月花	十二版	全壹冊洋裝 紙皮金字入	正價金三十五錢 郵税金六錢
村上敏夫君著	作文錦囊	六版	全壹冊 上製金字入 紙皮	正價金三十五錢 郵税金六錢
博文館編輯局校訂	通俗三國誌（下）	六版	全壹冊洋裝 背皮金字入	正價金六十錢 郵税金拾六錢
佐藤理學士編著	中等教育日本地圖	九版	全壹冊洋裝 寫眞版挿入	正價金四十五錢 郵税金八錢
村井弦齋居士著	酒道樂（下）	三版	全一冊洋裝 上製金字入	正價金五十五錢 郵税金八錢
大和田建樹先生著	九郎判官	十版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金八錢 郵税金四錢
大和田建樹先生著	惡七兵衛	八版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金八錢 郵税金四錢
大和田建樹先生著	相摸太郎	九版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金八錢 郵税金四錢
大和田建樹先生著	七本槍	八版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金八錢 郵税金四錢
大和田建樹先生著	四十七士	十一版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金八錢 郵税金四錢

區本町三丁目 博文館

再版出來

著者	書名	版	體裁	價
萩野落合池邊君校	日本文學全書 源氏物語	(三)	洋裝並綴 中判美本	正價金三十錢 郵稅金三錢
萩野落合池邊君校	日本文學全書 源氏物語	(五)	洋裝並綴 中判美本	正價金三十錢 郵稅金三錢
野口珂北君編著	書法自在	九版	全壹冊洋裝 木版密書入	正價金二十五錢 郵稅金六錢
石井研堂君著	新風船	四版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金十錢 郵稅金四錢
巖谷小波山人著	世界の始	八版	全壹冊洋裝 密畫十數入	正價金七錢 郵稅金二錢
巖谷小波山人著	鉄の王子	再版	全壹冊洋裝 密畫十數入	正價金七錢 郵稅金二錢
下田歌子女史著	母親の心得	六版	全壹冊和裝 紙數三百頁	正價金三十五錢 郵稅金六錢
橋本奇策君編著	寫眞術	九版	全壹冊洋裝 紙數三百頁	正價金十錢 郵稅金二錢
三浦暉信君編著	數學一万題	十版	全壹冊洋裝 紙數五百頁	正價金四十錢 郵稅金八錢
鴨居工學士續著	電氣鍍金術	三版	全壹冊洋裝 百十八頁	正價金二十五錢 郵稅金四錢
石井研堂君著	鉄道の卷	四版	全壹冊洋裝 表紙彩色畫	正價金十五錢 郵稅金四錢

發兌元 東京日本橋本町 博文館

（後付の八）

女學世界
每月壹回五日發行
第參卷第拾四號
(明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可)
(明治參拾六年十一月五日發行)



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㉓
明治36年10月（第3巻第13号）、11月（第3巻第14号）

2006年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3052-7　C3321